

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第6集

山門北池遺跡

福岡県みやま市瀬高町山門所在遺跡の調査

2007

福岡県教育委員会

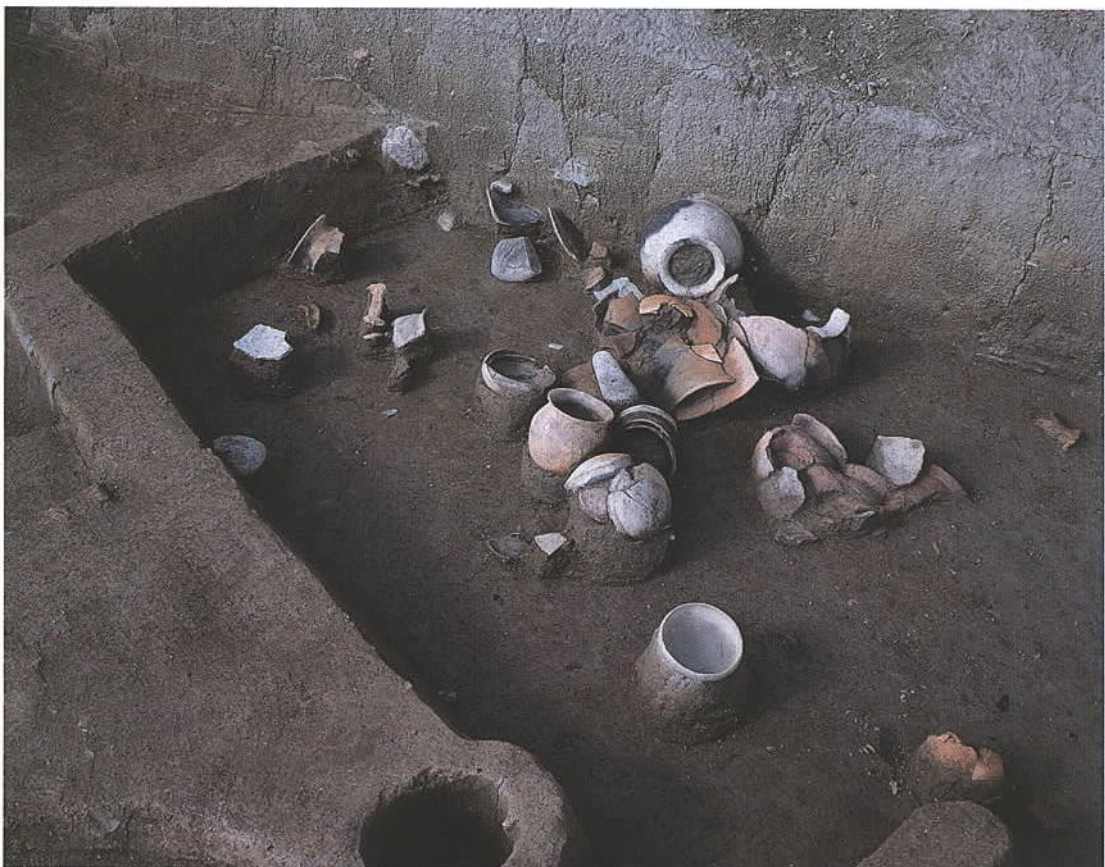
九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第6集

山門北池遺跡

福岡県みやま市瀬高町山門所在遺跡の調査



1. 3区16号竪穴住居跡出土状況(1) (西から)



2. 3区16号竪穴住居跡出土状況(2) (南東から)



1. 5区47号竪穴住居跡（西南西から）



2. 5区47号竪穴住居跡カマド（西南西から）



1. 5区55号竪穴住居跡カマド（南から）



2. 5区1号中世墓（北から）



1. 3区16号竖穴住居跡出土土器



2. 5区30号竖穴住居跡出土土器

序

福岡県教育委員会では、平成13年度から独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（旧日本鉄道建設公団）九州新幹線建設局の委託を受けて、九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。本報告書は平成15年度に発掘調査を実施した、みやま市瀬高町（旧山門郡瀬高町大字）山門に所在する山門北池遺跡の記録で、九州新幹線建設工事に伴う山門遺跡群調査報告の2冊目に当たります。

本遺跡は矢部川・大根川が育んだ緑豊かな田園地帯に位置しています。調査では弥生時代中期の甕棺墓、弥生時代後期～古墳時代前期・古墳時代後期～飛鳥時代・中世の集落跡などを確認し、この地域の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。

本書が文化財愛護思想の普及及び学術研究・生涯学習への一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査及び報告書の作成に当たりましては、関係諸機関や地元を始めとする多くの方々に御協力・御助言をいただきました。ここに深甚の謝意を表します。

平成19年3月31日

福岡県教育委員会
教育長 森山 良一

例言

- 1 本書は平成15（2003）年度に九州新幹線鹿児島ルート建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県みやま市瀬高町山門字北池・前田（旧山門郡瀬高町大字山門字北池・前田）に所在する山門北池遺跡の記録で、九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告の第6集に当たる。
- 2 本遺跡の発掘調査・整理報告は独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（旧日本鉄道建設公団）九州新幹線建設局の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。
- 3 本遺跡は九州新幹線船小屋一大牟田間の埋蔵文化財調査第4-A地点に当たる。
- 4 本書に掲載した遺構写真は、大庭孝夫・一瀬智・高松智が、遺物写真は、巻頭図版を九州歴史資料館参事補佐石丸洋、その他を文化財保護課整理指導員北岡伸一が撮影した。なお、空中写真は九州航空株式会社及び東亜航空技研株式会社に委託した。
- 5 本書に掲載した遺構図は、大庭の外、中間研志・秦憲二・一瀬・高松が作成し、溝上潔・石井正興・今村孝男・堤弘光・楠麻里が補助した。なお、掲載した遺構図の方位は全て座標北（G. N.）である。
- 6 出土遺物の整理作業は九州歴史資料館及び文化財保護課太宰府事務所において、濱田信也・大庭の指導の下に実施した。出土遺物の実測は調査担当者の外に、平田春美・棚町陽子・田中典子・久富美智子・坂田順子・橋之口雅子・荒川妙・堀江圭子・若松美枝子・寺岡和子・栗林明美・中村洋子・中川真理子・中川陽子・林知恵が行った。製図は調査担当者の外に、豊福弥生・原カヨ子・江上佳子が行い、土山真弓美・安永啓子・山田智子・辻清子・藤美代子が補助した。
- 7 出土遺物・写真・図面はすべて九州歴史資料館及び文化財保護課太宰府事務所に保管している。
- 8 本書の執筆は、Ⅲの一部を一瀬、Ⅳを株式会社パレオ・ラボ、その他を大庭が行い、編集は橋之口の協力を得て、大庭が行った。

目次

卷頭図版	
序	
例言	
目次	
図版目次	
挿図目次	
表目次	

I. はじめに (大庭)	1
1. 調査の経緯	1
2. 調査の組織	5
II. 位置と環境 (大庭)	7
1. 歴史的環境 (弥生時代～奈良時代編)	7
(1) はじめに	7
(2) 弥生時代早・前期～古墳時代中期前半	7
(3) 古墳時代中期～後期	17
(4) 飛鳥・奈良時代	18
III. 発掘調査の記録	21
1. 遺跡の概要 (大庭)	21
(1) 遺跡の概要	21
(2) 基本層序	27
2. 3区第1面の検出遺構と遺物 (大庭)	30
(1) 概要	30
(2) 掘立柱建物跡	30
(3) 土坑	32
(4) 溝	32
(5) ピット・遺構面等出土土器	35
3. 3区第2面の検出遺構と遺物 (大庭・一瀬)	35
(1) 概要	35
(2) 竪穴住居跡	35
(3) ピット・遺構面等出土土器	52
4. 4区第1面の検出遺構と遺物 (大庭・一瀬)	54
(1) 概要	54
(2) 竪穴住居跡	54
(3) 溝	78
(4) ピット・遺構面等出土土器	82

5. 4区第2面の検出遺構と遺物（大庭・一瀬）	83
(1) 概要	83
(2) 竪穴住居跡	83
(3) 土坑	98
(4) 木棺墓・甕棺墓	102
(5) 溝	106
(6) ピット・遺構面等出土土器	106
6. 5区第1面の検出遺構と遺物（大庭）	109
(1) 概要	109
(2) 竪穴住居跡	109
(3) 掘立柱建物跡	132
(4) 土坑	136
(5) 中世墓	138
(6) ピット・遺構面等出土土器	140
7. 5区第2面の検出遺構と遺物（大庭）	141
(1) 概要	141
(2) 竪穴住居跡	141
(3) ピット・遺構面等出土土器	162
8. 表採等出土土器（大庭）	162
9. 石器・石製品・土製品・金属器（大庭・一瀬）	163
(1) 石器・石製品（一瀬）	163
(2) 土製品	169
(3) 金属器	169
IV. 自然化学分析（株式会社パレオ・ラボ）	171
1. 山門北池遺跡3区1号溝出土炭化材の樹種同定（植田）	171
2. 山門北池遺跡5区1号中世墓出土墓桶の樹種同定（植田）	173
3. 山門北池遺跡5区47号竪穴住居跡カマド内から出土した炭化種実（新山）	174
4. 放射性炭素年代測定（パレオ・ラボAMS年代測定グループ）	177
V. まとめ（大庭）	180
1. 山門北池遺跡出土古墳時代後期の土師器について	180
2. 山門北池遺跡で検出した竪穴住居跡カマドについて	183
3. 山門北池遺跡における集落の変遷について	187

図版目次

巻頭図版1	1. 3区16号竪穴住居跡出土状況(1)（西から）	
	2. 3区16号竪穴住居跡出土状況(2)（南東から）	
巻頭図版2	1. 5区47号竪穴住居跡（西南西から）	2. 5区47号竪穴住居跡カマド（西南西から）

- | | | |
|--------|------------------------------|--------------------------|
| 巻頭図版 3 | 1. 5区55号竪穴住居跡カマド (南から) | 2. 5区1号中世墓 (北から) |
| 巻頭図版 4 | 1. 3区16号竪穴住居跡出土土器 | 2. 5区30号竪穴住居跡出土土器 |
| 図版 1 | 1. 山門北池遺跡遠景 (南から) | 2. 山門北池遺跡遠景 (北から) |
| | 3. 山門北池遺跡第2面全景 (上から、右が北) | |
| 図版 2 | 1. 山門北池遺跡第1面全景 (南から) | 2. 3区北 東壁土層 (西から) |
| | 3. 4区南 東壁土層 (西から) | |
| 図版 3 | 1. 4区中央 東壁土層 (西から) | 2. 4区北 東壁土層 (西から) |
| | 3. 5区 東壁土層 (西から) | |
| 図版 4 | 1. 3区第1面全景 (上から、右が北) | 2. 3区1号土坑 (北東から) |
| | 3. 3区1号溝 (東から) | |
| 図版 5 | 1. 3区1号溝出土状況 (北から) | 2. 3区第2面全景 (上から、右が北) |
| | 3. 3区16号竪穴住居跡 (北東から) | |
| 図版 6 | 1. 3区16号竪穴住居跡出土状況(1) (西から) | |
| | 2. 3区16号竪穴住居跡出土状況(2) (南東から) | |
| | 3. 3区16号竪穴住居跡出土状況(3) (南西から) | |
| 図版 7 | 1. 3区16号竪穴住居跡出土状況(4) (東から) | |
| | 2. 3区16号竪穴住居跡出土状況(5) (東から) | |
| | 3. 3区16号竪穴住居跡カマド (北東から) | |
| 図版 8 | 1. 3区17号竪穴住居跡 (西北西から) | 2. 3区18・19号竪穴住居跡 (南東から) |
| | 3. 3区21・22号竪穴住居跡 (東から) | |
| 図版 9 | 1. 3区22号竪穴住居跡カマド出土状況 (南南東から) | |
| | 2. 3区22号竪穴住居跡カマド完掘状況 (南南東から) | |
| | 3. 3区23・24号竪穴住居跡 (東から) | |
| 図版10 | 1. 3・4区第1面全景 (上から、右が北) | 2. 4区第1面南全景 (上から、右が北) |
| | 3. 4区第1面北全景 (上から、右が北) | |
| 図版11 | 1. 4区1号竪穴住居跡 (東から) | 2. 4区2号竪穴住居跡出土状況 (北東から) |
| | 3. 4区2号竪穴住居跡完掘状況 (北東から) | |
| 図版12 | 1. 4区3・9号竪穴住居跡 (北東から) | 2. 4区3・9号竪穴住居跡カマド (北東から) |
| | 3. 4区4・5号竪穴住居跡 (南西から) | |
| 図版13 | 1. 4区4号竪穴住居跡カマド (南西から) | 2. 4区6号竪穴住居跡 (東南東から) |
| | 3. 4区6号竪穴住居跡カマド (東南東から) | |
| 図版14 | 1. 4区7号竪穴住居跡 (北東から) | 2. 4区8号竪穴住居跡 (南から) |
| | 3. 4区8号竪穴住居跡カマド (南から) | |
| 図版15 | 1. 4区第2面全景 (上から、右が北) | 2. 4区第2面南全景 (上から、右が北) |
| | 3. 4区第2面北全景 (上から、右が北) | |
| 図版16 | 1. 4区29号竪穴住居跡 (西から) | |
| | 2. 4区29号竪穴住居跡屋内土坑出土状況 (南西から) | 3. 4区38号竪穴住居跡 (北東から) |
| 図版17 | 1. 4区39・45号竪穴住居跡 (東から) | 2. 4区40号竪穴住居跡9号土坑 (西から) |
| | 3. 4区40号竪穴住居跡屋内土坑 (西から) | |
| 図版18 | 1. 4区41号竪穴住居跡 (東から) | 2. 4区41号竪穴住居跡 (西から) |
| | 3. 4区42号竪穴住居跡 (北西から) | |

- 図版19 1. 4区42・43号竪穴住居跡（北西から） 2. 4区46号竪穴住居跡（南から）
3. 4区46号竪穴住居跡カマド（南から）
- 図版20 1. 4区2号土坑（南西から） 2. 4区3・6・7号土坑（南から）
3. 4区3・6・7号土坑（西から）
- 図版21 1. 4区3号土坑（南から） 2. 4区4号土坑（北西から）
3. 4区5号土坑（南西から）
- 図版22 1. 4区7号土坑（北東から） 2. 4区9号土坑（南東から）
3. 4区1号木棺墓（南東から）
- 図版23 1. 4区1・2号甕棺墓検出状況（西北西から）
2. 4区1・2号甕棺墓完掘状況（西北西から） 3. 4区2号甕棺墓（東から、中央に歯）
- 図版24 1. 5区第1面全景（北側は未掘）（上から、右が北）
2. 5区第1面北全景（上から、右が北） 3. 5区14号竪穴住居跡（南東から）
- 図版25 1. 5区14号竪穴住居跡カマド（南東から）
2. 5区30号竪穴住居跡上層出土状況（西から） 3. 5区30・37号竪穴住居跡（北東から）
- 図版26 1. 5区30号竪穴住居跡カマド（北東から） 2. 5区31号竪穴住居跡（東から）
3. 5区31～33号竪穴住居跡（西から）
- 図版27 1. 5区32号竪穴住居跡出土状況（北西から） 2. 5区34号竪穴住居跡（西から）
3. 5区34号竪穴住居跡カマド（南から）
- 図版28 1. 5区36号竪穴住居跡（南から） 2. 5区36号竪穴住居跡カマド（南から）
3. 5区1・4号掘立柱建物跡（北北東から）
- 図版29 1. 5区1号掘立柱建物跡P1土層（東南東から）
2. 5区1号掘立柱建物跡P2土層（東南東から）
3. 5区1号掘立柱建物跡P3土層（東南東から）
- 図版30 1. 5区1号掘立柱建物跡P4土層（北北東から）
2. 5区2号掘立柱建物跡（北東から）
3. 5区2号掘立柱建物跡P1土層（南東から）
- 図版31 1. 5区2号掘立柱建物跡P2土層（南東から）
2. 5区2号掘立柱建物跡P3土層（南東から）
3. 5区2号掘立柱建物跡P4土層（南東から）
- 図版32 1. 5区2号掘立柱建物跡P5土層（南東から）
2. 5区2号掘立柱建物跡P6土層（南東から）
3. 5区2号掘立柱建物跡P7土層（南西から）
- 図版33 1. 5区2号掘立柱建物跡P8土層（北東から）
2. 5区2号掘立柱建物跡P9土層（北東から）
3. 5区3号掘立柱建物跡（南東から）
- 図版34 1. 5区4号掘立柱建物跡P2土層（北西から）
2. 5区4号掘立柱建物跡P3土層（北西から） 3. 5区12号土坑（西北西から）
- 図版35 1. 5区13号土坑（北から） 2. 5区14号土坑（北から）
3. 5区1号中世墓（北から）
- 図版36 1. 5区第2面全景（上から、右が北） 2. 5区第2面南全景（上から、右が北）
3. 5区第2面北全景（上から、右が北）

図版37	1. 5区47・60号竪穴住居跡(西南西から) 2. 5区47号竪穴住居跡出土状況(南西から) 3. 5区47号竪穴住居跡カマド出土状況(西南西から)
図版38	1. 5区47号竪穴住居跡カマド完掘状況(西南西から) 2. 5区48号竪穴住居跡(北東から) 3. 5区49号竪穴住居跡(南東から)
図版39	1. 5区49号竪穴住居跡炉付近出土状況(東から) 2. 5区50号竪穴住居跡(西から) 3. 5区51号竪穴住居跡(南西から)
図版40	1. 5区53号竪穴住居跡(北東から) 2. 5区53号竪穴住居跡カマド(北東から) 3. 5区55号竪穴住居跡(南から)
図版41	1. 5区55号竪穴住居跡カマド(南から) 2. 5区30・37・56・57号竪穴住居跡(西から) 3. 5区59号竪穴住居跡(西から)
図版42	3区1号土坑、1号溝、第1面ピット・遺構面等、16号住居跡(1)出土土器・土製品
図版43	3区16号住居跡出土土器(2)
図版44	3区16号住居跡出土土器(3)
図版45	3区16(4)～22(1)号住居跡出土土器
図版46	3区22(2)・24・25・27号住居跡、第2面ピット・遺構面等(1)出土土器
図版47	3区第2面ピット・遺構面等(2)、4区1・2(1)号住居跡出土土器
図版48	4区2(2)～6・7(1)号住居跡出土土器
図版49	4区7(2)・8号住居跡・8号住居跡付近遺構面(1)出土土器
図版50	4区8号住居跡付近遺構面(2)・9号住居跡、第1面ピット・遺構面等、29・38～40・43(1)号住居跡出土土器
図版51	4区43(2)・45号住居跡、6・7号土坑出土土器、2号甕棺
図版52	4区1号甕棺、第2面ピット、5区30・37号住居跡、30・31号住居跡付近クレーク内、30号住居跡(1)出土土器
図版53	5区30号住居跡出土土器(2)
図版54	5区30号住居跡出土土器(3)
図版55	5区30号住居跡出土土器(4)
図版56	5区31・34・36・37号住居跡、34号住居跡南包含層、2号掘立柱建物跡、13号土坑、1号中世墓、第1面ピット・遺構面等出土土器・土製品
図版57	5区47・49号(1)住居跡出土土器
図版58	5区49(2)・55・61号住居跡、第2面ピット、表採等出土土器・土製品
図版59	石器・石製品(1)
図版60	石器・石製品(2)、金属品

挿図目次

第1図	山門北池遺跡の位置	1
第2図	弥生時代～古墳時代前期周辺遺跡分布図(1/50,000)	9
第3図	上枇杷遺2号土壇出土鑄型・土器実測図(1/4、1/8)	11
第4図	山門北池遺跡周辺地形図及び松延遺跡トレンチ配置図(1/3,000)	13
第5図	古墳時代後期～奈良時代周辺遺跡分布図(1/50,000)	15

第 6 図	藤ノ尾車塚古墳現況空中写真	17
第 7 図	権現塚古墳地形測量図 (1/1,000)	17
第 8 図	堤古墳群 (1/3,000)	18
第 9 図	調査区配置図 (1/1,000、1/100)	22
第 10 図	山門北池遺跡第 1 面遺構配置図 (1/200)	23
第 11 図	山門北池遺跡第 2 面遺構配置図 (1/200)	25
第 12 図	3～5 区土層実測図 (1/60)	28
第 13 図	5 号掘立柱建物跡・出土土器実測図 (1/60、1/3)	30
第 14 図	1 号土坑、1・2 号溝実測図 (1/60、1/30)	31
第 15 図	1 号土坑、1 号溝、3 区第 1 面ピット、遺構面等出土土器実測図 (1/4、1/3)	33
第 16 図	1 号溝出土土製品実測図 (1/2)	34
第 17 図	16・27号竪穴住居跡 (1/60)、16号住居跡出土状況・カマド (1/40、1/30) 実測図	37
第 18 図	16号竪穴住居跡出土土器実測図(1) (1/3)	39
第 19 図	16号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (1/3)	40
第 20 図	16号竪穴住居跡出土土器実測図(3) (1/4、1/3)	41
第 21 図	17・21・23・25号竪穴住居跡実測図 (1/60)	43
第 22 図	18～20・24号竪穴住居跡、24号住居跡カマド実測図 (1/60、1/30)	45
第 23 図	17～21号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	46
第 24 図	22号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60、1/30)	47
第 25 図	22・24(1)竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	49
第 26 図	24(2)・25・27号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4、1/3)	51
第 27 図	3 区第 2 面ピット・遺構面等出土土器実測図 (1/4、1/3)	53
第 28 図	3・4 区第 1・2 面遺構配置図 (1/400)	55
第 29 図	1・2 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	57
第 30 図	1・2(1)号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	59
第 31 図	2 号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (1/3)	60
第 32 図	2 号竪穴住居跡出土土器実測図(3) (1/3)	61
第 33 図	2 号竪穴住居跡出土土器実測図(4) (1/4、1/6、1/3)	62
第 34 図	3・9 号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60、1/30)	64
第 35 図	3 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	65
第 36 図	4・5 号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60、1/30)	67
第 37 図	4～6 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4、1/3)	69
第 38 図	6 号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60、1/30)	71
第 39 図	7 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	72
第 40 図	7 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	73
第 41 図	8 号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60、1/30)	75
第 42 図	8・9 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	77
第 43 図	3～6 号溝・土層実測図 (1/60、1/30、1/120)	79
第 44 図	3～6 号溝出土土器実測図 (1/4、1/6、1/3)	80
第 45 図	4 区第 1 面ピット・遺構面等出土土器実測図 (1/4、1/6、1/3)	81
第 46 図	29・38号竪穴住居跡実測図 (1/60)	85

第 47 図	39・40号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	87
第 48 図	29・38・39号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4、1/3).....	89
第 49 図	41・42号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	90
第 50 図	40～42号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4、1/3).....	91
第 51 図	43～45号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	93
第 52 図	43号竪穴住居跡出土土器実測図(1) (1/3).....	94
第 53 図	43号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (1/3).....	95
第 54 図	46号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60、1/30).....	96
第 55 図	45・46号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4、1/3).....	97
第 56 図	2～5号土坑実測図 (1/30).....	99
第 57 図	6～9号土坑実測図 (1/30).....	101
第 58 図	2～7・9号土坑出土土器実測図 (1/4、1/6、1/3).....	103
第 59 図	1号木棺墓、1・2号甕棺墓、7号溝実測図 (1/60、1/30).....	105
第 60 図	1・2号甕棺、1号木棺墓出土土器実測図 (1/8、1/3、1/4).....	107
第 61 図	4区第2面ピット、遺構面出土土器実測図 (1/3).....	108
第 62 図	5区第1・2面遺構配置図 (1/400).....	109
第 63 図	14号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60、1/30).....	110
第 64 図	14号竪穴住居跡、30・37号竪穴住居跡覆土上層、30・31号竪穴住居付近クレーク内、30号竪穴住居跡東包含層出土土器実測図 (1/3).....	111
第 65 図	30号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60、1/30).....	113
第 66 図	30号竪穴住居跡出土土器実測図(1) (1/3).....	115
第 67 図	30号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (1/3).....	116
第 68 図	30号竪穴住居跡出土土器実測図(3) (1/3).....	117
第 69 図	30号竪穴住居跡出土土器実測図(4) (1/3).....	119
第 70 図	30号竪穴住居跡出土土器実測図(5) (1/3).....	120
第 71 図	30号竪穴住居跡出土土器実測図(6) (1/3).....	121
第 72 図	31・32号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	123
第 73 図	31・32号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3).....	125
第 74 図	31号竪穴住居跡出土土製品実測図 (1/2).....	126
第 75 図	33・34号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	127
第 76 図	33・34号竪穴住居跡、34号竪穴住居跡南包含層出土土器実測図 (1/3).....	128
第 77 図	36号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60、1/30).....	129
第 78 図	37号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	130
第 79 図	36・37号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3).....	131
第 80 図	1・3・4号掘立柱建物跡実測図 (1/60).....	133
第 81 図	2号掘立柱建物跡実測図 (1/60).....	135
第 82 図	1～4号掘立柱建物跡柱穴出土土器実測図 (1/4、1/3).....	136
第 83 図	10～14号土坑、1号中世墓実測図 (1/30).....	137
第 84 図	10～14号土坑、1号中世墓出土土器実測図 (1/4、1/3).....	139
第 85 図	5区第1面ピット、遺構面等出土土器実測図 (1/3).....	140
第 86 図	47・48号竪穴住居跡、47号住居跡カマド実測図 (1/60、1/30).....	143

第 87 図	47号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3).....	145
第 88 図	49号竪穴住居跡実測図 (1/60)	146
第 89 図	50・51号竪穴住居跡実測図 (1/60)	147
第 90 図	52・53号竪穴住居跡実測図 (1/60)	149
第 91 図	48・49(1)号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3).....	151
第 92 図	55号竪穴住居跡実測図 (1/60、1/30).....	153
第 93 図	49(2)~53号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3).....	155
第 94 図	55号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3).....	157
第 95 図	56・57・60・61号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	158
第 96 図	59号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	159
第 97 図	56・57・59・61号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3).....	160
第 98 図	5区第2面ピット出土、5区表採、4区表採等土器実測図 (1/3).....	161
第 99 図	石器・石製品実測図① (1/2、1/3).....	164
第100図	石器・石製品実測図② (1/2、1/3).....	165
第101図	石器・石製品実測図③ (1/2、1/3).....	166
第102図	石器・石製品実測図④ (1/2).....	167
第103図	石器・石製品実測図⑤ (1/2、1/1).....	168
第104図	土製品・金属器実測図 (1/2、2/3).....	169
第105図	3区1号溝出土炭化材材組織の光学顕微鏡写真.....	172
第106図	5区1号中世墓桶状木製品材組織の光学顕微鏡写真.....	174
第107図	5区47号竪穴住居跡から出土した炭化種実.....	176
第108図	暦年較正結果.....	179
第109図	山門北池遺跡出土土師坏の型式分類 (1/3).....	180
第110図	カマド分類図 (1/60).....	183
第111図	山門北池遺跡遺構変遷図 (1/400).....	185

表目次

第 1 表	九州新幹線鹿児島ルート 船小屋・新八代間福岡県内埋蔵文化財調査地点一覧.....	1
第 2 表	旧山門郡を中心とする弥生時代~古墳時代前期集落一覧.....	8
第 3 表	旧山門郡を中心とする古墳時代中期~奈良時代集落一覧.....	14
第 4 表	石器・石製品・土製品・金属器一覧表.....	170
第 5 表	炭化材樹種同定結果.....	171
第 6 表	測定試料及び処理.....	177
第 7 表	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果.....	178
第 8 表	山門北池遺跡及び周辺遺跡における土師器坏の相伴関係.....	181

I. はじめに

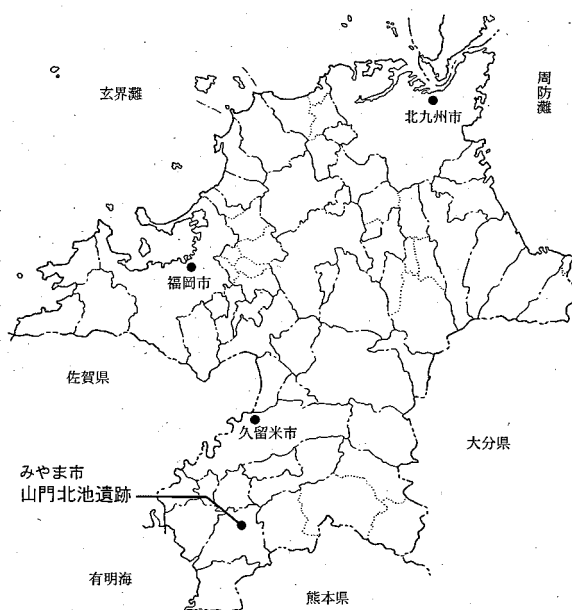
1. 調査の経緯

九州新幹線（鹿児島ルート）は、「国民経済の発展及び国民生活領域の拡大並びに地域の振興を図るため」に「全国新幹線鉄道整備法」に基づき建設される新幹線鉄道で、福岡市（JR博多駅）から熊本市・川内市を經由して鹿児島市（JR鹿児島中央駅）に至る、工事延長249kmの路線である。このうち、JR新八代駅～JR鹿児島中央駅間（127.6km）は平成16年3月13日に部分開業しており、新たな産業の立地や観光産業の振興等に寄与している。

九州新幹線に係る埋蔵文化財の対応などの経緯については、山門前田遺跡報告書（大庭孝夫・

坂元雄紀編2006『山門前田遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第3集 福岡県教育委員会 p1・2）で記述したため省略し、今報告書では当遺跡に直接的に関わる調査の経緯のみ取り上げる。

当遺跡は福岡県みやま市瀬高町山門2424・2423・2413・2351・2352（旧山門郡瀬高町大字山門字北池・前田）に所在し、新幹線工事区分では連続して調査を行った山門前田・藤の尾垣添遺跡と同じ瀬高南工区となる。当教育委員会では平成13年11月よりみやま市高田町海津横馬場遺跡の発掘調査を行っていたが、瀬高町山門地区の新幹線用地買収がほとんど終了したため、



第1図 山門北池遺跡の位置

地点	工事件名	遺跡名	所在地	対象面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	調査年度	報告年度	備考
1	瀬高北	郡領ノ一遺跡	みやま市瀬高町坂田	4,480	1,107	H16	H17	調査終了
2	瀬高中	小川柳ノ内遺跡	みやま市瀬高町小川・下坂田	5,600	5,300	H16・17	H18・19	調査終了
3	瀬高南	藤の尾垣添遺跡	みやま市瀬高町山門	3,360	5,500	H15・16	H19～21	調査終了
4-A	瀬高南	山門北池遺跡	みやま市瀬高町山門	6,340	1,230	H15	本書	調査終了
4-B	瀬高南	山門前田遺跡	みやま市瀬高町山門・松田		1,175	H14・15	H17	調査終了
4-C	瀬高南	松田掛畑遺跡	みやま市瀬高町松田		360	H17	H19	調査終了
5	高田田尻	海津横馬場遺跡	みやま市高田町海津	4,200	2,250	H13～15	H16・17	調査終了
6	高田田尻	飯田遺跡	みやま市高田町田尻	0				遺跡なし
7	高田T		みやま市高田町上楠田	3,300				遺跡なし
8	楠田T	上楠田松浦遺跡	みやま市高田町上楠田	3,520	560	H16	H17	高田町調査
9	楠田T	上楠田垣田遺跡	みやま市高田町上楠田	6,000	870	H16	H17	高田町調査
10	楠田T		みやま市高田町上楠田	3,300				遺跡なし
11	楠田T		大牟田市大字宮崎	5,200				遺跡なし
12	楠田T	釈迦堂古墳群	大牟田市大字岩本	4,000				遺跡なし
13	楠田T	釈迦堂古墳群	大牟田市大字岩本	8,400				遺跡なし
14	楠田T	コノシロ塚遺跡	大牟田市大字岩本	2,576				遺跡なし
15	大牟田ST	白銀川条里	大牟田市大字岩本	3,360				遺跡なし
16	岩本	岩本下内遺跡	大牟田市大字岩本	1,300	1,000	H18	H19	調査終了
17	岩本	岩本土定原遺跡・貝殻塚古墳	大牟田市大字岩本	2,240				遺跡なし
18	岩本		大牟田市大字岩本	896				遺跡なし
19	岩本	出口古墳群	大牟田市大字宮部	5,000				遺跡なし
20	岩本		大牟田市大字宮部	5,400				遺跡なし
21	三池T		大牟田市大字教来木	896				遺跡なし

第1表 九州新幹線鹿児島ルート船小屋・新八代間福岡県内埋蔵文化財調査地点一覧



遺跡の現況写真（南東から）

平成14年11月5～7日に秦憲二を担当とする確認調査を行った。調査では数条のクレークと溝・落ち（包含層）・竪穴住居等と、複数遺構面の存在を確認している。

当瀬高南工区で発掘調査を行った遺跡としては、北から順に藤の尾垣添遺跡（第3地点）・山門北池遺跡（第4-A地点）・山門前田遺跡（第4-B地点）・松田掛畑遺跡（第4-C地点）の4ヶ所である。（地点名は第1表と対応）。松田掛畑遺跡は用地の解決が

他の3遺跡と比べて遅かったため、平成17年度に確認調査及び本調査を行っている。

藤の尾垣添遺跡・山門北池遺跡・山門前田遺跡については、確認調査及び本調査を平成14～16年度から連続して行ったため、調査区割・遺構番号等重複がないよう留意した。この区割りには、圃場整備後の現在の道路・水路を基準に、県道本吉・小川線を挟んで南から0～10区の計11区に区分けした。0～2区は山門前田遺跡、3～5区は山門北池遺跡、6～10区は藤の尾垣添遺跡となる（区割り図面に関しては藤の尾垣添遺跡報告書で掲載予定）。本来なら、遺跡ごとに区分けすべきであるが、同じ遺跡群としての可能性があること（P19註1参照）、また調査時の区分けを優先し、本文の中では南から3～5区とし、区・遺構面ごとに報告する。

本調査の経過としては、山門前田遺跡調査中の平成15年5月1日から3区第1面の表土剥ぎを開始し、引き続き4区第1面南の表土剥ぎを行った。この4区南第1面は第9・12図の検討から、当遺跡の中でも地形が高くなる箇所、上部は削平を受けたと想定されるため、1・2号竪穴住居跡など古墳時代前期前半の遺構を第1面で検出した。また第9図の断面図から4区は起伏にとんだ旧地形を示し、かつ当遺跡は自然堤防上及び沖積微高地に立地し、遺構面が2面存在する箇所がほとんどであることから、地山と遺構埋土との区別が難しく、重機による表土剥ぎは非常に苦労した。このため、5月20日に4区中央～北中央に入れた確認調査トレンチを拡張したトレンチを南北方向に入れ、旧地形を確認することにした。トレンチ土層で4区中央の落ちを確認したため、この中央部は1遺構面のみしかないと判断した。しかし、2日後の22日にはこの判断が誤りで、中央部も遺構面が2面存在することを調査区壁で確認したが、既に4区中央部の狭い微高地及び4区北第1面の南側10mほど第2面部分まで下げており、第1面に存在した東西溝となる溝2条を重機で掘削して、記録に反映できない結果となった。

ちなみに4区第1面の表土剥ぎは24日に終了した。

山門前田遺跡調査終了後の6月11日から、作業員を投入し、3区第1面から遺構検出を開始した。3区第1面1号溝では粘土塊が集中して投棄された状態で検出したため、遺構の性格を把握するための調査に時間がかかり、



調査状況（4区1・2号甕棺墓）

3区第1面の調査は7月31日に終了することとなった。13日から4区第1面南の遺構検出を開始した。先述したように、4区第1面南は弥生時代後期～古墳時代前期の遺構面であったため、埋土と地山の区別が非常に難しく、人力で15cmほど下げて遺構検出を行った。20日には甘木市（現朝倉市）教育委員会松尾宏氏が来訪した。



調査状況（5区）

梅雨による調査中断後の7月9日から4区南遺構掘削を開始した。14日から4区第1面北の遺構検出を行い、翌日の15日から4区第1面北の遺構掘削を開始すると同時に、4区第1面南は遺構実測を開始した。17日には1号溝以外の3区第1面の遺構実測が終了した。

当遺跡とは直接的に関係することではないが、瀬高南工区0～9区東側に借地による南北方向の工事用道路の建設をJVが計画していたため、8月1日～8日に事前の文化財確認調査を小澤佳憲が担当で行った。調査結果は8・9区東側で弥生時代後期の竪穴住居跡群・土坑群を検出したものの、工事用道路は借地かつ仮設であったため、表土下50cm以下は確認調査では掘削できないという制約があり、8・9区以外では遺構は検出できなかった。

8月4日から5区第1面の表土剥ぎ、13日から遺構検出を開始した。この5区第1面の遺構検出を進めていくと、5区中央、西に計2本のクリークを検出したため、21日から小型重機を投入し、クリークを掘削することで、水抜き溝とした。9月2日から4区第1面北の遺構実測と同時に、5区第1面南の遺構掘削を開始した。5区第1面北側は28日に開催した親子体験発掘のため、第1遺構面直上の遺物包含層を残したままであったが、19日に九州航空株式会社に委託し、3～5区第1面のラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。28日には瀬高町教育委員会主催、福岡県教育委員会共催事業の親子体験発掘を当遺跡で行い、28名の参加を得た。体験発掘の内容は調査中の遺構・遺物の説明、体験発掘、土器洗浄というメニューであり、特に体験発掘では遺物を多く含む包含層を掘削したことから、大変好評のうちに終了した。

4区第1面南の2号竪穴住居跡覆土上層から多量の土器が投棄された状態で検出したため、実測に時間がかかったが、10月2日に4区第1面南実測を終了し、また5区第1面南の実測、3区第2面の表土剥ぎも開始した。3日から引き続き4区第2面南の表土剥ぎも行い、遺構検出を開始した。3区第2面は地山と遺構埋土が同じ茶褐色であり、4・5区とは異なり、砂質が強い地山であるため、遺構検出に苦労した。また4区第1面北の実測も同日終了している。7日から3区第2面・4区第2面南の遺構掘削を開始した。3区第2面16号竪穴住居跡では古墳時代後期後半の良好な土師器の一括資料が出土した。21日から3区第2面の実測、4区第2面北の表土剥ぎを行い、24



親子体験発掘写真(1)



親子体験発掘写真(2)

日には5区第1面南の実測を終了した。27日から4区第2面南の実測及び親子体験発掘のために遺物包含層を残していた5区第1面北の表土剥ぎを開始した。28日に4区第2面中央の遺構検出を開始し、調査終了後の山門前田遺跡1区に置いていた現場事務所を6区横の仮設道路事業用地に移設した。29日から4区第2面南の実測、4区第2面北の遺構検出、4区第2面中央の遺構掘削を開始した。

11月4日から4区第2面北、5区第1面北の遺構検出を開始し、11日から5区第1面北の遺構掘削を行った。ちなみに、4区第2面北は遺構密度が高く、かつ遺構埋土と地山の区別が難しかったため、遺構検出に苦労した。また5区第1面30号竪穴住居跡では古墳時代後期後半の良好な土師器の一括資料が出土した。13日から4区第2面中央の遺構実測、17日より4区第2面北の遺構実測を開始し、18日には5区第1面南遺構実測が終了した。19日から4区第2面北の遺構掘削、21日より5区第2面南の表土剥ぎと5区第1面北の遺構実測を開始した。

12月2日から5区第2面南の遺構検出を開始し、12月3日には東亜航空航業株式会社に委託し、3・4区第2面のラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。12月4日には4区第2面北、5区第1面北の実測が終了した。元々、4区第2面南端では竪穴住居及び溝を調査していたが、調査を進めるとこれらの遺構は落ち部分を誤って掘削したものと判断したため、5日に重機により掘削し、落ち中層から46号竪穴住居跡を検出した。10日には3区第2面・4区南第2面の実測が終了し、12日には3区、4区南基本土層、16日には4区中央基本土層を記録した。3区では摩滅の少ない縄文時代後期の土器片も出土したことから、縄文時代の遺構を確認するため、竪穴住居跡下層を50cmほど掘削し、また基本土層を記録する際にも重機によるトレンチを入れたが、遺構・遺物とも検出できなかった。18日には4区第2面北の実測が終了し、19日には4区北の基本土層を記録した。22日から5区第2面北の表土剥ぎ、23日から遺構検出及び掘削を開始した。年末の26日には東亜航空航業株式会社に委託し、5区第2面のラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。

平成16年は1月5日から開始を再開し、空撮が終了した5区第2面の実測を開始した。1/20実測がほぼ終了した、20日から遺構補足調査も同時に行い、30日には5区の基本土層を記録し、当遺跡の調査が終了した。なお23日には九州大学名誉教授西谷正先生、瀬高町立図書館参与三池賢一氏等の来訪を得た。

2. 調査の組織

発掘調査及び整理・報告書作成に至る間の関係者は以下のとおりである。

独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部九州新幹線建設局

(平成15年9月30日まで日本鉄道建設公団 九州新幹線建設局)

	[平成15年度]	[平成17年度]	[平成18年度]
局長	高山 博文	北川 隆	元木 洋
次長	伊神 英二	関根 茂	関根 茂
用地第一課長	関根 茂	田中 等	高橋 秀幸
用地第一課課長補佐	有屋田幸郎 木佐一正和	木佐一正和	
用地第一課担当係長	入江 万久	入江 万久	入江 万久 房野 和清
工事第三課長	石徳 博行	北原 太一	北原 太一
工事第三課課長補佐	上野 登	上野 登 弓削 伸二	弓削 伸二
工事第三課担当係長	橋本 順一	馬淵 善男 林 孝治	林 孝治
大牟田鉄道建設所長	渡邊 修	長谷川正明	長谷川正明
担当副所長	那須 芳人	福田 聡	福田 聡 石津 範彦

福岡県教育委員会 (教育庁総務部文化財保護課)

	[平成15年度] (発掘調査)	[平成17年度] (整理)	[平成18年度] (整理報告)
総括			
教育長	森山 良一	森山 良一	森山 良一
教育次長	三瓶 寧夫	清水 圭輔	清水 圭輔
総務部長	清水 圭輔	中原 一憲	大島 和寛
総務部副理事兼文化財保護課長			磯村 幸男
文化財保護課長	井上 裕弘	久芳 昭文	
副課長		川述 昭人	佐々木隆彦
参事兼課長技術補佐	川述 昭人 木下 修	木下 修 池邊 元明	池邊 元明 小池 史哲
参事		佐々木隆彦 新原 正典	新原 正典
参事兼課長補佐	久芳 昭文	安川 正郷	安川 正郷
参事補佐兼調査第一係長	小池 史哲	小池 史哲	小田 和利

庶務

参事補佐兼管理係長	古賀 敏生	稲尾 茂	
管理係長			井手 優二
事務主査	宮崎 志行	石橋 伸二	野中 顯
主任主事	末竹 元	末竹 元	淵上 大輔
	秦 俊二	淵上 大輔	柏村 正央
			小宮 辰之

調査・報告

参事補佐兼調査第二係長	中間 研志	飛野 博文	飛野 博文
主任技師	秦 憲二	大庭 孝夫	大庭 孝夫
			今井 涼子
	宮地聡一郎		
	小澤 佳憲		
	今井 涼子		
	大庭 孝夫		

技師		一瀬 智	一瀬 智
----	--	------	------

整理担当

参事補佐			濱田 信也
主任技師		岡寺 未幾	大庭 孝夫
		大庭 孝夫	

調査及び整理期間中には、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（旧日本鉄道建設公団）九州新幹線建設局工事第三課・同局大牟田鉄道建設所の担当の方々、瀬高南BL他工事を担当した鴻池・山九・九鉄・廣瀬特定建設工事共同企業体久積副所長をはじめとする工事事務所の方々、瀬高町教育委員会図書館・資料館文化財担当の三池賢一・鬼丸哲也・立石真二氏、字図や圃場整備関係の図面の入手においては瀬高町役場税務課・建設課、また現場近隣の方々には発掘調査を進めるに当たって様々に配慮いただきました（肩書きは調査・整理当時）。

調査には地元を中心とする多数の方々が作業員として参加されました。調査は悪天候、悪条件の作業も伴い、作業員の皆様の御尽力なしには無事に調査を完了することはなかったと思います。ここに深甚の謝意を表します。



山門北池遺跡遠景（南東から）

Ⅱ. 位置と環境

1. 歴史的環境（弥生時代～奈良時代編）

(1) はじめに

今報告書の歴史的環境は、昨年度の山門前田遺跡報告書（大庭孝夫・坂元雄紀編2006『山門前田遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第3集 福岡県教育委員会 p 9～14）において、旧石器・縄文時代及び中近世の当遺跡周辺の歴史的環境を取り上げたため、今回は弥生～奈良時代の旧山門郡を中心とする歴史的環境について記述する。

まず対象する遺跡は、地域としては旧三池郡北部の一部を含む旧山門郡内で、既に報告書が刊行された遺跡を主に検討し、特に集落の動向に焦点を当て、第2・3表の集落消長表を作成した。しかし、報告書刊行遺跡を対象としたため、発掘調査数が多い旧瀬高町域に情報が片寄り、市全域が沖積低地となる柳川市内遺跡の動向は余り反映できていないが、今後の情報の蓄積により新たな知見が加わり、再検討されることを期待したい。

遺跡の動向を検討する前に、第2・5図に下山正一氏が想定する縄文時代早期（太一点破線）・弥生時代後期（太破線）の推定海岸線を加えた（下山1996）。今回の対象となる弥生時代後期の推定海岸線はかなり入り組んだ状態であり、加えて現在より地形に凹凸が存在したことが推測される。そのため、第2・3表には遺跡検出高を示す標高と立地の項目を入れ、遺跡の動向を検討するに当たり地形の変化に留意できるようにした。

なお、当地域の遺跡動向を検討したものとして、西谷正（西谷1976）・山本信夫（関編1977）の論考があり、今回の検討の上でも大いに参照している。

(2) 弥生時代早・前期～古墳時代中期前半（第2図・第2表）

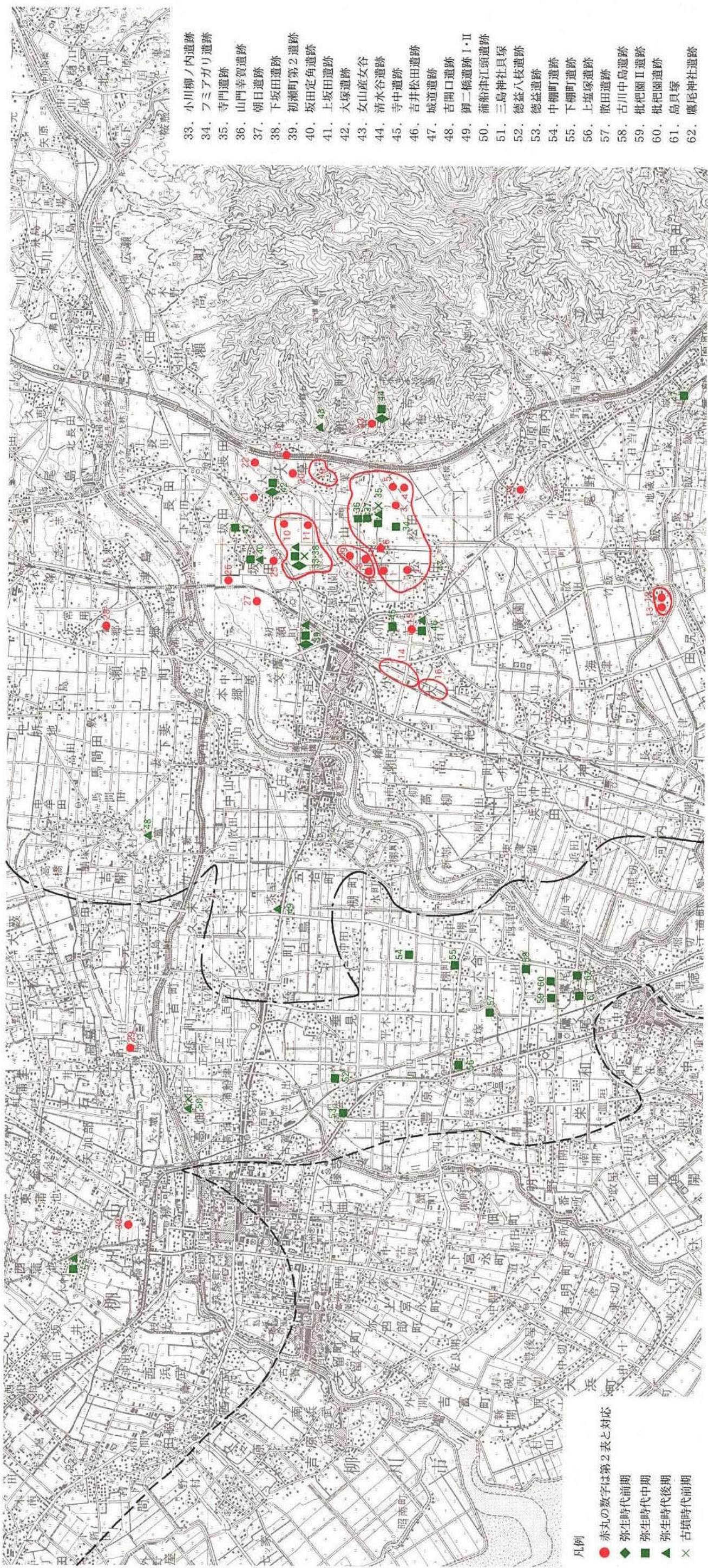
まず圃場整備前の田面標高等から佐賀平野平坦低地の微地形を復元し、弥生～古墳時代の遺跡立地の検討を行った徳富則久氏は、佐賀平野では弥生時代前期以前に遺跡と関わる大部分の微高地の形成が終了したと考えられるとする（徳富1994）。また西谷正氏も柳川市西蒲池天神前遺跡を例に挙げ、弥生時代前期には律令制時代と大差がないところまで海岸線が退き、水田経営が可能な低湿地を控え、漁撈活動も可能な標高3m前後の微高地に遺跡が進出したとする（西谷1976）。以上のように弥生時代開始に伴い、縄文時代晩期以前の遺跡立地である安定した丘陵裾部・台地・微高地とともに、可耕地を求めるために矢部川本・支流の自然堤防上を中心とする沖積低地へ集落が展開する。

そこで、具体的に事例を検討してみると、現在調査で確認されている旧山門郡内の弥生時代早期～前期後半に属する遺跡としては、山門前田遺跡・山ノ上遺跡・小川柳ノ内遺跡の3遺跡のみである。まず当遺跡の120m南に位置する、標高5m前後の山門前田遺跡では、早期～前期前半の溝、前期末に埋没した谷を検出し、弥生時代中期後半まで小規模な集落・墓地として継続する（大庭・坂元2006）。山ノ上遺跡では早期～前期前半と考えられる甕棺墓12基検出した。全ての甕棺墓は壺+突帯文甕の合わせ口甕棺で、供献品として11号甕棺墓から浅鉢1点が出土した（東他2002）。山ノ上遺跡甕棺墓は壺+甕の組み合わせ及び浅鉢の供献から、久保泉丸山遺跡、礫石遺跡などに代表される、佐賀地域における墓地の様相と共通点が認められる。

No.	遺跡群名	遺跡名	内容	立地	標高	弥生時代										古墳時代			備考	文献								
						早期 前期	前期 後半	前期末 ~中期 初頭	中期 前半	中期 後半	中期末 ~後期 初頭	後期 前半	後期 中葉	後期 後半	前期 前半	前期 後半	中期 前半	中期 後半										
						初頭																						
1	山門遺跡群	山門北池遺跡 松延遺跡	集落・墓地	沖積微高地	6 m																							本書・28
2	山門遺跡群	山門前田遺跡	集落・墓地	沖積微高地	5.5 m																							41
3	山門遺跡群	山門井鎌口遺跡	集落	沖積微高地	7 m																							15
4	山門遺跡群	山門牛島遺跡	集落	沖積微高地	7.5 m																							16
5	山門遺跡群	山門片垂遺跡	集落	沖積微高地	7.6 m																							15
6	山門遺跡群	堤遺跡	墓地	自然堤防上	7.5 m																							4・7
7	藤ノ尾遺跡群	藤ノ尾垣添遺跡	集落・墓地	自然堤防上	6 m																							11・13
8	藤ノ尾遺跡群	杉ノ本遺跡	墓地	自然堤防上	6.5 m																							28
9	藤ノ尾遺跡群	藤ノ尾車塚遺跡	集落・墓地	自然堤防上	7 m																							21・25・28
10	権現塚遺跡群	権現塚北遺跡	集落・墓地	沖積微高地	9 m																							8
11	権現塚遺跡群	権現塚南遺跡	集落	沖積微高地	9 m																							10
12	海津遺跡群	海津横馬場遺跡	集落・墓地	台地上	8.5 m																							36・38
13	海津遺跡群	竹海校東遺跡	集落・墓地	台地上	9.5 m																							32
14	鉦田遺跡群	鉦田遺跡	墓地	自然堤防上																								2・3・4
15	鉦田遺跡群	上枇杷遺跡	集落	自然堤防上	5 m																							12
16	鉦田遺跡群	大江南遺跡	集落	自然堤防上	5 m																							10
17		御仁田遺跡	集落	自然堤防上	7.5 m																							23
18		大道端遺跡	集落	沖積微高地	9.5 m																							4・19
19		草葉遺跡	散布地	沖積微高地	8 m																							4
20		大草遺跡	散布地	沖積微高地	9 m																							4
21		北古賀遺跡	集落	自然堤防上	9.5 m																							19
22		三反畑遺跡	集落	沖積微高地	10.5 m																							14
23		三船山遺跡	集落	台地上	48 m																							9
24		山ノ上遺跡	集落・墓地	台地上	14 m																							31・42
25		定角遺跡	墓地	自然堤防上																								4
26		郡領ノ一遺跡	集落	沖積微高地	7.5 m																							40
27		文広大塚遺跡	集落・墓地	自然堤防上	7 m																							17
28		本郷地区遺跡	集落	沖積微高地	5.5 m																							27・28
29		磯島フケ遺跡	集落	沖積低地	3 m																							39
30		東浦池榎町遺跡	集落	沖積低地	3 m																							35

第2表 旧山門郡を中心とする弥生時代～古墳時代前期集落一覧

表の見方・凡例については第3表参照 (p14)



- 33. 小川柳ノ内遺跡
- 34. フミアガリ遺跡
- 35. 寺門遺跡
- 36. 山門幸賀遺跡
- 37. 朝日遺跡
- 38. 下坂田遺跡
- 39. 初瀬町第2遺跡
- 40. 坂田定角遺跡
- 41. 上坂田遺跡
- 42. 大塚遺跡
- 43. 女山産女谷
- 44. 清水谷遺跡
- 45. 寺中遺跡
- 46. 吉井松田遺跡
- 47. 城道遺跡
- 48. 吉開口遺跡
- 49. 御二橋遺跡 I・II
- 50. 蒲船津江頭遺跡
- 51. 三島神社貝塚
- 52. 徳益八枝遺跡
- 53. 徳益遺跡
- 54. 中棚町遺跡
- 55. 下棚町遺跡
- 56. 上塩塚遺跡
- 57. 散田遺跡
- 58. 古川中島遺跡
- 59. 枇杷園 I 遺跡
- 60. 枇杷園遺跡
- 61. 島貝塚
- 62. 鷹尾神社遺跡

凡例

- 赤丸の数字は第2表と対応
- ◆ 弥生時代前期
- 弥生時代中期
- ▲ 弥生時代後期
- × 古墳時代前期

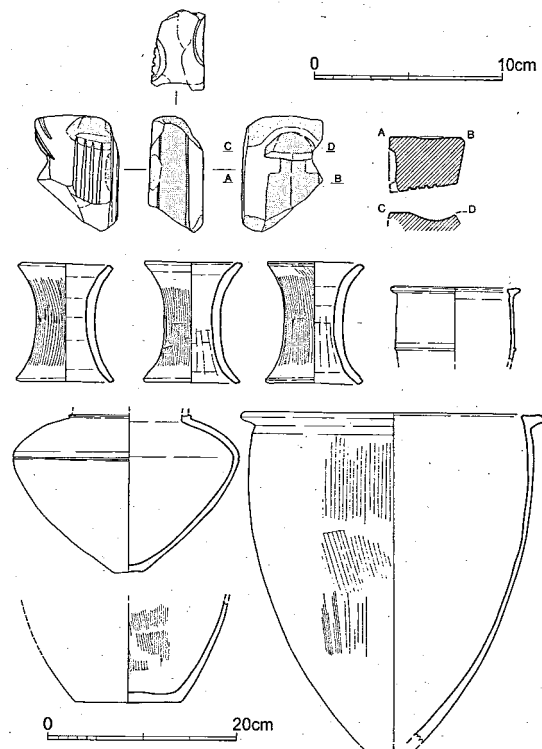
第2図 弥生時代～古墳時代前期周辺遺跡分布図 (1/50,000)

また、山門前田遺跡出土土器は佐賀平野の土器様相と類似点が多いことから、当地域において弥生文化の導入するにあたり、佐賀地域の遺跡が何らかの関与した可能性を指摘できる。権現塚遺跡群に含まれる小川柳ノ内遺跡では、前期後半の竪穴住居跡を伴う集落を検出している。現在整理中であるため、詳細は今後の調査報告に期待したい。

弥生時代前期末・中期初頭になると、台地・自然堤防及び沖積低地上に遺跡が爆発的に増加し、中期前半にはピークを迎える。この段階の遺跡の特徴として、銚田遺跡群（銚田・上枇杷・大江南遺跡等）・藤ノ尾遺跡群（藤ノ尾・藤の尾垣添・藤ノ尾車塚・北ノ前・杉ノ本遺跡等）・権現塚遺跡群（権現塚北・権現塚南・定角遺跡・小川柳ノ内遺跡等）・海津遺跡群（海津横馬場・竹海校東遺跡等）・山門遺跡群（山門北池・松延・山門前田・山門牛島・山門片垂・山門井鎌口・堤・フミアガリ遺跡等）（註1）という大規模な集落が出現し、その周囲には小規模な集落（大道端・御仁田遺跡等）が営まれ、地域内における集落間の格差が認められるようになる。柳川市旧大和町域の弥生集落の検討を行った中園聡氏は、前期末・中期初頭になると、矢部川下流域の標高3m前後の沖積微高地に小規模な遺跡が進出し、これらの小規模な集落は中期後半には藤ノ尾遺跡群や銚田遺跡群のような大型集落に集住した可能性を指摘する（中園2004）。中園と同様の指摘はすでに西谷正も行っている（西谷1976）。

この集落間格差を象徴する例である銚田遺跡群は、東西600m×南北1kmほどの範囲に広がる大規模遺跡である。当遺跡は戦後瓦用粘土を採集するための地下げが行われ、鏡山猛氏が弥生時代中期の甕棺墓55基及び石棺墓等を調査したが、他にも未調査のまま破壊された甕棺墓等も多いとのことである。甕棺墓群は大きくは第一～三区に分かれ、中でも第二区はさらにA～E群に細分でき、最大の基数を数えるB群のみ細形銅剣切先片、磨製石鏃、石製紡錘車が棺外副葬の状態で見られている（鏡山1972・西谷1976）。また銚田遺跡群に含まれる上枇杷遺跡（川述1988）では中期前半の2号土壌から銅剣と考えられる鋳型が出土する（第4図）。藤ノ尾遺跡群では中期後半古相の小児棺である14号甕棺墓から翡翠製勾玉が出土し（田中編1988）、正式な調査は行われていないため詳細は不明であるが、同遺跡からは中・後期の甕棺墓から鉄剣が出土し、環濠と考えられる溝の一部が検出されているようである（西谷1976）。

弥生時代中期後半になると、大規模集落である上記5遺跡では、引き続き集落が営まれるものの、各遺跡内の遺構数は減少する。また前段階に形成された小規模集落も西谷・中園両氏の指摘するように消滅する方向へ向かうが、本郷地区・三反田・文広大塚・東蒲池榎町・磯鳥フ



第3図 上枇杷遺2号土壌出土鋳型・土器実測図（鋳型は1/4、土器は1/8、福岡県82集より）

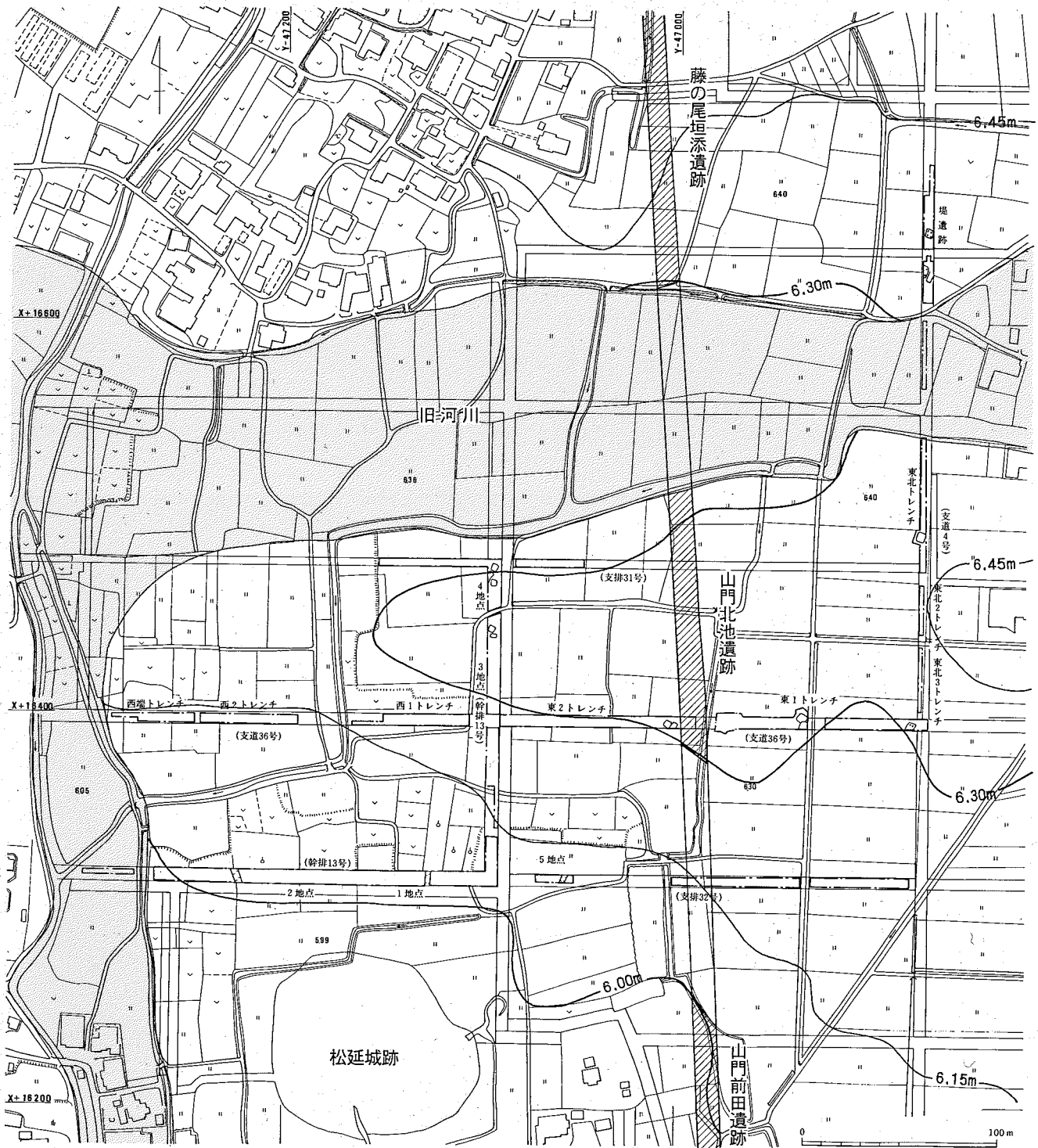
ケ遺跡例のようにこの段階から新たに展開する遺跡も認められる。この新たに展開する遺跡のほとんどが中期後半の時期に収まる短い存続期間を示すことから、当地域では何らかの要因で小規模集落の再編が行われた可能性があり、一概に大規模集落への集住が進んだとは言えないと考えられる。この段階の特徴的な遺跡ではある磯鳥フケ遺跡は標高3m前後の沖積微高地に立地する掘立柱建物12棟とその周囲の土坑群等で構成される集落である(上田編2006)。掘立柱建物のみで構成される集落は佐賀平野沖積低地で多く確認されており、柱穴構造も佐賀平野例と同様のものであることから、矢部川下流沖積低地における標高3m前後の弥生集落は、佐賀平野沖積低地と同じく掘立柱建物が住居の主体となる可能性が高いことを示唆している。また山門遺跡群内のフミアガリ遺跡では中期後半の竪穴住居跡より青銅製鋤先が出土する。

この段階には他地域との交流が活発化したことが出土資料から裏付けられる。まず中期末の大江南遺跡竪穴遺構床面上で腰岳産と考えられる拳大の黒曜石原石が敷き詰められた状態で出土し(川述1986)、当該期の黒曜石の流通システムを考える上で重要な資料となる。大道端遺跡・大江南遺跡・磯鳥フケ遺跡では黒髪Ⅱ式新段階と須玖Ⅱ式新段階の土器の共伴を確認しており、当地域は両地域の土器編年における併行関係を考える上でも重要な地域であり、今後の土器研究が期待される。

住居形態においては、権現塚南遺跡では中期前半の隅丸方形プランを検出し(川述1986)、海津横馬場遺跡では中期初頭～前半には発展型松菊里型住居の46号竪穴住居跡に代表される円形住居、中期末～後期前半には2本柱の方形住居という住居形態の変遷を確認している(宮地他2005・2006)。中期末の三船山遺跡11号住居跡は方形住居であり(池辺他1985)、権現塚南遺跡例のようにイレギュラーな例も存在するが、基本的には円形→方形住居という住居形態の时期的変遷が認められる。なお、三船山遺跡では後期前半に方形住居から長方形2本柱ベット付住居へ変遷しており、古墳時代中期前半にかけてこの住居形態が主流となる。また、古墳時代前期前半をピークに住居自体も大型化する傾向にある。

弥生時代後期初頭・前半になると、銚田遺跡群の動向は不明であるものの、他の大規模集落である海津・藤ノ尾・山門・権現塚遺跡群は中期後半よりもさらに遺構数が減少するが、継続して集落が営まれる。先述したように中期段階の小規模集落は後期になると消滅するが、標高50m前後の丘陵斜面に位置する三船山遺跡の存在は、女山中腹の標高64mから出土した中広形銅矛2口(片岡2001、p11・12に実測図記載)と合わせ、この段階における社会的緊張関係との関わりで注目できる。

弥生時代後期前半までは低調な遺跡動向であったが、後期後半～古墳時代前期前半には中期以来の大規模集落である海津・藤ノ尾・山門遺跡群では急激に遺構数が増えると同時に、大規模遺跡周辺にあたる郡領ノ一・北古賀遺跡など新たな遺跡の進出や御仁田・本郷地区・大道端遺跡など中期集落と重複する場所に遺跡が認められる。特に中期以来の大規模集落は遺構密度が非常に高くなり、海津横馬場遺跡では巴形銅器・小型倣製鏡の出土など、より顕著な集落間の格差が認められる。これらの遺跡は古墳時代前期前半をピークとして、遺跡・遺構数が余り減少することなく、古墳時代中期前半まで継続して集落が営まれるが、中期中葉に一斉に集落が断絶し、後期中葉までの約100年間、当地域では中期古墳の存在から集落が存在することは確実であるが、遺跡自体は確認されていない。この断絶の契機としては、前方後円墳である藤



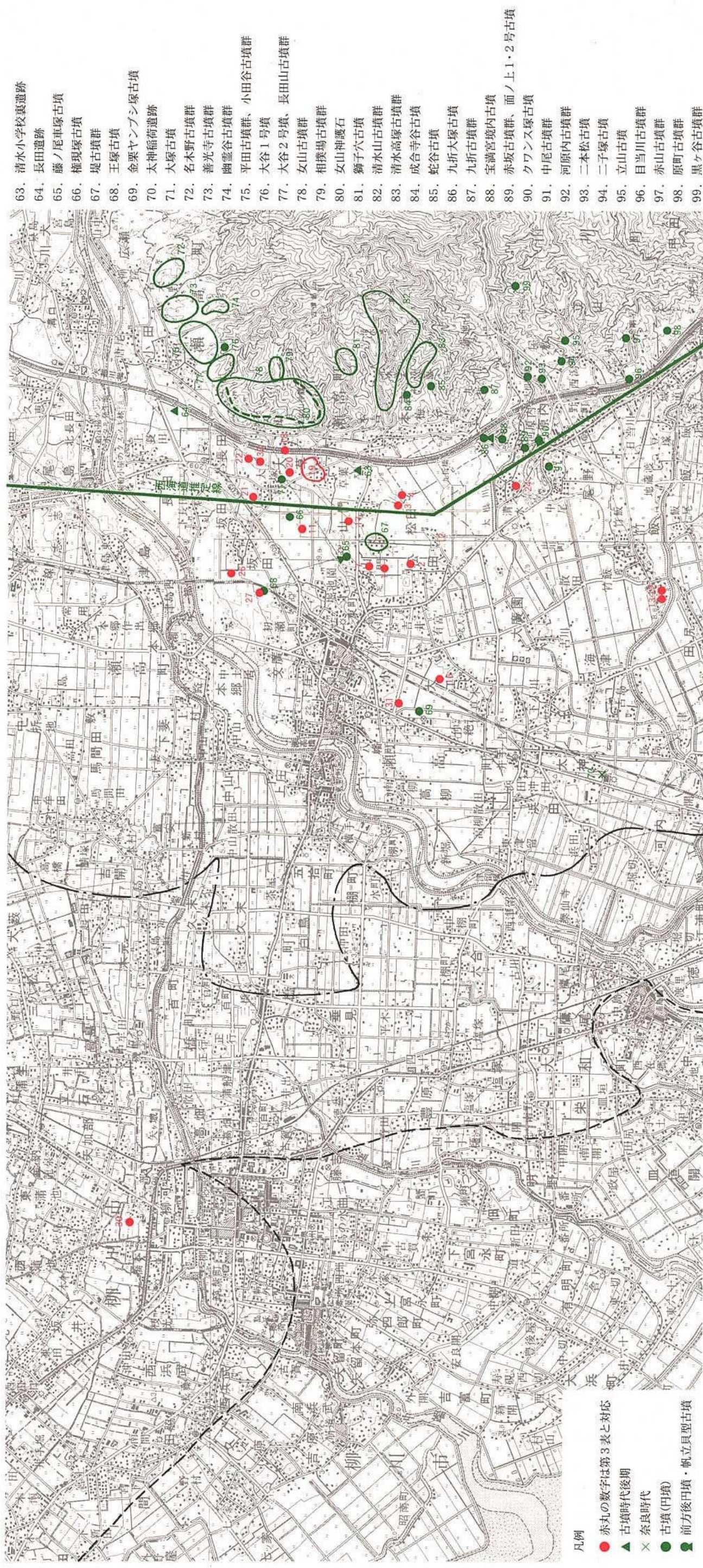
第4図 山門北池遺跡周辺地形図及び松延遺跡トレンチ配置図 (1/3,000)
 (等高線は圃場整備前田面標高から図化)

No.	遺跡名	内容	立地	標高	古墳時代												11世紀	備考	文献
					7世紀			8世紀			9世紀		10世紀	11世紀					
		前期	中期	後期	前半	中葉	後半	前半	後半	前半	後半	前半			後半				
1	山門北池遺跡 松延遺跡	集落	自然堤防上	6 m														本書・28	
2	山門前田遺跡	集落	沖積微高地	5.5 m														土2、溝2	
3	山門井鎌口遺跡	集落	沖積微高地	7 m														住3	
4	山門牛島遺跡	集落	沖積微高地	7.5 m														住1	
7	藤の尾垣添遺跡	集落	自然堤防上	6 m														住5	
11	権現塚南遺跡	集落	沖積微高地	9 m														住3、土1、溝1	
12	海津横馬場遺跡	集落	台地上	8.5 m														36・38	
13	竹海校東遺跡	集落	台地上	9.5 m														32	
31	金栗遺跡	集落	自然堤防上	5 m														土1	
16	大江南遺跡	集落	自然堤防上	5 m														住10	
17	御仁田遺跡	集落	自然堤防上	7.5 m														石帯1、 巴面硯3、山門 郡衙推定地	
18	大道端遺跡	集落	沖積微高地	9.5 m														住170以上、大集落	
19	草葉遺跡	散布地	沖積微高地	8 m														4	
20	大草遺跡	散布地	沖積微高地	9 m														4	
21	北古賀遺跡	集落	自然堤防上	9.5 m														住3	
22	三反畑遺跡	集落	沖積微高地	10.5 m														19	
24	山ノ上遺跡	集落	台地上	14 m														14	
26	郡領ノ一遺跡	集落	沖積微高地	7.5 m														郡主厩相柳地・刻書土 器・風子硯等	
27	文広大塚遺跡	墓地	自然堤防上	7 m														住5	
30	東蒲池榎町遺跡	集落	沖積低地	3 m														石棺墓・石蓋土坑、滑石 製品	
32	女山火葬場遺跡	散布地	沖積微高地	10 m														35	
																		4	

第3表 旧山門郡を中心とする古墳時代中期～奈良時代集落一覧

《表の見方及び凡例》

- ・第3表の遺跡番号は、第5図の番号と対応。第2表の遺跡番号は、第2図の番号と対応。
- ・標高は遺構検出レベルを示す。遺構面に傾斜がある場合には、平均レベルで計測する。
- ・表中の実線は、遺構・遺物などが出土しており、確実に存続していたと考えられるもの。
- ・薄いアミ線は正確な時期比定が難しいもの及び存続した可能性が高いものを示す。
- ・文献番号は p.19・20の引用・参考文献の番号と対応。



- 63. 清水小学校裏遺跡
- 64. 長田遺跡
- 65. 藤ノ尾車塚古墳
- 66. 権現塚古墳
- 67. 堤古墳群
- 68. 王塚古墳
- 69. 金栗ヤンブシ塚古墳
- 70. 太神稲荷遺跡
- 71. 大塚古墳
- 72. 名木野古墳群
- 73. 善光寺古墳群
- 74. 幽霊谷古墳群
- 75. 平田古墳群、小田谷古墳群
- 76. 大谷1号墳
- 77. 大谷2号墳、長田山古墳群
- 78. 女山古墳群
- 79. 相撲場古墳群
- 80. 女山神護石
- 81. 獅子穴古墳
- 82. 清水山古墳群
- 83. 清水高塚古墳群
- 84. 成合寺古墳
- 85. 蛇谷古墳
- 86. 九折大塚古墳
- 87. 九折古墳群
- 88. 宝満宮境内古墳
- 89. 赤坂古墳群、面ノ上1・2号古墳
- 90. クワンス塚古墳
- 91. 中尾古墳群
- 92. 河原内古墳群
- 93. 二本松古墳
- 94. 二子塚古墳
- 95. 立山古墳
- 96. 目当川古墳群
- 97. 赤山古墳群
- 98. 原町古墳群
- 99. 黒ヶ谷古墳群

- 凡例
- 赤丸の数字は第3表と対応
 - ▲ 古墳時代後期
 - × 奈良時代
 - 古墳(円墳)
 - 前方後円墳・帆立貝型古墳

第5図 古墳時代後期～奈良時代周辺遺跡分布図 (1/50,000)

ノ尾車塚古墳が中期前半に断絶する藤ノ尾車塚遺跡に近接して造営されることに象徴される、集落の再編が行われた結果によると考えておきたい。

また棒状浮文土器を検討した檀佳克氏は、山門牛島遺跡を含む当土器出土遺跡は、古墳時代前期における有明海沿岸地域における交流の痕跡を示す遺跡として評価する。この土器の存在から、瀬高地域には八女市西原遺跡のような首長墓よりランクが下がる方形周溝墓が存在する可能性が高いと指摘しており（檀2005）、藤ノ尾車塚古墳の前段階の首長墓が当遺跡周辺に存在する可能性がある。また古墳時代前期後半に掘削、中期前半に埋没する方形溝と柱穴群を検出した竹海校東遺跡は、方形居館となる可能性が高い（猿渡2003）。



第6図 藤ノ尾車塚古墳現況空中写真

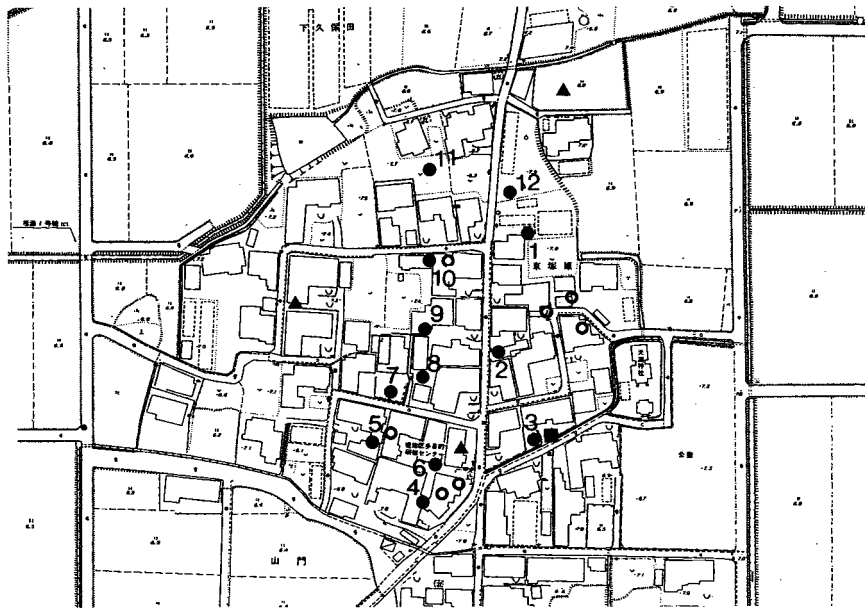
(3) 古墳時代中期～後期（第5図・第3表）

先述したように、現在確認されている集落すべてが古墳時代中期前半で断絶し、中期中葉以降の集落動向は不明である。そこで中期古墳の動向を見てみると、返済川流域の首長墓系列として全長55mの前方後円墳である藤ノ尾車塚古墳（第6図）、径58mの大型円墳である権現塚古墳（第7図）が挙げられる。いずれも5世紀代の古墳と考えられるが、未調査のため内部主体及び時期などは不明である。この返済川の首長墓は藤ノ尾車塚古墳に後続すると考えられる権現塚古墳以降は確認されていないが、5世紀末には大根川流域の台地上に、全長84mの帆立貝形古墳と想定されるクワンス塚古墳（小田2001）、6世紀前半には全長約80mの前方後円墳である九折大塚古墳が展開する。さらに両古墳周囲には5世紀末～6世紀初頭の赤坂1・2号墳（小田2001）など埴輪を伴う古墳群も複数存在することから、大根川流域における5世紀初頭の面の上1号墳（佐々木1995）の存在は気になるものの、返済川流域から大根川流域へ首長系列が移動した可能性を指摘しておきたい。

首長系列以外の古墳としては、縄掛突起を持つ長持形石棺が出土した大谷1・2号墳（関1977）、5世紀後半～6世紀末にかけて同一丘陵上に築造され、石室形態の変遷を追うことができる名木野古墳群（新原1977）、6世紀後半～7世紀前半の山内古墳群1・2号墳（川述1982）、6世紀中葉の面の上2号墳（佐々木1993）などが発掘調査されているが、



第7図 権現塚古墳地形測量図（1/1,000、瀬高町2集より）



村山建治1967の堤古墳群配置図及び
村山建治1967所収の石田昌氏大正二
年時配置図及び瀬高町第2集を参考し、
現地図上に落として作成

- 凡例
- ほぼ確実な古墳(村山氏踏査時)
 - 場所が不確実な古墳(石田氏踏査時)
 - ▲ 甕棺
 - 石棺墓

第8図 堤古墳群 (1/3,000)

当地域の調査例は少なく、後期古墳の動向など不明な点が多い。調査された中でも、6世紀後半に築造されたと考えられる、成合寺谷1号墳は複室構造の横穴式石室で、後室石屋形前縁部に赤・白と塗り残した岩肌の緑色で連続三角文と菱形文の図文を描く、装飾古墳であり、石屋形構造や図文構成など独自色が強く、注

目される(三池他2004)。

なお、女山・清水山の山麓・斜面には、長田山・相撲場・女山・清水山古墳群など横穴式石室・横穴墓を主体とする後期古墳が総数で数百基以上分布し、今後の調査の進展が期待される。また女山・清水山以外の沖積低地においても、堤古墳群・金栗ヤンプシ塚古墳・大草大塚古墳(前方後円墳か)などの後期古墳が存在する。中でも堤古墳群は標高7mほどの自然堤防上に立地し、昭和37年段階で12基確認されている(第8図)。堤古墳群は横穴式石室を主体とする後期古墳になると考えられ、場所・時期的にも近接する当遺跡との関係が注目される。

古墳時代後期の集落の動向は、後期中葉以降台地・自然堤防・沖積微高地上を中心に集落が一斉に展開し、弥生時代後期後半以来の画期となる。中でも大道端遺跡は古墳時代後期中葉～奈良時代の竪穴住居跡150棟以上+20棟以上(F・G・H区)が検出された、南北幅340m×東西幅約300mの楕円形に近い形になると考えられる大規模遺跡で、韃羽口・鉄滓等の出土から、鉄器生産(鍛冶)を行っていたことが指摘されている(関1977・田中1993)。検出された竪穴住居群は10棟前後の単位に分類でき、住居重複関係から古墳時代後期には集落内の土地規制が行われた可能性が高い。また当該段階の住居形態は古墳時代中期前半までの住居形態とは大きく異なり、4本柱の方形住居に造り付けカマドを付設する形態へ変化し、奈良時代にかけて住居規模は次第に縮小する。

(4) 飛鳥・奈良時代(第5図・第3表)

古墳時代後期中葉から営まれた集落は後期末をピークとして、次第に遺構を減少させながら多くが7世紀前半まで継続する。7世紀後半には大道端・海津横馬場遺跡を除き断絶している

が、7世紀後半まで古墳の追葬が認められることから、古墳時代後期からの集落の枠組みは維持されていたと考えられる。海津横馬場遺跡では奈良時代を通じた集落が存在であり、9世紀前半の須恵器集積土坑も検出されている。7世紀後半には、標高200mの古僧都山を中心として、西・南側の全長1.5kmのみ列石を巡らす、女山神護石が築造されている（川述編1982）。西側の谷部分には横尾谷・長谷・源吾谷・産女谷水門という4つの水門が存在する一方、列石や土塁も途切れている箇所が複数認められることから、築城途中で中止されたものと考えられる。

8世紀に入ると、大道端遺跡の竪穴住居数は数棟のみとなり、海津横馬場・権現塚南・御仁田・山ノ上遺跡で集落を確認しただけで、低調な遺跡動向となる。本吉遺跡では条里制の遺構を検出しているが（関編1977）、この条里制の実施とともに集落の再編が行われたと考えられ、特に沖積低地の集落は大きく再編されたことは想像に難くない。この段階の遺跡として注目される山ノ上遺跡では、包含層・谷部から「田前主帳」・「田前」・「国前」と記した刻書土器及び越州窯系青磁・緑釉陶器・製塩土器片・風字硯などが出土した（小田2001・東他2002）。田前は姓、主帳は郡司の官職名であり、特殊品の出土から山ノ前遺跡は山門郡衙に関わる田前主帳の根拠地となると考えられる。また山門郡衙に直接的に関連する遺跡は検出されていないものの、円面硯3点と石帯が出土した御仁田遺跡は安定した自然堤防上に立地し、西海道推定ルートに接することからも、山門郡衙の有力な推定地の一つとなる。また老司系瓦が出土した金栗遺跡、円面硯が出土した太神稻荷遺跡、「塚」の墨書土器が出土した権現塚南遺跡も郡衙候補地となり、今後の調査の進展に期待したい。

なお、第3図の西海道推定線は日野尚志の論考によるが（日野1978）、瀬高町大字松田付近で東南方向に折れ曲がる。これは条里がこの付近で北西－東南方向に変化することによるものであり、先に存在した西海道に合わせて条里を行ったためと考えられている。

註

註1 山門遺跡群は藤ノ尾遺跡群と旧河川は挟んでかなり近接した位置に存在するため、同一遺跡群となる可能性がある。

引用・参考文献（文献番号は第2・3表と対応）

1. 村山健治1967『堤古墳群』筑後地区郷土研究会・邪馬台郷土史会
2. 鏡山猛1972『九州考古学論攷』吉川弘文館
3. 西谷正1976「山門郡の考古学」『九州文化史研究所紀要』第二十一号 九州大学九州文化史研究施設
4. 関晴彦編1977『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XIV』福岡県教育委員会
5. 新原正典1977『名木野古墳群』瀬高町文化財調査報告書第1集 瀬高町教育委員会
6. 日野尚志1978「筑後国上妻・下妻・山門・三池四郡における条里について」『研究論集』第26集 佐賀大学教育学部
7. 川述昭人編1982『女山・山内古墳群』瀬高町文化財調査報告書第2集 瀬高町教育委員会
8. 川述昭人編1985『権現塚北遺跡』瀬高町文化財調査報告書第3集 瀬高町教育委員会
9. 川述昭人・池辺元明・木下修1985「三船山遺跡」『観音丸遺跡・向野古墳群・三船山遺跡』福岡県文化財調査報告書第71集 福岡県教育委員会
10. 川述昭人1986『瀬高地区遺跡 上長延1～3号墳』福岡県文化財調査報告書第74集 福岡県教育委員会
11. 田中康信編1988『藤ノ尾垣添遺跡』瀬高町文化財調査報告書第4集 瀬高町教育委員会
12. 川述昭人1988『上枇杷・金栗遺跡』福岡県文化財調査報告書第82集 福岡県教育委員会

13. 田中康信編1989『藤の尾垣添遺跡Ⅱ』瀬高町文化財調査報告書第5集 瀬高町教育委員会
14. 田中康信1990『三反田遺跡』瀬高町文化財調査報告書第6集 瀬高町教育委員会
15. 田中康信1991『山門遺跡群』瀬高町文化財調査報告書第7集 瀬高町教育委員会
16. 田中康信1992『山門遺跡群Ⅱ』瀬高町文化財調査報告書第8集 瀬高町教育委員会
17. 田中康信1993『瀬高地区遺跡群』瀬高町文化財調査報告書第9集 瀬高町教育委員会
18. 佐々木隆彦1993『面の上2号古墳』山川町文化財調査報告書第1集 山川町教育委員会
19. 田中康信1993『大道端・北古賀遺跡』瀬高町文化財調査報告書第10集 瀬高町教育委員会
20. 下山正一・松本直久・湯村弘志・竹村恵二・岩尾雄四郎・三浦哲彦・陶野郁雄1994「有明海北岸低地の第四系」『九州大学理学部研究報告 地球惑星科学』第18巻第2号
21. 田中康信1994『藤ノ尾車塚遺跡』瀬高町文化財調査報告書第11集 瀬高町教育委員会
22. 徳富則久1994「平坦低地における弥生～古墳時代集落の立地と動向（佐賀平野の集落Ⅰ）」『佐賀考古』第1号 佐賀考古談話会
23. 田中康信1995『御仁田遺跡』瀬高町文化財調査報告書第12集 瀬高町教育委員会
24. 佐々木隆彦1995「山川町・面の上1号墳の再検討」『九州歴史資料館研究論集』20集 九州歴史資料館
25. 田中康信1996『藤ノ尾車塚遺跡Ⅱ』瀬高町文化財調査報告書第13集 瀬高町教育委員会
26. 下山正一1996「有明海沿岸低平地の成因と海岸線の変遷」『ミュージアム九州』第52号 博物館等建設推進九州会議
27. 田中康信1997『本郷地区遺跡』瀬高町文化財調査報告書第14集 瀬高町教育委員会
28. 田中康信1998『瀬高地区遺跡群Ⅱ』瀬高町文化財調査報告書第15集 瀬高町教育委員会
29. 片岡宏二2001「第二編 天神浦・田代堤出土銅矛と筑後出土銅矛の同類の銅矛」『天神浦出土銅矛』広川町教育委員会
30. 小田和利2001『山ノ上遺跡・赤坂古墳群』福岡県文化財調査報告書第164集 福岡県教育委員会
31. 新原正典・東竜雄2002『山ノ上遺跡』山川町文化財調査報告書第4集 山川町教育委員会
32. 猿渡真弓2003『竹海校東遺跡』高田町文化財調査報告書第7集 山川町教育委員会
33. 三池賢一・鬼丸哲也編2004『成合寺谷1号墳』瀬高町文化財調査報告書第17集 瀬高町教育委員会
34. 中園聡2004『九州弥生文化の特質』財団法人九州大学出版会
35. 今井涼子2005『東蒲池榎町遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 福岡県教育委員会
36. 進村真之・宮地聡一郎2005『海津横馬場遺跡Ⅰ』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第1集 福岡県教育委員会
37. 檀佳克2005「九州出土の棒状浮文を有する土師器に関する一考察」『九州考古学』第80号 九州考古学会
38. 宮地聡一郎編2006『海津横馬場遺跡Ⅱ』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第2集 福岡県教育委員会
39. 上田龍児2006『磯鳥フケ遺跡』柳川市文化財調査報告書第1集 柳川市教育委員会
40. 今井涼子2006『郡領ノ一遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第4集 福岡県教育委員会
41. 大庭孝夫・坂元雄紀2006『山門前田遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第3集 福岡県教育委員会
42. 『図説 南筑後の歴史』2006 株式会社郷土出版社

Ⅲ. 発掘調査の記録

1. 遺跡の概要

(1) 遺跡の概要

山門北池遺跡は、福岡県みやま市山門2424・2423・2413・2351・2352（旧山門郡瀬高町大字山門字北池・前田）に位置する。なお、当遺跡周辺の圃場整備前の字界については、山門前田遺跡報告書内で検討しているため、参照されたい（大庭孝夫・坂元雄紀編2006『山門前田遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第3集 福岡県教育委員会 第74・75図 p135～137）。当遺跡は山門前田遺跡と同じく、大字・小字名から遺跡名を付与したが、国営筑後川下流用水建設事業に伴い、当遺跡3・4区間の道路部分の発掘調査を、1985年度に瀬高町教育委員会が「松延遺跡」として行っている（今調査区と瀬高町教委調査区との関係については第4・9図を参照のこと、また松延遺跡報告書は以下の通りである。田中康信他1998「Ⅲ 松延遺跡の調査」『瀬高地区遺跡群Ⅱ』瀬高町文化財調査報告書第15集 瀬高町教育委員会）。今回の調査においても、既に周知化された松延遺跡2次調査とすることもできたが、「松延遺跡」という遺跡名については、以下に列挙したいくつかの問題点が認められるため、今回は「山門北池遺跡」として報告する。

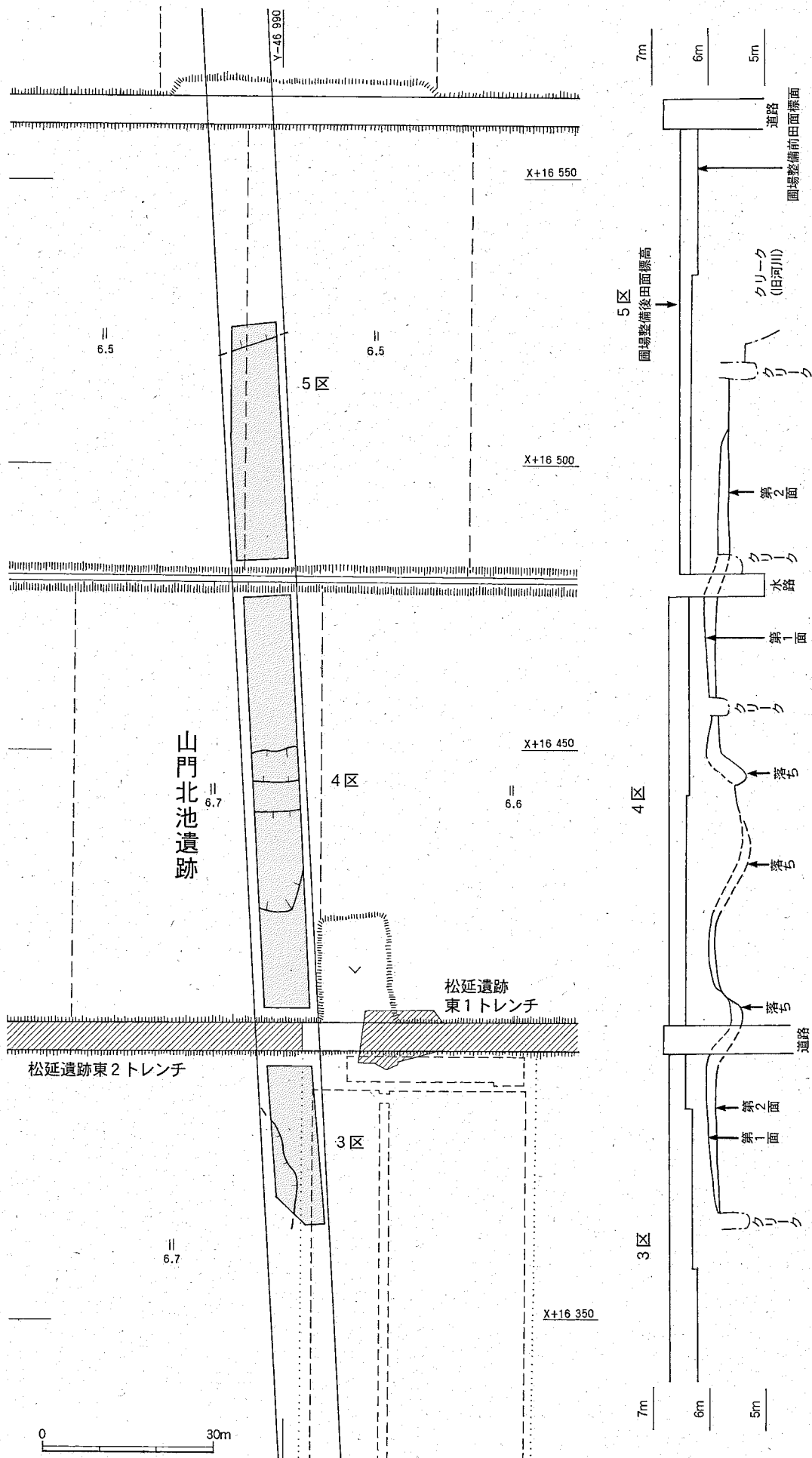
第1の問題点として、「松延」という地名は中近世では公田・松延城・松延村などに見られるが、明治以降の字名では残っておらず、現在ではバス停及び城跡名に痕跡を留めるのみである。第2に、福岡県遺跡等分布地図（福岡県教育委員会1978『福岡県遺跡等分布地図（大牟田市・柳川市・山門郡・三池郡編）』）及び全国遺跡地図（文化庁文化財保護部1984『全国遺跡地図 福岡県』）では、当遺跡周辺に所在する「松延」という名称が付与された遺跡として、松延宮東遺跡・松延二ノ丸遺跡・松延大石遺跡という3ヶ所が掲載されている。しかし、この3遺跡の一覧表の所在地欄を見ると、いずれも瀬高町大字松田となっており、瀬高町遺跡詳細分布地図が未作成である現在、最も新しく刊行された遺跡地図である両遺跡分布地図から、「松延」という遺跡名を当てはめることができる範囲としては、大字松田内のみと理解できる。

以上の2点から、大字山門に所在する当遺跡は、「松延遺跡」という遺跡名は不相当であると考えられるので、「山門北池遺跡」という遺跡名が適当であると判断した。今後周辺の調査成果やみやま市内遺跡等詳細分布地図の作成により、遺跡名の整理を期待したい。

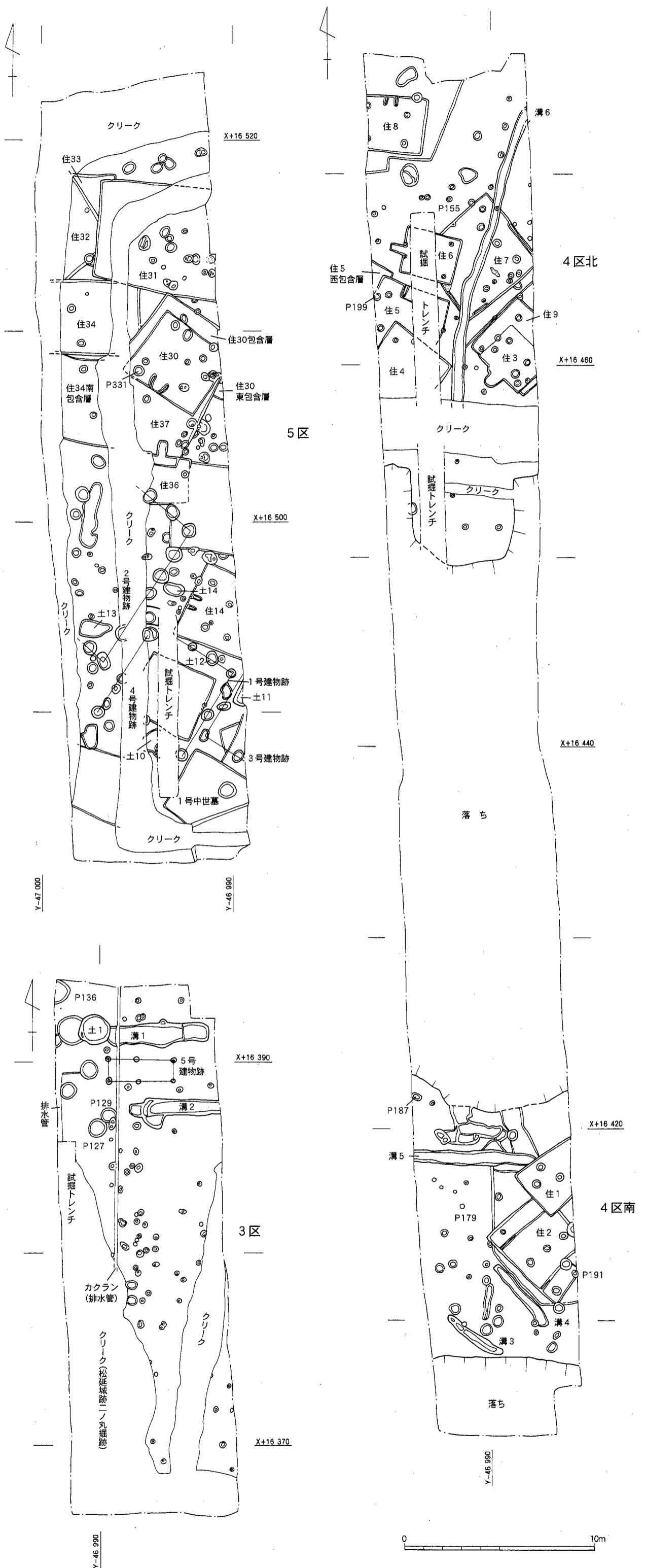
当遺跡から約130m南に位置する山門前田遺跡との間には、廃城後も近代までクリークとして利用された松延城跡二ノ丸掘跡、約100m北に位置する藤の尾垣添遺跡との間には旧河川が存在することを、試掘・確認調査及び昭和24年頃の米軍空中写真、圃場整備前の図面の検討により確認している。そのため、今回の調査では遺跡の南北幅が約150mと判明しているが、東西幅は松延遺跡の調査成果と山門前田遺跡報告書の旧地形の検討から、堤古墳群西端までが集落域と考えられるため、集落域は東西幅約500m、堤古墳群まで含めると遺跡の範囲は東西幅約670mを測る、東西に細長い遺



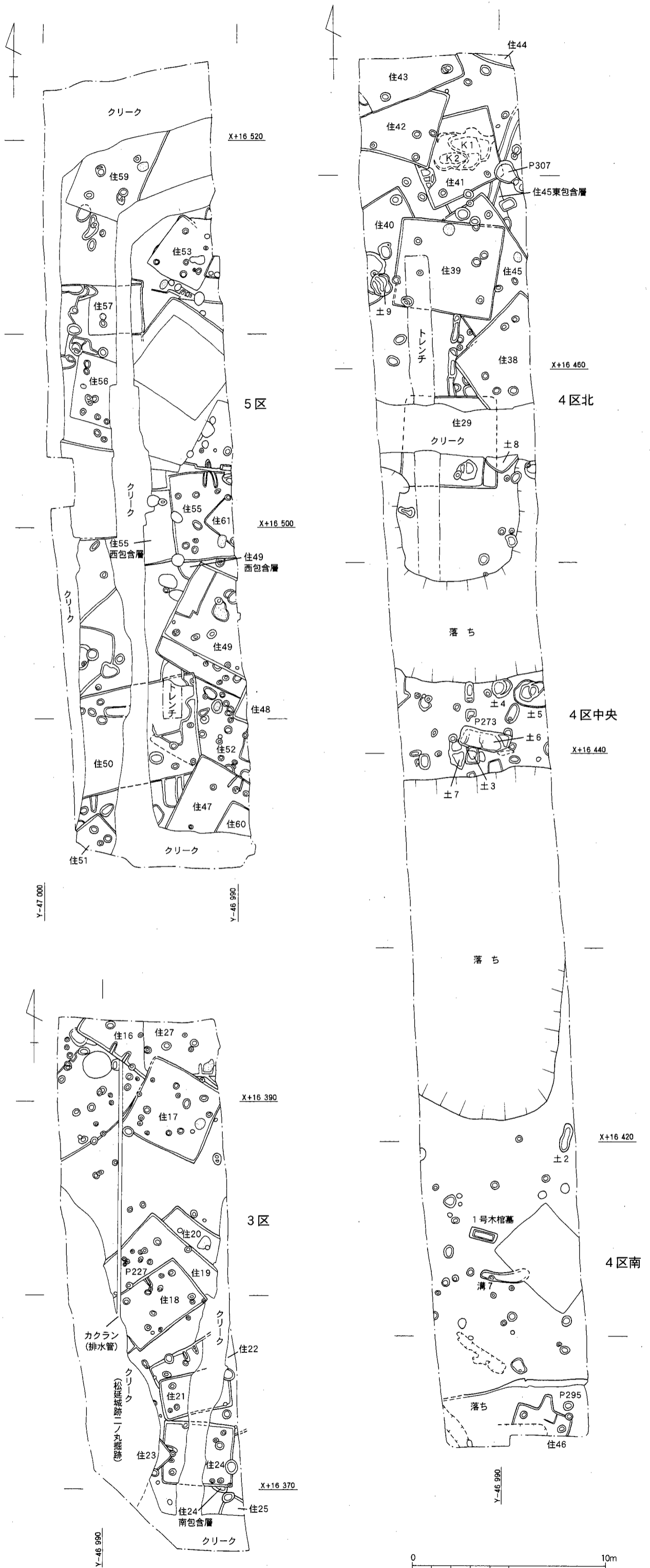
調査状況（4区）



第9図 調査区配置図 (1/1,000、断面図沿道方向は1/100)



第10図 山門北池遺跡第1面遺構配置図 (1/200)



第11図 山門北池遺跡第2面遺構配置図 (1/200)

跡となる。また松延遺跡の調査成果から古墳時代後期の集落域は東西幅300m程となる可能性が高い。

また、第9図の断面図及び第12図の各区土層の検討から、調査区内は、かなり起伏のとんだ旧地形であったことが判明しているため、谷や落ちで分けられた複数の小集落の集合体が当遺跡の実態であった可能性を指摘しておきたい。

当遺跡調査区内には、現在使用中の道路や水路が存在することから、この道路・水路で調査の便宜上区切り、北から5・4・3区とした(第9図)。本来なら、順に1から区番号をつけるべきであるが、昨年度報告の山門前田遺跡(0～2区)、現在整理作業中である藤の尾垣添遺跡(6～10区)と当遺跡(3～5区)は、いずれも同じ(山門)遺跡群として位置づけられる可能性があること、また九州新幹線建設工事区分では10区は瀬高中工区となるものの、県道本吉・小川線より南は同じ瀬高南工区となること、さらに南→北に向かって連続して発掘調査を進めたため、後の整理作業の段階で区・遺構番号が重複しないように留意したため、調査時では当遺跡の区割りを3～5区とした。今報告でも、調査段階の分けを踏襲して行うこととしたい。

調査に当たっては、新幹線用地幅が11.2mであり、さらに調査区東西に表土による土手を設けたため、実際の調査幅は8～9m程度である。調査は南の3区第1面→5区第1面、3区第2面→5区第2面というように、遺構面・南→北という優先順位で調査を進めた。3～5区の合計の調査面積は1,230㎡で、調査区全体で遺構面が2層確認されたため実際の調査面積は2,460㎡となり、遺物はパンケース126箱出土した。検出した遺構は竪穴住居跡52棟、掘立柱建物跡5棟、土坑14基、溝7条、木棺墓1基、甕棺墓2基、中世墓1基などで、遺物は縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・陶磁器・土製品・石器・石製品・金属品等が出土した。

なお、以下のⅢ-2～9で検出遺構・遺物の説明を行うが、この文中内で使用される出土土器の分類・年代観については、以下の文献を参照した。まず、弥生時代後期～古墳時代前期にの土器については、檀佳克氏の編年(檀佳克2005「1. 土器からみた、京田・深田遺跡の竪穴住居跡に関する位置づけ」『八女市南部地区県営圃場整備事業地内 埋蔵文化財調査報告書1』八女市文化財調査報告書第71集 八女市教育委員会)、古墳時代後期の土師器については、重藤輝行氏・小松讓氏の編年(重藤輝行2002「福岡県における古墳時代中期～後期の土師器」『古墳時代中・後期の土師器』第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料・小松讓2002「肥前地域における古墳時代中・後期土師器の編年」『古墳時代中・後期の土師器』第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料)、中世土師皿及び青磁・白磁については山本信夫氏の編年(山本信夫1990「統計上の土器-歴史時代土師器の編年研究によせて-」『乙益重隆先生古稀記念論文集 九州上代文化論集』・山本信夫2000『大宰府条坊XV-陶磁器分類編-』太宰府市文化財第49集大宰府市教育委員会)を用いた。

(2) 基本層序

発掘調査前の当遺跡は水田が営まれており、調査前の田面標高は3・4区6.7m、5区は6.5mを測る。一方、圃場整備前の田面標高は南→北で、3区は6.23-6.31m、4区は6.31-6.37-6.43m、5区は6.43-6.37-6.34mを測る(第9図)。

まず第9図の断面図から検討すると、調査区内では4区北～5区南、4区南、3区北という

第1面の標高が約6m前後の3ヶ所のピークと4区中央には標高5.5m、南北幅8m程の非常に狭い高まりが認められる一方、3・4区間、4区中央の2ヶ所、計3ヶ所に落ち込みが認められ、遺跡南北端はクリーク（旧河川・堀跡）で区切られる。3ヶ所のピークでは遺構面の傾斜の度合いが異なるものの、南北方向に傾斜する点は一致するため、各ピークは東→西方向の幅の狭い微高地を示し、当遺跡調査区はこの3ヶ所の微高地を分断した形であると想定される。なお、4区中央の幅狭い高まりは、土坑・ピット群のみで構成され、標高も低いことから、竪穴住居跡が検出された、先述した3ヶ所のピークと在り方が異なると考えられる。

まず、先述した3ヶ所の微高地（ピーク）の中でも、4区北～5区南間の微高地は南北約60mと幅広く、地形も北の旧河川に向かって緩やかに傾斜することから、第1・2面とも遺構密度が最も高い箇所となる。また3区北の微高地は南北幅約25mとやや狭いものの、後述するように上部が削平されたと考えられるため、当調査区の中で4区南の次に標高が高かった箇所である可能性が高い。この3区北は、4区北～5区南と比較すると遺構密度は劣るものの、第1面では中世前期の遺構群、第2面では古墳時代後期の竪穴住居跡群を検出した。4区南の微高地は南北幅15mほどと非常に幅が狭く、遺構密度も低い。このことから、安定した地形の存在が集落形成に大きく関わっていることが分かる。

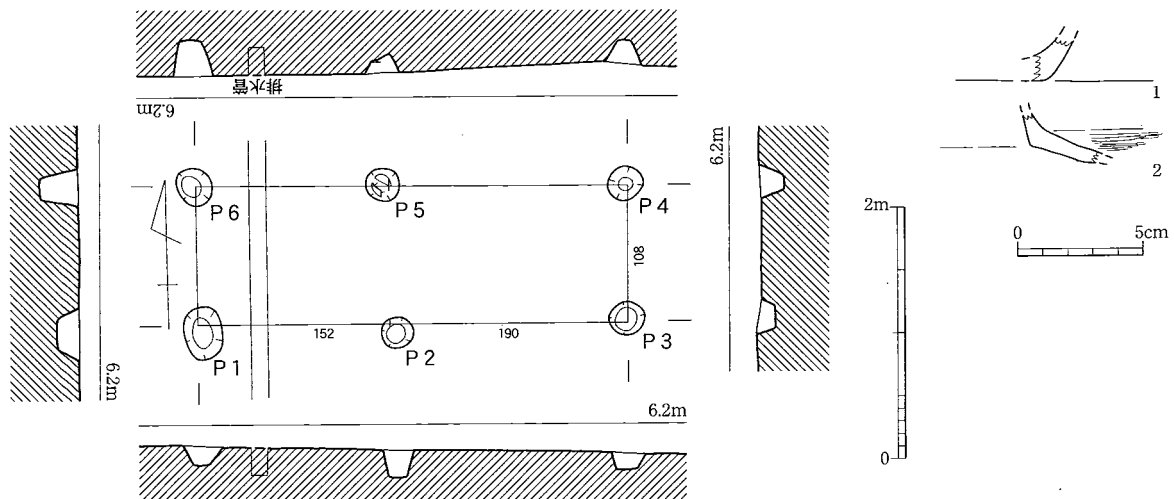
さらにここでは、第12図の3～5区基本層序から、上記のことを裏付けていきたい。基本層序は第12図に北→南に順に、5→4（北・中・南）→3区と図示した。

まず3ヶ所の微高地から検討すると、5区北では、表土・床土（1～3層）下に、第1面の地山である灰黄色粘質土（17層）、第2面の地山である黄褐色粘質土（18層）が堆積し、その下の20・21層はやや青みがかかる色の粘質土・砂となる。4区北では、表土・床土（1～3層）と第1面の地山（8層）との間に包含層（4層）が存在する。そのため、5区はこの包含層部分が削平されてしまった可能性が高い。5区～4区北の第1面遺構埋土は暗灰色系粘質土であり、第2面の遺構埋土は暗黄褐色系粘質土となる。また、5区21層と4区14層は同じ土であり、遺構面とともに地山も南→北に傾斜する。

4区南では、第1面と第2面の地山とも黄褐色系となるため、元々1面であった可能性が高い。しかし、第1・2面でそれぞれ遺構を検出していることから、2面に分けて報告する。4区南端は南に向かって急に落ち込むが、10層を切り込む46号竪穴住居跡を検出したため、古墳時代後期以前は落ち込みであったが、その後少なくとも10層まで埋め立てられ、竪穴住居が築造されたと考えられる。また3・4区間の落ち込みは南北幅10mと狭く、落ち込みすべてこの段階で埋め立てられた可能性が高い。

3区北では、4区南と比べ、第1面検出レベルは40cmほど高くなっているが、第1面の地山（6層）上は盛土・表土・床土（1～4層）となるため、3区も上部が削平された可能性が高い。第1面の地山は灰色粘質土（6層）、遺構埋土は灰褐色系粘質土（5層）で、中世前期の遺構埋土となる。第2面の地山は青灰色系粗砂、遺構埋土は灰黄褐色系粘質土で、古墳時代後期の遺構埋土となる。

一方、4区中央土層は、北側の高まりが先述した4区中央の標高の低い高まりとなる。この高まりは、重機による第1面表土剥ぎの際に誤って第1面を掘り飛ばし、第2面まで下げたため、第1面の調査は行っていない。この高まり部分の第1面の地山は灰茶褐色粘質土であるが、



第13図 5号掘立柱建物跡・出土土器実測図 (1/60、1/3)

8～13層と16～19層上で大きく2回の堆積に分層することが可能である。特に8～13層上はほぼ平らであり、8～15層と4区南10層との土質の類似から、落ち込みを埋め立てた可能性が高く、時期も近いことが予想される。高まりで土坑群を検出した第2面の地山(21層)は、やや砂性がある灰黄褐色系であり、4区北の第2面地山との類似を指摘できる。

また、各区の地山である粘質土の下は青灰色砂質土となるが、この砂質土検出レベルで最も高い箇所は4区北・中央の標高5.6m、次に4区南・3区の5.4m、最も低い箇所は5区の5.0mであり、砂質土の検出レベルが高い箇所において、弥生時代中期前半の甕棺墓が認められることは、沖積作用による微高地の形成と遺跡の形成との関連性を推測させてくれる。

以上、基本層序を検討してきたが、V-3において、当遺跡検出遺構の変遷の検討を行っているので、合わせてご覧いただきたい。

2. 3区第1面の検出遺構と遺物

(1) 概要

3区第1面は、4区南端とは道路を挟んで10m南、南に位置する山門前田遺跡2区北端から130m北に位置する、南北28m、東西約8.5m、面積260㎡の調査区で、第9図から北から南側に向かって緩やかに傾斜する地形となる。

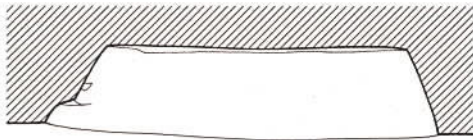
検出した遺構は掘立柱建物跡1棟、土坑1基、溝2条、ピット多数で、調査区北西-南で検出したクレークは松延城跡二ノ丸堀跡となる(大庭孝夫・坂元雄紀編2006『山門前田遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第3集 福岡県教育委員会の第74・75図 p135～137)。遺構の残りは総じて悪く、大きく削平を受けたものと考えられる。

遺物は中世前期の土器を中心に、パンケース7箱分出土した。

(2) 掘立柱建物跡

5号掘立柱建物跡(第13図)

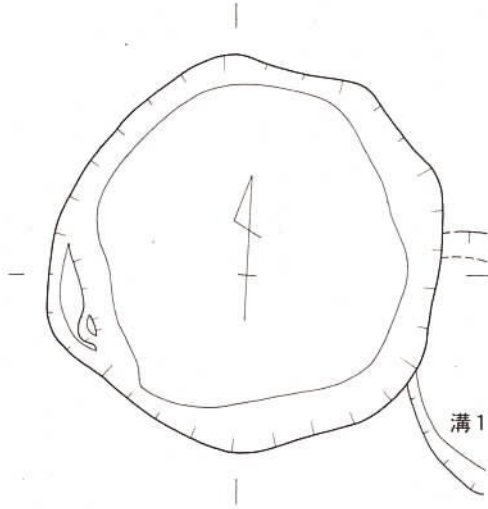
1・2号溝に挟まれた3区北中央部に位置する、梁行1間×桁行2間の小型の東西棟建物で



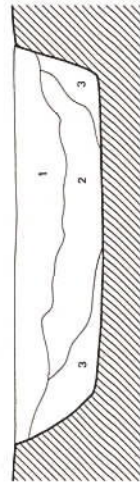
〈土1土層〉

1. 灰褐色粘質土80%に黄褐色粘質土ブロック20%混じる、炭少量混じる
2. 灰褐色粘質土60%に黄褐色粘質土ブロック40%混じる、1より多く炭混じる
3. 灰褐色粘質土40%に黄褐色粘質土ブロック60%混じる、1より炭が少ない

ウ29



6.2m



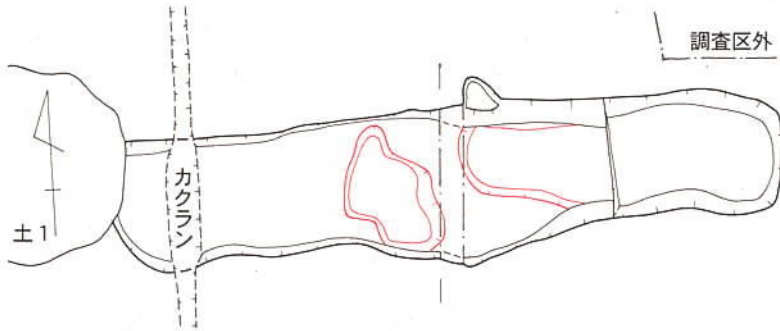
6.2m



〈溝2土層〉

1. 灰褐色粘質土に鉄分多く混じる
2. 灰褐色粘質土に鉄分量混じる

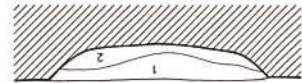
土1



土1

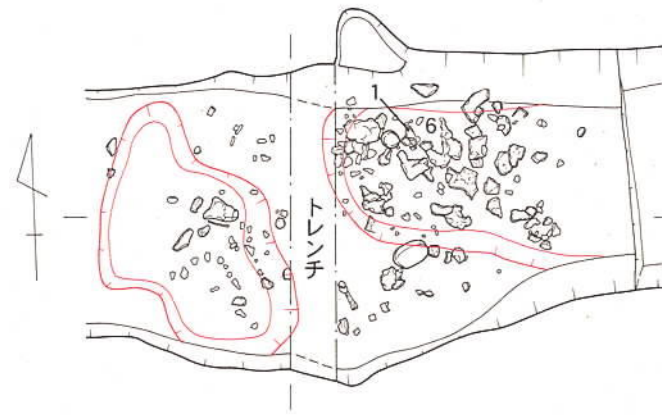
調査区外

カウリン

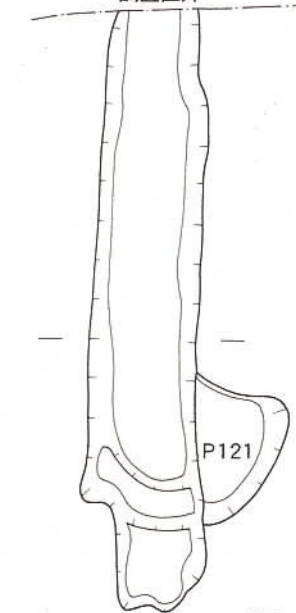


ウ19

調査区外

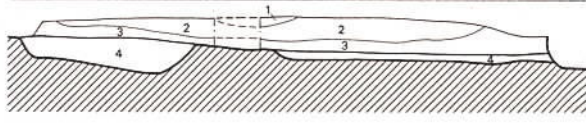


6.1m



溝2

6.1m

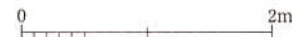


6.1m

〈溝1土層〉

1. 黄褐色砂質土
2. 灰褐色砂質土に黄褐色砂質土60%含み、焼土・炭非常に多く混じる(粘土塊包含層)
3. 灰褐色砂質土に炭少量混じる
4. 3+炭多く混じる

溝1



第14図 1号土坑、1・2号溝実測図 (1/60、1/30)

ある。建物主軸方向は北-1°-東で、柱間寸法は桁行で西から152・190cm、梁行で108cmを測る。柱穴掘形はいずれも径30cm前後の円形を基調とし、深さは14~30cmとバラツキがある。当建物跡は1・2号溝とほぼ同じ主軸であり、1号溝出土粘土塊が当建物の土壁となる可能性が高いこと、また出土土器から12世紀後半~13世紀初頭頃の建物跡と考えられる。

出土土器（第13図1・2） 1はP2出土の土師器杯aで、底部には糸切り痕がわずかに残るか。色は橙褐色。2はP6出土の古墳後期の土師器短頸壺頸部片で、外面にはミガキを施す。色は橙褐色。この他に白磁片がP2から出土している。

(3) 土坑

1号土坑（図版4、第14図）

3区北中央の西寄りに位置し、1号溝を切る。南北157cm×東西155cm、深さ36cmのややいびつな正円形の土坑で、土坑床面はほぼ平らである。土坑東には小さな2段のテラスを持ち、土坑壁はやや緩やかな傾斜となる。土坑埋土は3層に分かれるが、ほぼ同じ土質であることから、埋没期間は非常に短い可能性が高い。

出土土器と1号溝との切り合いから、12世紀後半~13世紀中葉の土坑と考えられる。

出土土器（図版42、第15図1~3） 1は土師器小皿aである。口径8.5cm、底径6.7cm、器高9mmの低平な器形で、底部には静止糸切り痕が残る。色は橙褐色。時期は上庄秀遺跡3号土坑出土土師器小皿a（坂元雄紀2005『上庄秀遺跡』福岡県文化財調査報告書第203集 福岡県教育委員会）よりもやや新しい様相を呈し、13世紀前半~中葉に比定できる。2は土師器杯aである。復元口径24.8cmを測る。焼成は甘く、色は黄褐色を呈する。3は玉縁口縁の白磁碗で、大宰府分類碗IV類となる。黄色を帯びた白色を呈する厚目の釉を内外両面に施釉し、釉表面には若干気泡が認められる。胎土はやや粗く、白色を呈する。11世紀後半~12世紀前半の標識磁器で、12世紀後半まで一定量を占め、出土する資料である。

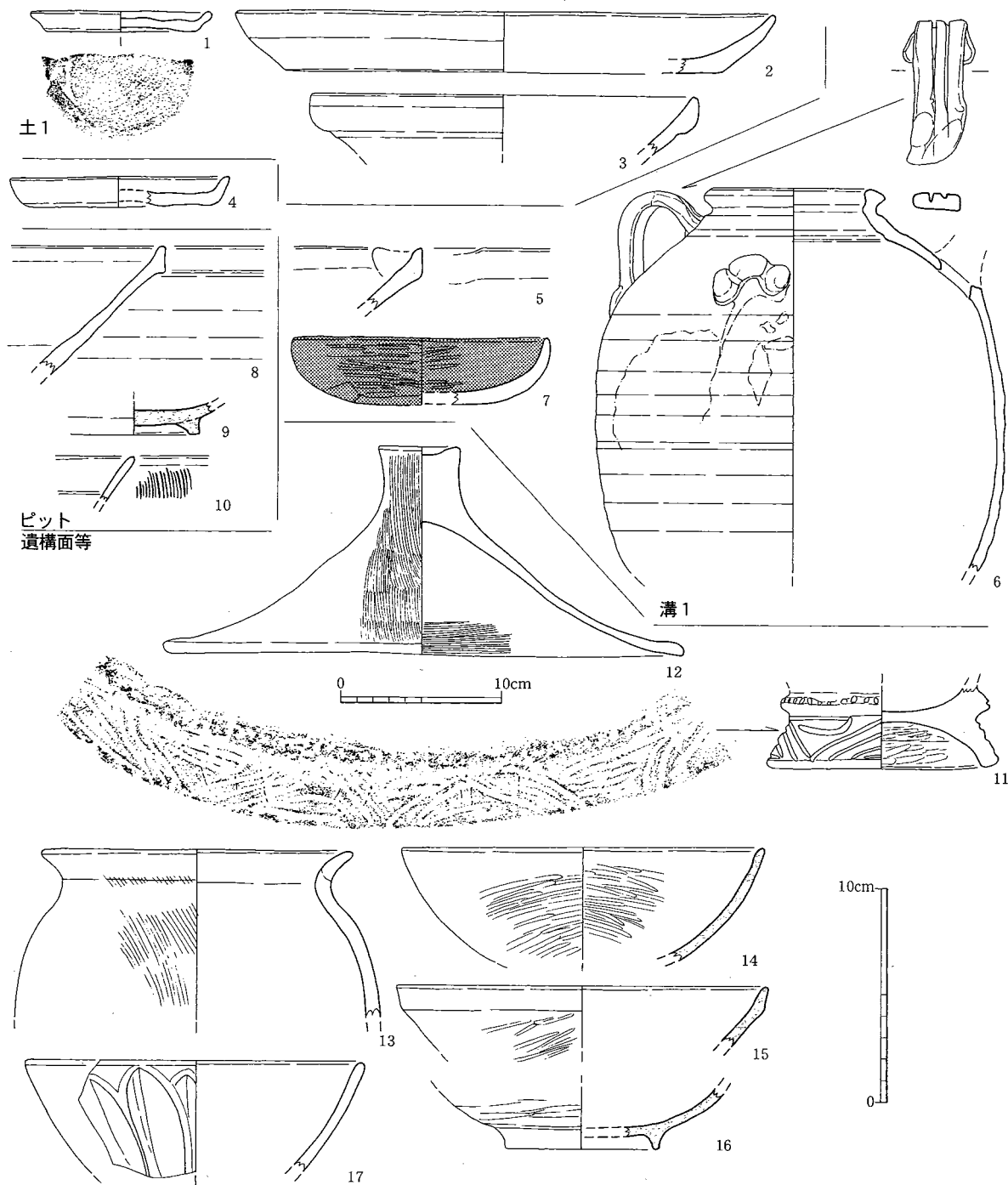
(4) 溝

1号溝（図版4・5、第14図）

3区北端近くの東西溝で、1号土坑に切られる。溝の長さは現状で520cm以上を測るが、調査区東壁土層で当溝を確認していることから、長さ550cm以上の溝となる。幅は中央で最大127cm、深さは東端15cm、中央13cm、西端9cmを測り、西→東に傾斜する。壁・床面の壁は緩やかであり、あまり深い溝とはならないと考えられる。

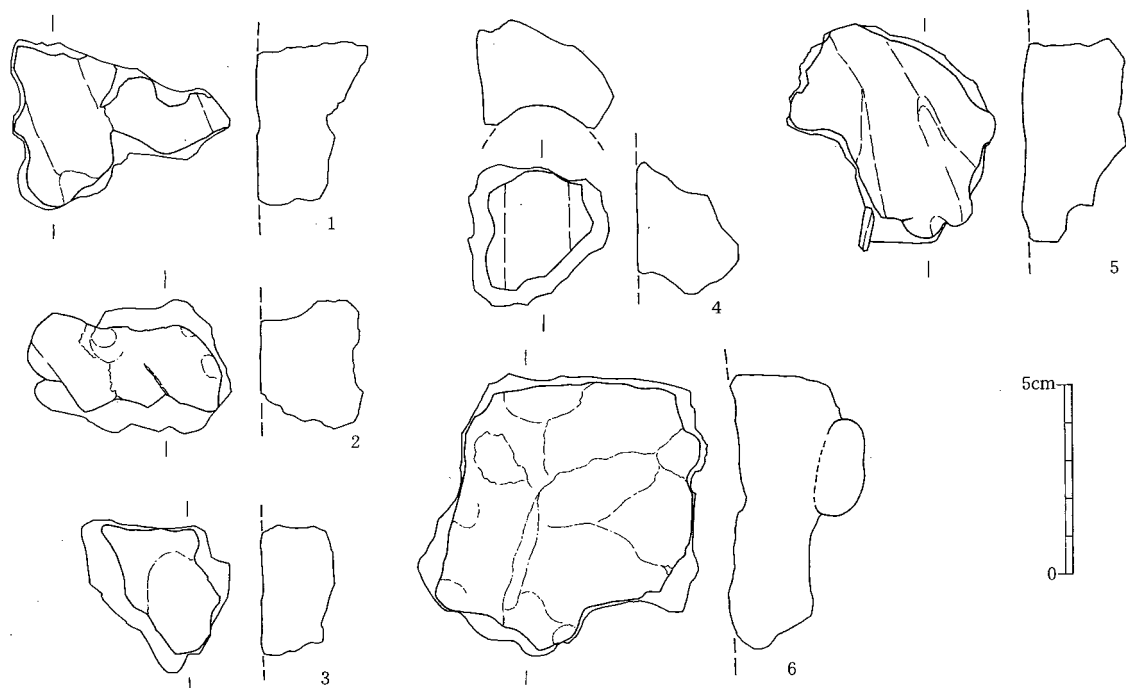
溝中央では粘土塊・焼土・炭がまとまって出土した。粘土塊の一部には面を持つものが存在したため、土器焼成遺構と考えたが、粘土塊等は2層で出土し、2層下の3層の存在や粘土塊が焼けていないこと、当溝と平行する5号建物跡の存在から、炭を多く含む4層は気になるものの、5号建物跡の土壁等を遺棄したものと判断した。なお、出土した炭の一部を樹種同定し、クリと同定された。IV-1（p171・172）の同定結果で記載されているが、出土した炭は燃料材である可能性があるとのことである。

当溝の時期は出土土器及び放射性炭素年代測定（IV-4、p177~179）から、12世紀後半~13世紀初頭となると考えられる。



第15図 1号土坑、1号溝、3区第1面ピット、遺構面等出土土器実測図 (12は1/4、他は1/3)

出土土器 (図版42、第15図4~7) 4は土師器小皿aである。復元口径11cm、底径9cm、器高1.3cmを測る。底部は板状圧痕のちナデを施し、色は黄褐色。5は東播系須恵器片口鉢口縁部で、わずかに片口の痕跡が残る。色は灰色。6は陶器水注で、大宰府分類陶器耳壺V-2類の肩部に注口・把手を付けた形態を呈する。口縁は玉縁状を呈し、把手にはヘラ工具による2本の縦沈線を施すが、注口は欠損する。肩部には横型の双耳を注口・把手からほぼ90度回転させた位置に貼り付ける。釉は茶灰色の釉を基調とし、外面肩部に灰緑色の釉を重ねる。胎土は橙灰色を呈する。12世紀後半~13世紀初頭の標識陶器である。7は古墳時代後期の土師器碗形杯



第16図 1号溝出土土製品実測図 (1/2)

で、混入品。内外面ミガキを施し、黒塗りをを行う。底部には手持ちヘラケズリが認められる。生地の色は灰黄褐色を呈する。

土製品 (図版42、第16図) 中央部からまとまって出土した土壁と考えられる粘土塊のうち、面を持ったものを選別し、図化を行った。1~3、5・6は平らな面を持つもので、平らな面はナデ調整のままであり、弱い凹凸が認められる。小片のため、全体的な長さは不明だが、6から厚さは3.5cm程度になると推測される。また5の胎土内には中世の土師器小皿片が混じる。4は断面が丸みを持つもので、3cmほどの建築部材を囲んだ粘土塊となると考えられるが、材を全て粘土で覆ったものではなく、半分ほど囲んであったものである可能性が高い。いずれも胎土には比較的大きな砂粒やスサも少量混じるが、胎土内に炭や木舞痕は認められない。色調はいずれも灰黄褐色だが、2の一部は灰黒色を呈す。

以上が、観察記録であるが、16世紀前半~中頃の居住建物の可能性が高い土壁を報告した久留米市安武町海津城跡SK44出土例 (白木守編1994『安武地区遺跡群Ⅶ』久留米市文化財調査報告書第87集 久留米市教育委員会 p115~117) とは、焼成・色調・胎土・調整が全く異なるため、居住建物の土壁の可能性は低いと考えられる。

2号溝 (第14図)

3区北寄りに位置する東西溝で、P121を切る。溝東側は調査区外まで延び、西側は2段のテラスを持ち、次第に浅くなる形態になる。現状で長さ478cm以上、土層図を作成した部分で幅85cm、深さは東端で13cm、中央で14cm、東のテラス部分で10cm、西のテラス部分で3cmを測り、西→東に傾斜する溝となる。壁・床面の立ち上がりは緩やかで、深い溝にはならないと考えられる。溝主軸・埋土・形態は1号溝とほぼ同じであり、時期的・機能的にも近いことが予

想される。なお、溝覆土内から滑石製の用途不明品が出土した（第103図28）。

(5) ピット・遺構面等出土土器

ピット出土土器（図版42、第15図8～10）

8は東播系須恵器鉢口縁部で、色は灰茶色。P129出土。9は瓦器碗底部で、焼成はやや甘お。色は淡灰色～淡灰橙色を呈する。P136出土。10は同安窯系青磁碗口縁部で、大宰府分類碗Ⅰ-1-b類となる。外面に細かい縦の櫛目文を施し、内面上位には沈線を入れる。胎土は灰色で、釉は薄い黄緑色を呈する。P127出土。

遺構面等出土土器（図版42、第15図11～17）

11は縄文時代後期中葉の北久根山式台付鉢脚部で、脚部分は完形品。脚部外面は沈線による文様帯で、S字文をデフォルメしたものである。脚部と体部との境の三角突帯には棒状工具による刺突を密に施す。脚部内面はミガキ状の調整を丁寧に施す。胎土は良好で、色は灰橙褐色～灰黄褐色を呈する。12は弥生中期の甕蓋で、1/3ほど残存する。色は橙褐色～褐色を呈する。13は土師器中型甕で、口縁部は強く外湾し、体部内面はナデ調整を施す。胎土にやや砂粒を多く含み、色は黄褐色～灰褐色。14～16は瓦器碗である。14の内外面には細かいミガキ調整を施し、色は暗灰色～灰色を呈する。15の口縁端部外面は、強い横ナデにより窪み、外面は細かいミガキ調整を施す。色は灰白色。16の体部外面は粗いヘラナデで調整し、胎土には細粒をやや多く含み、色は淡灰色を呈する。17は龍泉窯系青磁碗で、大宰府編年碗Ⅱ-b類となる。体部外面には鎬蓮弁文を有し、弁の中心線は稜をなす。内外面とも気泡が目立ち、釉はくすんだ緑色を呈する。胎土は淡黄褐色。

3. 3区第2面の検出遺構と遺物

(1) 概要

3区第2面で検出した遺構は竪穴住居跡11棟、ピット多数である。竪穴住居跡は調査区北・中央・南と3群に分かれ、それぞれの群内で住居跡が切り合う状況である。この各群は同一家族が同じ場所で竪穴住居を建て替えた結果を示すと考えられ、集落内での土地利用を考える上でも重要な資料となる。遺物はパンケース16箱分出土した。

(2) 竪穴住居跡

16号竪穴住居跡（図版5～7、第17図）

3区北端部、調査区境に位置する。17・27号竪穴住居跡と切り合い、17・27号より古い。住居跡の北半分が調査区外となるほか、当初27号住居跡との切り合いを誤認したため、南東壁の大半を失ってしまった。主軸は北東-南西。平面プランは方形で、長さが確認できる南西壁は4.9mを測る。南西壁の中央部には



16号住居跡土器出土状況(1)（南東から）



16号住居跡土器出土状況(2) (南西から)

両袖とも壁から60cmほど突出し、燃烧部幅は断面図部分で幅58cm、奥壁部分で幅48cmを測り、やや奥壁側が狭くなる平面形態となる。奥壁から70cm手前には、カマドから掻き出したと考えられる56×35cmの薄い炭の広がりが見られる。また、カマド埋土最下層の9～11層はカマド構築土が崩落した土と考えられ、カマド使用時の堆積土は認められなかった。なお、第18図2・5の土師器坏はカマド廃棄時に意図的に置かれた可能性がある(大庭)。

出土土器(図版43～45、第18～20図) 1・2・4～13は土師器坏身。このうち7～11・13は完形品である。1・4・6は覆土出土で他は床面、特に5はカマド付近、12は土器集中から出土した。口径は2・4～6が約11～12cm、1・7～13が約13cmを測る。身の深さは6・12が浅い。口縁部は1が直立する他は全て内湾する。また底部外面の手持ちヘラケズリも全てにみられるが、5はケズリの範囲が広い。6～13は内外面ミガキで仕上げられ、6～10の内外面と11の外面には黒漆が塗られる。9の底部内面には工具痕がみられる。3は土師器碗の口縁部片。やや内湾する。底部外面に手持ちヘラケズリが見られる。

14～25は土師器の須恵器模倣坏。14～16は覆土、17～25は床面から出土した。このうち20は土器集中の出土である。口径は14～16・21・24・25が約13cm、17～20・22・23が約12cmを測る。口縁部は概ね外反するが、14は外上方に直線的に伸び、内面の口縁・底部境に屈曲が見られない。19は口縁部がやや内傾し、20も外反せず直立する。21は他よりも外反が強い。底部外面の手持ちヘラケズリは全てに見られる。ミガキは14・18・19・22・25で内外面、17・21・23・24は内面のみ、20は外面のみ施される。15・16は摩滅・剥離のため不明。黒塗りは14・17～25で見られ、うち14・18・20・22・24・25は内外面、17・19・21・23は内面のみ塗られる。

26は土師器小型高坏の脚部と考えられる。土器集中部から出土。内外面ヨコナデで仕上げる。27・28は土師器壺。27は口縁部破片で床面出土。復元口径9.6cm。内外面にミガキおよび黒塗リが見られる。28は土器集中部から出土した。口縁部が外反し端部は丸く終わる。体部内面はケズリで仕上げる。下端部は擬口縁となる。外面に煤の付着や二次焼成痕がある。

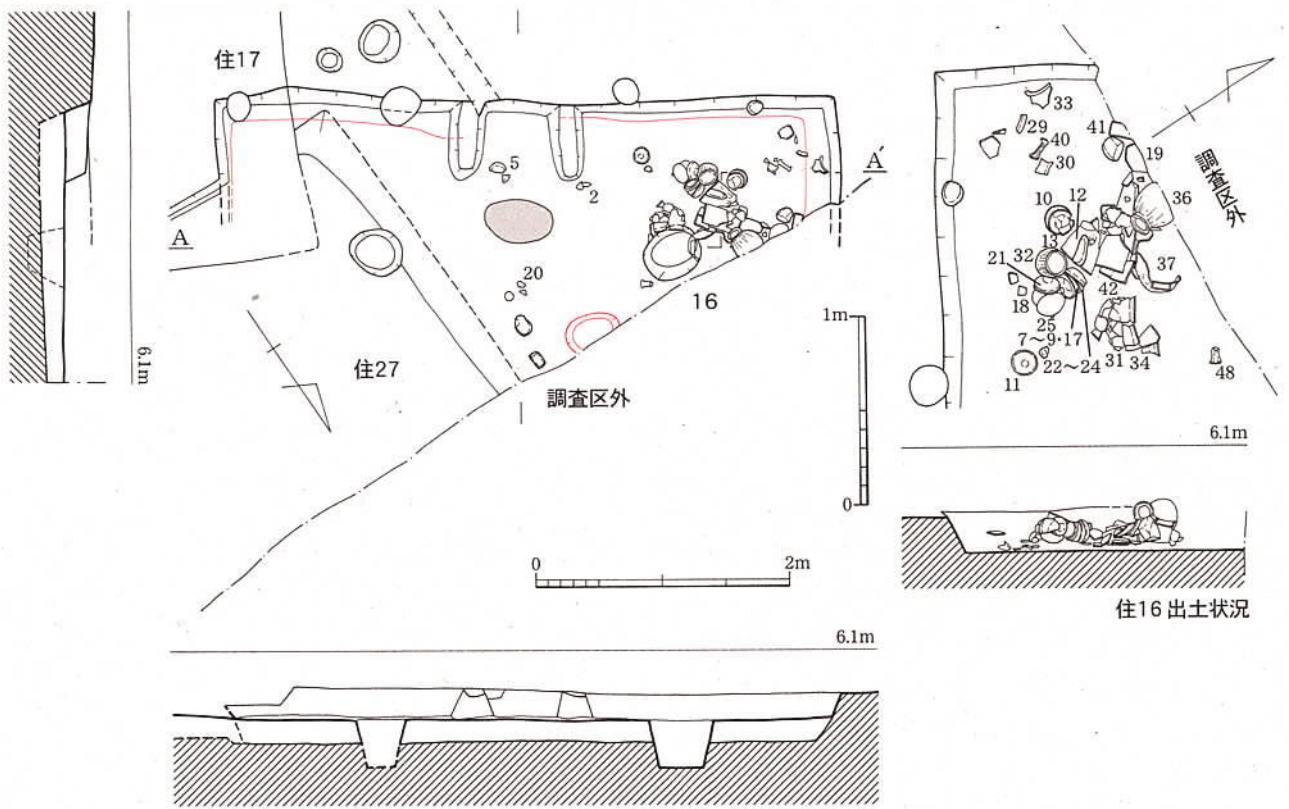
29～37は床面出土の土師器甕。29は口縁部破片で、復元口径15.2cm。口縁部は短く丸く外反し端部は丸くなる。内面はハケのちナデ。内面下端に体部上位のケズリ痕がわずかに残る。30は復元口径12cm。口縁部は外反して端部は丸い。摩滅・剥離のため不明瞭だが、外面にハケメ、頸部内外面に指圧痕が認められる。割れ口・内面には粘土継ぎ目が残る。外面が二次焼成を受けて赤変する。31は復元口径13.2cm。口縁部はやや外反し端部が丸い。体部は丸い。体部内面

内接型のカマドが付く。床面の深さは26cmで、床面から支柱穴と考えられる深さ40cmほどのピットを2基検出した。また住居跡西隅の床面からは完形品を含む土器が集中して出土した。床下の掘り込みは床面から20cmの深さで、住居跡の全体にわたる。

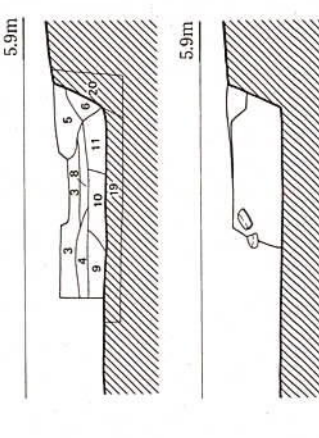
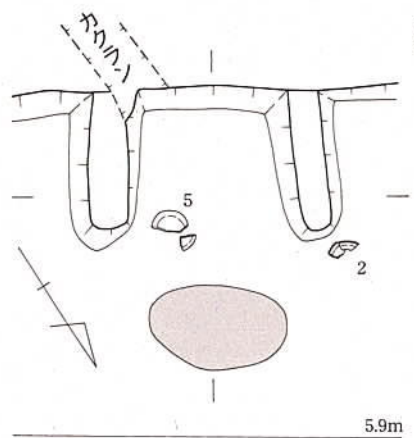
出土土器から古墳時代後期後半の住居跡と判断される。(一瀬)

カマド(第17図) 住居南壁中央に付設された

カマドで、左袖奥壁の一部が排水管理設により

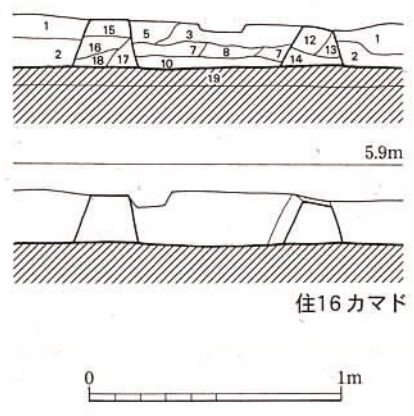


住16 出土状況

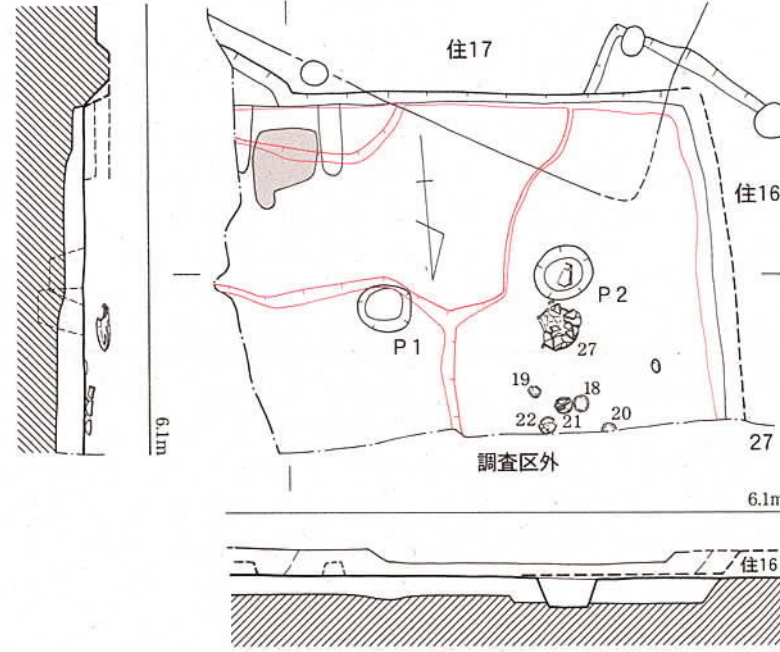


- 《住16 カマド土層》
1. 暗茶褐色砂質土(住居覆上層)に焼土・炭少量混じる
 2. 黄褐色砂質土(住居覆下層)に炭少量混じる
 3. 1より焼土・炭多く混じる
 4. 2より炭多く混じる
 5. 灰黄褐色粘質土に焼土・炭少量混じり、小礫多く混じる
 6. 茶褐色砂質土に焼土・炭少量混じる
 7. 3より明るく、焼土・炭をあまり含まない
 8. 3より暗く、粘性があり、焼土・炭をあまり含まない
 9. 黄褐色粘質砂に炭少量混じる
 10. 灰色粘質砂に炭少量混じる
 11. 暗黄褐色粘質砂に炭少量混じる
 12. 暗茶褐色砂質土に暗黄褐色粘土ブロック少量混じる
 13. 12より暗黄褐色粘土ブロック多く混じる
 14. 灰黄色粘質砂
 15. 褐色砂質土
 16. 明褐色砂質土
 17. 灰黄色砂質土に灰褐色粘質土が50%混じる
 18. 灰黄色砂質土(やや粘性あり)
 19. 青灰色粘質砂(住居掘り込み)
 20. 地山

カマド袖
構築土



住16 カマド



住16

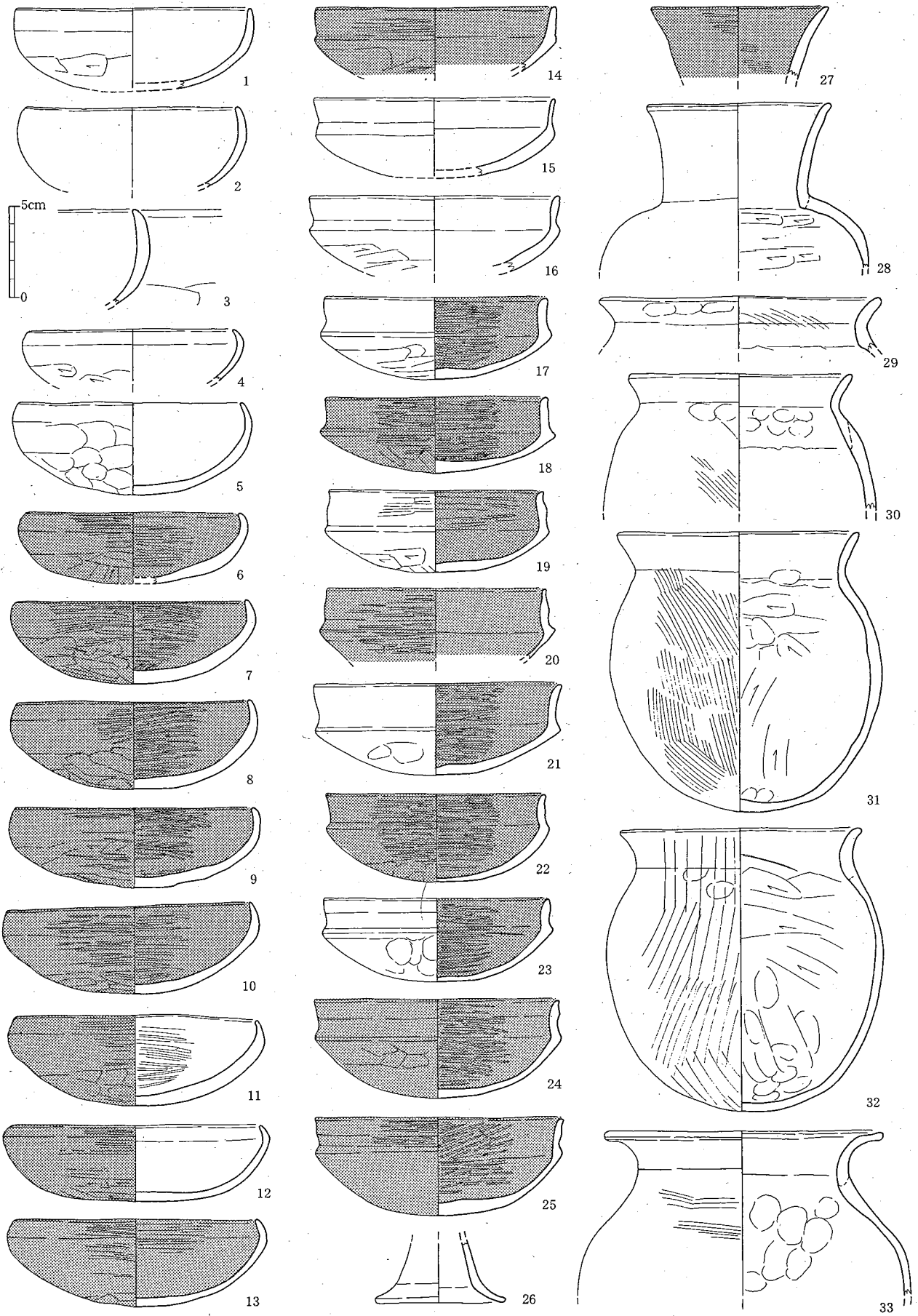
第17図 16・27号竪穴住居跡 (1/60)、16号住居跡出土状況・カマド (1/40、1/30) 実測図

はナデ調整で部分的にケズリが施される。外面は粗いハケメ。頸部内面に粘土継ぎ目が残る。外面の一部に二次焼成痕が見られ、部分的に煤が付着している。32は完形で口径13cm。口縁部は丸く外反する。体部は丸い。体部内面はナデとケズリ、外面は無文のタタキのち粗いハケで調整。頸部内面に粘土継ぎ目が残る。内面上位と中・下位で色調が異なり、上位は焦げて黒化し、対照的に中・下位は白色系を呈する。また外面は二次焼成のため赤変する。33は復元口径13cm。口縁部は丸く屈曲して外反する。端部内面がわずかに窪む。体部外面はタテハケのちヨコハケ、内面と口縁部外面は摩滅する。34はほぼ完形で口径17cm。口縁部はやや外反して伸び、体部は丸い。体部内面はケズリ、口縁部内面はハケのちナデで仕上げる。外面は二次焼成のため剥離して調整不明である。35は土器集中部の出土で復元口径17.8cm。口縁部は短く丸く外反する。内面にケズリと指圧痕、外面に板ナデとケズリ痕が残る。36は復元口径14.3cm。口縁部は丸く屈曲して外反し、体部は丸い。体部内面は丁寧なケズリ、外面はハケで調えられる。体部外面の一部に黒斑が見られる。37は復元口径17.5cm。口縁部は外反し端部は丸い。体部内面ケズリ、外面ハケのちヨコナデ。外面には部分的に黒斑や煤が見られる。

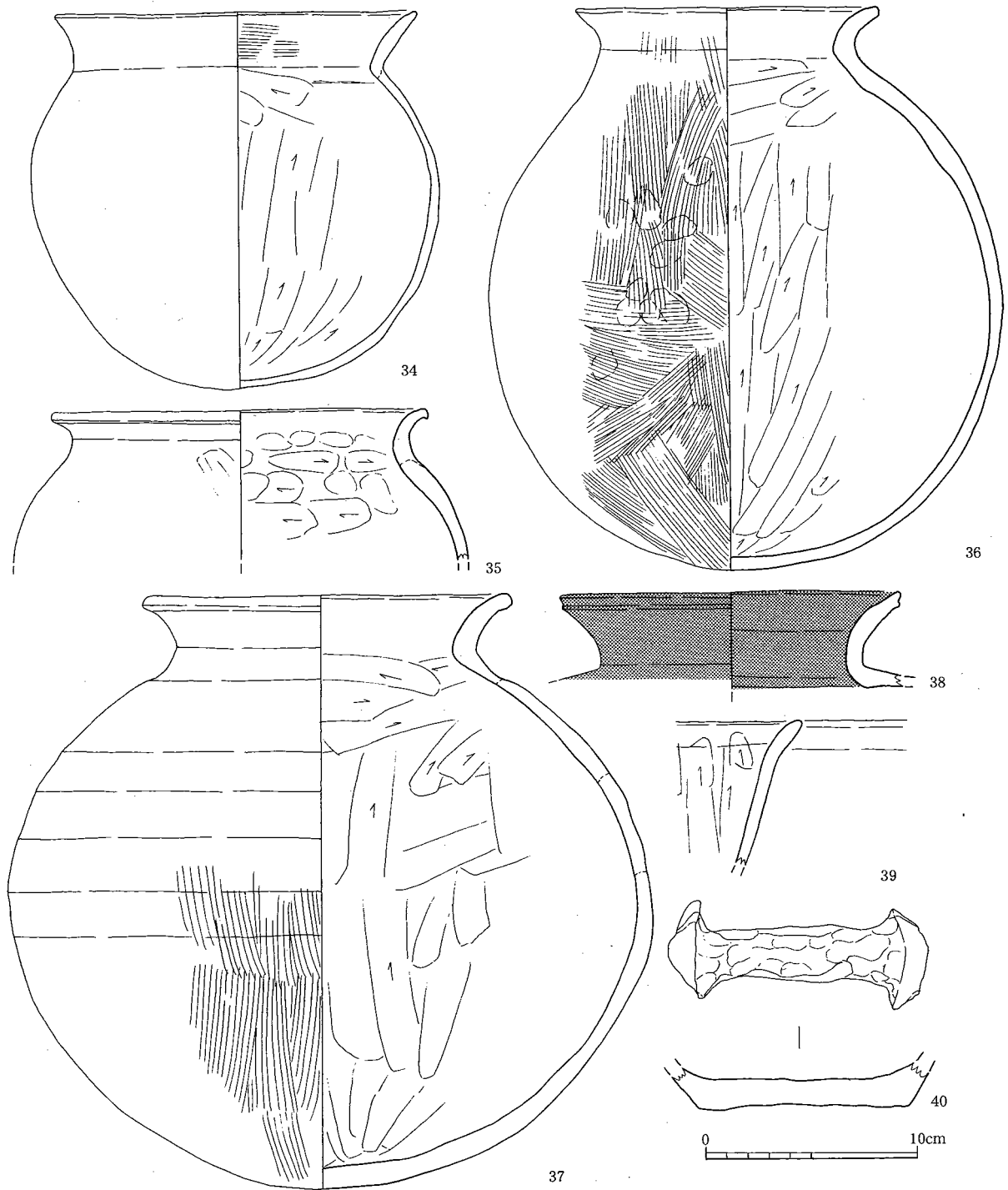
38は覆土出土の土師器甕口縁部。口縁部は外反し端部外方が面取りされる。体部外面に幅広いミガキが行われ、内外面全体に黒塗りが施されるなど特殊な甕である。39は土師器甕の口縁部破片。土器集中部から出土した。内面ケズリ、外面はナデ。外面の大部分が黒化する。40は土師器甕底部の棧破片。ナデとケズリで仕上げられ、特に底部内面は丁寧なナデが見られる。41・42は床面出土の土師器甕。単孔で1対の把手を持つ。42はほぼ完形。口縁部は41がやや外反し、42は直立してわずかに外反する。いずれも体部内面ケズリ、体部外面と口縁部内面はハケ、その他はヨコナデ・ナデで仕上げる。43は覆土出土の手づくね土器。44は土器集中部から出土した蓋状の土器。つまみ状の部分と内面はナデ、外面は規則的な斜め方向のナデで調えられる。胎土が粗く、細粒を非常に多く含む。また強い二次焼成を受けて還元された色調を帯びるなど、通常の土器とは異なる特徴が見られる。カマドに関する製品か。45は弥生時代中期の甕底部片の転用品。覆土から出土した。破片の上部から工具による穿孔がある。内部の摩滅は見られず、太さ1cmほどの棒状工具で丁寧に穿たれたものと考えられる。割れ口から外面にかけて二次焼成痕が見られる。

46～49は弥生時代後期の土器。46は壺の口縁部片。内外面ヨコナデ。47は広口甕口縁部の破片。口縁部はやや外反し、頸部内外面に稜が入る。体部は内外面ハケ、口縁部は内外面ハケのちヨコナデで仕上げる。48・49は高坏。48は坏部内面に暗文状のミガキが密に施される。脚部外面はヘラナデ、内面タテナデで仕上げる。脚基部の割れ口に工具痕が残る。49は外面ナデ、坏部内面ハケメが見られる。内面に粘土継ぎ目を残す。50は弥生土器の支脚。内面タテナデ、外面ハケメ。端部は二次焼成のため赤変する。

出土遺物の主要な時期は概ね古墳時代後期。特にまとまって出土した土師器坏身や模倣坏に黒塗りがされたものが多いことや、模倣坏の受け部の突出が比較的明瞭であることから後期後半に位置付けられよう。(一瀬)



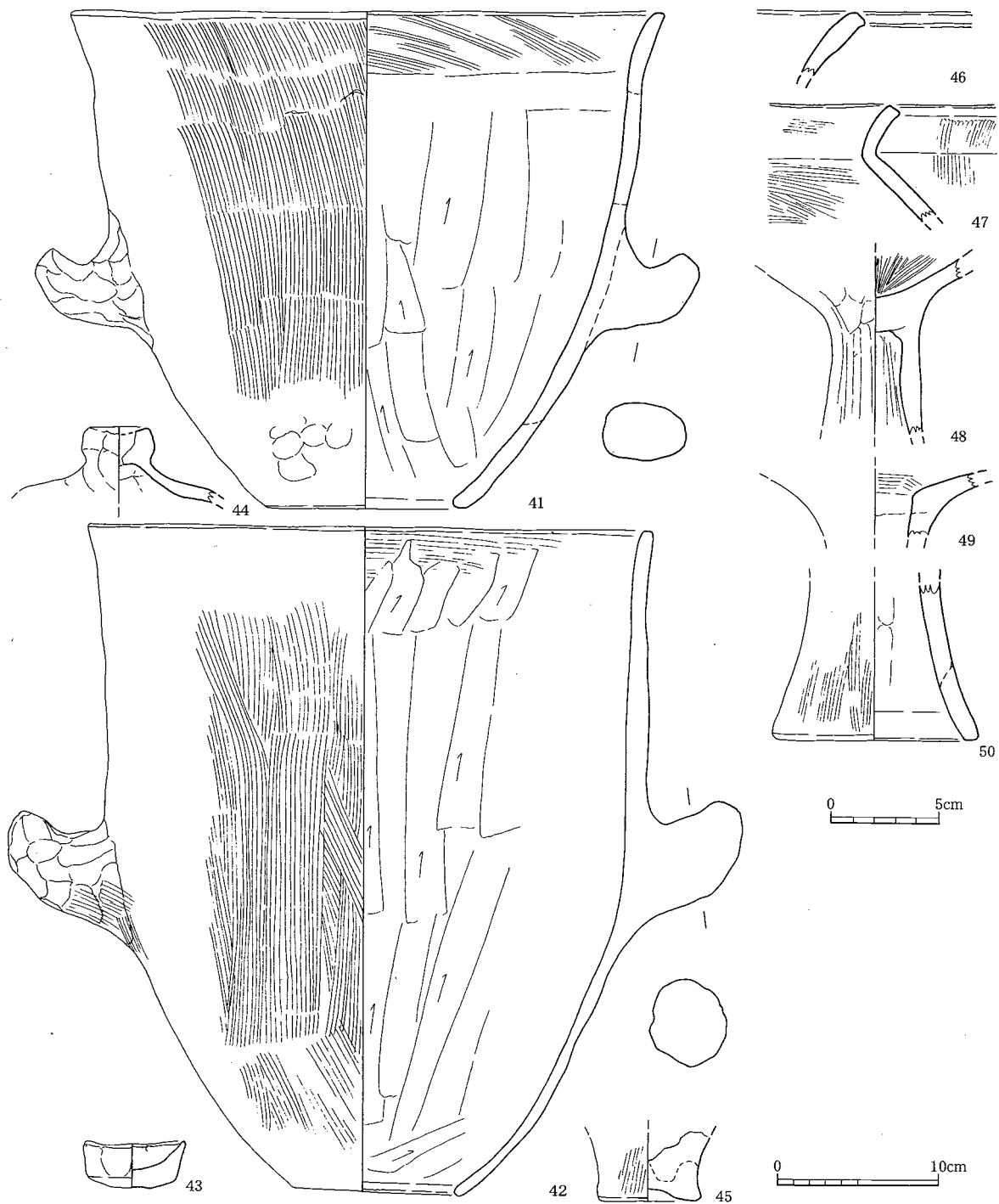
第18图 16号竖穴住居跡出土土器実測图(1) (1/3)



第19図 16号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (1/3)

17号竪穴住居跡 (図版8、第21図)

3区北東に位置し、16・27号住居跡を切る。調査当初は16号住居跡に切られると考えていたため、住居北西隅を誤って掘削してしまった。また住居北東隅は調査区外、住居南西隅は排水管による攪乱のため、住居隅は南東部分しか残っていない。住居は東西417cm×南北412cmの正方形を呈し、深さ13cm程度と浅い。住居床面は硬く締まり、床面上でピットを8基検出し、P1・3～5が支柱穴となる。当初、カマドは住居北か西壁にあると考えていたが、土層ベルト



第20図 16号竪穴住居跡出土土器実測図(3) (45は1/4、他は1/3)

下の住居東壁中央で15×12cmの弱い焼面を確認したため、床面を精査したが、袖の痕跡は検出できなかった。土層でみると14・15層がカマド埋土となる。また土層では、1・2・7～9・12層の粘質土系と、3～6・10・11・13・16・17層の砂質土系は、堆積状況に差が認められる。住居床面下全体で、住居西側が最も深くなる掘り込みを確認した。

切り合い関係及び出土土器から古墳時代後期末の住居跡と考えられる。

出土土器(第23図1～7) 1・2は土師器模倣坏身である。1は外傾する口縁部で、体部との屈曲部は沈線状に窪む。底部は手持ちヘラケズリを施したか。色は橙褐色。2は口縁端部が

弱く外反する器形となるもので、外面全体には黒塗りを施す。底部は手持ちヘラケズリで調整する。生地は灰色。3は土師器椀形坏。色は橙褐色。4は須恵器高坏の脚裾部片か。歪んでいるため、径は不明である。端部下面を斜め下方向につまみ出し、外面には低平な三角突帯を貼り付ける。色は灰色。5は須恵器甕頸部片。頸部外面には平行タタキのちカキ目を施す。胴部内面は同心円文タタキ痕が残る。外面には厚い自然釉が付着し、色は灰色。

6・7は混入品である。6は弥生時代後期の甕口縁部で、色は橙褐色。7は弥生後期の台付甕底部～脚部で、色は灰褐色を呈するが、脚部内面のみ黒化する。

18号竪穴住居跡（図版8、第22図）

3区中央に位置し、19・20号住居跡を切る。18～20号住居跡付近の地山は硬く締まる小礫混じりの粘質土であるが、礫の混じりが少ない範囲が住居跡となる。住居北西部分は排水管理設の攪乱を受け、住居南東隅、北西隅～西壁はクリークにより壊される。住居規模は東西440cm×南北290cm、深さ14cmの長方形住居であり、北壁中央にはカマドを付設する。住居床面ではピットを7基検出し、P1・2・4・5が支柱穴である。埋土は非常によく締まる暗灰黄褐色粗砂。住居床面下全体で深さ18cmの深い掘り込みを確認した。

切り合い関係及び出土土器から古墳時代後期末の住居跡と考えられる。

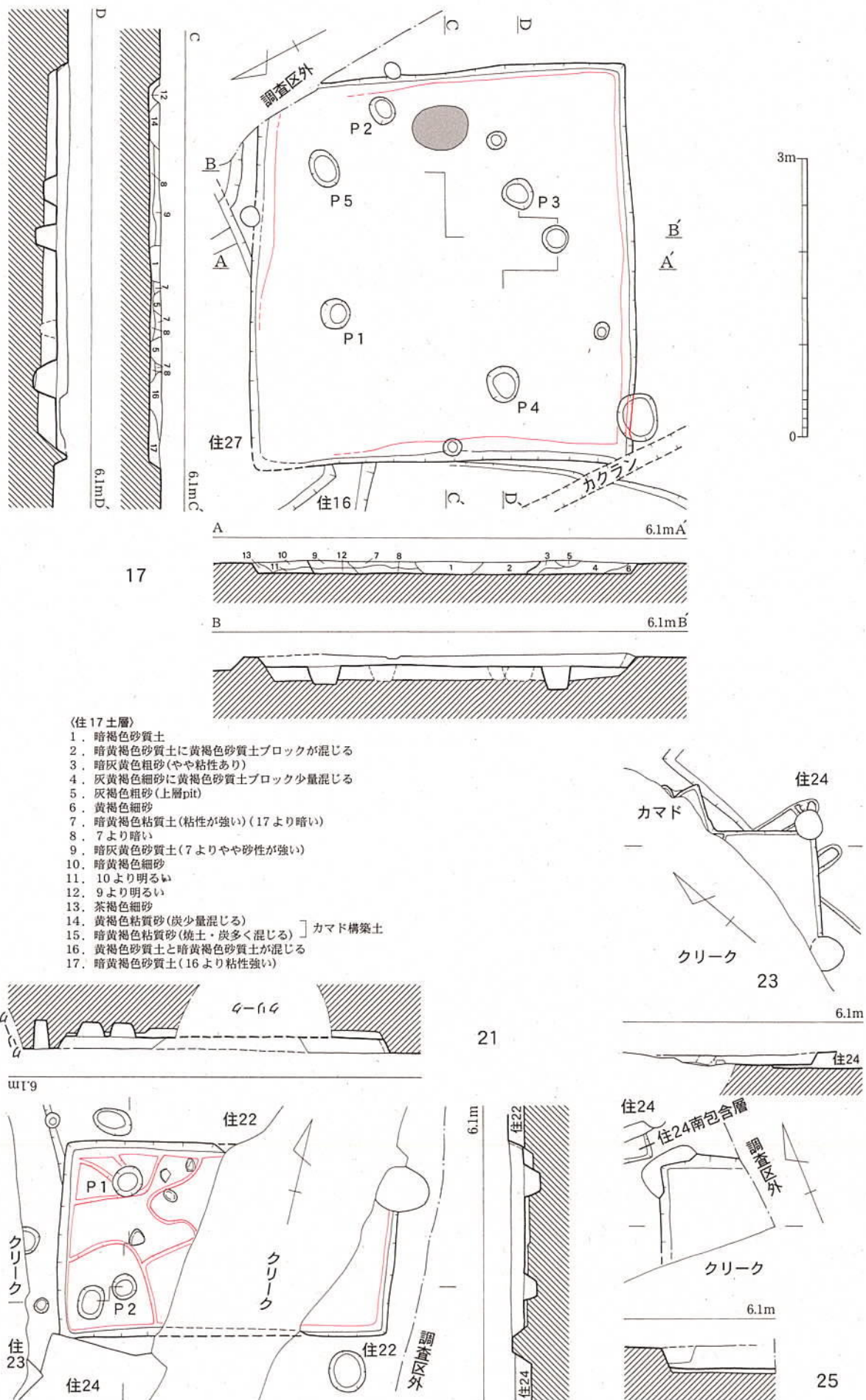
カマド 住居北壁中央に付設されたカマドである。カマド埋土に焼土・炭の混じりが少なかつたため、左袖すべて掘り飛ばしてしまった。右袖は壁から63cm突出し、カマド燃焼部奥壁から南に60cmの箇所径40cmほどの弱い焼面を検出した。この焼面中央で反転すると、焼面北端部分の燃焼部幅は54cm、奥壁での燃焼部幅は40cmと「ハ」の字状に開く形態となる。カマド埋土上層は暗灰黄色粗砂に焼土・炭が少量混じる土、カマド埋土下層は黄褐色粗砂に焼土・炭が少量混じる土である。また右袖は暗灰黄色粗砂と黄白色粘土を混ぜたもので構築する。

出土土器（第23図8～14） 8は土師器模倣坏で、鈍い稜を持ち、色は淡灰橙褐色を呈する。9は口縁端部が強く外湾する土師器甕口縁部で、色は橙茶色。10は土師器甕口縁部であるが、形態から甗となる可能性もある。色は橙褐色。11は胴部が非常に厚い土師器短頸壺。短く直口する口縁部に、肩が張らない胴部を持つ。色は灰黄褐色。12は須恵器坏蓋で、口縁部内面は横ナデによって窪み、外面の稜部分には工具により沈線を巡らす。色は黄灰色。

13・14は混入品である。13は弥生中期の高坏脚部上部片で、外面全体には二次加熱痕が認められる。色は黄褐色。14は胎土・調整から弥生土器の注口で、鉢に付くものと考えられる。注口の長さは4cmほどとなり、孔径は1.5cmを測る。色は灰黄褐色。

19号竪穴住居跡（図版8、第22図）

3区中央に位置し、18号住居跡を切られ、20号住居跡を切る。住居南・西壁はクリーク・18号住居跡により壊される。現状で東西450cm以上×南北530cm以上を測り、カマド北壁中央にカマドが存在したとすると、住居東西幅は460cm程度となる。またクリークで切られたと考えられる南壁もクリークの影響を受け、青く変色していたことから、南北450cm前後の位置に南壁が存在した可能性もある。18号住居跡と同じく、硬くよく締まる灰黄色粗砂の住居埋土であったため、当住居跡でもカマドを掘り飛ばしてしまったが、袖の痕跡と焼面範囲から大よその形



第21図 17・21・23・25号竪穴住居跡実測図 (1/60)

態は推測できる。住居床面では、支柱穴と考えられるピット1基検出したのみである。住居床面下全体で深い掘り込みを確認し、北東部では床面からの深さが45cmを測る土坑状の遺構を検出したが、埋土から掘り込みの一部と判断できる。

切り合い関係及び出土土器から古墳時代後期末の住居跡と考えられる。

カマド 住居北壁中央に位置すると考えられるカマドで、両袖ともカマド埋土と袖、住居覆土との区別が非常に分かりにくく、掘り飛ばしてしまった。焼面及び袖下端痕跡から、燃烧部・奥壁幅が45cmとやや狭く、直線的な袖を持ち、焼面は弱い。袖には黄白色粘土を使用する。

出土土器 (第23図15~23) 15は土師器碗形坏口縁部で、色は淡橙色。16は土師器模倣坏で、口縁端部は欠損する。外面には黒塗りを施す。生地は暗橙色。17は土師器壺口縁部。やや外傾気味の直口する口縁部で、頸部付近には黒斑あり。生地は橙褐色。18は把手部のほとんどが欠損する土師器甗である。把手を貼り付けるための最終調整としてハケ工具を用いる。色は外灰褐色、内黒色。19は薄い器壁の須恵器坏蓋。口縁部内面は強い横ナデにより窪む。色は灰色。20は端部を打ち欠いた可能性がある須恵器坏身口縁部。受部は小さく、器高も低くなるもの。体部外面は細いタテ方向のケズリで調整する珍しいもの。色は灰色。21は須恵器甗口縁部。口縁端部はナデにより窪む。色は灰色。23は弥生後期器台下部片。色は灰橙褐色。混入品。

20号竪穴住居跡 (第22図)

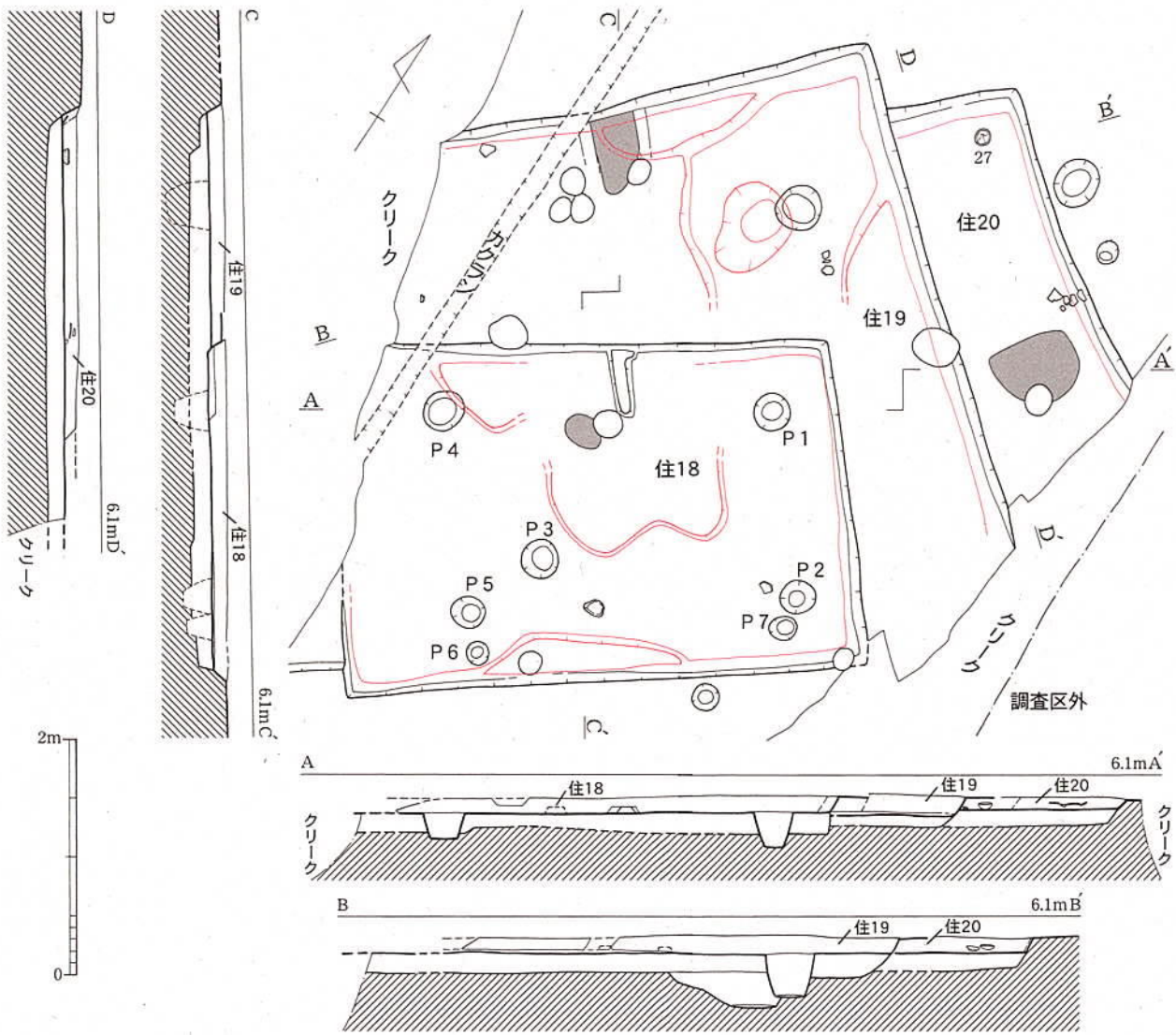
3区中央東寄りに位置し、19・20号住居跡に切られる。住居南・西側大半は18・19号住居跡、クリークで壊されており、東・北壁の一部のみ確認できた。規模は現状で東西125cm以上、南北350cm以上、深さ13cm程度を測る。住居床面ではピットは検出できなかった。床面南側で57×70cmの弱い焼面を確認し、19号住居跡と同じくカマドを掘り飛ばしてしまったものと考えられる。なお、このカマド焼面で反転させると住居南北幅が480cm程となる。また住居床面北東隅には天地逆で出土した完形の須恵器坏蓋(27)が存在する。住居埋土は灰黄色粗砂で、住居床面下全体で掘り込みを確認した。

切り合い関係及び出土土器から古墳時代後期中葉の住居跡と考えられる。

出土土器 (第23図23~27) 23は土師器高坏坏部。口縁端部はほぼ直立し、丸く収める。口縁部外面と体部外面中位には工具による浅い沈線を各1条施し、脚部との接合は付加法で行ったもの。底部外面は手持ちヘラケズリで調整したものか。色は橙褐色。24・25はカマド左袖付近覆土出土。24は緩やかに外反する土師器小型甗口縁部。色は黄褐色。25は内傾気味の口縁部を持ち、端部は外に折り曲げるもの。外面には二次加熱痕が薄く残る。色は外赤褐色~茶褐色、内は暗灰褐色。26は鉢形の土師器手捏ね土器で、内外面は指押さえ痕が顕著に残る。色は灰褐色。27は完形の須恵器坏蓋で、天井部との口縁部との境には工具による浅い沈線を施す。外面天井部は丁寧なヘラケズリで調整。色は灰色~赤灰色。

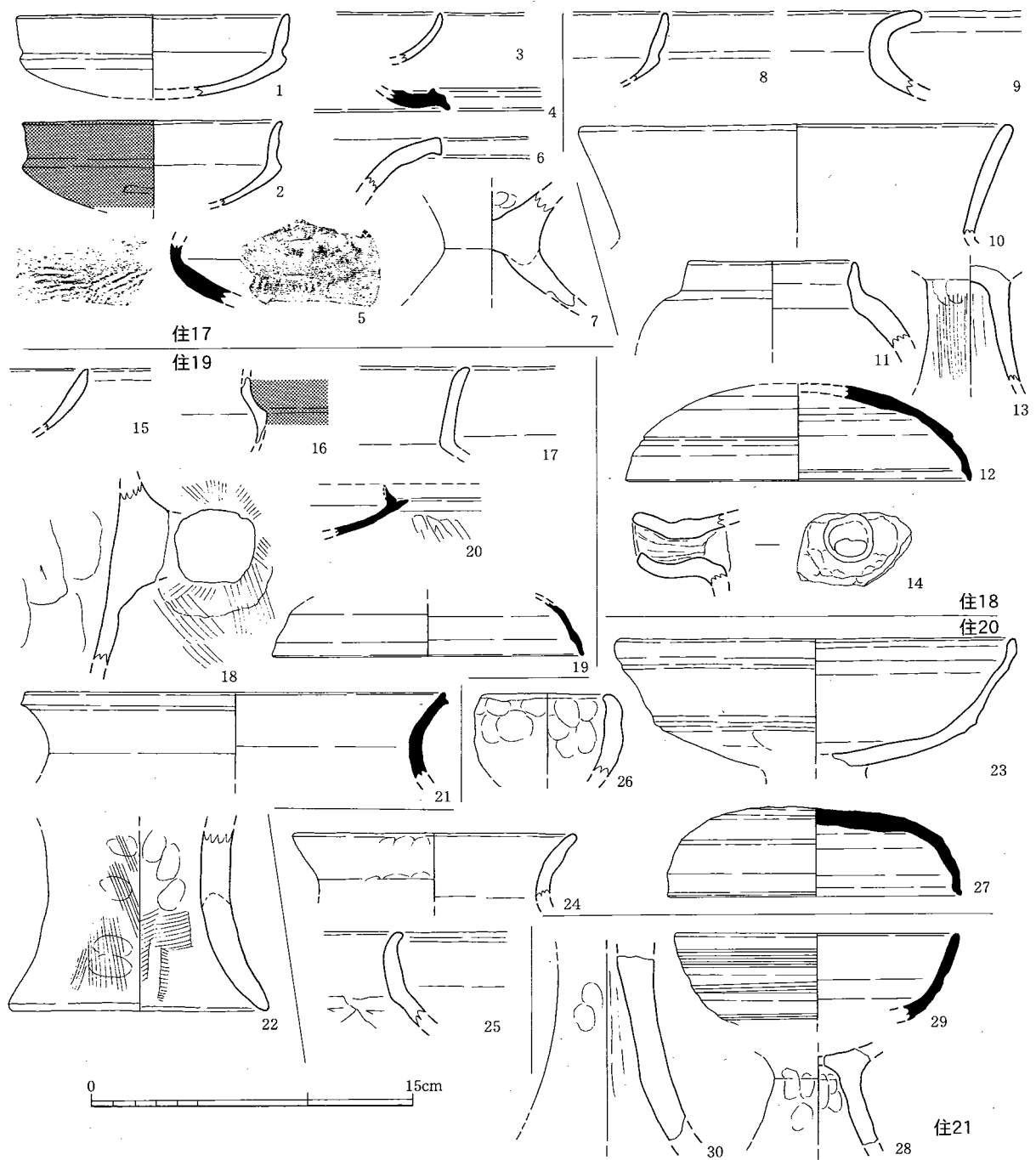
21号竪穴住居跡 (図版8、第21図)

3区中央南、東寄りに位置し、24号住居跡に南西隅を切られ、22号住居跡を切る。住居中央~東はクリークにより切られ、北・南壁の半分しか残存せず、北東隅もピットにより切られる。住居規模は東西365cm×南北210cm、深さ13cm程度の東西に長い小型の長方形住居となる。切り



- 24
1. 茶褐色粘質土に黄褐色粘質土ブロック少量混じる、
焼土・炭も混じる
 2. 1より砂性がある
 3. 茶褐色粘質土と黄褐色粘質土が50%ずつ混じる
 4. 1より炭・焼土少なく、やや明るい
 5. 4より明るく粘性がある
 6. 灰褐色粘質土+黄褐色粘質土
 7. 暗青灰色細砂+黄褐色粘質土ブロック
+茶褐色粘質土ブロック=カマド掘り込みか
 8. 暗青灰色細砂(地山)

第22図 18~20・24号竪穴住居跡、24号住居跡カマド実測図 (1/60、1/30)



第23図 17～21号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

合い及び出土土器から古墳時代後期末の住居と考えられることからカマドの存在が予想され、クリークによって切られた北・南壁中央にカマドが存在した可能性が高いと考えられる。住居床面では、ピット3基検出し、P1・2が支柱穴。住居床面下全体で、住居中央部が最も深くなる掘り込みを確認した。埋土は暗灰黄褐色粗砂で、非常によく締まる。

出土土器(第23図28～30) 28は土師器高坏脚部。色は橙褐色。29は須恵器坏身か高坏坏部となるもの。外面にはカキ目を粗く施し、横ナデにより2条の沈線状に窪む。色は灰色。30は弥生後期高坏脚部。色は橙褐色。混入品。

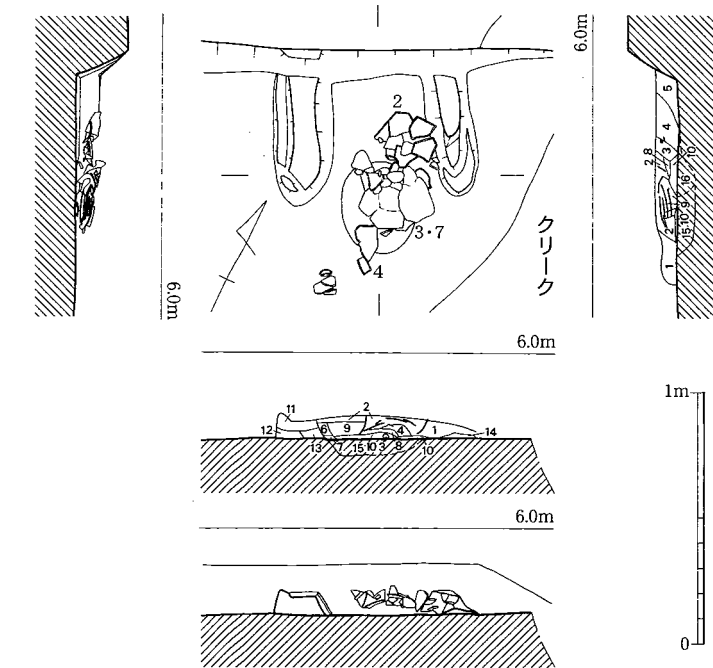
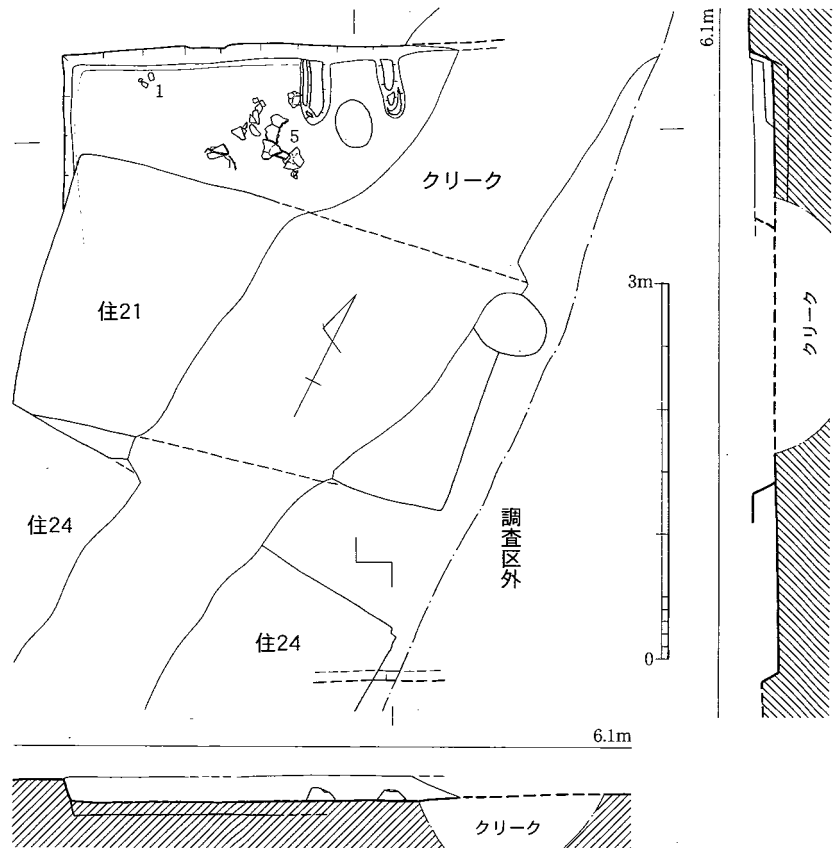
22号竪穴住居跡

(図版9、第24図)

3区中央部東側の調査区境に位置する。21・24号竪穴住居跡と切り合い、両者より古い。主軸方位は北やや西に振れる。住居跡の大半が21・24号住居跡および近代のクリークによって失われ、東壁も調査区外となる。平面プランは方形で、一部確認できる主軸方向の長さは5.0mを測る。壁は状況の良い箇所では17cm残る。北壁の中央と思われる位置に内接型のカマドが付く。床下の掘り込みは住居跡北西隅で確認できた。住居跡の時期は出土土器や切り合い関係から古墳時代後期末と考えられる。

カマド (第24図) 内接型のカマドで住居跡北壁に付く。北壁はクリークに切られ、調査区外に伸びるため長さが不明だが、カマドはほぼ中央部に位置すると考えられる。袖は壁から直線的に伸び、平面的には左袖で63cm、右袖で60cm残る。但し残存状況は悪く、堆積状況から廃棄時に意図的に壊されたとも考えられる。燃烧部では掘り込みを確認し、焼土が堆積する。カマド埋土は大きく3層に分けられる。

下層(7・10層)はカマド使用時の堆積層、中層は構築材(3・6・8層)を含むカマド廃棄時の堆積、上層(2層)は住居覆土の1層と類似しており、カマド廃棄後の住居跡の埋没に伴って堆積したものと思われる。



1. 暗灰褐色砂質土(住居覆土)
 2. 暗灰褐色砂質土70%に明赤褐色砂質土30%混じる
 3. 黄灰褐色粘土(カマド構築土が崩壊したもの)
 4. 黒褐色砂質土に炭多く混じる
 5. 明灰褐色砂質土
 6. 淡茶褐色粘質土60%+淡灰色粘質土40%(カマド構築土が崩壊したもの)
 7. 暗茶褐色粘質土80%+暗灰色粘質土20%(いずれも粘性強い)=カマド使用時の堆積層
 8. 淡黒褐色粘土(カマド構築土が崩壊したもの)
 9. 暗茶褐色粘質土に炭やや含む
 10. 暗茶褐色粘質土60%+暗灰色粘質土40%(いずれも粘性強く、焼土・炭も含む)=カマド使用時の堆積層
 11. 暗灰黄褐色粘質土20%+茶褐色粘質土80%
 12. 暗褐色粘質土(砂性あり)
 13. 11+12
 14. 灰黄褐色粘質土(鉄分多い)
 15. 16+焼土(焼土非常に多く含む)
 16. 灰黄褐色粘質砂
- カマド袖(右袖は意図的に壊されたものか)
カマド掘り込み

第24図 22号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60、1/30)

燃焼部の埋土中層から土器片がまとまって出土している。カマドの廃棄に伴うものか。

出土土器（図版46、第25図1～7） 1は住居床面から出土した土師器の須恵器模倣坏。受け部の突出は比較的明瞭で、立ち上がりはやや外反する。内外面とも全面に黒塗りが施される。底部外面は手持ちケズリ、内面はミガキ痕が残るが摩滅する。2～7は土師器甕。このうち2～4・7はカマド燃焼部から出土した。2は小型の甕で復元口径13.2cm。体部が丸く、口縁部は丸く屈曲して外反する。端部は丸く終わる。体部外面の全体に二次焼成痕が残る。体部内面はケズリ、外面は摩滅と二次焼成の影響で不明瞭である。頸部内外面には指圧痕がみられる。3は甕体部上位が残る。復元口径は13.1cm。口縁部は外反して端部は丸くなる。二次焼成の影響と摩滅のため、体部内面のケズリの他は調整不明である。4は外反する口縁部の破片。復元口径19cm。調整は内外面ともヨコナデ。5は覆土からの出土。長胴の甕で、復元口径19.1cm。口縁部は丸く屈曲して外反し、端部は丸く終わる。全体的に摩滅するが、体部内面にタテ方向のケズリ、外面にタテハケが認められる。外面全体に薄く煤が付着する。6は住居跡の床下掘り込みから出土した甕口縁部片。丸く外反して、端部上面がナデによりわずかに面取りされる。全体が摩滅する。7は甕の体部中位より下部が残る。丸い体部で上部に向かってわずかに内傾したところで割れる。体部外面の中位はハケメ、下位～底部はナデか。指圧痕が残る。内面は体・底部ともタテ方向のケズリで調整する。内面の一部と外面の数ヶ所に黒班が見られる。割れ口には粘土紐の接合面が数ヶ所見られ、上端の割れ口も擬口縁である。

これらの資料はいずれも古墳時代後期後半に当たる。（一瀬）

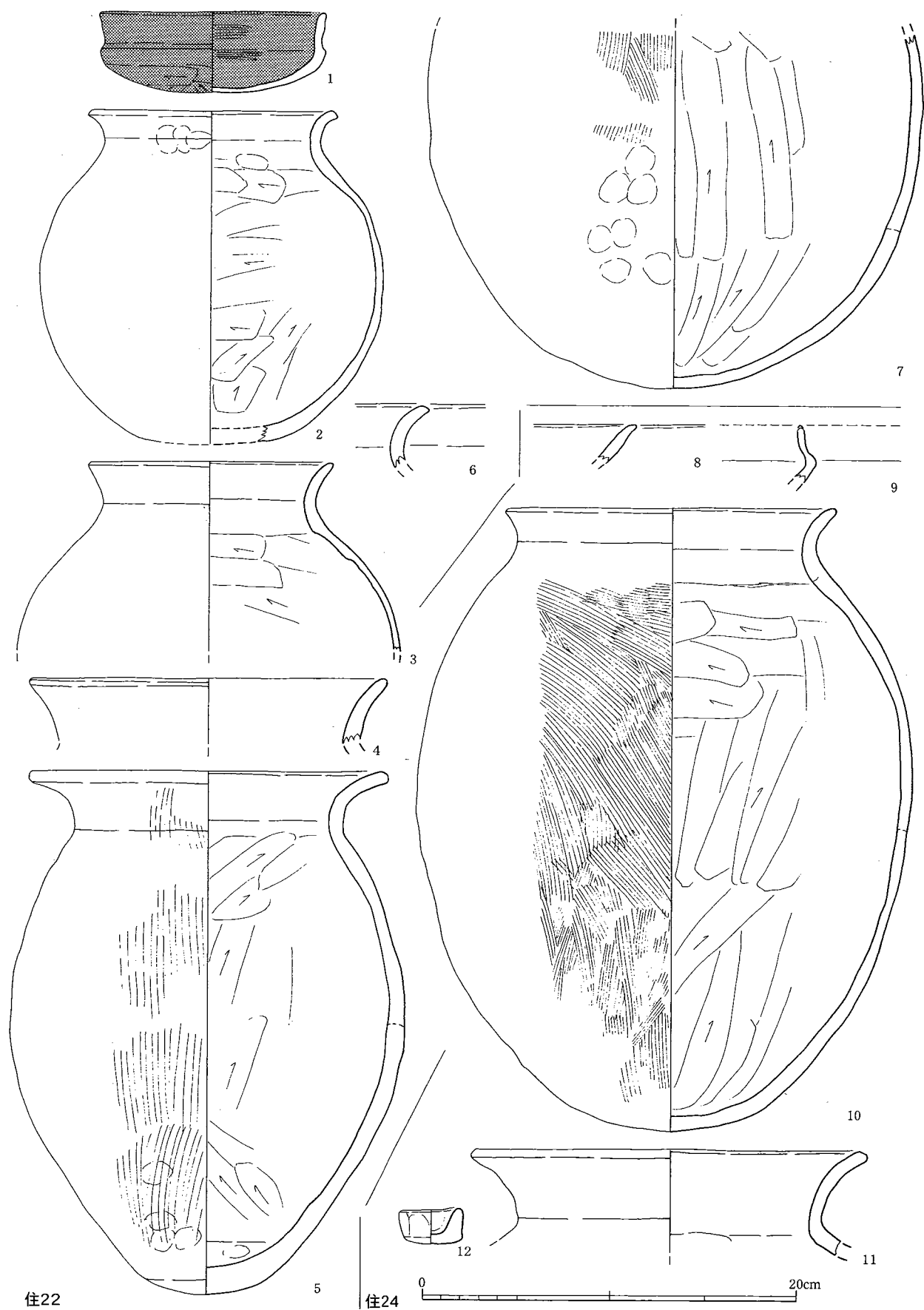
23号竪穴住居跡（図版23、第21図）

3区南中央に位置し、24号住居跡を切る。住居ほとんどをクリークに切られるため、住居北・東壁、カマド東壁の一部を検出したに留まる。住居規模は現状で、東西170cm以上×南北115cm以上、深さ8cmを測り、カマドで反転すると、住居は東西350cm程度の小型住居となる。住居埋土は茶褐色砂質土を呈する。出土土器で図示できるものはないが、住居の規模、カマドの形態から7世紀前半の住居跡となるか。

カマド 住居北壁に付設された燃焼部突出タイプのカマドで、住居と同じくほとんどがクリークにより壊される。カマド埋土上層は灰黄色砂質土に焼土・炭を多く含む土、下層は灰黄色粗砂に焼土含むが、炭はあまり含まない土となり、いずれもカマド構築土が崩壊した土である。また住居壁から突出した灰黄色粘質砂と灰黄褐色砂質土で構築された右袖がわずかに残存する。燃焼部奥壁は住居壁から40cm突出し、燃焼部奥壁～煙道部壁は火を受け、赤く変色する。燃焼部床面から5cm上から、長さ14cmの短い煙道が付く。なお、煙道部中央を中心にカマドを反転すると幅が90cmとなることや燃焼部東壁が住居壁と直交しないことから、東壁は掘りすぎた可能性がある。

24号竪穴住居跡（図版9、第22図）

3区南の東寄りに位置し、23号住居跡に切られ、21・22号住居跡を切る。住居中央はクリークによって大きく壊されるが、東西360cm×南北330cm、深さ18cmのやや東西に長い方形住居である。他の住居はカマドと住居の主軸がほぼ一致するが、西壁中央に付設された当住居跡カマ



第25图 22・24(1)竖穴住居跡出土土器实测图 (1/3)

ドの主軸は住居跡主軸からかなり南東に振れており、支柱穴の位置とも合わないため、住居主軸を優先させた。なお、カマド個別図はカマド主軸を優先させている。住居床面では、ピットを6基検出し、P1・2・4・6が支柱穴となるが、いずれも住居壁際に近い位置に支柱穴が存在する。P2内では完形の土師器甕(10)が据えられた状態で出土し、支柱穴抜き取り後に甕を据えたものと考えられる。また住居東部分床面直上で50×35cm、厚さ7cmの台石を確認している。住居埋土は暗茶褐色粘質土に暗黄褐色粘質土が混じる。住居床下ほぼ全体に、浅い掘り込みが認められ、住居南には24号住居跡南包含層が存在する。

切り合い関係及び出土土器から古墳時代後期末の住居跡と考えられる。

カマド(第22図) 住居西壁中央に付設されたカマドである。先述したように住居主軸と当カマド主軸が一致しないため、調査段階では燃烧部を掘り間違えてしまい、土層図を作成することができなかった。壁から右袖は78cm、左袖は60cm突出し、上部は23号住居跡により削平され、特に右袖は最も残りのよい部分で高さ6cm残存する。燃烧部奥壁から東に55cmの箇所、38×28cmの弱い焼面が存在する。断面図の箇所、燃烧部幅38cm程度、奥壁で幅37cmと燃烧部の幅は変わらず、当遺跡他のカマドと比較するとやや狭い。カマド埋土を参考程度に述べると、カマド内埋土上層は暗黄褐色砂質土に焼土・炭多く混じる土、下層は灰褐色砂質土に焼土・炭多く混じる土で、いずれもカマド構築土が崩落したのと考えられる。なお、土層図7層はカマド掘り込みである。

出土土器(図版46、第25・26図8~14) 8は土師器高坏口縁部で、カマド内出土。内外面とも黒斑が認められる。色は黒色。9は土師器模倣坏口縁部で、口縁端部は欠損する。色は外黄橙褐色、内白黄色を呈する。10は先述したように支柱穴(P2)に据えられた約80%残存する長胴の土師器甕で、口径17.5cm、器高33.2cmを測る。胴部外面全体にはスス、外面胴部中位以下は黒斑が認められ、色は黄橙色を基調とする。11はやや長め口縁部を有する土師器甕で、胎土には細粒を非常に多く含む。色は橙褐色を基調とする。12は完形の土師器手捏ね土器で、色は黄褐色を呈する。

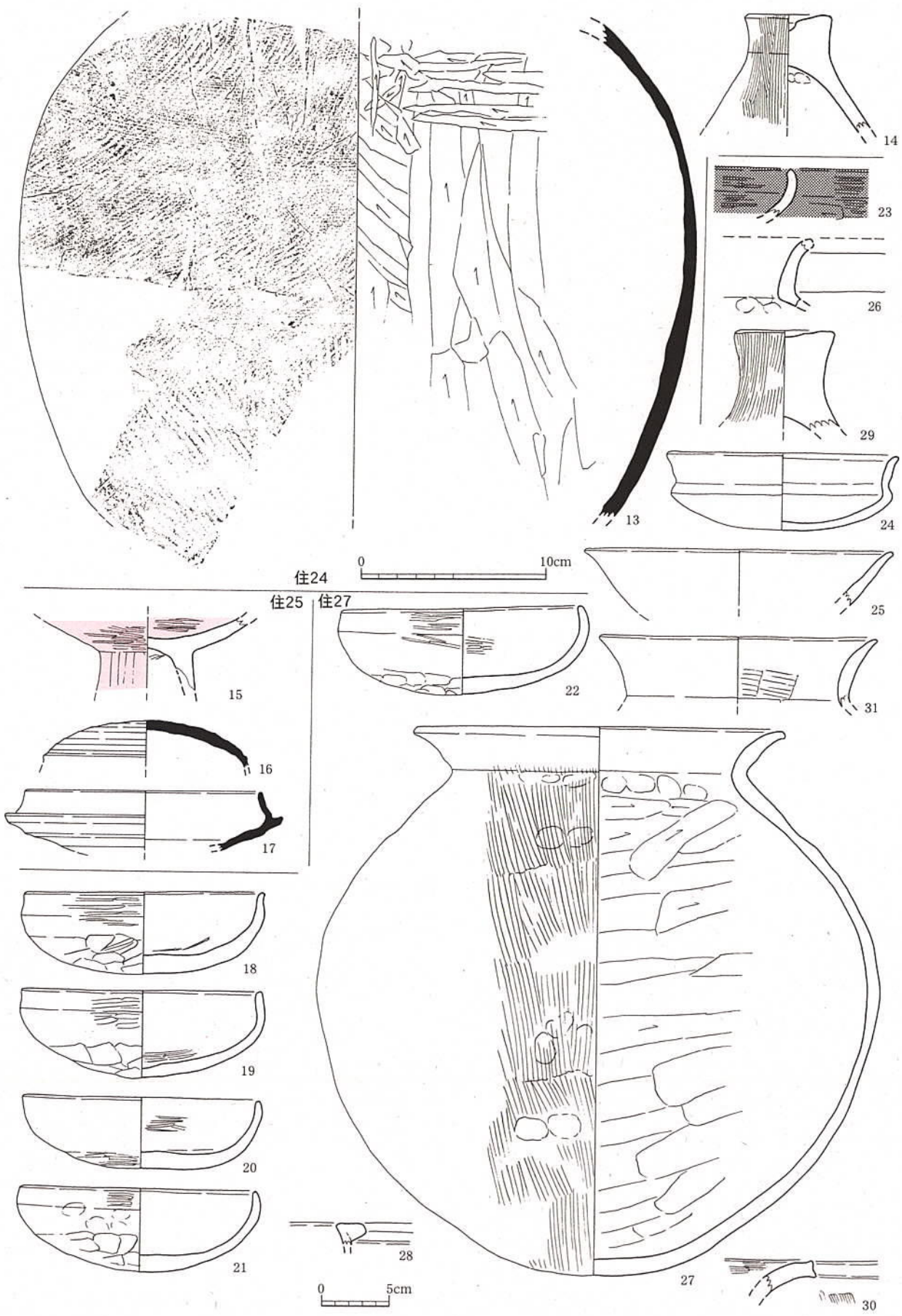
13は須恵器甕胴部片であり、胴部中位にある最大胴部径は38.8cmを測る。右上がりタタキを外表面全体に施し、外表面中位以上はタタキ後粗いカキ目を施す。内面上部は細かいケズリで調整する、珍しいものである。色は外灰色、内灰褐色。14は弥生中期の甕蓋上部片。色は灰黄褐色を呈する。混入品。

25号竪穴住居跡(第21図)

3区南東隅に位置する。住居東は調査区外、住居南はクレークで切られているため、住居北西隅部分を検出したに留まる。規模は東西120cm以上×南北105cm以上、深さは26cmを測る。住居床面下全体に浅い掘り込みを確認した。住居埋土は茶褐色粘質土を呈する。

出土土器から古墳時代後期後半の住居跡と考えられる。

出土土器(図版46、第26図15~17) 15は土師器高坏で、外表面全体及び坏部内面は厚くスリッパを施す精製品となる。坏部内外面には細かい横ミガキ、脚部外面にはヘラナデで調整する。外表面には一部ススが付着し、生地は黄褐色。16は須恵器坏蓋。天井部との境には鈍い稜を持つ。天井部には丁寧な回転ヘラケズリを施す。色は灰色。17は須恵器坏身。色は白灰色。



第26図 24(2)・25・27号竖穴住居跡出土土器実測図 (27は1/4、1/3)

27号竪穴住居跡（第17図）

3区北東隅に位置し、17号住居跡を切られ、16号住居跡を切る。住居北・東半分は調査区外で、現状で東西340cm以上×南北285cm以上を測るが、南壁中央に付設されたと考えられるカマドで反転すると、東西幅が680cm程度と当遺跡では大きい竪穴住居跡となる。

当初は、16号住居跡→17号住居跡→当住居跡という切り合い関係であると判断したため、16・17号住居跡と遺物が混ざってしまった。また西壁の全てを掘り飛ばしてしまったため、壁西壁は下端のみ検出したにとどまった。なお、この混ざってしまった土器はほとんど16号住居跡出土土器として取り上げたため、16号住居跡出土土器として報告し、当住居跡と17号住居跡出土土器は、両住居跡に確実に伴うもののみ、図示している。カマドは調査区壁際で検出し、住居床面直上では土師器模倣坏5個体（18～22）を確認した。また住居床面ではピット2基検出し、深さ・位置からP2が支柱穴となる。住居床面下全体で住居中央部が最も深くなる、深さ20cmほどの深い掘り込みを確認した。住居埋土は茶褐色砂質土である。住居床下掘り込みから石包丁が出土した（第99図1）。

切り合い関係及び出土土器から古墳時代後期末の住居跡と考えられる。

カマド 住居南壁東壁際で検出されたカマドで、左袖の半分は調査区外となる。第1面ピットがカマド上にあつたため、カマドの存在が分からず、床面まで全体を掘り下げた際に、焼面を検出したため、カマドの存在に気が付いた。そのため、カマド両袖は下端のみ検出したに留まる。両袖とも壁から65cmほど突出し、燃焼部幅は焼面中央部で57cm、奥壁部分で52cmを測る。焼面はあまり焼けていない。

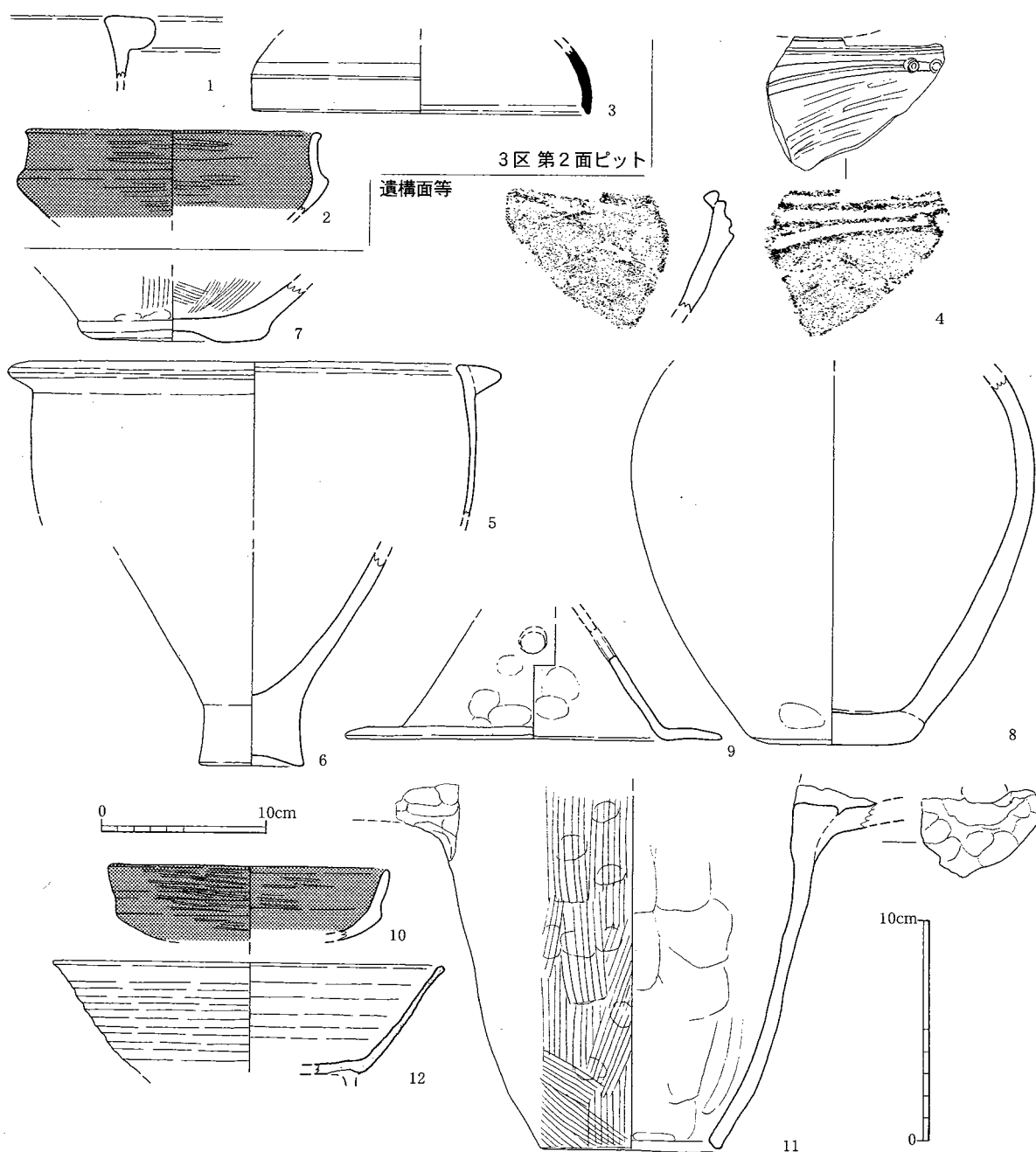
出土土器（図版46、第26図18～31） 18～23は土師器碗形坏で、いずれも口径13cm前後となる規格品である。18・20～22はほぼ完形品で、いずれも外面底部付近は手持ちヘラケズリ、外面全体は細かいミガキ、内面もミガキを施す（18・21は摩滅が顕著）。口縁部形態は18が横ナデにより弱く外反し、19・20が直口気味で、19の口縁部は長くなり、21・22は弱く内湾するものと分類できる。19・20・22の外面底部には黒斑が認められ、色はすべて橙褐色を基調とする。いずれも胎土には赤褐色粒を含み、21は胎土に細粒を非常に多く含む。23は内外面を細かいミガキのち、黒塗りを施す。生地は橙褐色。24は土師器模倣坏で、強く外反する長めの口縁部を持つ。底部外面は手持ちヘラケズリを施す。色は橙褐色。25は土師器小型高坏口縁部で、口縁端部は弱く外反する。焼成はやや甘く、色は橙色。26は口縁部が弱く外湾する土師器甕口縁部である。内面頸部が稜を持ち、色は黄褐色。27は1/2残存する土師器甕で、歪みが顕著に認められる。胴部中位が最大径となる寸胴形態で、口径20cm、器高29.6cm、胴部径30.6cmを測る。頸部から強く屈曲する口縁部を持つ。外面胴部中位以下には黒斑が認められ、色は淡橙褐色。

28～31は混入品。28は弥生中期甕口縁部で、色は黄褐色。29は弥生中期甕蓋上部片で、色は白黄色。30は弥生後期壺口縁部。色は灰黄褐色。31は弥生後期小型甕口縁部。外面は二次加熱痕が認められ、色は赤褐色～橙褐色。

(3) ピット・遺構面等出土土器

ピット出土土器（図版46・47、第27図1～3）

1は弥生中期甕口縁部。色は灰黄褐色～灰褐色。P197出土。2は土師器模倣坏。口縁端部



第27図 3区第2面ピット・遺構面等出土土器実測図（1・5・6は1/4、他は1/3）

を弱く外反させる。内外面細かいミガキのち黒塗りを施す。生地は橙褐色。P228出土。3は須恵器坏蓋口縁部で、口縁内端部はナデにより窪む。口縁部と天井部との境には工具による浅い沈線を巡らす。外面には自然釉が薄く付着し、色は灰色～淡灰色。P227出土。

遺構面等出土土器（図版46・47、第27図4～12）

4は縄文後期後半の西平式鉢口縁部で、波状口縁となる。口縁部文様帯に3条の沈線を施文し、その沈線は波状の高い部分で工具による刺突文により区切られる。また文様帯には縄文がわずかに認められる。体部外面及び内面全体はミガキで調整。色はこげ茶色。5は弥生中期甕

で、口縁部が外側に大きく突出するもの。色は黄橙色。6は弥生中期甕底部で、上げ底の厚い底部を持つ。色は黄橙色～灰黄褐色。7は弥生後期甕底部。底部中央は上げ底で、底部外面付近には黒斑が認められる。色は黄褐色～黒色。8は弥生後期壺胴部～底部。厚い器壁で、平底残すレンズ状底部となる。色は灰黄褐色。

9は布留系土師器高坏脚部で、脚部中位には焼成前穿孔が1ヶ所残存する。色は橙褐色。10は土師器模倣坏。弱く外傾する口縁部で、底部との境となる稜はかなり鈍いものとなる。内外面はミガキのち黒塗りが認められる。生地は灰褐色。11は小型土師器甌で、底径は8.2cmを測る。把手には胴部内面まで貫通する径2cmほどの孔が認められる。甌本体を棒で支えるための孔となる可能性がある。色は黄褐色。12は瓦器椀である。高台は欠損するが、器壁は薄く、外面は横ナデによる細かな凹凸が顕著である。色は黒灰色～灰色を呈する。

4. 4区第1面の検出遺構と遺物

(1) 概要

4区第1面は、3区北端とは道路を挟んで10m北、5区南端とは水路を挟んで6m南に位置する、南北72m、東西約8m、面積600m²の調査区である。Ⅲ-1-(2)の基本土層の項で先述したように、第9図の断面図を見ると、4区は北・中央・南にピークを持つ高まり及びその間の落ちから構成され、検出された遺構もピークと対応するように3ヶ所に分かれて存在する。このうち、当区南は第1面で古墳時代前期前半の竪穴住居跡を検出し、また検出レベルが標高6.1mと高く、地形の傾斜から判断すると、第1面は既に削平されてしまったものと推測される。なお、4区第1面中央は、重機による表土剥ぎの際に誤って第2面まで下げてしまい、第1面で存在した東西方向の溝2条等を記録することができなかった。

検出した遺構は竪穴住居跡8棟・溝4条・ピットである。当区北では切り合う竪穴住居群を検出し、3区第2面と同様の状況が見て取れる。

遺物はパンケース36箱分出土した。

(2) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（図版11、第29図）

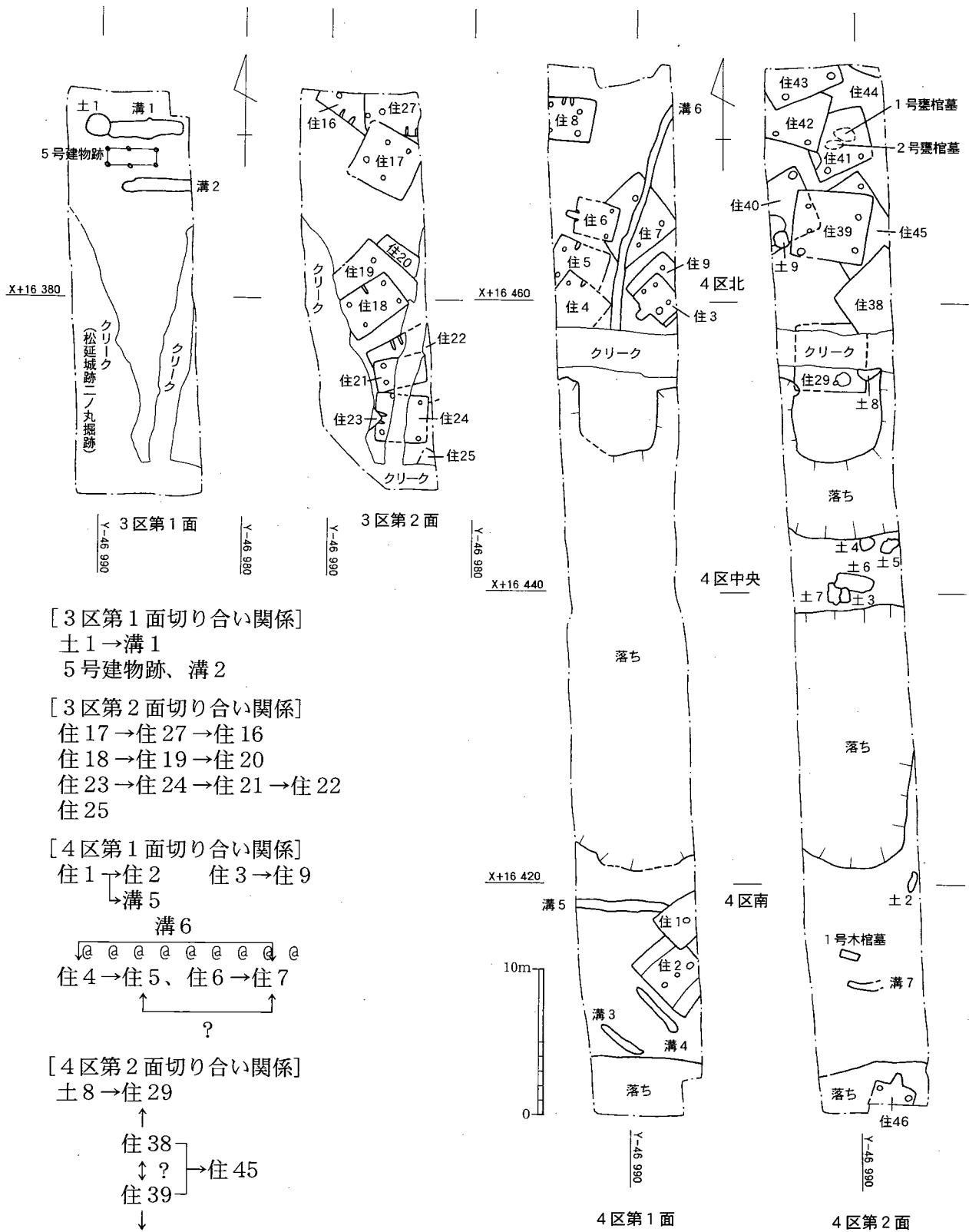
4区南部の東端、調査区境に接して検出した。2号住居跡を切り、5号溝を切る。主軸は北東-南西。長軸は3.5m以上で、短軸は2.8mを測る。北西壁が東に向かってやや狭まっております、やや南西側が広がる長方形の平面プランとなる。深さは14cm。床面からはピット3基を検出した。P2は深さ27cmで支柱穴の可能性はある。



出土土器から古墳時代前期前半に属する住居跡と考えられる。

出土土器（第30図） 1～3は弥生時代後期の広口甕。いずれも上部のみ残存する。1はP

4区から女山神護石を臨む（西から）



[3区第1面切り合い関係]

土1 → 溝1
5号建物跡、溝2

[3区第2面切り合い関係]

住17 → 住27 → 住16
住18 → 住19 → 住20
住23 → 住24 → 住21 → 住22
住25

[4区第1面切り合い関係]

住1 → 住2 住3 → 住9
 ↓
 溝5
 溝6
@ @ @ @ @ @ @ @ @ @
住4 → 住5、住6 → 住7
 ↑
 ?

[4区第2面切り合い関係]

土8 → 住29
 ↑
 住38 }
 ↓ ? } → 住45
 住39 }
 ↓
 土9 → 住40

住43 → 住42 → 住41 → 1・2号藁棺墓
土6 → 土3 → 土7
住44、住46、土2、土4、土5、1号木棺墓、溝7

第28図 3・4区第1・2面遺構配置図 (1/400)

1 から出土した。復元口径は18.1cm。口縁部は外反しながら立ち上がり、頸部内外面に弱い稜が認められる。端部は丸く収まる。外面体部にハケメ、頸部はのちナデで調整する。口縁部外面から内面は摩滅する。2 は覆土出土で復元口径19.8cm。3 はP 1 出土で同24.5cm。いずれも口縁部が直線的に立ち上がり、頸部内外面に稜が付く。端部は外方が面取りされ、断面方形を呈する。2 の内面は体部ハケ、頸部直下に指頭圧痕が残る。外面は頸部にヨコナデが見られる他は摩滅する。3 は体部内外面にハケメが施され、頸部内面直下に指頭圧痕を残す。

4 はP 1 出土の小型甕の底部破片。調整は摩滅・剥離のため内外面ともほぼ不明。体部外面に薄くハケメが残る。底部外面に黒班が見られる。5 は覆土出土の支柱支脚片。高さは不明だが厚手である。口縁部近くの外面にハケメと二次焼成痕を残す。

これらの出土資料の時期には幅があるが、住居の時期としては古墳時代前期前半と考えられる。(一瀬)

2号竪穴住居跡 (図版11、第29図)

4区南部の東側で検出した。1号住居跡と切り合い、この住居跡が古い。主軸は北西-南東。長軸5.1m、短軸3.7mの長方形プランで、東隅は調査区外となる。ベッド状遺構を持ち、北西壁と南東壁に接して幅0.8~1.0m、深さ16cmに設けられている。床面までの深さは32cm。床面中央部に径35cm、深さ5cmの炉を検出した。また炉を挟むように支柱穴と思われるピット2基を確認したが、深さは10cmと浅い。床下の掘り込みは不整形で、中央部を除くほぼ全面にわたる。なお、覆土上層(1層)から廃棄されたと考えられる多量の土器が出土した。この土器は概ね



2号住居跡炉跡 (北東から)

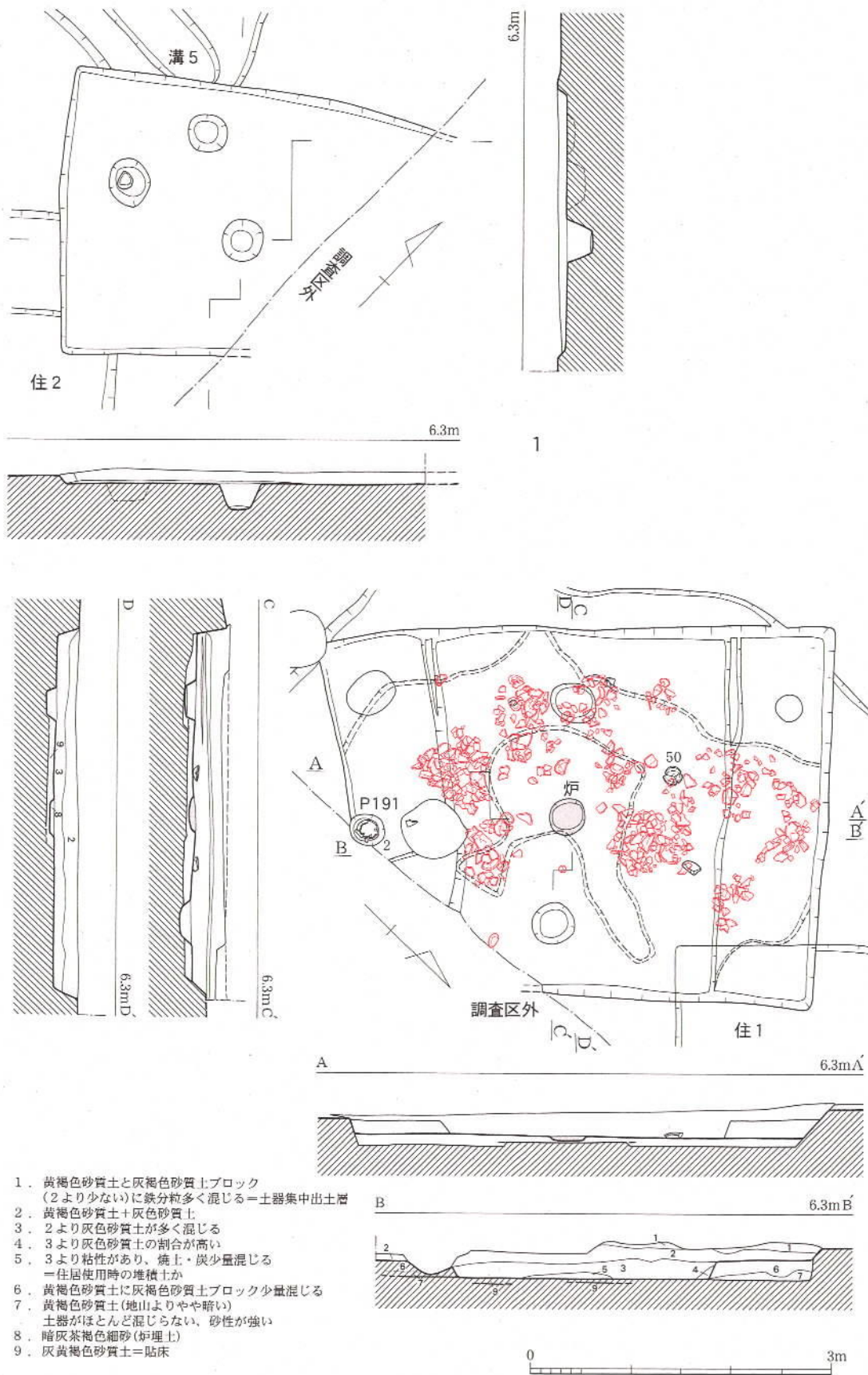


2号住居跡を切るP191出土状況 (南西から)

弥生時代後期後半~古墳時代前期前半のものである。住居跡も覆土下層や床下出土土器から古墳時代前期前半と判断される。

出土土器 (第30~33図) 6~46は覆土上層(1層)の出土。6~9・11は弥生時代後期の小型丸底壺。6・7は口縁部の破片で口径12.2cmに復元できる。いずれも摩滅する。8・9は復元口径12.8cm。8は口縁部がやや外傾する。体部中位に強い張りを持ち内外面に稜が付く。外面肩部に指頭圧痕、体部中位にハケメが残る。また体部外面下位に二次焼成痕が見られる。9は口縁部が直立し、体部の張りは8に比べて弱く丸い。体部外面ハケ、口縁部内外面はハケのちナデ。11は口縁部が短く外反し、口径7.6cm。体部下位に張りがあり、内外面に稜が付く。内外面にミガキが施された精製品である。

10・12~16は弥生時代後期の壺。10は復元口径16cm。体部内面にハケメが残る他は摩滅



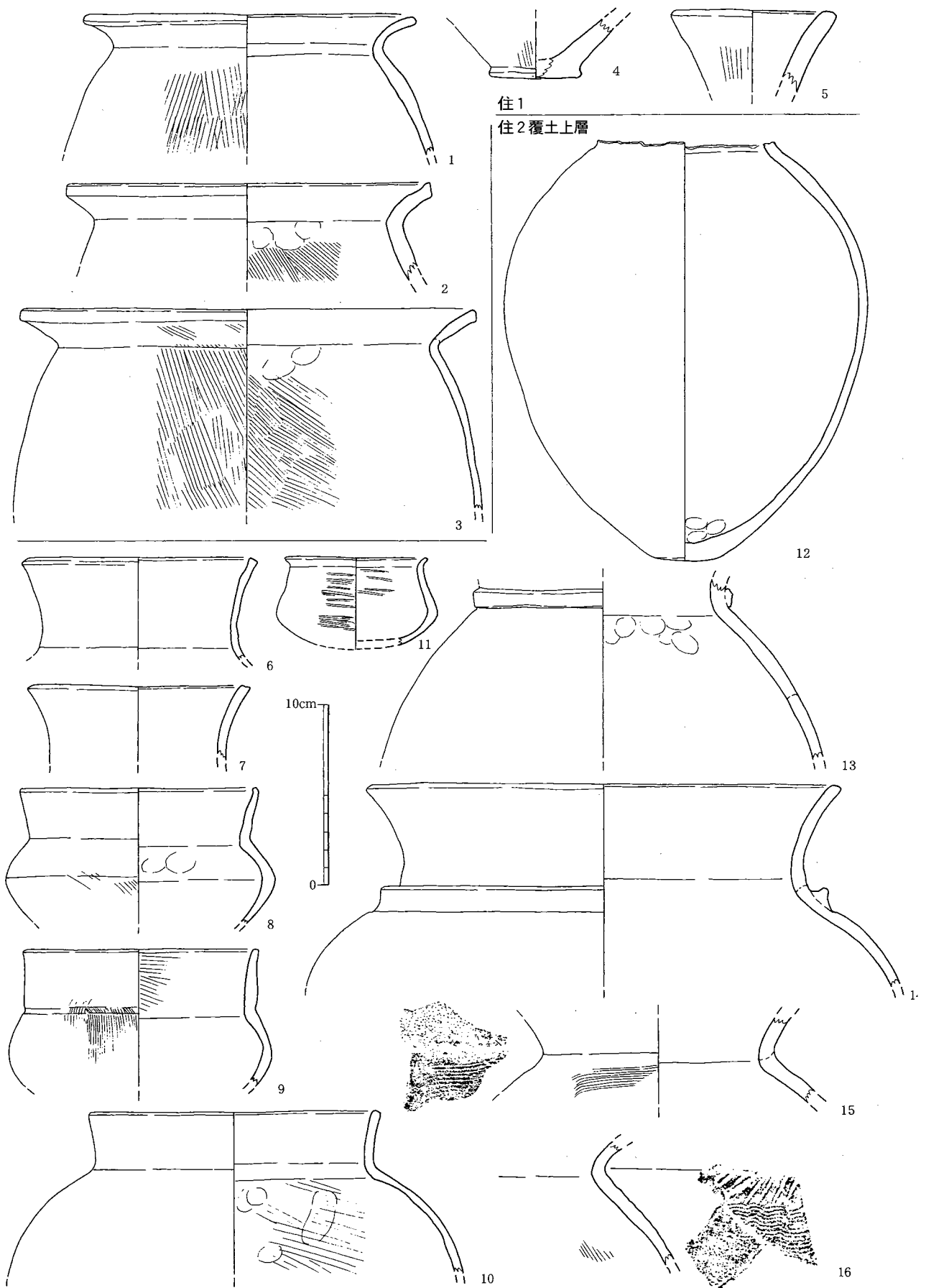
第29図 1・2号竪穴住居跡実測図 (1/60)

して不明瞭。胎土に細砂を多く含む。12は口縁部を打ち欠かれる。内外面とも二次焼成痕が顕著で、炉内土器などに転用された可能性がある。底部内面に指圧痕が残る。13は肩部破片。頸部外面に1条の貼り付け突帯を持つ。頸部直下の内面に指圧痕が残る。14は復元口径26.4cm。口縁部は外反して端部は丸く収める。くびれ部直下の外面に1条の突帯が貼り付く。突帯の先端には刻目を施す。全体的に摩滅が進むが頸部外面にわずかにハケメが残る。15は肩部破片。外面に8条の櫛描文が残る。16も肩部片で、外面に刺突文と14条の櫛描波状文を施す。

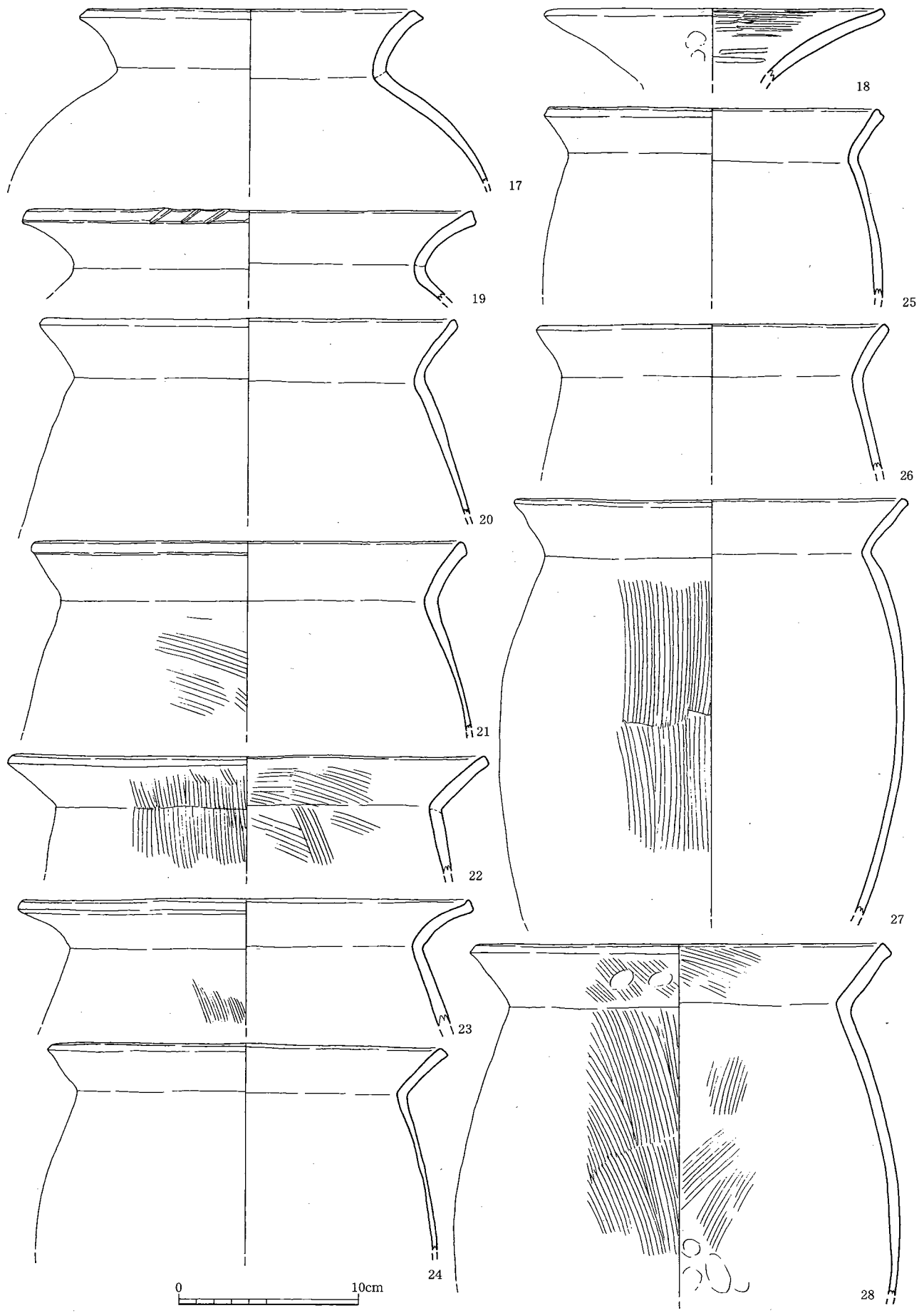
17は弥生時代後期の甕。口縁部は外反して立ち上がり、端部は面取りされる。18は土師器二重口縁壺の口縁部。口径18.8cm。強く外傾して端部は面取りされる。内面にミガキが施され、端部側がより細かいミガキとなる。精製品である。19～29は弥生時代後期の広口甕。口径は25・26が約19cm、19～21・24・27・28が約22～24cm、22・23・29が約26.5cmを測る。口縁部はいずれも直線的に伸び、頸部内外面に稜が付く。但し23の口縁部はやや外反する。端部は概ね断面方形を呈するが、20はやや丸く、19にはハケ状工具による刻目が入る。21・23・26・29の端部は面取りされる。摩滅するものが多いが21～23・27～29はハケメを残す。22の外面はタテハケ。体部から口縁部まで一連のハケメで調整する。内面にも口縁部から体部に斜め方向のハケメが施され、体部はさらにナデで調整する。28も内外面にハケメを施す。21外面には二次焼成痕、25・28は外面に黒斑が見られる。

30～34は弥生時代後期の高坏坏部の破片。いずれも坏部が屈曲し口縁部が外反して伸びるタイプ。31・32は内外面にスリップを施す。33は脚基部まで残存し、脚部の割れ口が擬口縁となる。35・36は弥生土器の高坏脚部。35は内面タテナデ、外面ハケメで仕上げる。脚内面天井部に工具痕、接合部には凹凸の接合痕が残る。36は精製品で、外面と坏部内面にスリップが施す。脚内面天井部に工具痕が残る。37・38は弥生時代後期の高坏。37は外面にミガキを施した精製品。脚部内面にナデ絞り、天井部に工具によるナデが見られる。38は小型高坏。39は古式土師器の高坏。脚が低く3ヶ所に穿孔がある。焼成前に外側から穿孔される。全体的に摩滅するが、脚基部近くの外面は工具ナデのちナデで仕上げ、内面下位に一部ハケメが残る。40は弥生時代後期の小型鉢。内面工具ナデ、外面ハケのちナデ。41は土師器鉢の口縁部と思われる。口縁部はやや外反し、端部上面が面取りされる。体・底部境に2条の沈線が巡る。内外面ヨコナデで内面の一部にヨコハケが残る。42・43は弥生時代後期の単口縁の鉢。42は復元口径21.6cm。口縁部はわずかに内湾し、端部上面が面取りされる。底は丸い。内面ハケのちナデ、外面はタタキのちナデ。内外面に黒斑がある。43は復元口径19.0cm。口縁部が直立し端部上面が面取りされる。口縁部外面に強いヨコナデによる幅広の沈線が1条巡る。内面ナデ、外面は上位ナデ、下位ハケのちナデ。44は古式土師器の小型鉢。体部が屈曲して口縁部が外反する。器壁が薄く、内外面にミガキが行われた精製品である。45は弥生土器の支脚脚部。46は弥生時代後期の大型支脚。内面と外面上部はナデ、下部はタタキ。

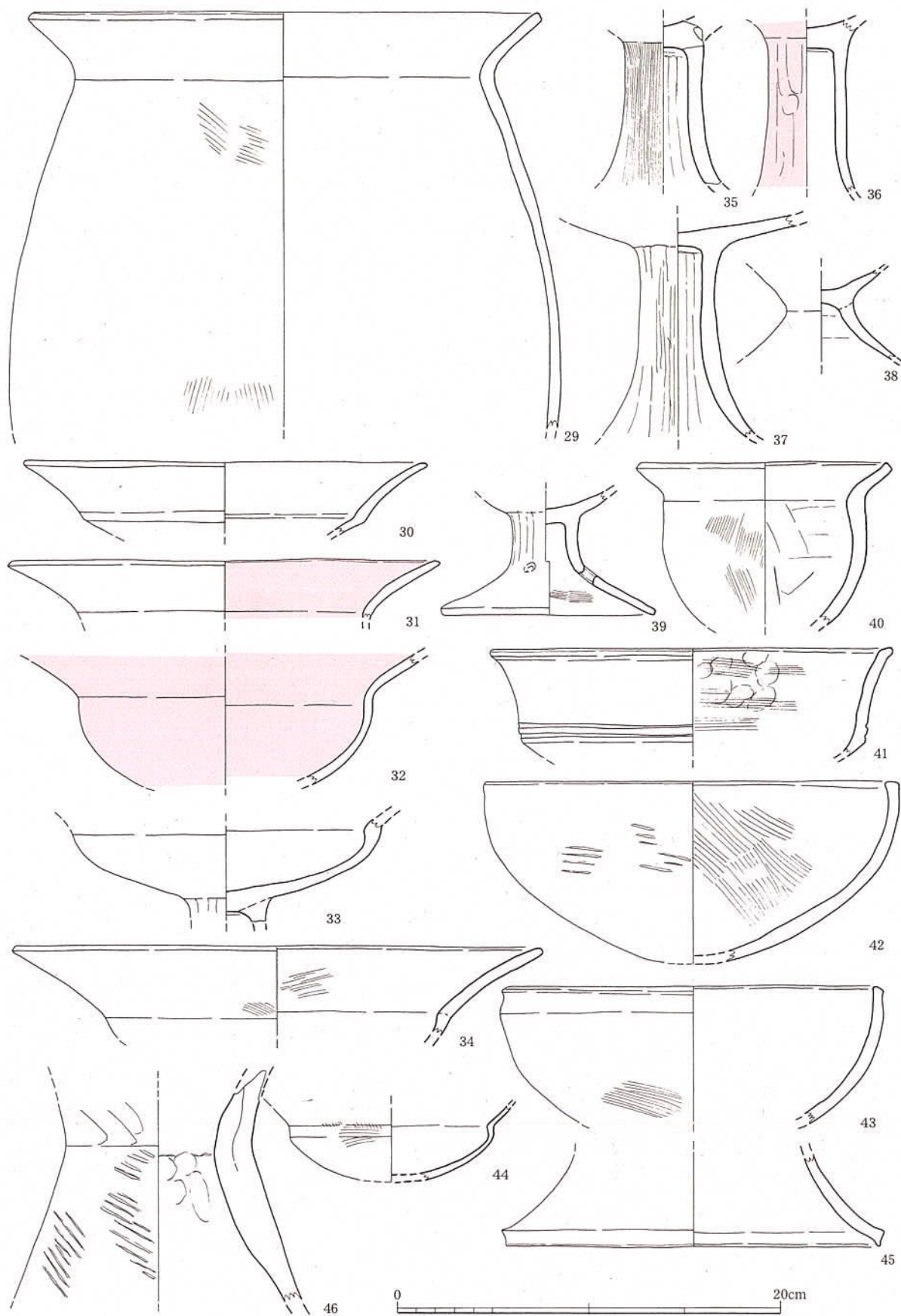
47～52は覆土下層から出土した弥生時代後期の土器。47～49は広口甕。47は口縁部破片で、やや外反して立ち上がる。端部外方が面取りされる。外面ハケメ、基部近くはのちヨコナデ。48は口縁部が直線的で断面方形となる。頸部内外面に稜が付く。摩滅のため調整は不明。内面に二次焼成痕がある。49は口縁部がわずかに外反し、頸部内外面に稜が付く。端部は外方が面取りされ、刻目を施す。調整は内面ハケのちナデ、外面ハケのちヨコナデ。内面頸部直下に指



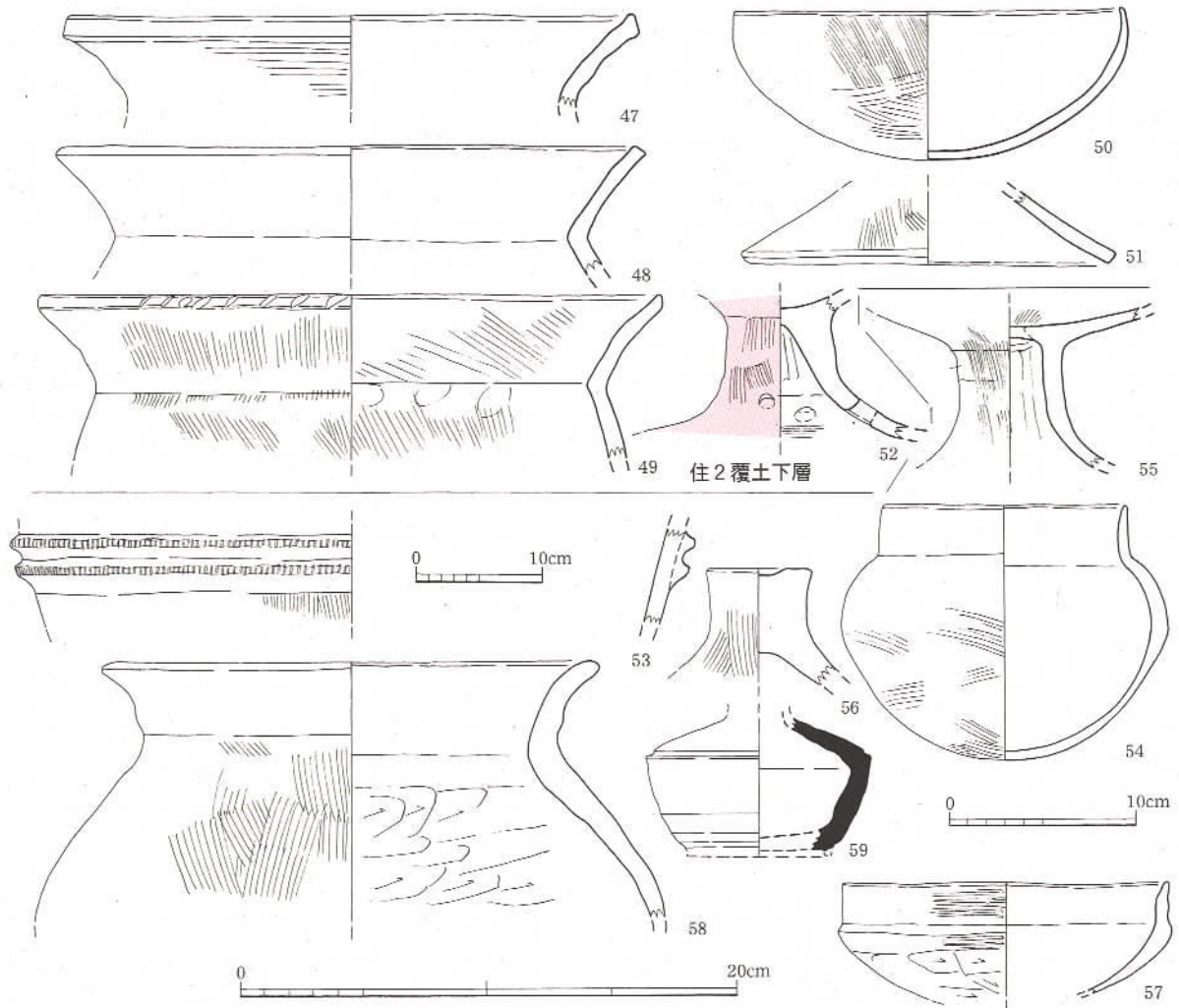
第30图 1·2(1)号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第31图 2号竖穴住居跡出土土器実测图(2) (1/3)



第32图 2号竖穴住居跡出土土器实测图(3) (1/3)



第33図 2号竪穴住居跡出土土器実測図(4) (56は1/4、53は1/6、他は1/3)

圧痕を残す。50は床面直上から出土した鉢。口縁部は直立し、端部がわずかに内湾して丸く終わる。底部は丸い。口縁部内面ヨコナデ。外面は底部に横・斜め方向の粗いハケのちナデ、口縁部が斜め方向のハケのちヨコナデで仕上げる。51・52は高坏。51は脚端部片。52も脚部で、高さが低い。穿孔が3ヶ所見られ、焼成前に外側から穿孔する。内面下位にハケのちナデ、外面はハケメと基部近くはミガキで調整する。脚内面天井部には工具痕がある。外面と坏部内面にスリップが施された精製品である。

53～55は床下掘り込みの出土。53は弥生土器の壺体部破片。外面に2条の刻目突帯が巡る。54は弥生時代後期の壺。口縁部が低く直立する。体部外面はハケ状工具によるナデで仕上げる。55は弥生時代後期の高坏。精製品で坏部内面ミガキ、脚部外面ハケで調整。脚内面天井部に工具痕が残る。充填法で接合されており、脚部外面に接合時に加えられた粘土の痕跡が残る。56～58は覆土出土。56は弥生土器の蓋。57は土師器の須恵器模倣坏。受け部の突出は比較的明瞭で、口縁部はわずかに外反する。内面と口縁部～受け部下の外面はミガキ、底部外面手持ちケズリで調整する。58は土師器甕。口縁部は外反し、端部は丸く収める。体部内面ケズリ、外面ハケメが残る。口縁部は摩滅する。59はP1から出土した須恵器の小型長頸壺。頸部・高台を欠く。体部上位の強く屈曲する箇所には1状の沈線が巡る。体部外面の下位に回転ヘラケズリが

施される。体部外面上位に降灰が見られる。(一瀬)

3号竪穴住居跡(図版12、第34図)

4区北、中央南東寄りに位置し、9号住居跡を切る。住居北東部は調査区外であり、住居規模は南西—北東230cm×南東—北西295cm、深さ10cmを測る、南東—北西に長い小型の長方形住居である。当初は、3・9号住居跡を一つの住居跡として調査したため、住居北・西壁のほとんどを掘りすぎてしまい、遺物も混ざってしまった。この北・西壁の位置は、当住居床下全体で掘り込み(黒破線)が認められたことから推測できる。混ざった遺物は、当住居跡出土土器の中で3・9号住居跡出土土器として報告する。

住居床面では、ピットを4基(P1・2・5・6)検出し、いずれもやや深さが浅いものの、支柱穴と考えられる。住居南壁中央では、3・9号住居跡カマドを切りあった状態で検出し、またカマド手前では90×60cmのカマドからの掻き出しによる焼土・炭の広がりを確認した。住居埋土は灰褐色粗砂に暗黄褐色砂質土が混じるものである。なお、当住居覆土中から凹石2点が出土した(第100・101図14・15)。

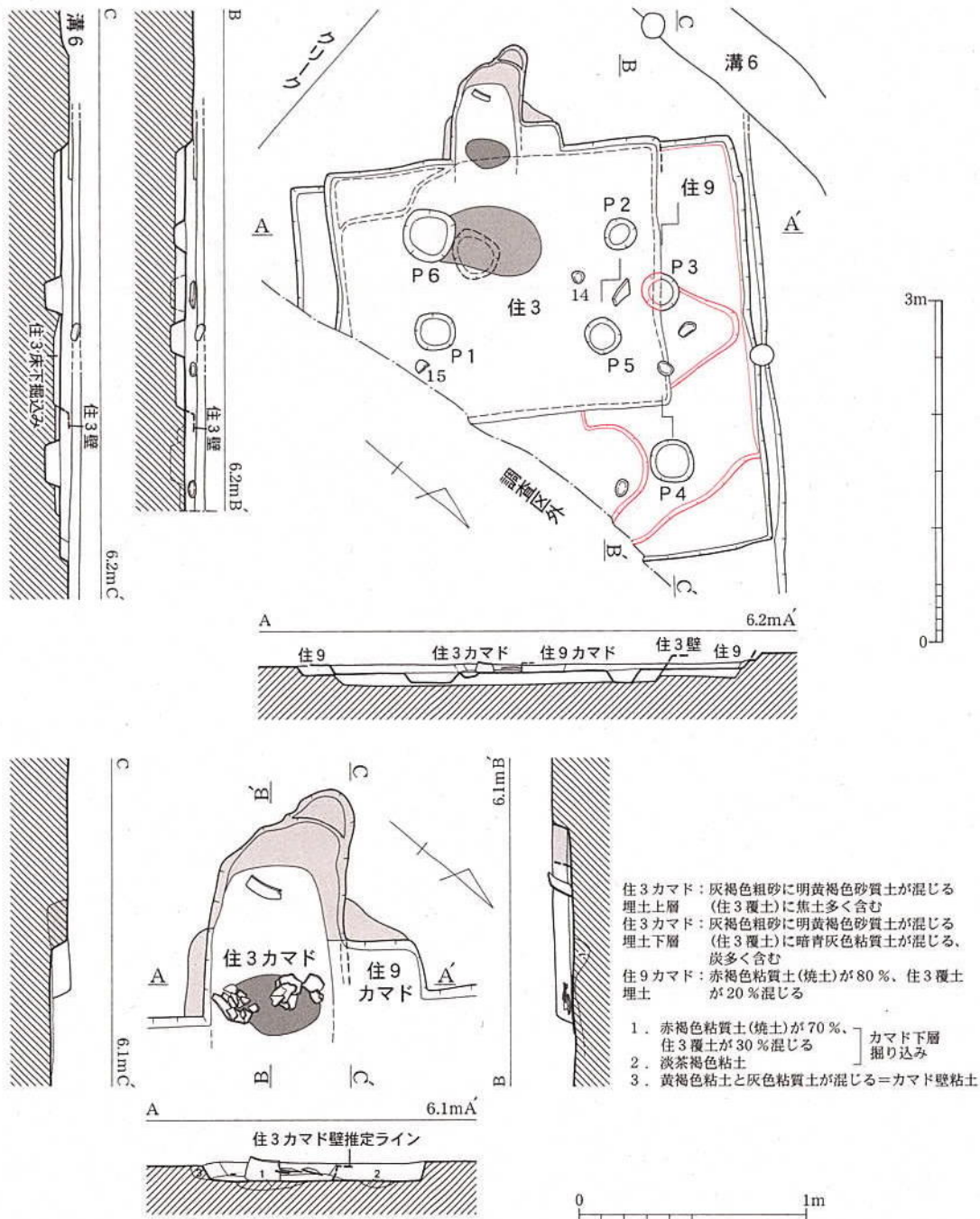
切り合い関係及び出土土器から古墳時代後期末の住居跡と考えられる。

カマド(第34図) 住居南壁中央に付設された突出タイプのカマドで、調査当初は3・9号住居跡カマドを一つの住居跡カマドと判断したため、両袖と燃焼部西壁の一部を掘り飛ばしてしまった。当住居跡カマド及び6・9号住居跡カマドは、最初にカマド周囲を大きく掘り込み、掘り方に粘土を充填することで壁を構築するというタイプとなるが、3・9号住居跡カマドはこのタイプの最初の調査例であったため、充填粘土の意味が分からず、地山まですべて掘り進めてしまい、東壁の一部以外は掘り方ラインで図面を記録することとなった。なお、壁下端推定ラインは黒破線で示す。また燃焼部奥壁では甕胴部片が壁のように立った状態で検出したが、トーンで示した粘土の充填土をこの甕片まで充填し、土器自体を奥壁としたものか、カマド燃焼部として何らかの役割を果たした構造物なのかは、土層で観察することができなかつたため判断できない。

カマド燃焼部奥壁から47cm手前で40×27cmのかなり硬化した焼面を確認し、支脚推定位置である断面図の燃焼部幅は54cm、奥壁の燃焼部幅は34cmで、燃焼部は逆「U」字形を呈する。掘り方は南西側に大きく突出し、カマド壁下端推定ライン(黒破線)から見ると、ややいびつなものとなる。また燃焼部東壁の充填粘土の厚さは薄い。カマド埋土下層にカマド構築土(暗青灰色粘質土)が混じる。

出土土器(第35図) 先述したように、当住居跡と切りあう9号住居跡出土土器が混ざってしまったため、当住居跡出土土器の中で、3・9号住居跡、3号住居跡、3・9号住居跡付近遺構面出土土器と分けて報告する。

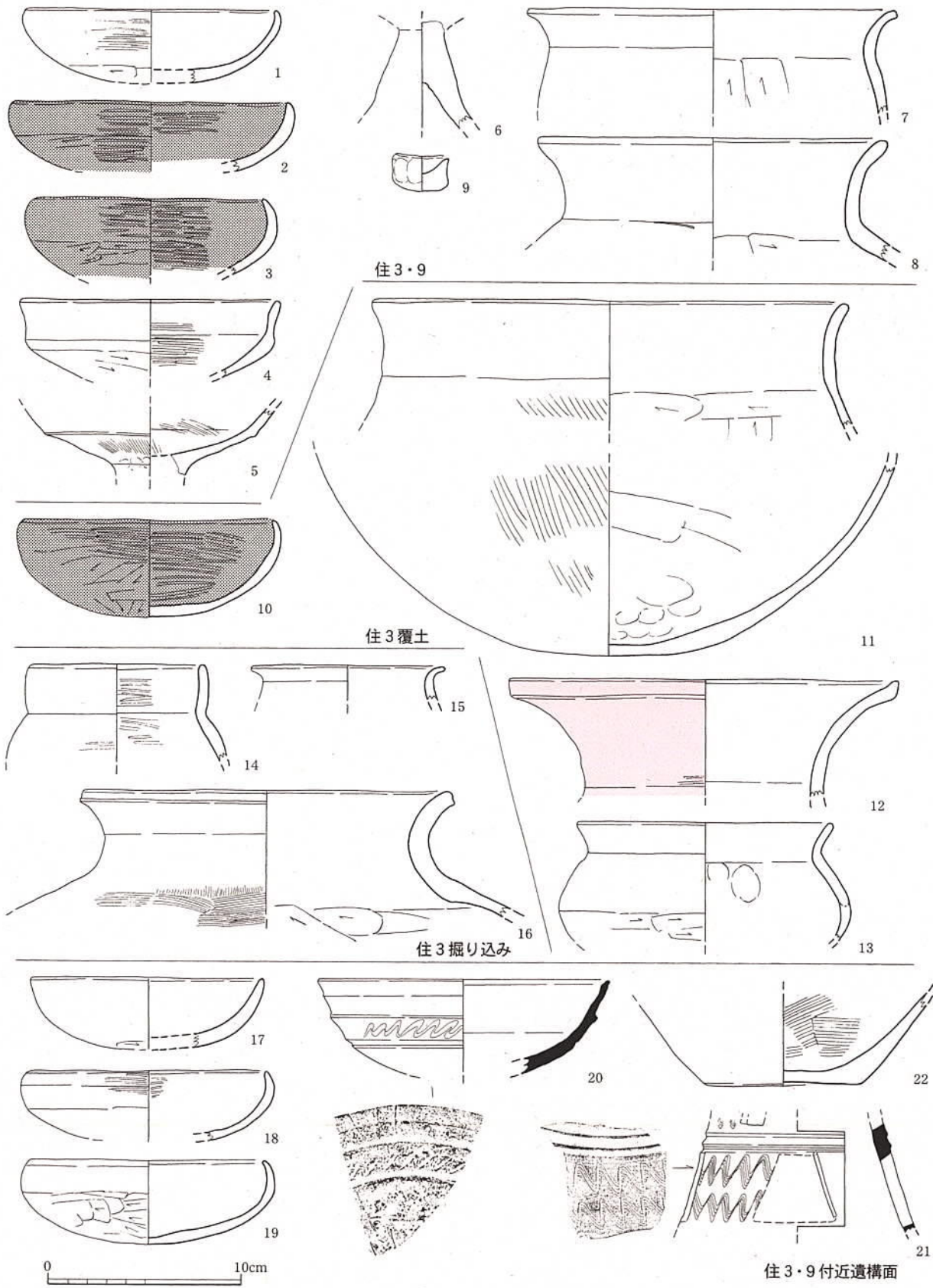
3・9号住居跡出土土器(図版50、第35図1～9) 1～3は口縁部が内湾する土師器碗形坏である。1・2は器高が低いもの。1は器壁も薄く、外面はミガキ、内面もミガキを施したものか。色は橙褐色。2・3は内外面横ミガキのち黒塗りを施す。2の生地は橙褐色、3は灰褐色。4は土師器模倣坏。口縁部と底部の境の稜は非常に鈍く、口縁部は弱く外反する。内面全体は黒化する。色は外灰橙色。5は土師器高坏で、口縁部と体部との境には鈍い稜を持つ。色



第34図 3・9号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60、1/30)

は黄橙色。6は土師器高坏脚部上部片で、中実のもの。色は橙褐色。7・8は土師器甕である。7は口縁端部かけて徐々に角度を持ちながら、外反するもので、口縁端部はナデで面取りする。色は灰黄褐色。8は直立気味の頸部から緩やかに外傾する、長めの口縁部を持つ。色は灰黄褐色。9は土師器手捏ね土器。胎土は精良で、色は黄褐色。

3号住居跡出土土器（第35図10～16）10は土師器碗形坏である。底部～体部中位にかけて手持ちヘラケズリを施し、その後内外面を細かいミガキで調整し、黒塗りを施すもの。生地は淡灰褐色。11は土師器甕口縁部と底部片で、胎土・色から同一個体となるもの。底部はやや大き



第35図 3号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

すぎる復元の可能性がある。全体的に器壁が薄く、口縁部は緩やかに外反する。色は灰黄褐色。12・13は混入品。12は弥生後期壺口縁部で、朝顔状に大きく開く口縁部を呈する。口縁上端部は弱く上方につまみ出し、外面全体にはスリップを施す。内面及び生地の色は黄褐色。13は弥生後期短頸壺。胴部外面下位にはケズリを施し、外面には黒斑あり。色は灰黄色。

14～16は3号住居跡住居床下掘り込み出土。14は精製の土師器丸底壺口縁部。内湾する直立口縁で、内外面はミガキを施す。色は橙褐色。15は短く外折する口縁部を持つ土師器小型甕。色は黄褐色。16は短く外湾する口縁部を持つ土師器甕で、器壁は厚く、口縁端部は面取りする。色は外赤褐色、内赤褐色～灰黄色。

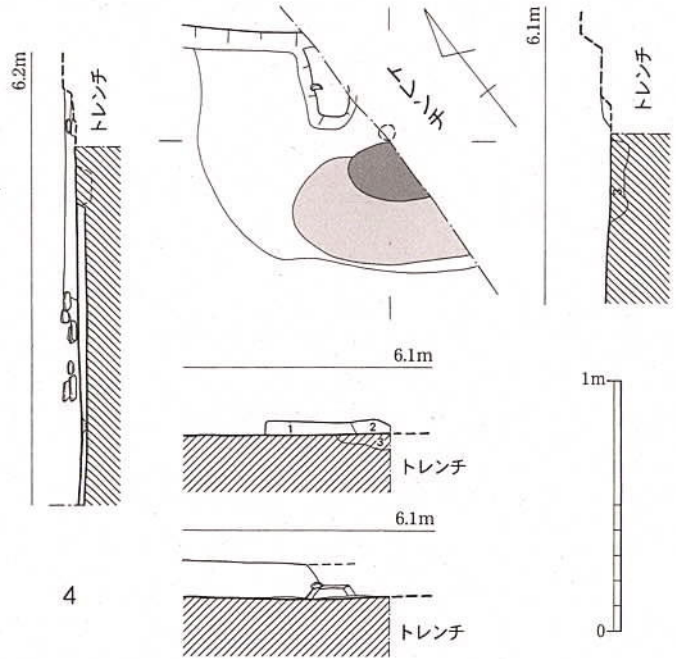
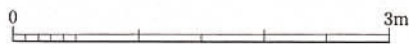
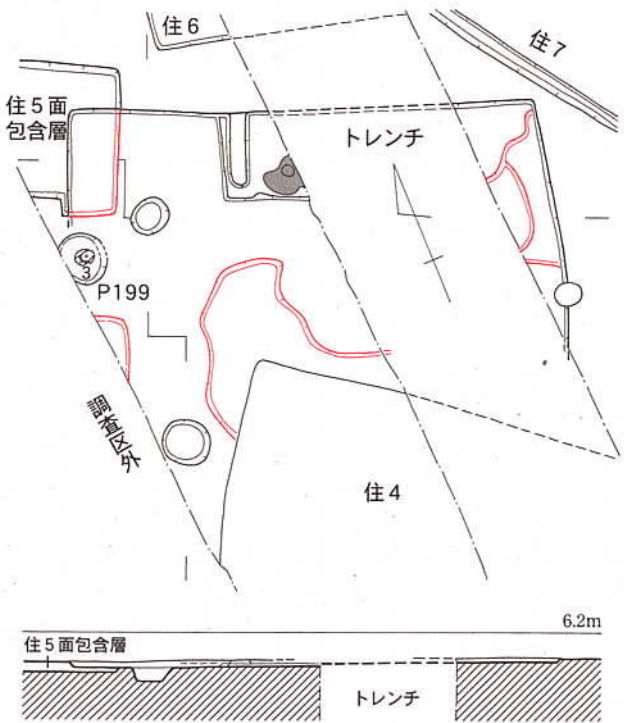
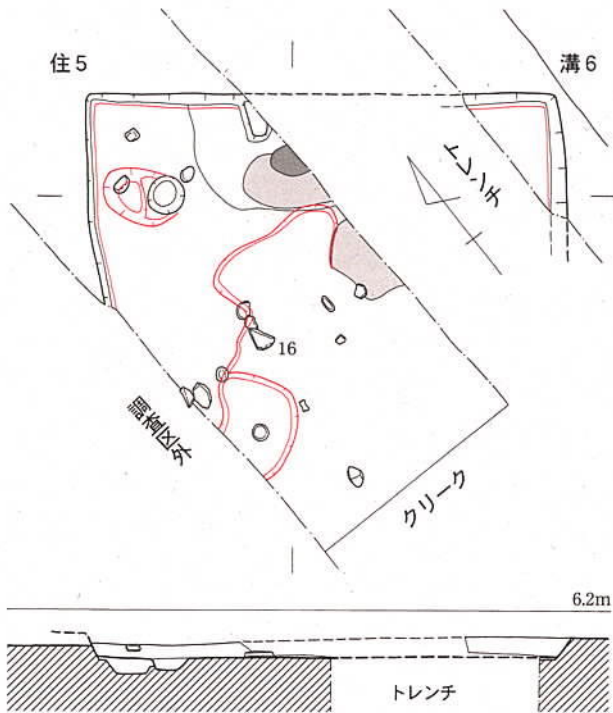
3・9号住居跡付近遺構面出土土器（第35図17～22） 17～19はいずれも径12cm前後のやや小型品となる土師器碗形坏。17は口縁部が内湾せず、そのまま開くもの。色は淡橙色。18は口縁部がやや内湾し、色は橙褐色。19は強く内湾する口縁部で、内外面口縁部～体部中位はミガキを施したものか。色は淡橙色。20は須恵器高坏坏部で、体部中位には鈍い稜とその下に沈線を巡らし、稜と沈線の間には1条の波状文を施す。色は灰色。21は須恵器器台脚部片。上部は3方向の長方形透かし孔、下部は4方向の台形透かし孔を施し、間には2条のナデによる低い突帯を巡らす。下部の台形透かし孔周囲にはヘラ工具で孔を切り取る前に、6条の波状文を上下2つ巡らし、上部透かし孔周囲にも波状文の痕跡がわずかに残る。外面には薄く自然釉が付着し、色は黒灰色。22は弥生後期甕底部。色は黄褐色。

4号竪穴住居跡（図版12・13、第36図）

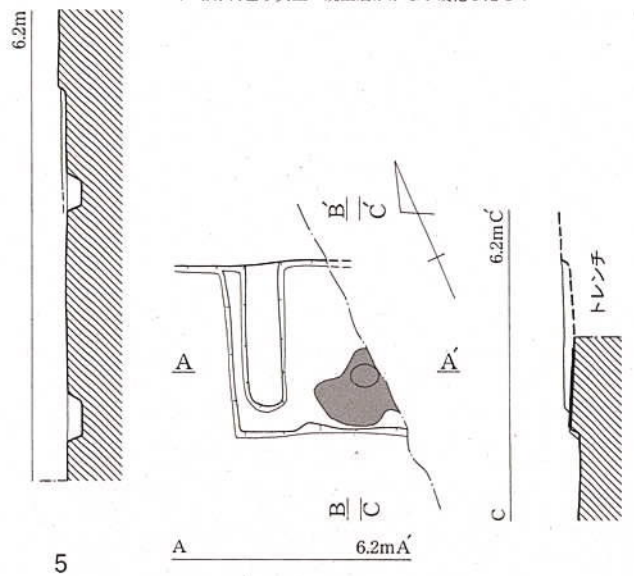
4区南部の西側で検出した。試掘トレンチ、近代のクレークのため大きく削られ、西隅は調査区外となる。主軸は北東－南西で方形プランをとる。北東壁の長さは3.8m、主軸方向は3.5m以上で調査区外に伸びる。壁は状況が良い箇所では深さ15cmほど残り、北東壁中央にはカマドが付く。床面からは北隅にピット1基が検出された。支柱穴の可能性もあるが、深さは9cmである。また中央やや東よりの一部に焼土と炭化物の広がりが見られた。床下掘り込みは不整形で、住居跡の全面にみられる。出土土器から古墳時代後期末に属すると考えられる。

カマド（第36図） 住居跡北東壁の中央部に付く。トレンチのため大部分が削られ、カマド本体は左袖のみ残る。左袖は壁から40cm突出するが、先端部は壊される。残存する右袖先端部から中央20cmに支脚位置が推定され（破線部）、その前面には広い範囲で焼面が認められた。特に支脚推定位置すぐ前面はよく焼けて硬化しており、下層にも影響する。なお検出の段階でカマドの周囲に粘土塊の広がりを確認した（細線で示す）。カマド廃棄時に散乱したカマド構築材と思われる。

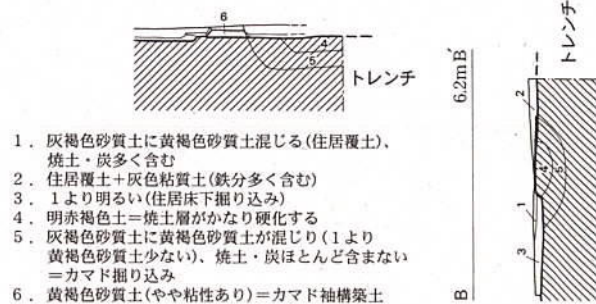
出土土器（第37図1～9） 1～3は4・5号竪穴住居跡の覆土上層出土。1は須恵器坏身。受け部・立ち上がりを持つタイプで、立ち上がりは短く内傾し端部は丸くなる。身はやや深い。底部外面の広い範囲に回転ヘラ削り、他は回転ナデ調整される。2は須恵器平瓶。口縁部は短く外反し、端部は面取りされ上下に伸びる。体部・口縁部の調整は内外面回転ナデ、体部外面上位にカキメが施される。外面全体と頸部内面に降灰が見られる。3は弥生土器の支脚。残存は上部のみで、天井部に径1.7cmの穿孔がある。穿孔は焼成前に指で空けられ、ナデで調整する。体部の内外面にハケメが見られ、一部にハケ工具痕も残る。



1. 黄褐色粘質土60%に灰褐色粘質土40%混じる
2. 黄褐色砂質土に灰褐色砂質土がやや混じる(焼土を少し含む)
3. 暗赤褐色砂質土=焼土層がかなり硬化したもの



5



1. 灰褐色砂質土に黄褐色砂質土混じる(住居覆土、焼土・炭多く含む)
2. 住居覆土+灰色粘質土(鉄分多く含む)
3. 1より明るい(住居床下掘り込み)
4. 明赤褐色土=焼土層がかなり硬化する
5. 灰褐色砂質土に黄褐色砂質土が混じり(1より黄褐色砂質土少ない)、焼土・炭ほとんど含まない=カマド掘り込み
6. 黄褐色砂質土(やや粘性あり)=カマド袖構築土

第36図 4・5号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60、1/30)

4～9は4号竪穴住居跡から出土。うち4・7は床下掘り込み、他は覆土上層の出土である。4は土師器坏身。口縁部が内湾し、内外面に黒漆が塗られる。内面は全面にミガキが行われ、底部付近は太いミガキとなる。外面は体部にミガキとヨコハケが見られ、底部は手持ちヘラケズリで調整する。5は土師器の須恵器模倣坏。受け部の突出は短く、立ち上がりはやや外反する。外面と口縁部内面はヨコナデ、底部内面はナデで仕上げる。6は土師器の小型丸底壺。口縁部が低く直立するタイプで、内面と割れ口に口縁部の接合痕が残る。体部外面にハケのちナデ、口縁部内面に細かいヨコハケが見られる。7は土師器甕。残存は口縁部から体部上位だが、長胴になると思われる。口縁部は短く外反して端部は丸く収める。体部内面にケズリ、外面は板ナデのちヨコナデが行われる。8・9は弥生時代後期の土器。8は素口縁壺の口縁部。体部との接合面が割れ口となり、擬口縁が露出している。口縁部は大きく外反し端部は外方に面取りされる。端部内面がわずかに窪む。内外面全体にハケメが見られ、部分的にハケメの上からヨコナデが行われる。9は鉢の口縁部から体部の破片。全体的に摩滅が進み調整は不明瞭だが、体部外面にハケメがわずかに残り、口縁端部にもヨコナデの跡が見られる。

以上の出土資料の時期にはやや幅があるが、概ね古墳時代後期以降に属するものが主体であり、中でも5・6から古墳時代後期末に位置づけられる。(一瀬)

5号竪穴住居跡 (図版12、第36図)

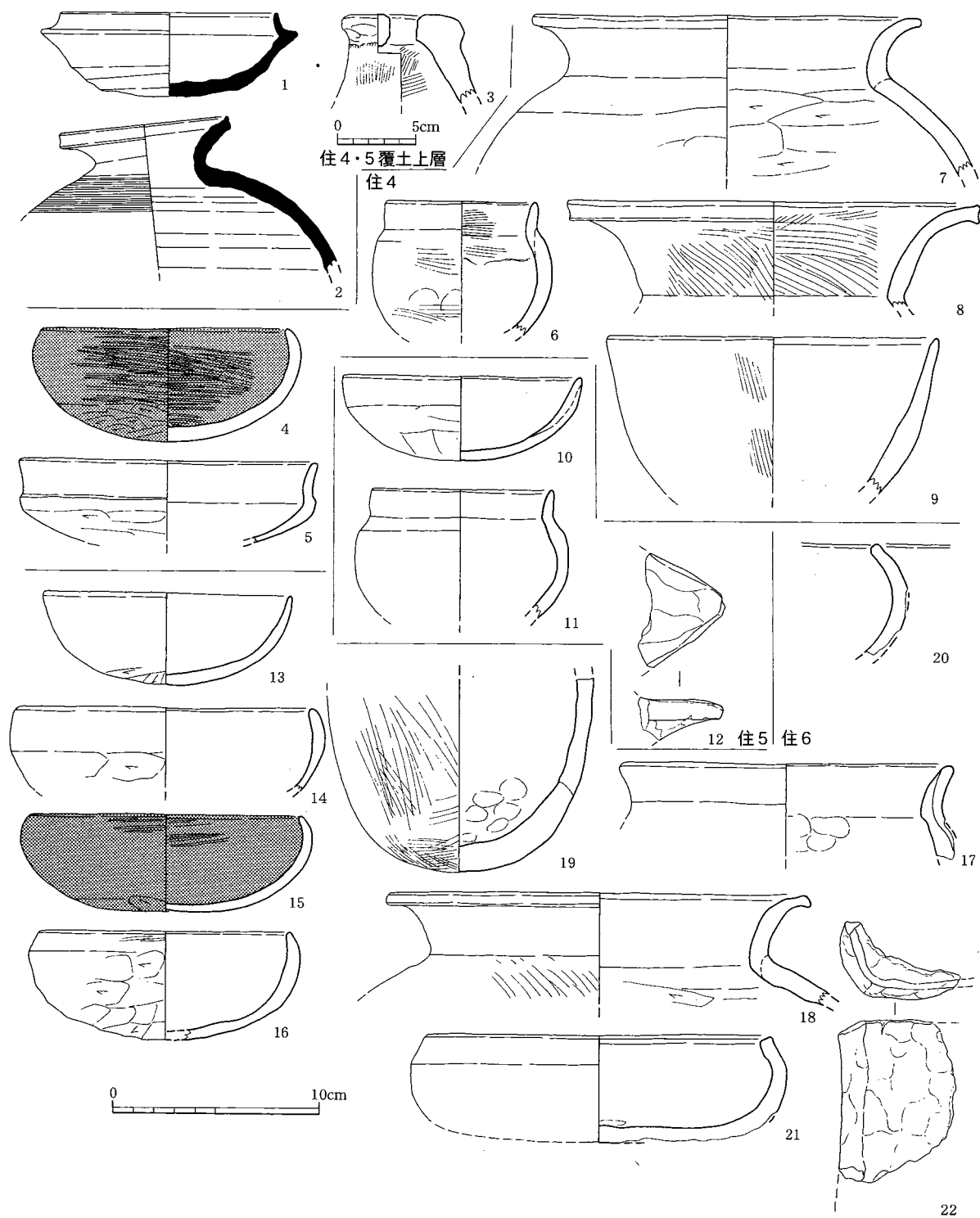
4区北、中央西壁際に位置し、4号住居跡に切られる。また、住居跡北東隅で7号住居跡と近接し、切り合い関係を持つと考えられるが、出土土器から両住居とも古墳時代後期末の住居跡と考えられるため、前後関係は不明である。住居跡北西―南東にかけて試掘トレンチ、当住居南は4号住居跡により大きく壊されており、住居規模は現状で東西390cm×南北355cm以上となる。またカマド以外の床面は2cmほど全体的に下げすぎており、カマド床面の高さが本来の住居床面レベルとなる。

住居北壁中央やや西寄りにカマドを付設し、住居覆土は灰褐色砂質土に黄褐色砂質土が混じる。住居床面ではピットを2基検出し、いずれも深さが浅いものの支柱穴と考えられる。また住居西壁を切るP199からは土師器高坏(第45図3)が出土しており、住居時期の下限を示す土器となる。また住居床面下では3ヶ所の浅い掘り込みを確認した。

また当住居跡西には5号住居跡西包含層が存在する。

カマド(第36図) 住居北壁中央やや西寄りに付設されたカマドで、東半分は試掘トレンチにより壊されている。左袖は壁から58cm突出し、燃焼部奥壁から南に32cmの箇所に30×30cm以上のかかなり硬化した焼面を検出した。奥壁から40cm南で検出した10×8cmの円形の支脚痕跡は、高坏脚部などを支脚に転用した可能性が高く、この支脚痕跡で反転すると燃焼部幅は64cmとなる。また左袖の形態から燃焼部幅が支脚部分と奥壁部分で幅があまり変わらないタイプとなる可能性が高い。4・5層はカマド掘り込みとなる。

出土土器(第37図10～12) 10は皿状を呈する土師器坏で、外面体部中位以下には手持ちヘラケズリの痕跡が残る。色は黄褐色。11は口縁部が短く直立する土師器小型丸底壺で、色は橙褐色。12は弥生後期の鉢の把手か。把手平面形は三角形で、上面はほぼ平坦、下面は緩やかに開く形状となる。当住居跡西包含層出土で、色は黄褐色。



第37図 4～6号竪穴住居跡出土土器実測図（3は1/4、他は1/3）

6号竪穴住居跡（図版13、第38図）

4区北中央やや西寄りに位置し、7号住居跡を切る。住居中央部ほとんどが試掘トレンチにより壊されており、住居規模は南北245cm×東西283cm、深さはトレンチを挟んだ住居東側は西側より2cmほど低くなるが、深さ平均10cmほどの東西に長い、小型の長方形住居となる。西壁中央に突出タイプのカマドを付設し、住居埋土は灰褐色砂質土と黄褐色砂質土が混ざった土と

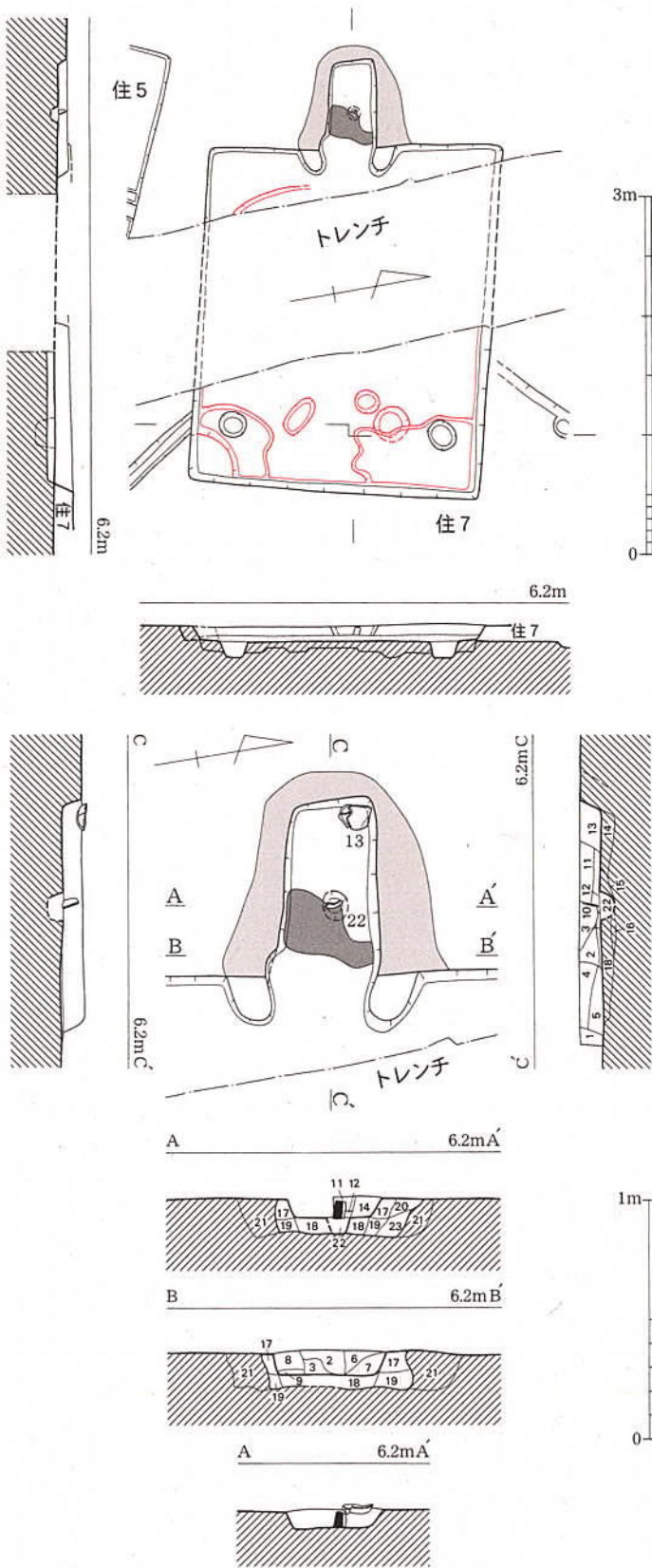
なる。住居床面では、東側床面でピット2基検出し、いずれも支柱穴と考えられる。東側の住居床面下では凹凸が顕著な掘り込みを確認している。

切り合い関係及び出土土器、住居形態から7世紀前半の住居跡となる可能性が高い。

カマド（第38図） 住居西壁中央に付設された突出タイプのカマドで、3・9号住居跡カマドと同じく、カマド掘り方を粘土で充填し壁を構築するタイプとなる。壁から右袖は24cm、左袖は20センチ内向きに突出し、両袖ともカマド掘り方とほぼ対応する。燃焼部は奥壁から44cmの箇所に、奥壁側を粘土で支えた小型の土製支脚（22）を設置し、その手前には20×37cmの範囲でやや硬化する焼面が認められる。燃焼部長さは奥壁から袖先端まで長さ93cm、燃焼部幅は支脚部分で32cm、奥壁部分で28cmを測る、非常に細長い形態の燃焼部となる。またこの土製支脚を設置するに当たっては、10×12cm、深さ6cmの支脚固定ピットで支脚を支えるが、土製支脚は長さが短くほとんど支脚固定ピットに入っていないこと、また21層と支脚固定ピット埋土（22層）は類似すること、後述しているように、カマド充填粘土からカマドの造り直しが認められることから、造り直す前の支脚の固定ピットである可能性が高い（とすると、石製支脚を使用した可能性がある）。カマド右奥隅で土師器碗形坏（13）がカマド床面から浮いた状態で出土した。

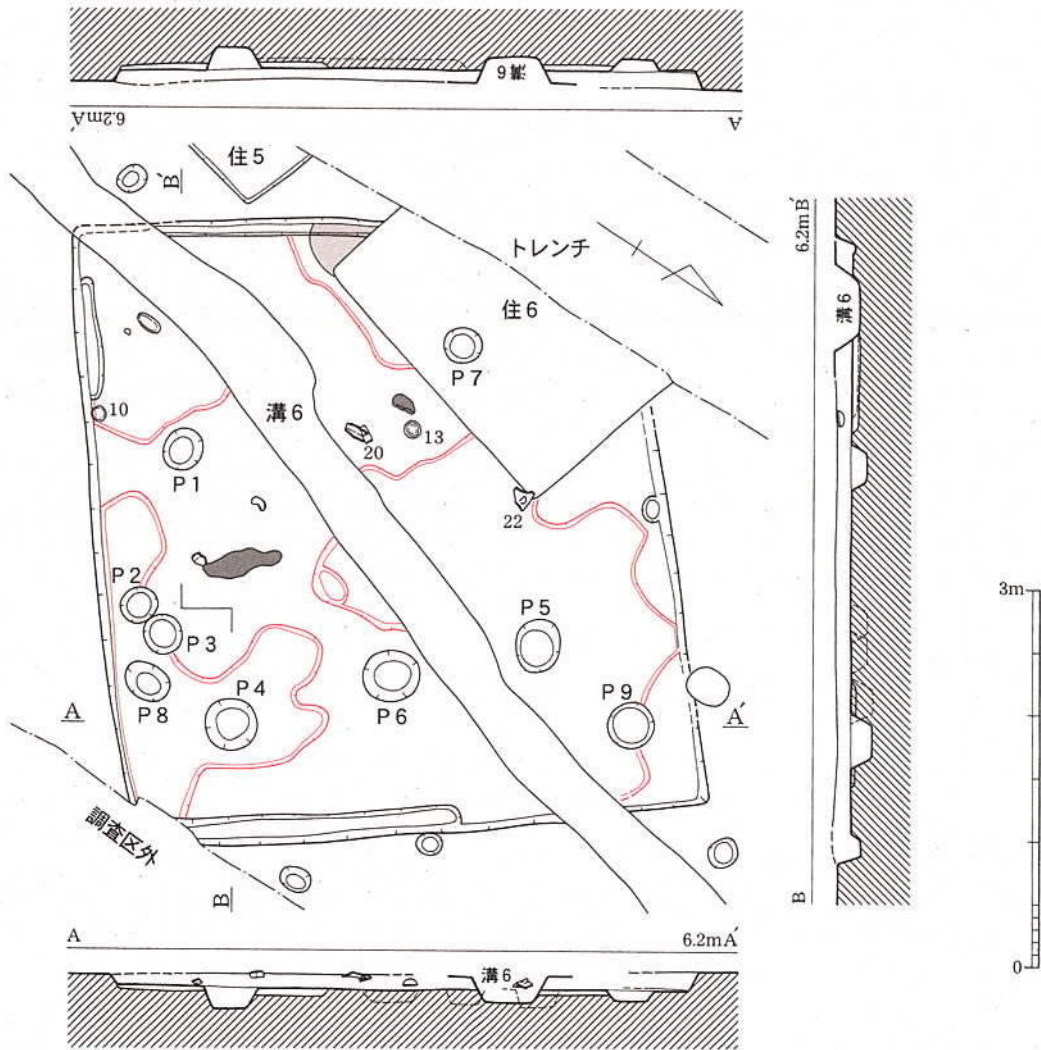
カマド土層では、2・6～9・12・13層はカマド構築土が崩落したもの、3層はカマド使用時の堆積土となる。カマド構築について土層で観察すると、17～20・23層と21層の2つに区別され、21層は当初のカマド掘り方充填粘土（構築土）、17～20・23層はカマドを造り替えた際の（再）構築土と理解できる。3・9号住居跡カマドは、当住居跡カマドのように床面下を大きく掘削せず、構造的な変化が認められる。なお、14～16層は当初か再構築の際の掘り込みかは不明である。

出土土器（図版48、第37図13～21） 13～16は土師器碗形坏である。13は口縁部が内湾せず、そのまま開く形態のもので、底部付近のみ手持ちヘラケズリを施す。色は外黄茶色、内灰黄色。カマド内出土。14は弱く内湾するもので、色は橙褐色。15の内外面は黒塗りを施し、口縁部外面には二次加熱痕が認められる。生地は灰黄茶色を呈する。覆土下層出土。16は深さがあるもので、外面は口縁部近くまで手持ちヘラケズリを施す。色は橙褐色で、カマド内出土。17～19は土師器甕。17は器壁が厚く、外面には二次加熱痕が認められる。色は暗灰黄色を基調とする。カマド充填粘土内出土。18は口縁部が強く外湾するもので、色は灰黄色。19は小型甕胴部～底部で、器壁が厚く、外面には二次加熱痕が認められる。色は暗黄褐色を基調とする。カマド内出土。20・21は強く内湾する低平な土師器鉢。いずれもカマド内出土で、また強い二次加熱により器表がかなり硬化する。形態的には須恵器皿を模した様な形となるが、このような鉢の出土は当遺跡においてはこの2点のみであるため、カマドと何らかの関係があるものと考えられる。20の色は暗灰色。21は口径16.6cmを測り、色は灰黄褐色。22は当住居跡カマド支脚として使用されたカマド土製支脚である。表面と左側面のみ形態となるため、再利用品の可能性がある。上端部と左端部は生きており、内面は支え用粘土と接していたため、器表は荒れ、わずかにナデ上げの痕跡が残る。外面全体には二次加熱痕が認められる。胎土にはスサを含み、色は灰黄色。



1. 灰褐色砂質土+黄褐色砂質土(住居覆土)に焼土・炭少量混じる
 2. 黄白色粘土に黄褐色砂質土30%混じる=カマド構築土が崩落したもの
 3. 2+焼土非常に多く混じる=カマド使用時の堆積土が主体
 4. 明灰黄褐色粘質土に焼土・炭少量混じる
 5. 灰黄褐色砂質土に焼土・炭少量混じる
 6. 黄褐色砂質土に焼土多く含む
 7. 6より暗い
 8. 灰砂質土に焼土少量混じる
 9. 8より暗く、焼土多く混じる
 10. 灰褐色粘質砂に焼土少量混じる
 11. 灰黄色粘質砂に焼土少量混じる
 12. 11より炭多く含む
 13. 黄褐色砂質土に焼土少量混じる(7より砂性強い)
 14. 暗褐色粘質砂に焼土・炭含む
 15. 14よりかなり軟らかい
 16. 灰黄褐色粘質土
 17. 暗灰白色粘質土に焼土多く含む
 18. 灰黄褐色粘質土に焼土多く含む(17より焼土少ない)
 19. 暗灰白色粘質土に焼土少量混じる
 20. 黄白色粘質土に焼土多く混じる
 21. 黄白色粘質土に焼土少量混じる=カマド当初構築土
 22. 灰白色粘土=支脚固定ビット
 23. 灰白色粘質土に焼土に暗黄褐色砂質土ブロック含む=カマド再構築土
- カマド構築土が崩落したもの
- カマド構築土が崩落したもの
- カマド再構築土?
- (当初のものである可能性あり)
- カマド再構築土

第38図 6号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60、1/30)

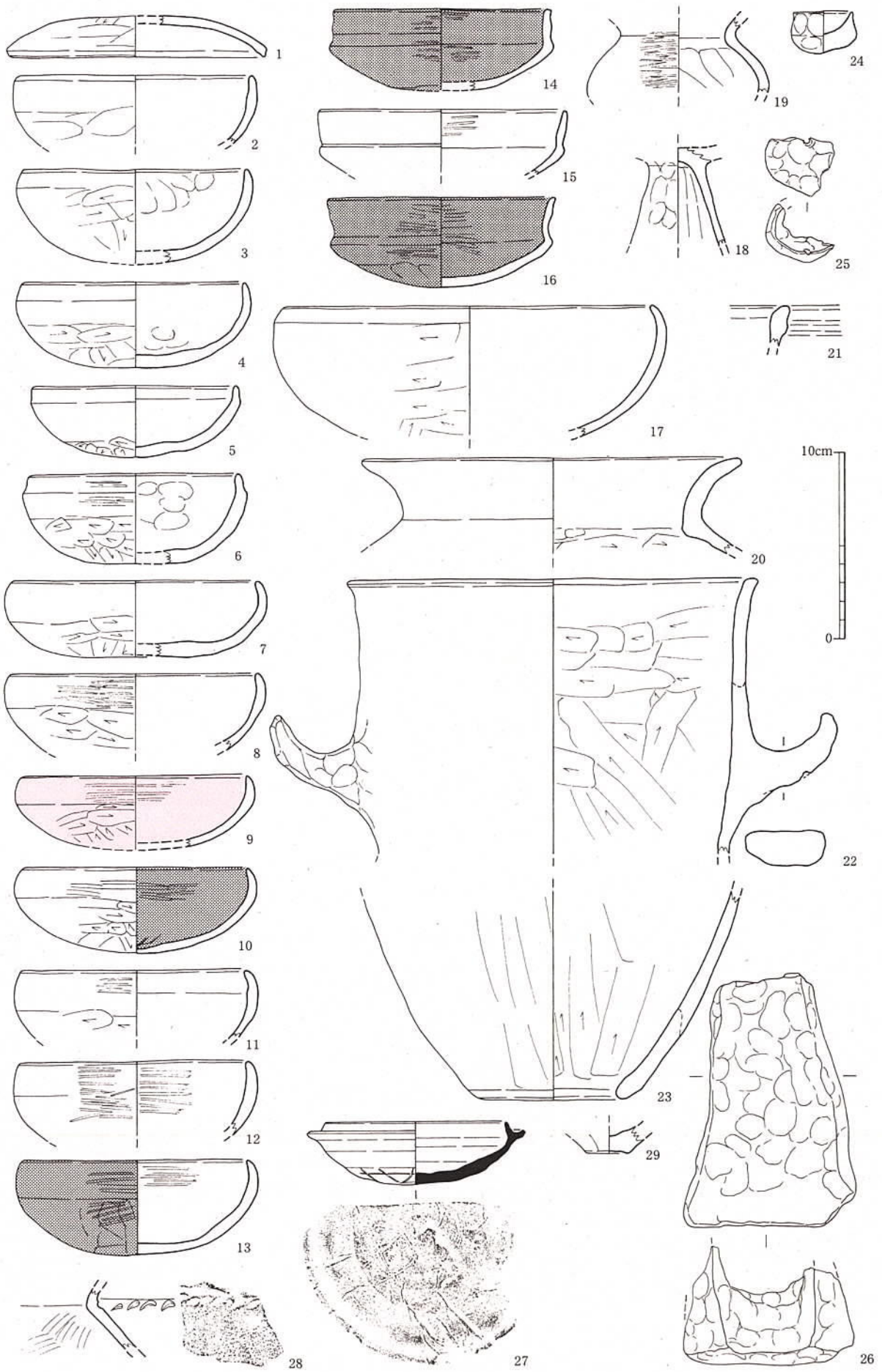


第39図 7号竪穴住居跡実測図 (1/60)

7号竪穴住居跡 (図版14、第39図)

4区北中央に位置し、6号住居跡・6号溝に切られる。当住居跡南に位置する5号住居跡北東隅壁と近接し、切り合い関係を持つと考えられるが、両住居とも古墳時代後期末の住居跡と考えられることから切り合い関係は不明である。住居東隅は調査区外となるものの、住居規模は北西—南東460cm×南西—北東490cm、深さ10cmのやや長軸側が長い大型の方形住居となる。住居南壁中央では50×40cmの薄い焼面を検出した。焼面上部の土は焼土・炭の混じりが少なく、袖の痕跡も確認できない。また、東壁中央やや北寄りから78cm手前に65×20cmを測るかなり硬化した焼面を検出した。焼面の硬化度からするとカマド焼面の可能性があるが、壁から焼面までの距離があること、焼面範囲も長すぎることから、カマドではないと判断した。なお、住居中央やや南西寄りのトーンで示したものは、焼土塊である。以上のことから、当住居跡カマドは南壁中央部に存在する可能性が高いと判断した。

住居北・東・南壁には深さ7cm前後の周壁溝を3ヶ所検出した。住居床面ではピットを8基検出し、P1・4・5・7が深さ・位置から支柱穴になる。また当住居跡からは比較的多く土



第40图 7号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/3)

器を検出したものの、ほとんどが床面から浮いて出土した。床面下では浅い掘り込みを4ヶ所確認した。住居埋土は灰褐色砂質土40%と黄褐色砂質土が60%混ざった土が主体となる。

出土土器(第48図) 1は土師器坏蓋。口縁端部はナデにより窪み、天井部外面には手持ちヘラケズリを施すか。色は橙褐色。このような形態の坏蓋は当遺跡ではこの1点のみ出土であるため、当初土師器皿とも考えたが、口縁部がやや肥厚し、ナデにより面取りすることから蓋の可能性が強いと判断した。2~13は土師器碗形坏。2~4はやや内湾気味の直立口縁、5・6は口縁部外面が強い横ナデにより窪み、7~13は弱く内湾する口縁部を持つ。3は口縁部付近まで手持ちヘラケズリを施す。3・4は外面底部付近に黒斑が認められ、胎土には赤色粒多く含む。いずれも色は橙褐色。5は口径11.2cmを測る小型品で、底部付近のみヘラケズリを施したもの。色は黄橙色。6の焼成は甘く、色は淡桃色を呈する。7・8の色は橙褐色を呈する。9の内外面にはスリップを薄く塗布する。P4出土。10・13は完形品で、10の内面、13の外面は黒塗りをを行う。11の口縁部内面は横ナデにより窪む。10~13の色・生地は橙褐色を基調とする。14~16は土師器模倣坏で、いずれも底部と口縁部との境の稜は鈍く、口縁部形態については14・15は直立気味、16は弱く外反する。14・16は内外面に黒塗りをを行う。色・生地は14灰黄色、15橙褐色、16灰白色。17は碗状を呈する土師器鉢。外面には二次加熱痕が認められる。色は白黄褐色~淡赤褐色。

18は土師器高坏脚部上部で、坏底部が一部残存する。色は黄褐色。19は土師器小型丸底壺頸部~胴部。胴部内面はナデの稜が良く残る。色は橙褐色。20は土師器甕口縁部。内面の口縁部と頸部との境の稜は明瞭で、色は灰黄褐色。21は土師器甕口縁部。外面には黒斑が認められる。色は橙褐色。22・23は土師器甕。22の扁平な把手下部には支え用の穴と考えられる刺突孔が認められる。内外面とも黒化が認められるが、黒化部分は二次加熱により色が薄くなる箇所も存在する。色は灰黄茶色。23は土師器甕底部。外面は板ナデのちナデを施す。色は橙褐色。24は土師器手捏ね土器。色は黄褐色~淡灰色。25は鈴状土製品。左端は欠損するものの、右端はヘラ切りを行い、上端に外→内の穿孔を施す。色は黄褐色。なお、上端が擬口縁となるのであれば、鈴となるため、接合面での穿孔の意味は不明であるものの、鈴状土製品として報告したい。26はほぼ完形の土製支脚で、横断面が「コ」の字形を呈する。高さ13.6cm、幅9cm、厚さ6.5cmを測り、外面は指押さえ痕が認められ、内面はカマド支脚として使用した際に支え用粘土と接していたことから、器表は荒れ、ナデ上げ痕がわずかに残る。胎土はスサを含むもので、色は灰黄色。右側面を中心に二次加熱痕が認められることから、実際に支脚として使用されたもの。

27は須恵器坏身。口縁端部はナデで面取りし、底部には「U」字に「×」を重ねた形態のヘラ記号を施す。底部内面には当て具痕が残る。色は灰色。28・29は混入品。28は弥生後期壺頸部。頸部外面にはハケ状工具の角で刺突された刺突文を密に巡らす。色は黄褐色。29は弥生後期小型壺か鉢底部。色は暗茶褐色。

8号竪穴住居跡(図版14、第41図)

4区北西隅に位置し、住居西側1/3ほどが調査区外となる。住居規模は現状で東西330cm以上×南北290cm、深さ18cmを測る。なお、北壁中央部に付設されたと考えられるカマドで反転すると、東西幅390cmほどの東西に長い長方形住居となる。住居床面ではピットを4基検出し、

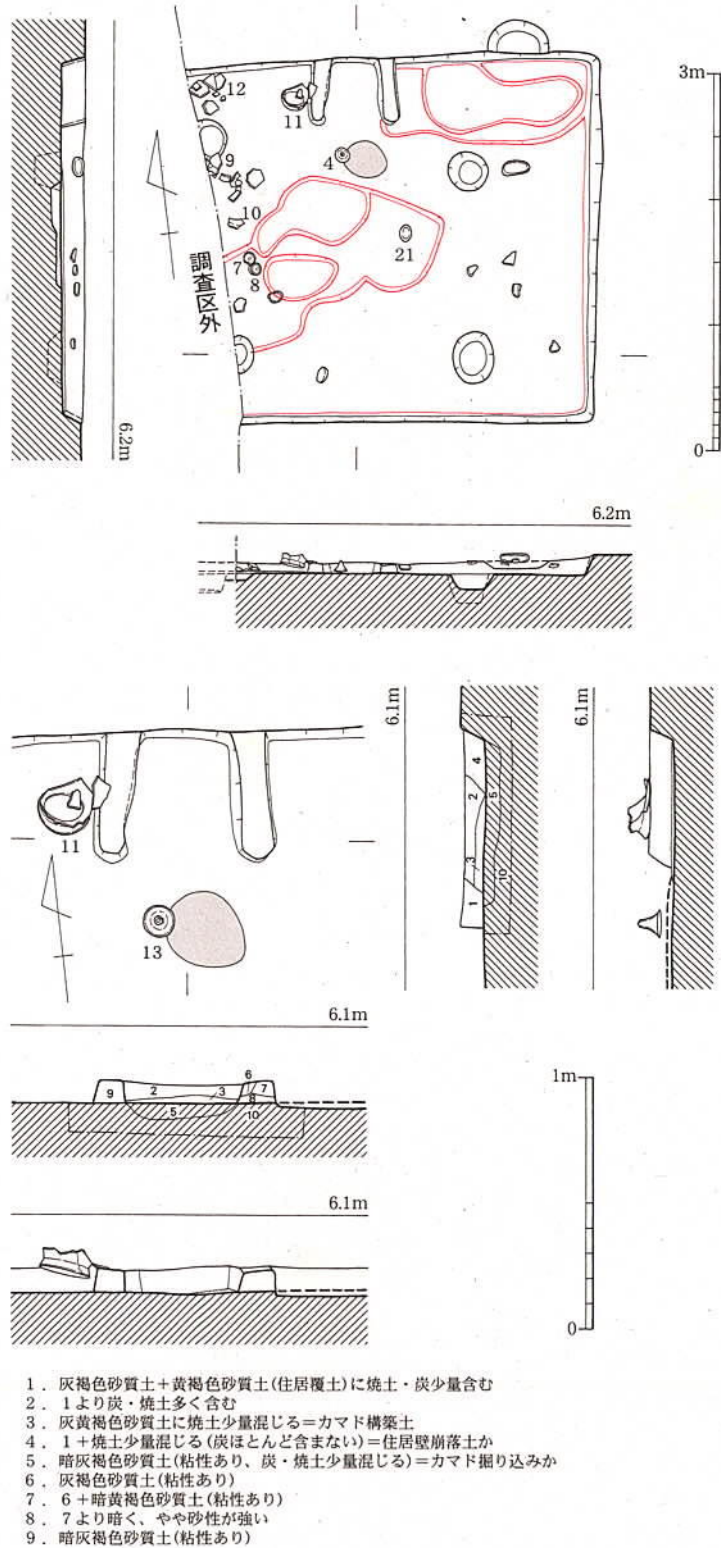
そのいずれもが主柱穴となる。また住居西側では床面～覆土中で土器がまとまって出土し（7～10・12）、住居床面下では浅い掘り込みを2ヶ所確認した。

なお、覆土下層から凹石（第101図17）、覆土中から磨石（第102図21）、当住居付近遺構面から凹石2点（第101・102図18・20）が出土した。

出土土器から古墳時代後期末の住居跡と考えられる。

カマド（第41図） 住居北壁中央に付設されたと考えられるカマドである。両袖とも壁から52cmほど突出し、開き気味の袖となる。燃焼部奥壁から南に62cmの位置に、カマドから掻き出したものと考えられる径30cmの薄い焼土の広がりを検出したが、カマド燃焼部内には焼面は形成されていない。燃焼部幅は断面図作成箇所で幅44cm、奥壁で幅32cmを測り、左袖部は一部オーバーハングする。カマド前の焼土の広がりで土師器高坏脚部（13）・左袖部左及び上で土師器甕（11）を検出したことから、カマドをこのレベルまで壊して住居を廃絶した可能性が高い。またカマド南側は2cmほど下げすぎてしまっており、カマド長軸方向見通し図で示した破線は本来の床面レベルを示し、本来のカマド床面は奥壁側に向かって緩やかに下がる。カマド埋土は3層がカマド構築土が崩落したものとなる。

出土土器（図版49・50、第42図1～17） 8～13はカマド左袖横か



第41図 8号竪穴住居跡、カマド実測図（1/60、1/30）

ら出土。1・2は土師器模倣坏で、外傾する短い口縁部を持つ。1はカマド内出土で、外面底部には黒斑が認められる。色は外灰黄褐色、内橙褐色。2の色は橙褐色。3は土師器高坏で、口縁部と底部との境の稜は鈍い。色は黄褐色。4・5は土師器高坏脚部。4は反り上がる脚裾部で、色は橙褐色。5は坏底部が残る。色は暗茶褐色。6～8は土師器小型丸底壺頸部～胴部片。いずれも胴部中位が胴部最大径となり、いずれも最大径は約8cmを測る。6の色は黄褐色。7・8の外面には黒斑が認められ、8は外面に二次加熱痕も認められる。7・8の色は灰黄褐色～黄褐色を呈する。

9～12は土師器甕である。9はナデ肩の胴部に対して、外傾する長い口縁部を持ち、色は橙茶色～灰黄褐色。10は9と比べ肩が張るもので、外面には黒斑が認められる。色は外暗黄土色、内暗茶褐色。11は口縁端部が強く外反する口縁部を持ち、外面胴部中位には黒斑が認められる。色は外灰黄褐色～黒色、内橙褐色～灰黄色。12は胴部中位～底部片が残存し、外面には黒斑が認められ、色は外黄橙色、内灰褐色。13は似非須恵土師器高坏脚部で、外面全体及び内面裾部付近にスリップを施したもの。外面上部及び内面上部には絞り痕が残り、坏部との接合部には刻みを施す。胎土は精良で、内面及び生地は橙褐色。15は弥生後期高坏坏底部。粘土充填法痕が良く残り、脚部との接合部分には刻みが認められる。色は橙褐色～灰色。混入品。

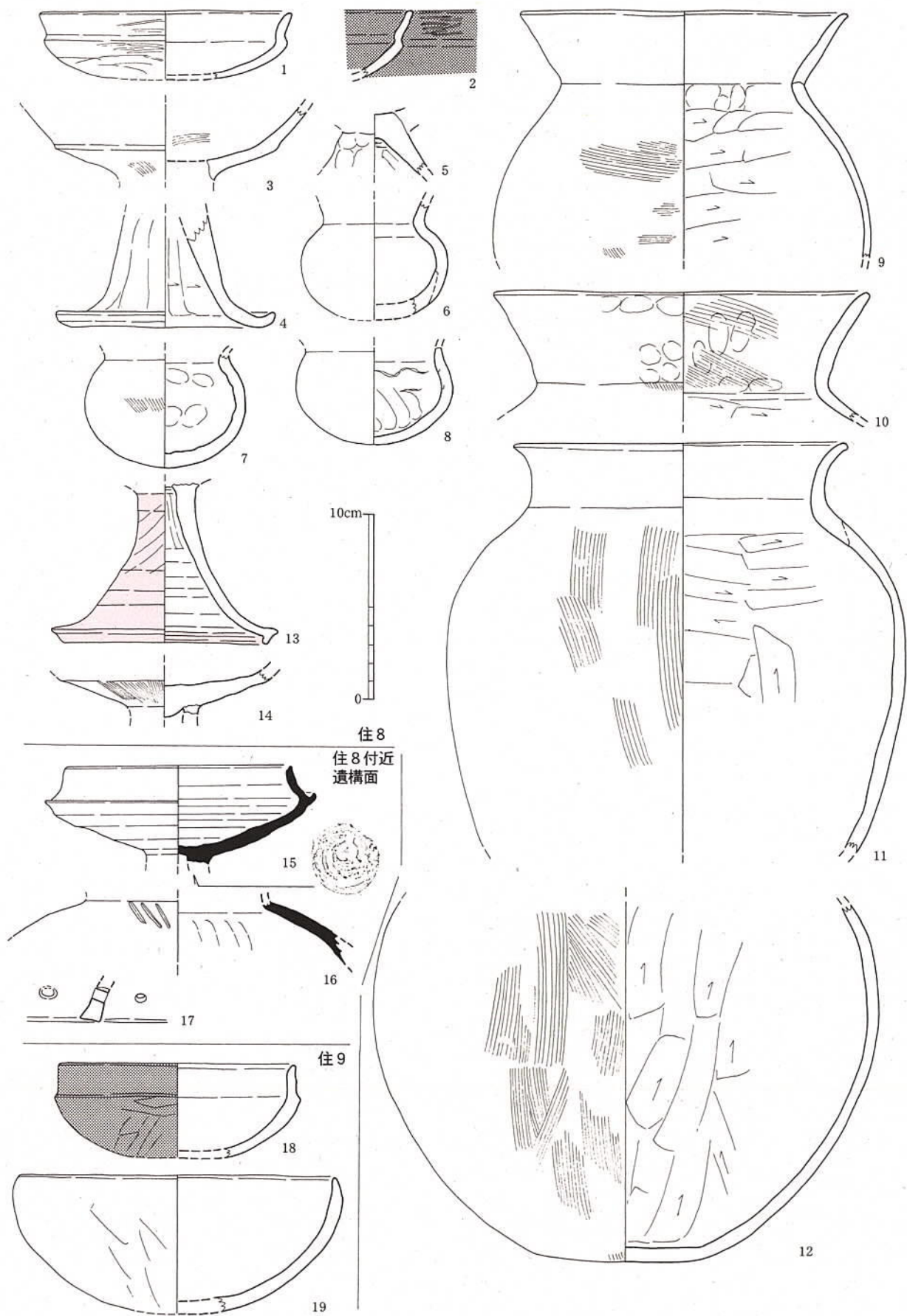
15～17は当住居跡付近遺構面出土土器である。15は完形の須恵器高坏坏部で、脚部との接合部には当て具による刻みを施す。坏内面底部にも当て具痕が残る。色は灰色。16は須恵器壺肩部で、3本線のヘラ記号を施したもの。色は灰色。17は土師器であるが、下端面が生きているため、器種は不明である。外→内に生乾き状態で穿孔を施す。色は黄褐色。

9号竪穴住居跡（第34図）

4区北、中央南東寄りに位置し、3号住居跡に切られる。住居北東側1/3は調査区外となり、住居中央部は3号住居跡により大きく壊される。3号住居跡で先述しているが、3・9号住居跡を一つの住居跡として調査したため、出土遺物も混ざってしまった。住居規模は南西—北東365cm×南東—北西400cm、深さ10cmを測る、南東—北西にやや長い方形住居となる。住居南壁中央に突出カマドを付設し、住居埋土は灰褐色粗砂となる。住居床面ではピットを2基検出し（P3・4）、深さは浅いが2基とも支柱穴になると考えられる。住居床面下ほぼ全体で浅い掘り込みを確認した（赤線）。

カマド（第34図） 住居南壁中央に付設されたカマドで、3号住居跡カマドとほぼ重複し、また3号住居跡カマドが大きく掘り込むタイプのカマドであったため、袖を含めた大半が壊されている。わずかに残った燃焼部西・北壁から、3号住居跡カマドと比べ、突出度が弱いカマドである。燃焼部床面には焼土・炭が広がるものの、硬化面は形成していない。燃焼部奥壁は掘り方に粘土を充填して壁を構築するもので、燃焼部の奥行は25cm程度、幅は50cm程度となるものか。カマド埋土には3号住居跡覆土が混じることから、9号住居跡を建て替え、3号住居跡を造ったと推測できる。燃焼部床面には浅いカマド掘り込みが存在する。

出土土器（図版50、第42図18・19） 18は土師器模倣坏で、短く直立する口縁部を持つ。口縁部と体部との稜は痕跡的で、外面には黒塗りを施す。生地は橙褐色。19は椀状を呈する土師器大型鉢。色は橙褐色。



第42图 8・9号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/3)

これ以外にも3号住居跡出土土器の中で、当住居跡に属する可能性がある土器を報告しているので、参照されたい。

(3) 溝

3号溝 (第43図)

4区南西隅付近に位置する北西—南東溝である。長さ330cm、幅は南東で60cm程、北西で40cm程とほぼ直線的な平面形態で、北西側が幅狭くなる。深さは南東隅で23cm、中央で25cm、北西側の最も深い一段下がった箇所では26cmを測る。溝埋土は1・2層とも類似しており、埋没が短期間であった可能性が高い。出土土器から古墳時代後期末の溝と判断される。

出土土器 (第44図1～3) 1は生焼けの須恵器坏身。底部外面の一部はケズリのちナデで調整する。色は外茶褐色、内灰黄褐色。2・3は混入品である。2は弥生中期甕口縁部。色は黄褐色。3は弥生後期大型甕頸部。頸部外面には三角突帯を貼り付け、胎土には非常に多量の細粒を含む。色は茶褐色。

4号溝 (第43図)

4区南中央南寄りに位置する北西—南東溝である。長さ403cm、幅は50cm前後、深さは北西部で9cm、中央で10cm、南東部で11cmを測り、北西→南東方向で緩やかに傾斜するほぼ直線的な溝となる。埋土は2号住居跡埋土と類似し、2号住居跡主軸と平行することから2号住居跡と関係する溝となる可能性が高い(住居外排水溝か)。

出土土器から弥生時代後期終末～古墳時代前期の溝と考えられる。

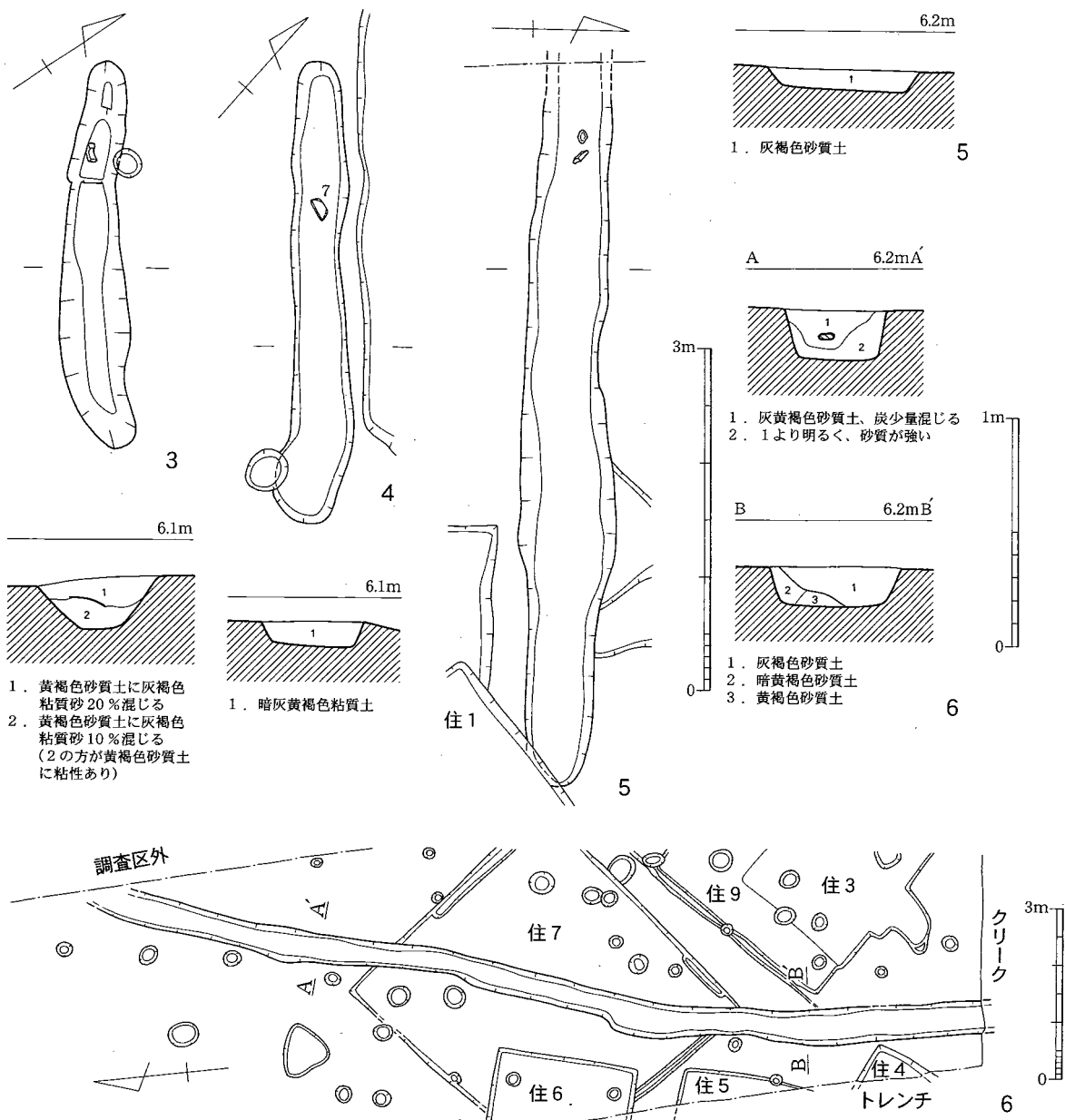
出土土器 (第44図4～7) 4は弥生後期壺口縁部。口縁端部に工具による浅い刻みを施す。色は灰黄褐色。5・6は弥生後期甕口縁部。5の色は灰黄褐色。6の口縁端部付近には黒斑が認められる。胎土には細粒を非常に多く含み、色は白黄褐色～黄褐色。7は弥生後期大型甕口縁部。口縁端部には工具による浅い刻みを密に施す。胎土には細粒を非常に多く含み、色は茶褐色を呈する。

5号溝 (第43図)

4区南、北端付近に位置する東西溝で、東側が1号住居跡に切られ、西側は調査区外となる。溝規模は長さ630cm以上となるが、溝東側の形態から、溝東端は現状に近い位置となる可能性が高い。幅は70～85cm前後、深さは西側で11cm、中央で9cm、東側で3cmを測り、東→西方向に傾斜するほぼ直線的な溝となる。埋土は灰褐色砂質土。

切り合い関係及び出土土器から弥生時代中期～後期の溝と考えられる。

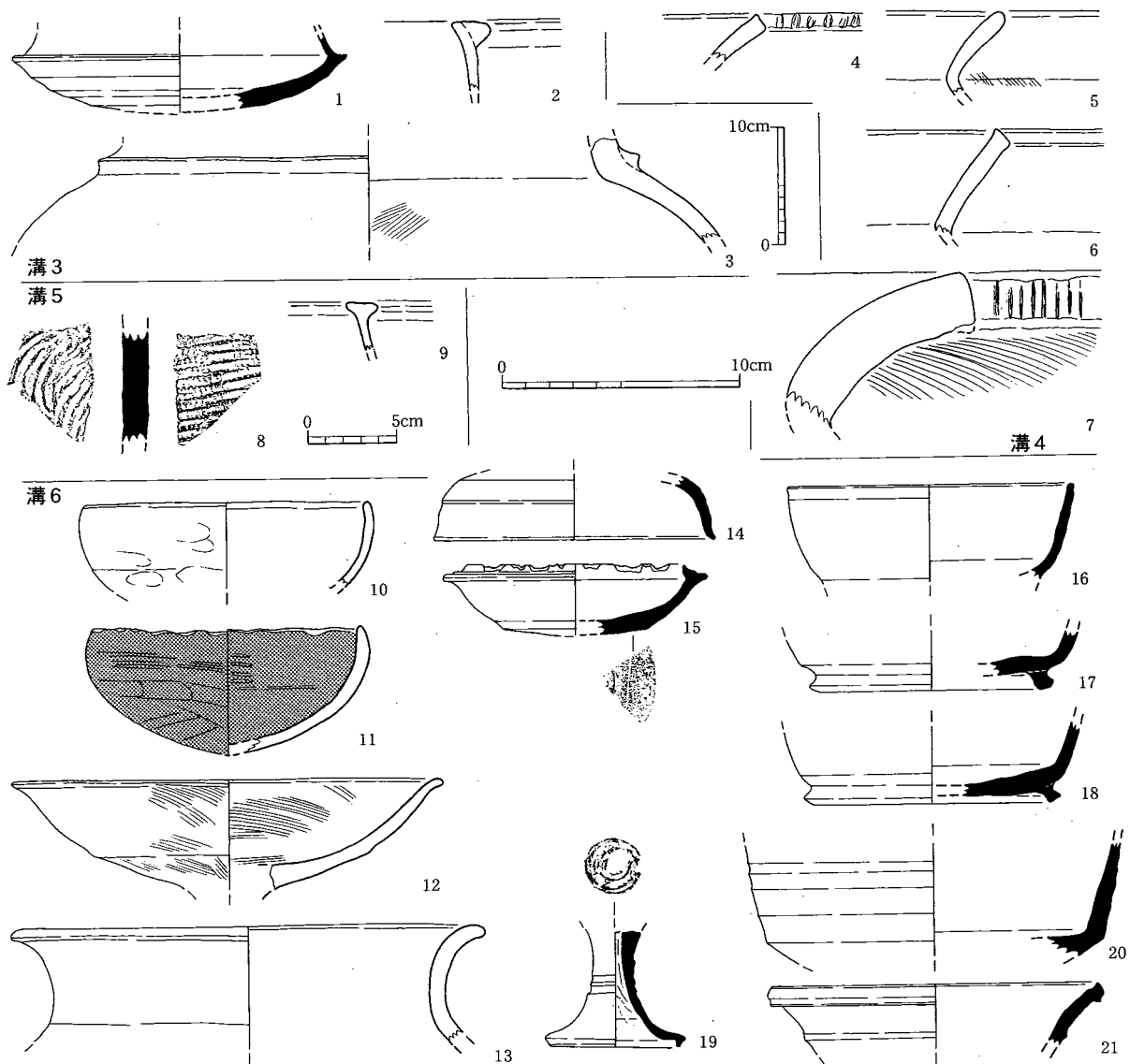
出土土器 (第44図8・9) 8は須恵器甕胴部片。外面には1格子が2cm×3cmの長方形となる格子目タタキ、内面には当て具痕が残る。色は茶褐色。混入品。9は弥生中期鋤先口縁甕の口縁部。色は灰黄褐色。



第43図 3～6号溝・土層実測図 (1/60、1/30、1/120)

6号溝 (第43図)

4区北を南北に縦断する溝で、7号住居跡を切る。また4号住居跡北東隅と近接するため、切り合い関係を持つと考えられるが、出土土器から当溝の方が新しい。当溝は、北側では北北東寄りであったものが、7号住居跡と切り合う部分で南方向となり、クリークに切られる箇所で溝が終了し、クリーク南側まで延びない。溝の規模は長さ15.7m以上、幅は50～60cm前後、深さは北側で18cm、A-A'断面図作成箇所で22cm、中央部で12cm、B-B'断面図作成箇所で17cm、南端で9cmと凹凸のある溝床面となるが、北方向が相対的に深さがあることから、南→北に流下した溝となる。土層図のA-A'部分では、2層の存在により水が流れた溝として認められ、B-B'では1と2・3層という大きく2つの堆積に分けることができる。また、溝

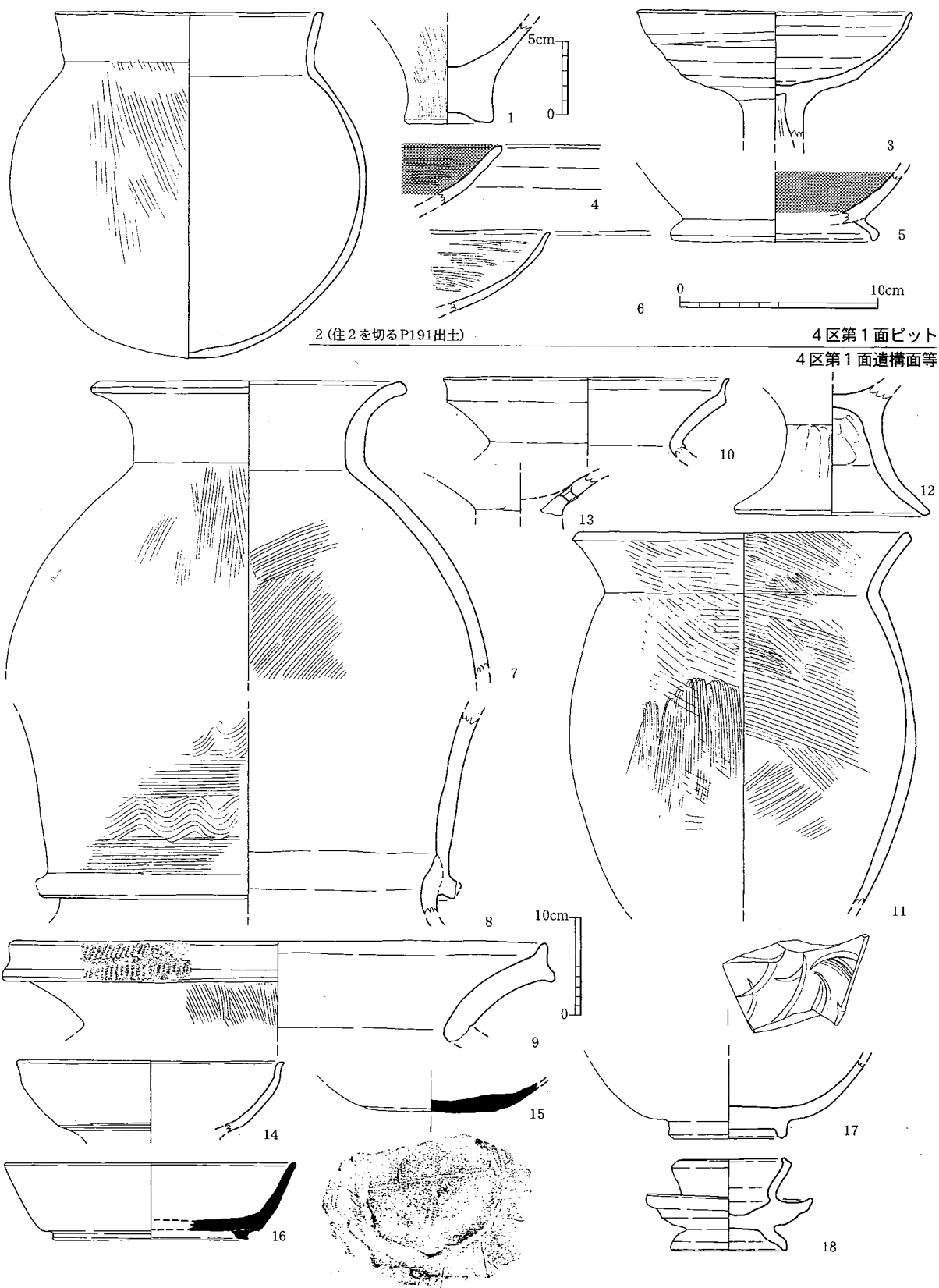


第44図 3～6号溝出土土器実測図（2・9は1/4、3は1/6、他は1/3）

方向が北側で北北東に振れる理由は、地形に沿って掘削されたものと考えられ、6号住居跡南壁と当溝が平行することは注目される。

出土土器から掘削時期は不明であるが、7世紀末に埋没した溝と考えられる。

出土土器（第44図10～21）10・11は土師器碗形坏である。10の色は橙褐色。11の口縁端部は波状に浅く打ち欠き後、工具により平滑に仕上げたもの。内外面には黒塗りを施す。生地は灰黄色。12は浅い土師器高坏坏部。口縁部と底部との境には弱い稜状の屈曲部を持つ。焼成はやや甘く、色は橙褐色。13は強く外反する土師器甕口縁部。色は黄橙色。14は小型の須恵器坏蓋。口縁端部は短く外反し、天井部と口縁部との境にはナデによる浅い窪みが施されたものか。色は灰色。15は受部の立ち上がりが非常に短い、小型の須恵器坏身で、口縁端部は打ち欠きされたもの。外面底部にはヘラ記号が認められる。色は暗灰色。16～18は高台付須恵器坏身。17は短く踏ん張る形態の高台部で、胎土はやや粗い。18は外下方に踏ん張る高台部。色は16・17が



2 (住2を切るP191出土)

4区第1面ピット
4区第1面遺構面等

第45図 4区第1面ピット・遺構面等出土土器実測図 (1は1/4、9は1/6、他は1/3)

灰色、18が暗灰色。19は生焼けの小型の須恵器高坏脚部。裾端部内面はナデにより窪み、端部下端面は下方につまみ出した形態のもの。脚部中位には一部3条の工具による2条の浅い沈線を施し、坏部との接合部には浅い刻みを施す。色は灰黄褐色。八女市古窯跡群塚ヶ谷4号窯跡産の資料である。20は須恵器壺下部片。胎土は細粒を多く含み、色は灰色。21は小型の須恵器壺口縁部。口縁端部外面及び口縁部外面中位にはナデによる突帯を巡らす。内面には自然釉が薄く付着し、色は灰色。

(4) ピット・遺構面等出土土器

ピット出土土器（図版50、第45図1～6）

1は上げ底・厚底の弥生中期甕底部。色は灰黄色～灰黄褐色。P190出土。2は在地系土師器甕で、80%ほど残存するもの。ほぼ直立する口縁部に丸い胴部が付く形態で、内外面には二次加熱痕が認められる。色は黄褐色～赤褐色～桃褐色。2号住居跡を切るP191出土。3は土師器高坏坏部で、坏部外面下位には回転ヘラケズリ痕が残る。色は黄橙色。P199出土。4・5はいずれも内面のみ黒化させる黒色土器A類。4の色は外白黄茶色。P179出土。5はやや長めで、端部が内側に屈曲する高台部を持ち、色は白黄褐色。P155出土。6は瓦器碗で、色は灰色。P187出土。

遺構面等出土土器（図版50、第45図7～18）

7は長胴の在地系古式土師器壺で、口縁部は端部を丸く収め、強く外反する。色は外黄褐色～橙褐色、内灰黄色。8は土師器二重口縁壺か。やや外傾する口縁部は長く、外面には横方向の櫛描文ののち7条ほどの波状文を上下に施し、頸部との境には突帯を巡らす。色は黄褐色。9は弥生後期大型甕口縁部。口縁端部は上下につまみ出し、上端面には工具による刻みを密に施す。胎土には細粒を多量に含み、色は茶褐色。10は中型の複合口縁壺口縁部。口縁端部を上方に拡張させたもので、肥後地域の白川流域で顕著に出土する「白川水系型」の影響を受けたもの。断面部分にも二次加熱痕が認められるため、破損後に火を受けたことが分かる。色は灰黄色～灰色。11は在地系土師器長胴甕。外面には左上がりのタタキ痕が明瞭に残り、胴部中位以下はタタキのちハケ状工具による板ナデを施す。外面には黒斑及びススが認められ、色は外灰茶褐色、内灰黄色。12は弥生後期高坏脚部。脚部外面にはヘラナデを施す。色は外黄橙色、内暗灰黄色。13は弥生後期高坏坏部下位片と考えられるが、外→内に生乾きの際の穿孔が認められるため、器種は断定できない。内面は剥離し、色は橙褐色。14は生焼けの須恵器高坏坏部で、下部にはカキ目を施したものの。色は灰黄褐色。15は須恵器坏身底部で、底部外面に「×」のヘラ記号を施す。色は灰色。16は低平な高台を持つ須恵器坏身で、色は紫灰色。17は龍泉窯系青磁で、大宰府分類碗I-2a類。器壁は厚く、特に底部は肉厚である。外面は丁寧なヘラケズリのち半透明の黄色味を帯びた緑色の釉を施釉し、豊付～高台内は露胎となる。内面には片彫蓮花文を施す。胎土は緻密で灰色のもの。18は近世末期～近代の陶製灯火具。胎土はやや粗く、色は黄橙色。

5. 4区第2面の検出遺構と遺物

(1) 概要

4区第2面は、第1面と同じく北・中・南の高まりに遺構が分布する。高まり間で検出した落ち3ヶ所はいずれも湧水が激しいため、底まで調査できなかったが、傾斜からさほど深くない落ちとなる。検出された遺構は、竪穴住居跡9棟・土坑8基・溝1条・木棺墓1基・甕棺墓2基・ピット多数である。当区北では第1面で検出できなかった古墳時代後期の竪穴住居跡等と弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居跡等が重複して存在する。当区中央では東西幅5mほどの狭小な微高地に、弥生時代後期～古墳時代前期の土坑群が集中して分布する。当区南では第1面で掘り残した遺構と、南端の落ち込みを整地して建設した46号竪穴住居跡を検出した。遺物はパンケース16箱分出土した。

(2) 竪穴住居跡

29号竪穴住居跡（図版16、第46図）

4区北中央南寄りに位置し、38号住居跡・8号土坑に切られる。住居中央1/2を東西方向のクレーク、住居西側1/4を試掘トレンチ、住居南西隅を後世の削平により壊される。住居規模は東西500cm×南北460cmの東西にやや長い長方形住居で、住居中央竪穴部で深さ20cmを測る。住居東西壁際には高さ15cmほど残存するベッド状遺構を持ち、西は幅70cm以上、東は幅70cmとやや狭いもので、いずれも茶褐色砂質土と暗黄褐色砂質土との互層で構築された貼りベッドとなる。南竪穴部床面では切り合い関係を持つピット（P1）と屋内土坑各1基検出した。P1と屋内土坑内西側のピット状の深い部分がほぼ位置的に重なりかつ深いことから、いずれも当住居跡の支柱穴であり、切り合い関係からP1が新しく掘り替えた支柱穴となる。とすると、壁にやや位置に近いことは気になるが、2本柱の住居跡となると考えられる。

屋内土坑は東西100cm×南北110cm、床面からの深さが36cmを測り、西側にはテラスを持つ。土坑埋土最上層で細かく割れた土器がまとまって出土したため、ある程度土坑が埋まった段階で廃棄されたものと判断できるが、土器検出上面レベルは住居床面より高く、住居廃絶前後に土器を廃棄した可能性が高い。このことから、当屋内土坑は支柱穴としての役割終了後も屋内土坑として使用された可能性が高い。屋内土坑埋土は、茶褐色砂質土に焼土・炭が多く含む。住居竪穴部の埋土上層は茶褐色砂質土、下層は茶褐色砂質土と明灰褐色粘質土ブロックが混じり、砂質が強くなる。

出土土器から弥生後期後半、下大隈式新段階の住居と考えられる。

出土土器（図版50、第48図1～10） 1は当住居覆土内出土、2～8は屋内土坑内出土、9・10はP1出土土器。1は弥生後期壺口縁部で、口縁端部には工具による浅い刻みを密に施す。外面には黒斑が認められる。色は黄褐色。2は弥生後期壺口縁部で、口縁端部には工具による浅い刻みを密に施す。外面はナデ消しを行わず、丁寧なハケであることから、文様状に意図的に施した可能性がある。口縁部内面には黒斑が認められる。色は橙褐色。3～6は弥生後期甕である。3・4は甕口縁部で、いずれも色は黄褐色を基調とする。5・6は平底の痕跡を残す凸レンズ底を持つ甕底部。5の底部内面には工具痕が残る。色は黄褐色。6の胎土には細粒を多く含み、外面には黒斑がある。色は黄茶褐色を基調とする。7・8は弥生後期鉢。7の体部

下部はハケのちケズリを施すもの。外面及び口縁部内面には黒斑が認められる。胎土は精良、色は黄褐色を基調とする。8の色は黄褐色を呈する。

9は弥生後期壺口縁部で、口縁端部にはやや丸い棒状工具による刻目を施す。色は外黄橙褐色、内黄褐色。10は弥生中期甕口縁部。色は暗灰黄褐色。混入品。

38号竪穴住居跡（図版16、第46図）

4区北南東寄りに位置し、29・45号住居跡を切り、39号住居跡南東隅と接するため、切り合い関係を持つと考えられるが、出土土器からは両住居とも古墳時代後期末と考えられることから、切り合いの前後関係は不明である。住居東～南東は調査区外、南はクレークにより壊される。住居規模は北西—南東450cm以上×南西—北東515cm、深さ7cm程度の方形住居となる。なお、北壁中央部～西にかけて、本来はもう少し内側に壁が入っていたと想定される。住居床面では、ピット4基検出したが、P1以外はいずれも浅く、主柱穴は不明である。住居床面下で掘り込みを2ヶ所確認した。住居埋土は茶褐色砂質土に灰褐色粘質土・黄白色粘質土ブロックが混じる土となる。

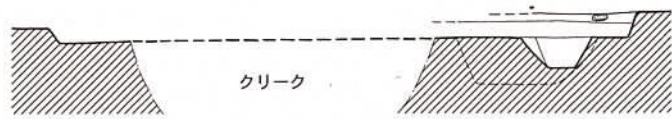
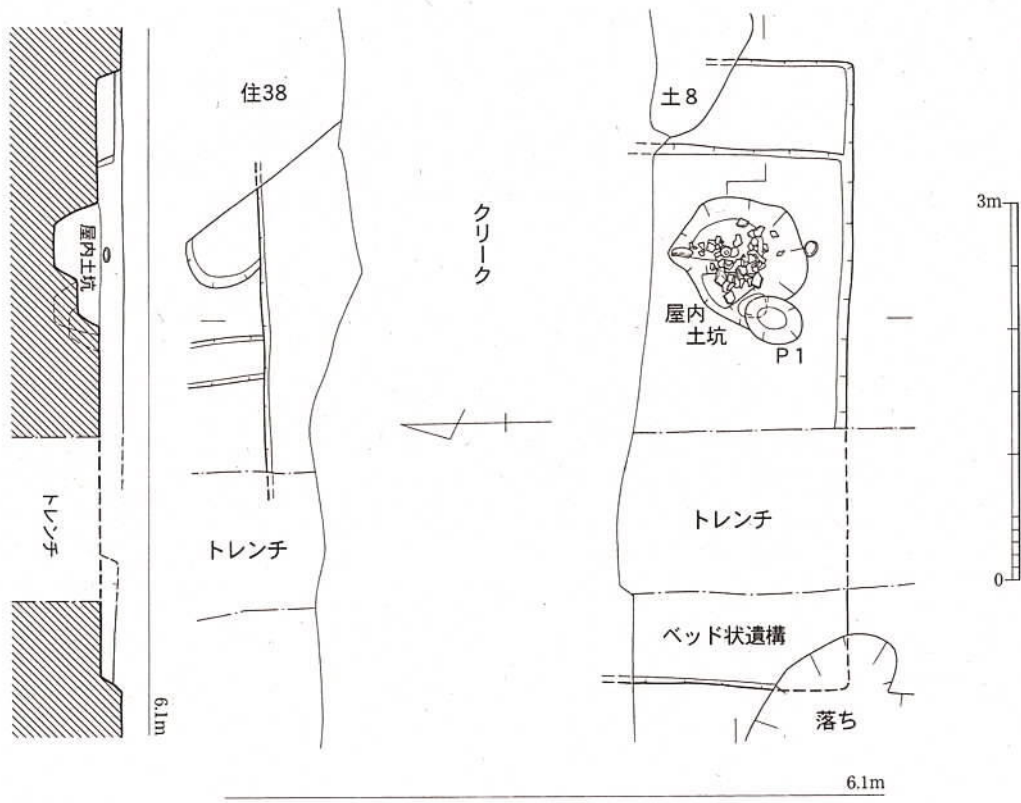
出土土器（図版50、第48図11～20）11は小型の土師器碗形坏で、体部外面下部には砂粒が取れた穴が認められる。色は褐色。12は短い口縁部が外反し、器壁が厚い土師器甕。胴部外面中位には二次加熱痕が認められる。色は外灰褐色、内黄白色～灰褐色。13は口縁内面がナデにより窪む土師器鉢口縁部か。色は橙褐色。14は土師器杓子型手捏ね土器で、把手が欠けたもの。杓子部先端には注ぎ口の突起を有し、外面には黒斑あり。色は灰黄褐色。杓子の形態はやや異なるものの、当遺跡に近接する古墳時代後期後半の藤の尾垣添遺跡3号住居跡から出土例がある（田中康信編1989『藤の尾垣添遺跡Ⅱ』瀬高町文化財調査報告書第5集 瀬高町教育委員会 p15）。

15～17は小型の弥生後期甕。15・16の外面には二次加熱痕が認められる。15は黒斑が認められ、色は黄橙色を基調とする。16は胴が丸く張り、短い口縁部が外傾する形態のもので、色は黄褐色を基調とする。17は強く外折する口縁部を持つもので、色は灰黄色。18は弥生後期高坏脚裾部。器壁はやや厚く、胎土には細粒を多く含む。色は橙褐色を基調とする。19・20は弥生後期器台上部。19の色は灰黄褐色～黄褐色。20の外面及び断面は二次加熱により赤変することから、破損後に火を受けたもの。色は橙色～黄褐色。

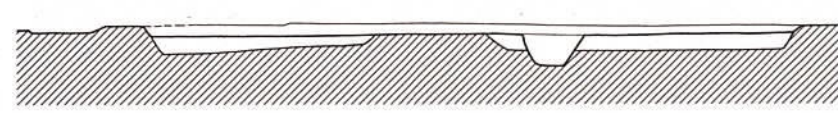
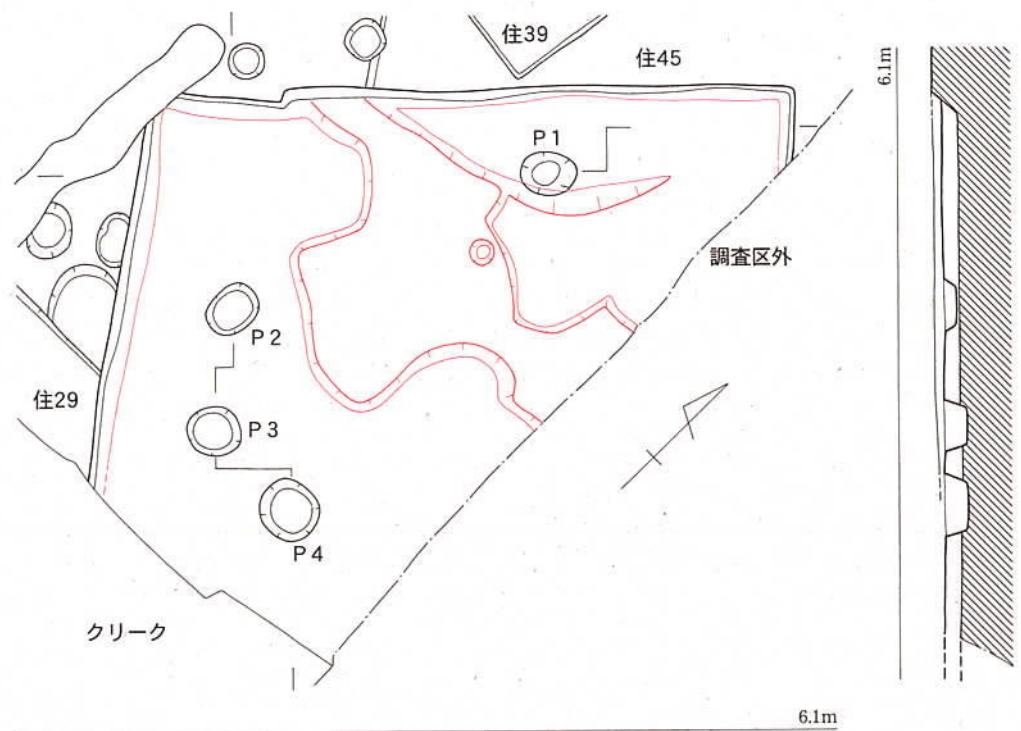
39号竪穴住居跡（図版17、第47図）

4区北部の調査区中央で検出した。40・45号住居跡と切り合い、45号住居跡より古く、40号住居跡より新しい。主軸方位は北でわずかに東に振れる。平面プランは南北4.8m、東西5.2mのほぼ正方形を呈する。壁は残存状況の良い箇所深さ10cmとなる。床面からは5基のピットが検出された。このうちP1・P3・P4・P5が主柱穴と考えられるが、P1は深さ6cmと浅い。また北壁中央部壁際の床面からは焼面が検出された。カマドと思われるが袖や煙道などは確認できない。床下の掘り込みは住居跡中央部から西壁際の一部を除く広い範囲で確認できた。住居跡の時期を即断できる資料は出土していないが、切り合いから古墳時代後期末に属すると考えられる。

出土土器（図版50、第48図21～27）21・22・27は覆土から出土。21は土師器坏身の口縁部片。



29



38

第46図 29・38号竪穴住居跡実測図 (1/60)

身は浅く、口縁部が外上方に伸びる。焼成は良好だが摩滅が進み、内外面とも調整は不明。22は須恵器坏身で高台を持つタイプである。平らな底部から、体部は丸みを帯びて外上方へと伸びる。高台は体・底部境に付き、低く外端部が接地する。内外面・高台とも回転ナデで仕上がる。7世紀末ごろのものか。混入品と思われる。27は弥生時代後期の土器で、甕底部と体部下位の破片。底部内外面はナデ、体部は内面ハケ、外面タテハケのちナデ調整。体・底部境の外面にはハケ工具痕が残る。

23～25は床下掘り込みの出土。23・24は弥生時代中期の土器で、23は断面三角形に近い逆「L」字状の口縁部をもつ甕。口縁部はやや内傾し、口縁部上面は水平で外方に短く伸びる。内端・外端とも丸く収める。わずかに残る体部は口縁部から下方に垂直に伸びる。外面の口縁部下に指圧痕が残る。摩滅のため調整は不明。中期初頭に位置付けられる。24も断面逆「L」字状の甕口縁部の破片で、口縁部はやや内傾、内端がわずかに突出する。口縁部上面はやや丸みを帯びて内傾し、外端は丸くなる。口縁部下の外面に貼り付けによる突帯が1条巡る。中期前半に属する。25は弥生土器の甕底部から体部下位の破片。内面はハケメのちナデ、体部外面タテハケメ、底部外面にハケメが残る。瓦質土器のような焼成を受け、全体として灰色を呈す。

26はP3から出土した弥生時代後期の甕。丸底に近い凸レンズ状の底部となる。内面の調整は体部にハケメ、底部にナデがみられるが、外面は摩滅のため不明（一瀬）。

40号竪穴住居跡（図版17、第47図）

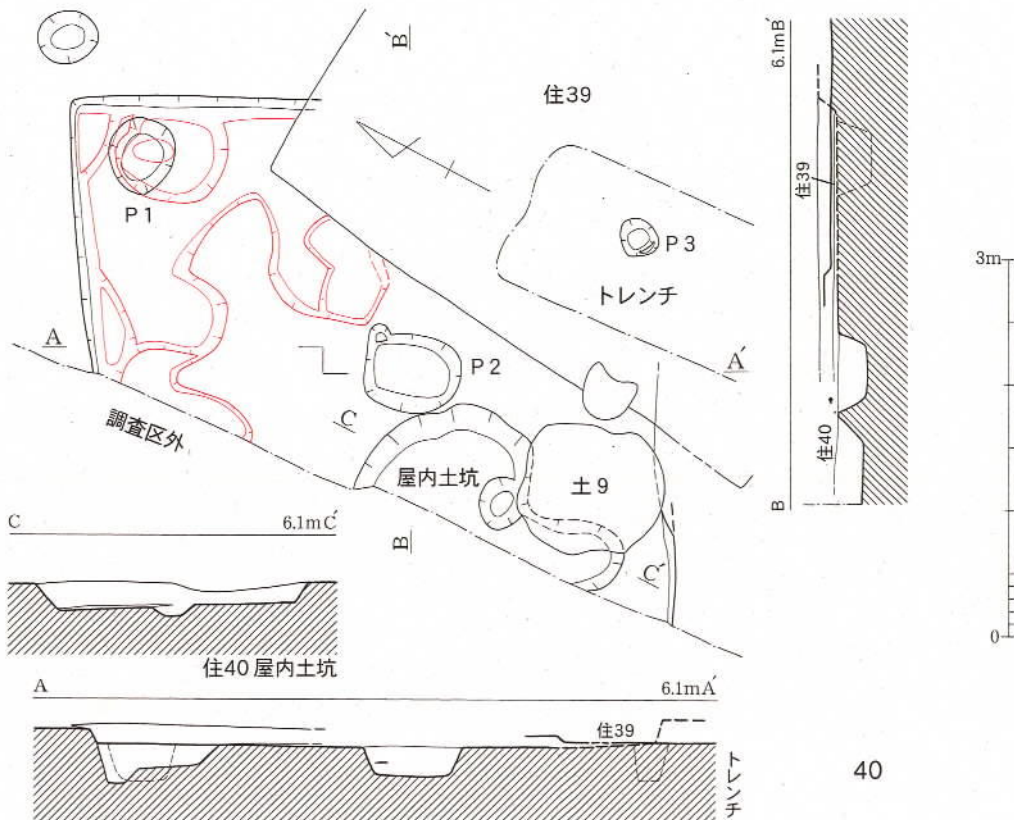
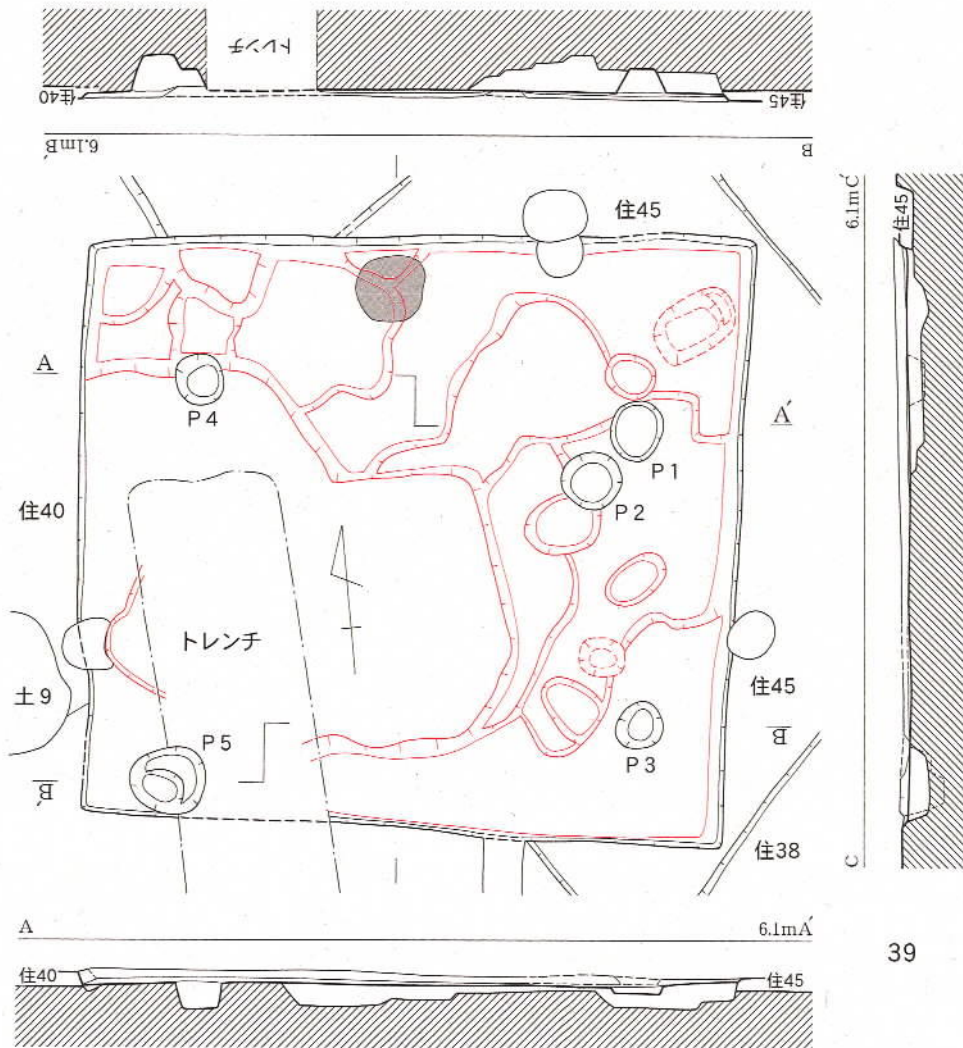
4区北中央西寄りに位置し、39号住居跡・9号土坑に切られ、住居西側大部分は調査区外となる。住居規模は東西410cm以上×南北450cm、深さ12cm程度の方角住居となる。住居床面では屋内土坑1基・ピット2基を検出し、また39号住居跡内で検出したピット1基も位置・埋土から当住居跡に属すると考えられる。位置・深さからP1・3が支柱穴となるため、4本柱の住居跡となる。住居埋土は暗黄褐色砂質土を呈する。屋内土坑は南北215cm、東西140cm以上、深さ23cmの不整形の大型屋内土坑で、床面はほぼ平らとなるが、ピット状に深くなる箇所も1ヶ所存在する。土坑埋土は明茶褐色砂質土に焼土・炭が少量混じる土。住居北東部分で床下掘り込みを確認した。

出土土器及び切り合う9号土坑から弥生時代後期終末～古墳時代前期前半の住居跡と考えられる。

出土土器（図版50、第50図1～6） 1・2は住居覆土出土、3～6は住居屋内土坑出土。1は弥生後期大型甕口縁部。口縁端部には工具による浅い刻み、頸部には低平な三角突帯を貼り付ける。色は淡橙褐色。2は口縁部がほぼ直角に屈折する在地系高坏口縁部。色は黄橙色。3は弥生後期大型甕口縁部。口縁端部には工具による雑な刻みを施す。色は外淡橙色、内黄褐色。4・5は弥生後期甕。4は強く屈曲する口縁部を持ち、胴部はやや膨らむ形態となる。口縁端部はナデで面取りする。色は黄褐色。5の口縁部内面及び外面全体にはススが付着する。色は黄橙色。6は弥生後期器台上部片。色は外灰黄褐色、内灰褐色。

41号竪穴住居跡（図版18、第49図）

4区北中央北寄りに位置し、42号住居跡に切られ、1・2号甕棺墓を切る。また住居南東隅



第47図 39・40号竪穴住居跡実測図 (1/60)

は切り合うピットとの前後関係を間違えて調査したため、掘り飛ばしてしまった。住居規模は東西440cm以上×南北410cm、深さ14cm程度のやや北東側が突出する、正方形に近い住居となる。住居床面では、西で屋内土坑1基・南でピット2基を検出し、ピット2基は位置から支柱穴の可能性が高いが、北側の2基は検出できなかった。

当住居跡は弥生時代中期前半の1・2号甕棺墓内に土・石を入れ、整地することで住居を構築していたが、調査では甕棺墓検出面まで一度に下げてしまったため、住居の貼床部分(3cm程)を掘り飛ばし、地山の礫層を露出させることとなった。屋内土坑は南北120cm×東西60cmの中央部2ヶ所がテラスを持つ土坑で、深さは北側の深い部分で22cm、南側で15cmを測る。屋内土坑埋土は明茶褐色砂質土。住居埋土は上層が黄褐色粘質土に炭が多く混じるもので、炭層が厚さ5cmほどのレンズ状に堆積し、埋土下層は黄褐色粘質土である。

出土土器から古墳時代前期前半の住居跡と考えられる。なお、覆土内から黒曜石の二次加工剥片が出土した(第103図31)。

出土土器(第50図7~13) 7は尖底気味の古式土師器小型甕底部。外面には黒斑が認められる。色は外黄褐色、内黄橙色。8・9は弥生後期小型甕。8の口縁端部は肥厚するもので、色は黄橙色。9は器壁の薄い短い口縁部で、色は黄褐色。10は長大な弥生後期大型甕口縁部で、口縁端部はハケ工具により浅く規則的に刻む。色は茶褐色。11は弥生後期直口鉢で、砲弾状の器形となるか。色は黄橙色。

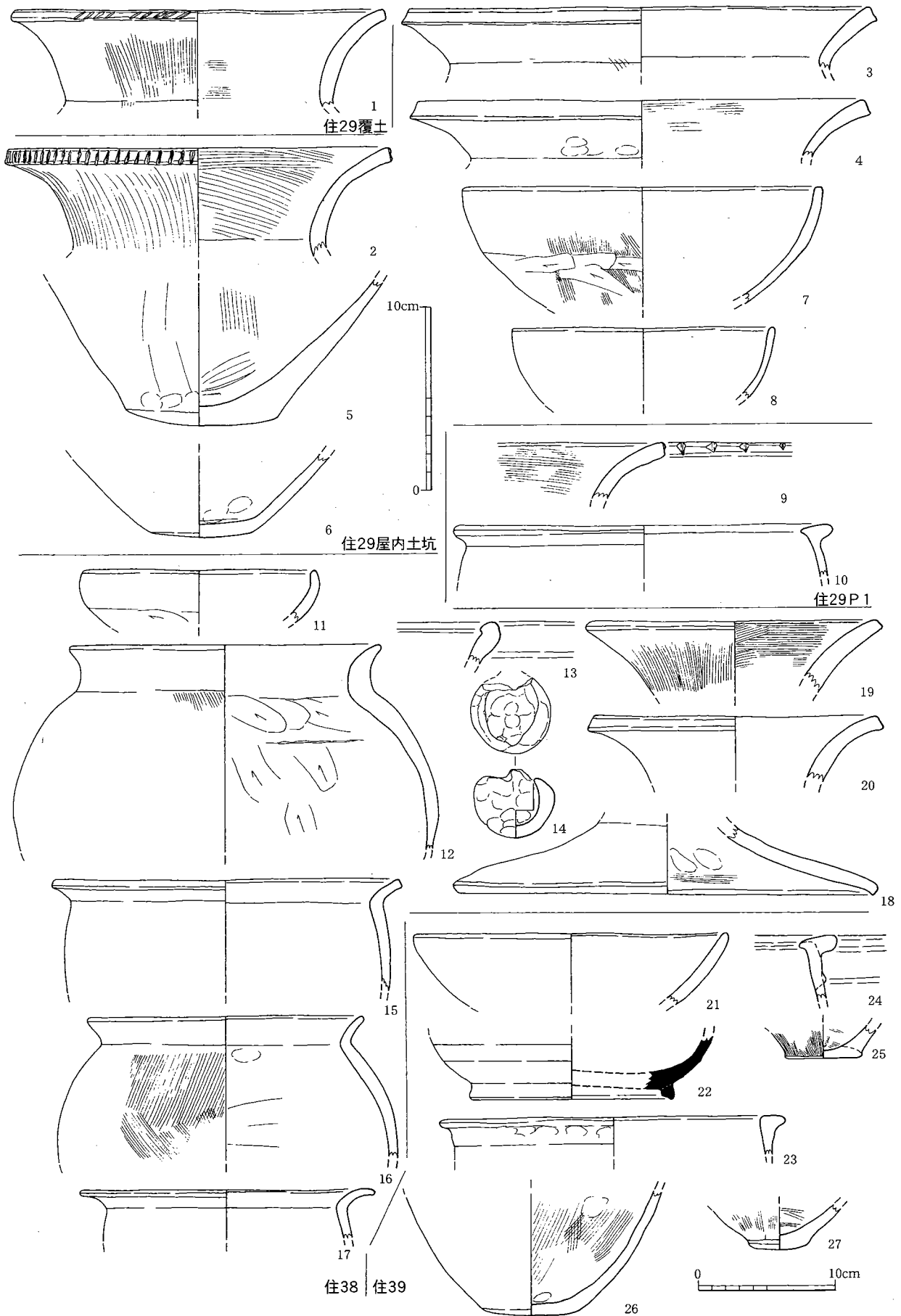
12は内側への突出が顕著である弥生中期甕口縁部。色は黄褐色~白黄褐色。13は弥生中期甕口縁部。色は黄橙色~灰黄褐色。12・13は混入品。

42号竪穴住居跡(図版19、第49図)

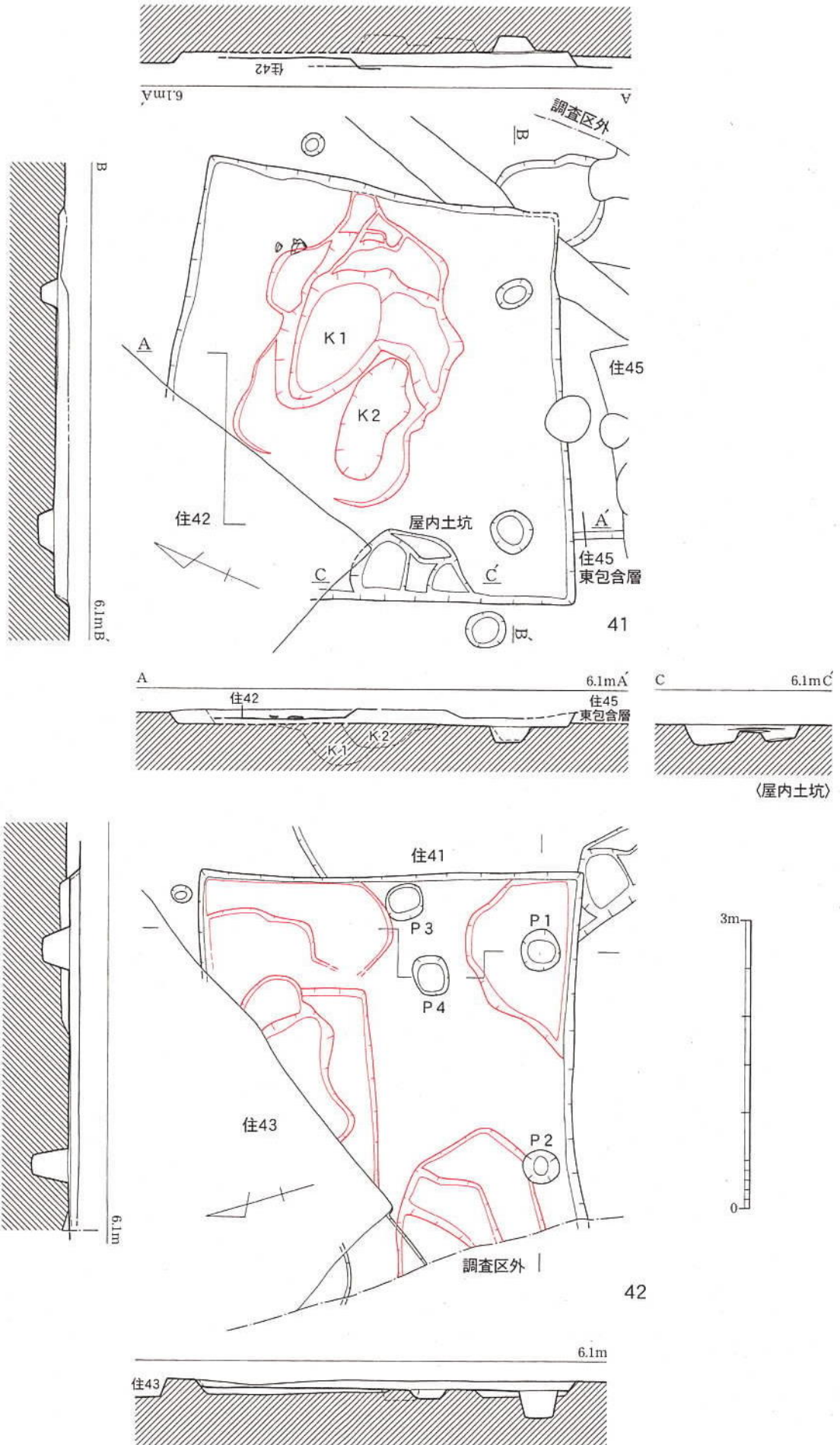
4区北西隅に位置し、43号住居跡に切られ、41号住居跡を切る。住居西側は調査区外となるが、住居規模は東西450cm以上×南北390cm、深さ10cm程度の東西に長い長方形住居となる。住居床面ではピット4基を検出し、P1・2が位置・深さから支柱穴であり、北東隅の支柱穴は検出できなかった。切り合い関係及び出土土器から古墳時代後期末の住居跡と考えられることから、4本柱の住居と想定される。なお、住居北西床面が2段下がるが、掘り過ぎてしまったものである。住居床面下では4ヶ所の掘り込みを確認した。北の方形を呈する掘り込みは当初は下層住居として掘っていたが、後に掘り間違いと判断し、当住居床下掘り込みとして報告する。当住居跡も41号住居跡と同じく、地山に礫層が混じる。住居埋土は茶褐色粘質土。

出土土器(第50図14~18) 14は土師器模倣坏口縁部で、高坏となる可能性もあるもの。短い口縁部がやや内湾気味で立ち上がり、口縁部と底部の稜は痕跡的なものとなる。内面には黒塗りを施す。内外面には二次加熱痕が認められる。生地及び外面の色は橙褐色。15は外反する口縁部はやや長い、土師器小型甕。胎土は精良で、色は橙褐色。

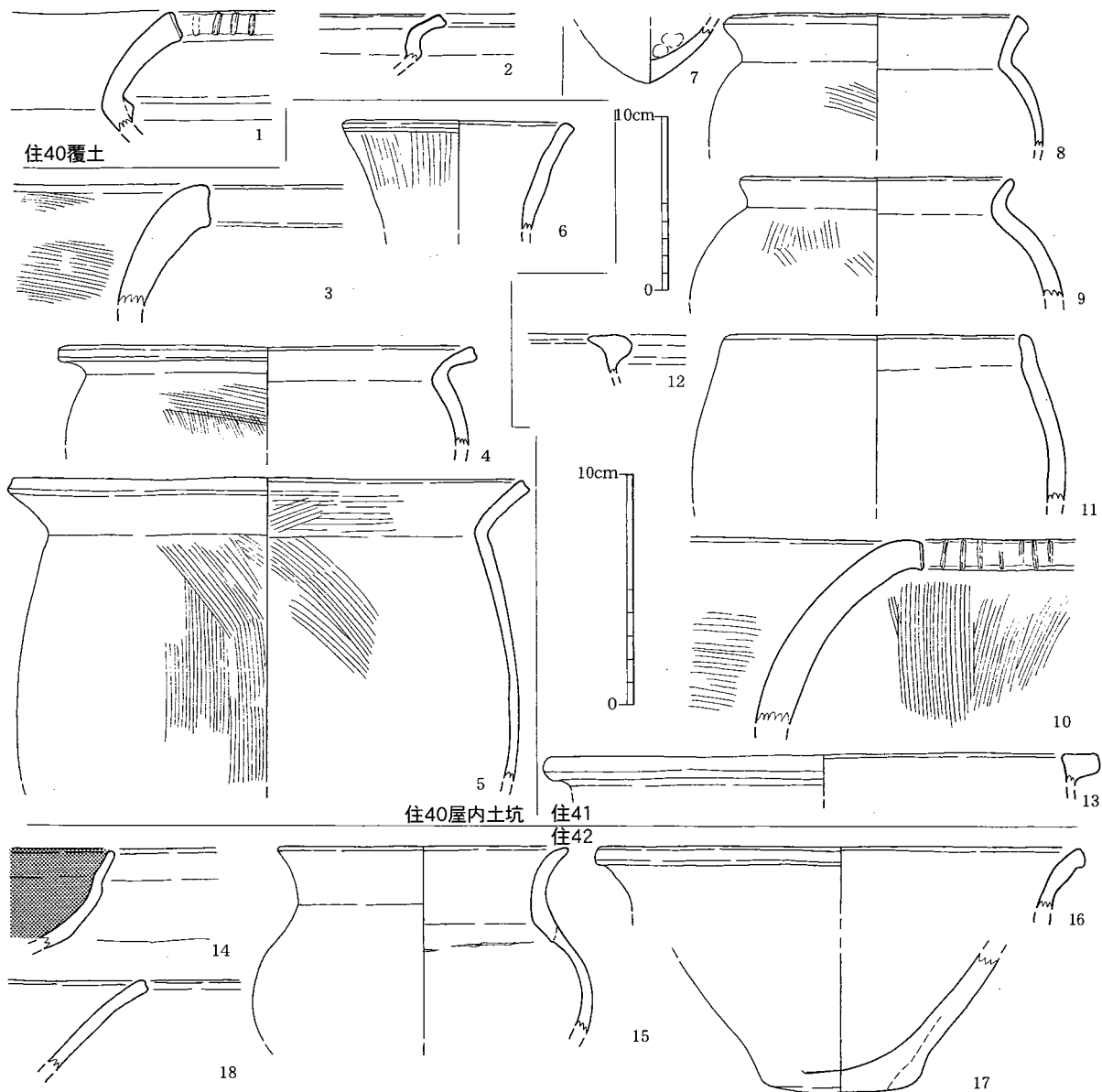
16~18は混入品。16は弥生後期甕口縁部。胎土には細粒を非常に多く含み、色は外灰褐色、内橙褐色。17は平底を残す凸レンズ底の弥生後期甕底部。外面には黒斑が認められる。胎土には細粒を非常に多く含み、色は黄褐色。18は弥生後期高坏口縁部。色は黄橙褐色。



第48図 29・38・39号竪穴住居跡出土土器実測図 (10・23~25は1/4、他は1/3)



第49図 41・42号竪穴住居跡実測図 (1/60)



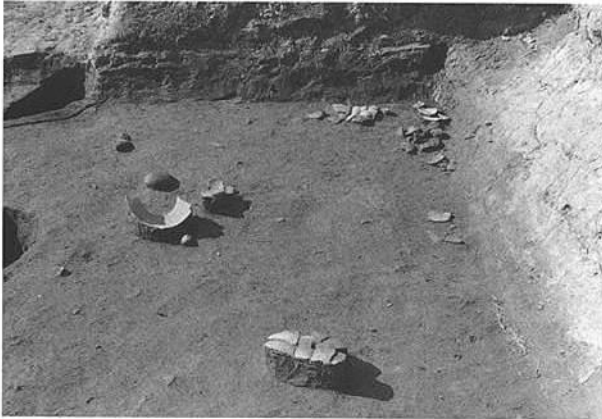
第50図 40～42号竪穴住居跡出土土器実測図（12・13は1/4、他は1/3）

43号竪穴住居跡（図版19、第51図）

4区北西隅に位置し、42号住居跡を切る。住居北側2/3ほどは調査区外になるが、住居規模は東西525cm×南北286cm以上、深さ20cm程度の方形住居となる。住居北西隅の床面付近では土器群が出土し、この土器群と対応するように床面には薄く炭が広がっていた。床面上ではピット2基（P1・2）を検出し、いずれも支柱穴となる。また土製支脚の存在から、当住居跡にはカマドが存在する可能性が高い。住居埋土は暗灰褐色砂質土。床面西側では12cmほどの深さとなる掘り込みを確認した。

切り合い関係及び出土土器から古墳時代後期末の住居跡と考えられる。なお、覆土上層（第103図30）、当住居付近遺構面（第103図29）から二次加工剥片が出土した。

出土土器（図版50・51、第52・53図） 1は土師器模倣坏で、口径15.2cmを測る大型品となる。当遺跡で出土した模倣坏は口径14cm以内のものがほとんどであることから、蓋として使用され



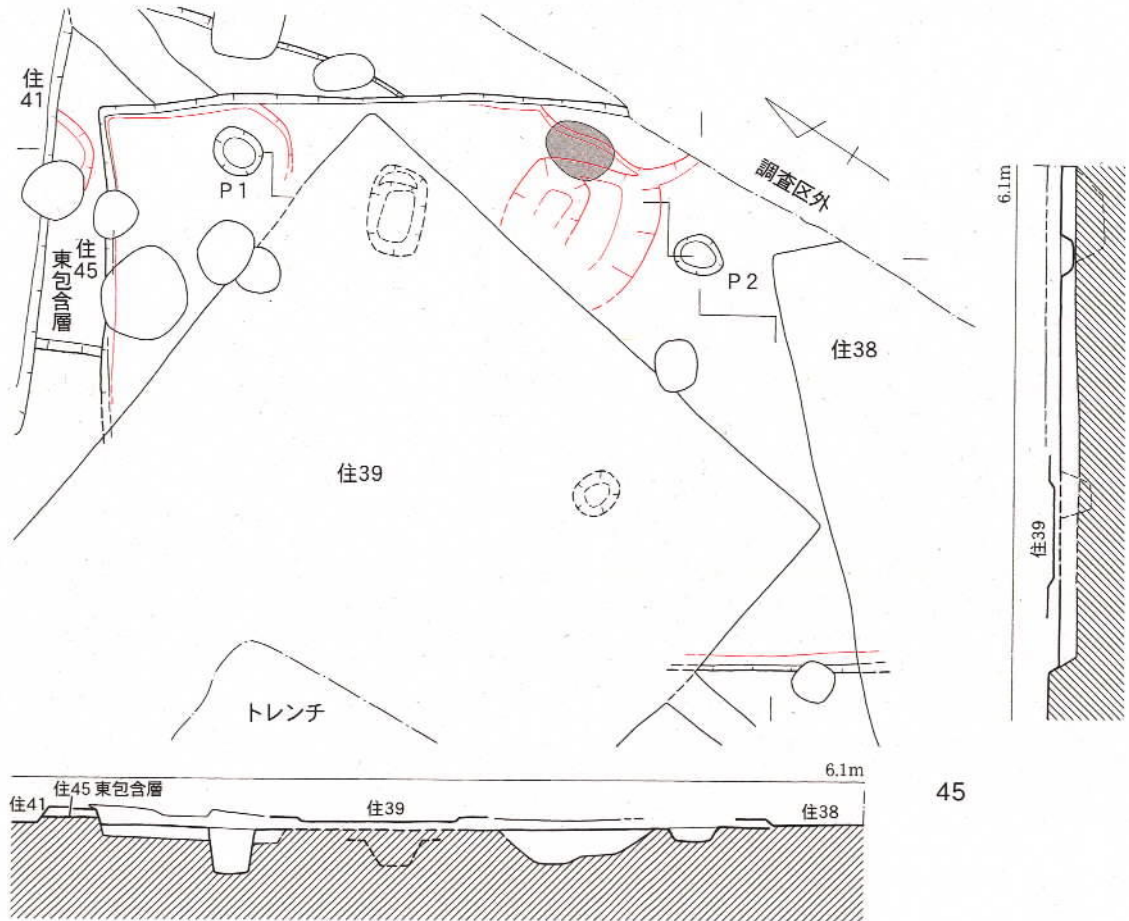
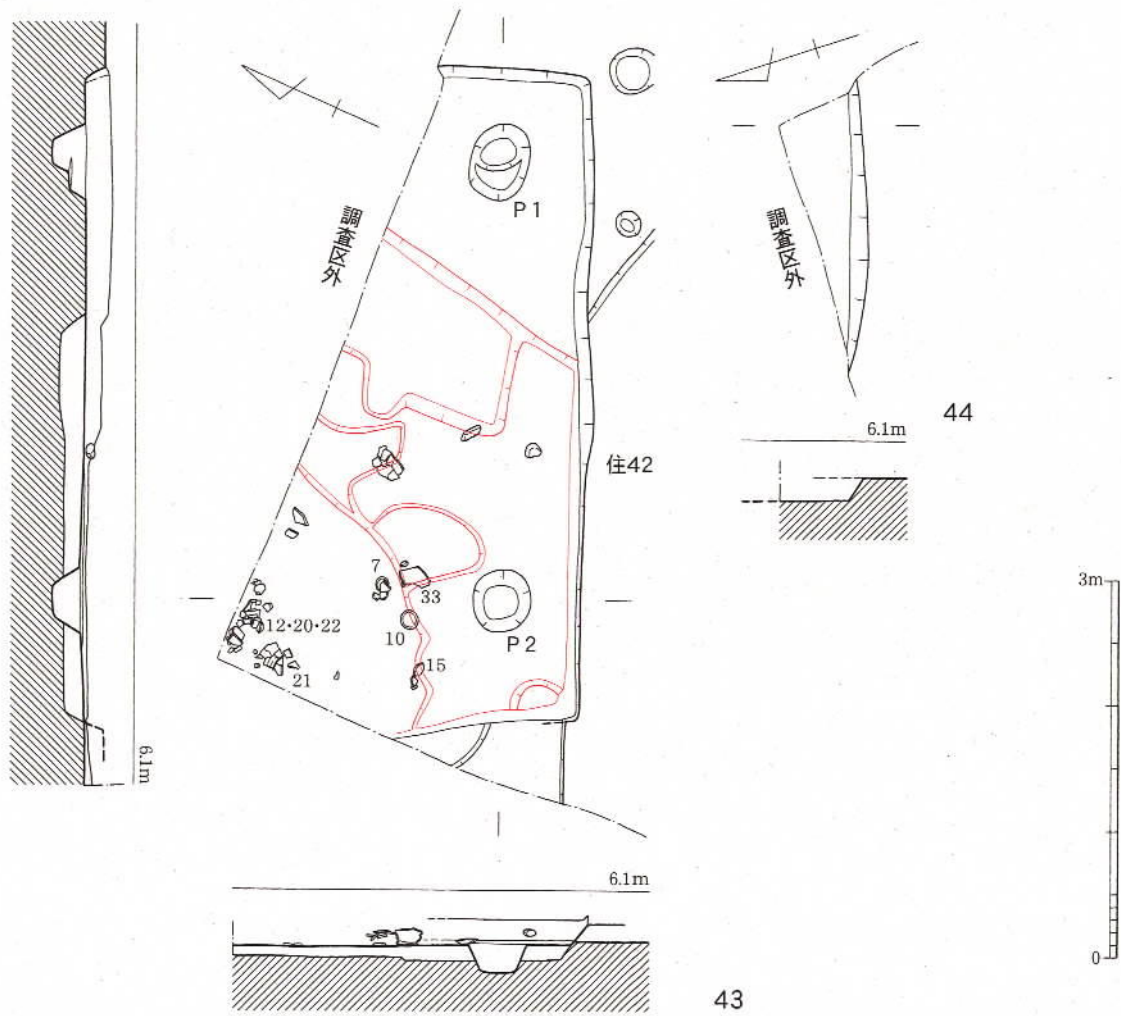
43号住居跡出土状況（東から）

た可能性もある。口縁部は外反し、口縁部と底部の境の稜は鈍い。内外面には黒塗りを施し、生地は灰黄褐色～橙褐色。2～10は土師器碗形坏である。2の口縁部外面は強い横ナデにより窪む。3は内湾気味に直立する口縁部で、4～10にかけては次第に内湾度が増す。器壁は2・6が厚く、7・10が完形品。2・10は内外面全体、6は内面のみ黒塗りを施す。4は胎土が精良で、6の口縁部外面は黒化するが、伏せた形で地面等に接して焼成したため

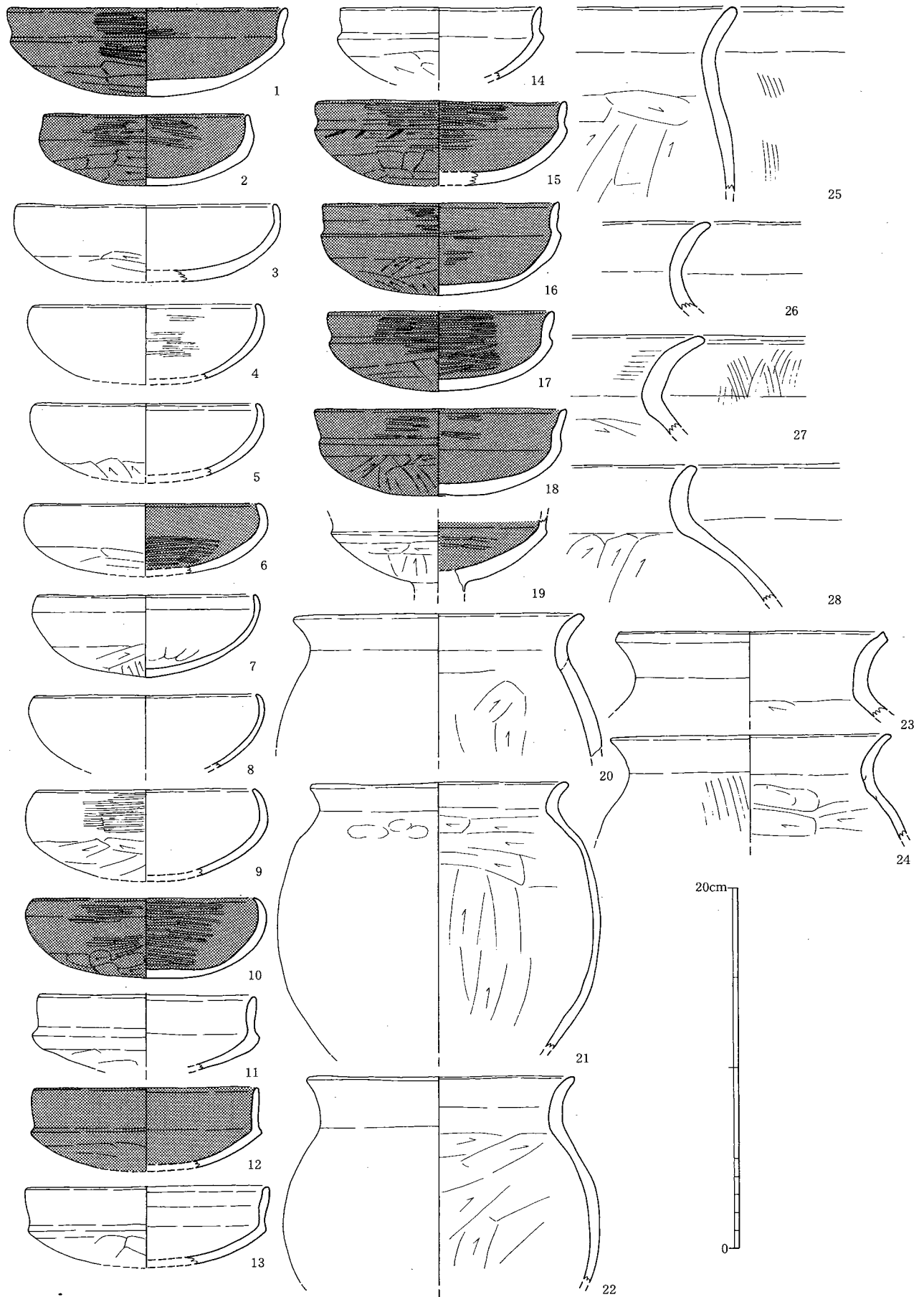
に黒化したと考えられる。7の外面には黒斑が認められる。2～10いずれも生地は橙褐色を基調とする。11～18は土師器模倣坏である。11～13は口縁部が直立し、14～18は口縁部が外反するタイプとなる。口縁部直立タイプの方がより口縁部と底部との境の稜が明瞭で、形態も規格性が認められる。12・15～18の内外面には黒塗りを施し、13の内面は黒化する。14の底部外面には黒斑が認められる。15の稜部分には意図的に刻まれた工具痕が3ヶ所存在する。18の稜は特に痕跡的となる。11～18いずれも色・生地は橙褐色～茶褐色系となる。19は模倣坏を坏部とした土師器高坏で、内面には黒塗りを施す。生地は橙褐色。

20～34は土師器甕である。20～24・29・30は中型のもので、その他は大型品となる。20の肩部にはススが付着し、色は外暗褐色、内灰黄褐色。21は短く外湾する口縁部に、球状の胴部を持つ。胴部外面には黒斑が認められる。色は淡黄褐色～黄茶褐色を呈する。22の色は灰黄褐色～暗灰黄色。23の胎土には比較的大きな細粒が混じり、色は赤褐色。24の胎土には細粒が非常に多く混じり、色は外灰黄褐色、内白黄褐色～灰褐色。25は緩やかに外反する口縁部を持つ大型甕で、頸部の屈曲がほとんどないことから、甕となる可能性もある。色は黄褐色。26・27は強く外湾する口縁部を持つ甕。26の色は黄褐色、27の色は外橙色、内黄褐色。28は丸く張る胴部に、短く外湾する口縁部を持つ。胴部外面には黒斑が認められる。色は橙褐色。29の胴部外面は下の縦ハケが上の横ハケを切る。外面肩部にはススが付着。色は外灰黄褐色、内黄褐色。30はナデ肩で、胴部外面にはススが付着。色は灰橙色。31は短い口縁部で、色は外灰褐色、内灰黄褐色。32は端部が強く外折する口縁部で、外面肩部には黒斑が認められる。色は外灰橙褐色～灰黄褐色、内灰橙色。33は壺の形態に近い甕で内面頸部との境が明瞭なもの。外面には黒斑が認められる。色は外白橙褐色、内白橙褐色～灰褐色～黒色を呈する。34は胴部内面に粘土継ぎ目痕が明瞭に残るもので、1.5cm幅前後の粘土紐を使用し成形したことが分かる。色は外白黄褐色～淡桃色、内白黄褐色。35は土師器甕口縁部。口縁端部はナデで面取りし、外面には黒斑が認められる。色は黄褐色。36は土製支脚で、下端面及び左側面は生きており、右端部も生きている可能性がある。横断面は鍵形を呈し、外面は全体的に二次加熱痕が認められることから、実際に使用されたもの。縦断面で見ると下端面部分が玉縁状に突出する形態で、裏面は丁寧にナデ調整される。器壁は他の土製支脚よりも薄く、胎土にはスサ含み、色は橙褐色～灰橙褐色を呈する。

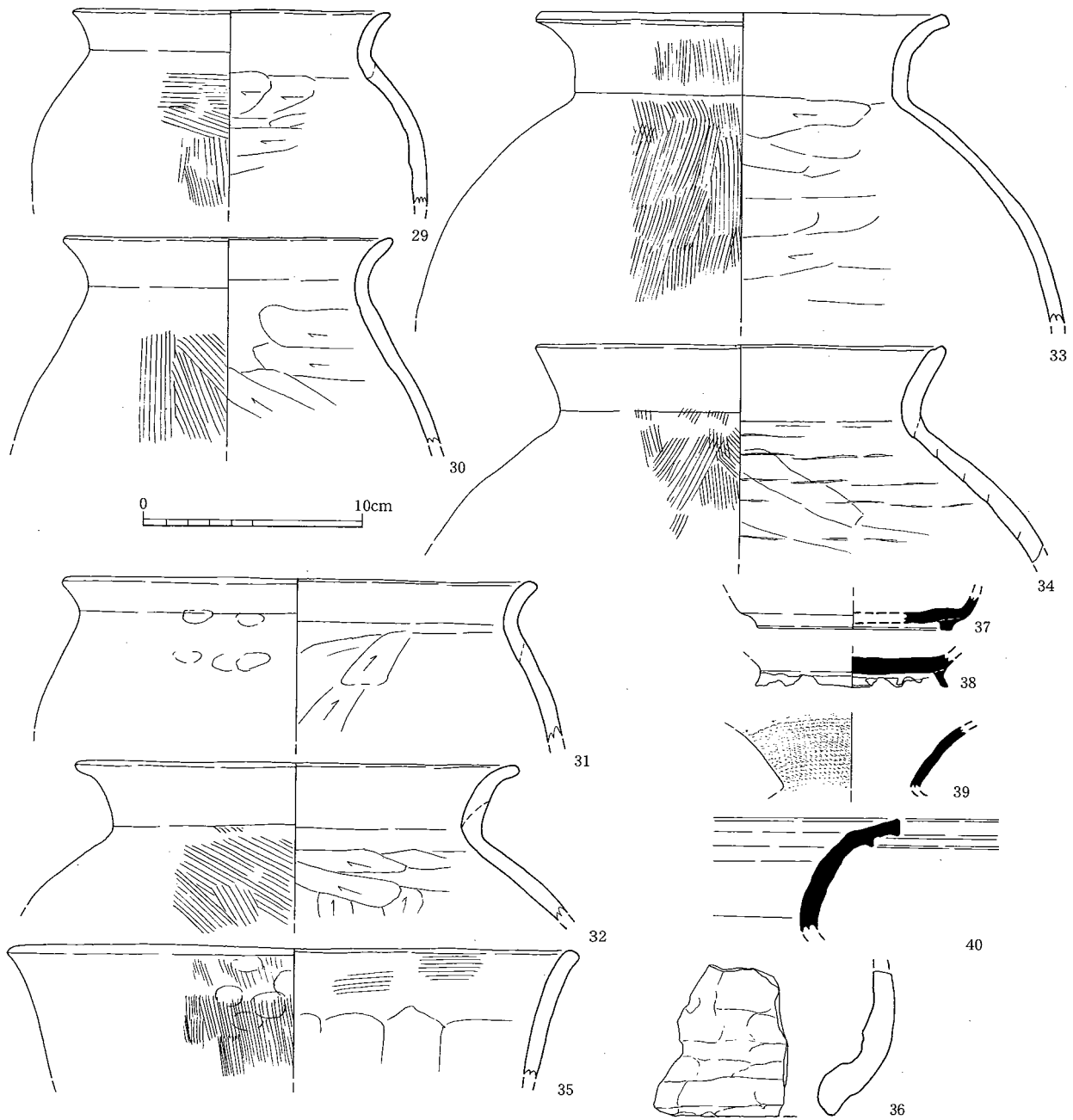
37・38は高台付須恵器坏身。いずれも覆土上層からの出土であり、混入品と考えられる。37



第51図 43~45号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第52图 43号竖穴住居跡出土土器実測図(1) (1/3)



第53図 43号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (1/3)

の色は灰色。38は高台部を打ち欠きするもので、胎土はやや粗で、色は紫褐色。39は須恵器甕頸部となるか。外面全体には15条の楕描波状文を施す。色は灰色。40は須恵器壺口縁部。口縁端部下には鋭い三角突帯を巡らす。外面には薄く灰がかかり、色は灰色。

44号竪穴住居跡 (第51図)

4区北東隅に位置する。住居のほとんどが調査区外であり、南壁の一部を検出したに留まる。住居規模は、東西230cm以上×南北63cm以上、深さ20cmを測る。埋土は暗茶褐色砂質土。

出土土器はないが、埋土から古墳時代後期の住居跡となる可能性が高い。

45号竪穴住居跡（第51図）

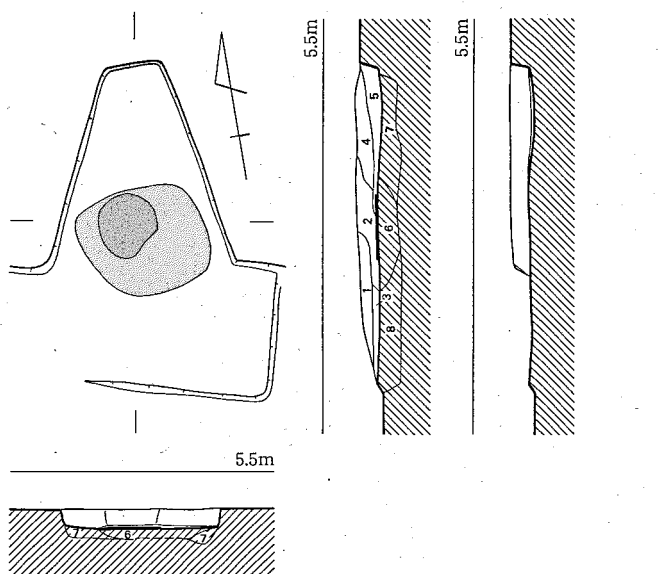
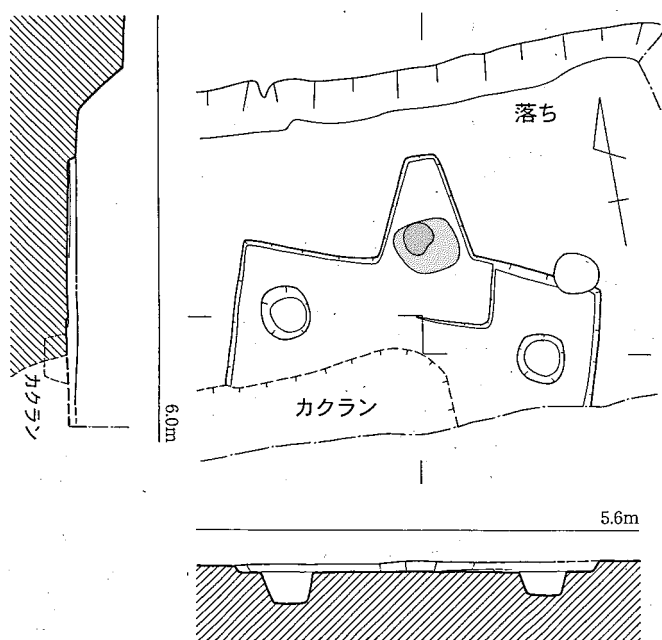
4区北中央東端に位置し、38・39号住居跡に切られる。南東隅は調査区外であるが、住居規模は南北585cm以上×東西450cm、深さ12cmの南北に長い大型長方形住居で、埋土はやや粘性のある明茶褐色砂質土。住居床面ではピットを2基検出し、P1は深さ・位置から主柱穴になると考えられるが、他の主柱穴は不明である。また住居南東隅近くで、53cm×42cmの範囲に薄く広がる焼面を確認したが、この焼面がカマドであるとして反転させると、南北幅が760cmと大きくなりすぎるため、カマドとは断定できない。床面下では2ヶ所掘り込みを確認した。

埋土・切り合い関係及び出土土器から古墳時代後期の住居跡となるか。

出土土器（図版51、第55図1～6）

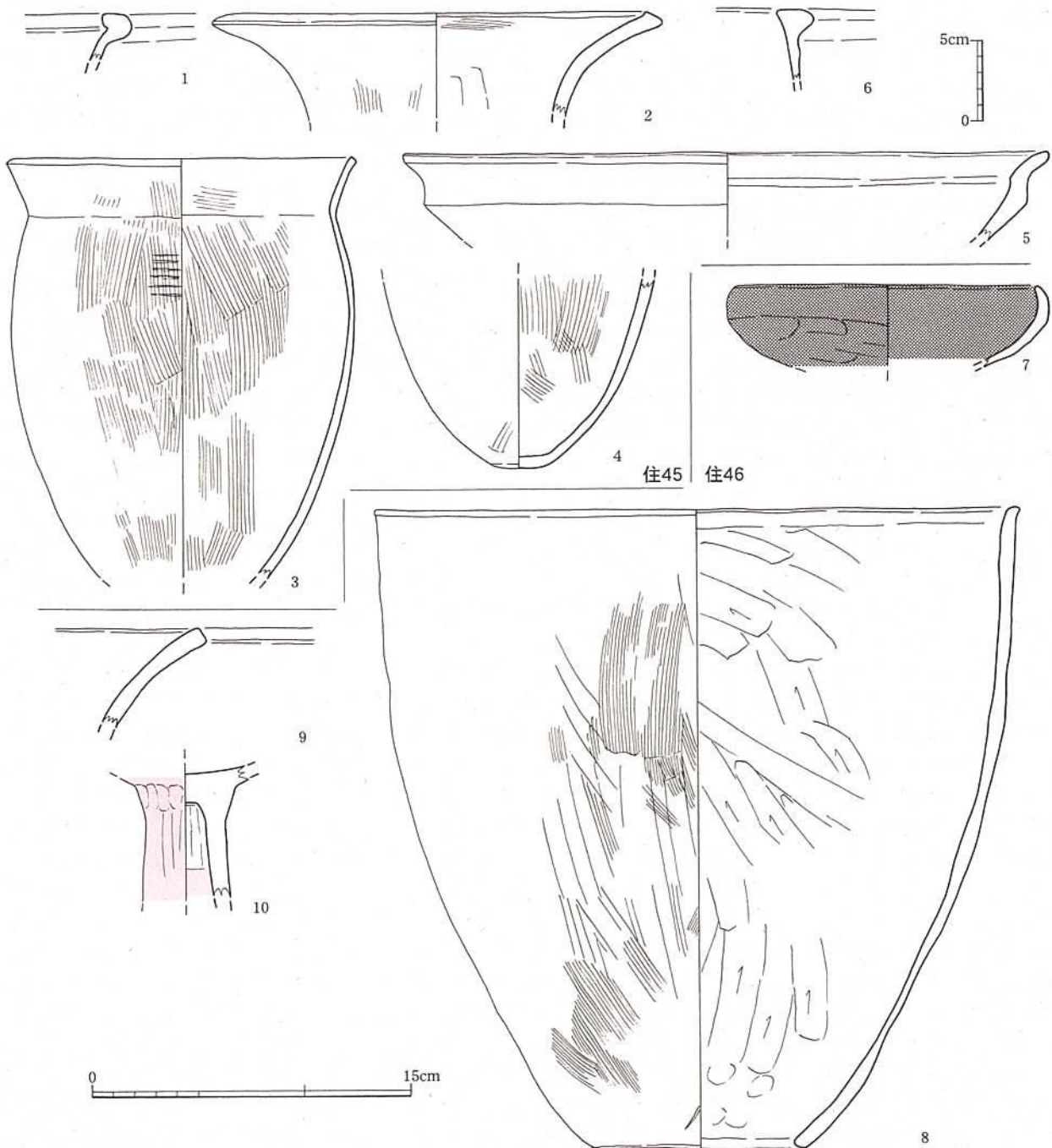
1は口縁内端部が突出する土師器鉢となるか。色は橙褐色。

1～5は混入品である。2は朝顔形に開く在地系土師器壺口縁部。口縁内端部はわずかに上方につまみ出したもの。色は灰橙褐色。3は器壁が非常に薄く、胴部が全く張らないことから、古墳時代前期に属する在地系土師器甕。外面には二次加熱痕・黒斑が認められる。色は灰黄褐色。4はわずかに凸レンズ底の痕跡が残る在地系小型甕底部。色は外灰黄色、内黄橙色。5は口縁部が強く屈曲する在地系土師器高坏口縁部。色は白黄褐色。6は弥生中期甕口縁部。色は白黄褐色。



1. 青灰色粘土+黄褐色砂質土(住居覆土)
2. 1+焼土多く含む
3. 2+炭少量含む
4. 1+炭多く含む、白色粘土ブロック少量含む
5. 1+焼土ブロックに青白色粘土ブロック少量含む(粘性強い)
6. 焼土90%+青灰色細砂10%
7. 1+青灰色細砂+灰白色ブロック] カマド掘り込み
8. 青灰色細砂+灰白色粘土ブロック=住居掘り込み

第54図 46号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60、1/30）



第55図 45・46号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4、1/3)

46号竪穴住居跡 (図版19、第54図)

4区南東隅に位置し、住居南側1/2ほどが調査区外で、住居北側の段は落ちの上端ラインとなる。住居規模は東西290cm×南北135cm、深さ10cmの小型方形住居である。当住居跡付近を記録した4区南土層図(第12図)と合わせて見てみると、地山が青灰色粘土となるため、住居覆土との区別が非常に見分けにくく、調査では10層上面まで下げて調査を行った。しかし、住居壁の残存高は10cmとなったこと、また4・5層上面が平らであることから、4・5層から掘り込んで住居を構築した可能性が高い。とすると、本来住居の壁は50cmほど残存していたことと

なる。住居北壁中央に突出タイプのカマドを付設し、住居埋土は暗青灰色粘土を呈する。住居床面では、ピットを2基検出し、いずれも支柱穴となる。

またカマド前面の段は住居東床面を掘りすぎてしまったために付いた段で、カマド床面が本来の住居床面レベルとなる。なお、カマド土層図8層は住居床下掘り込みとなるが、住居床面レベルで既に湧水層に達していたため、住居床面は精査ができず掘り込みの調査は断念した。

出土土器では古墳時代後期後半となるが、住居・カマドの形態から古墳時代後期末まで下がる住居となる可能性が高い。

カマド (第54図) 住居北壁中央に付設された突出タイプのカマドである。カマド埋土、住居埋土は地下水の影響で、青みを帯びていたため、両袖とも検出できなかった。燃焼部奥壁から手前50cmの箇所、中央径25cm部分がかかなり硬化した焼面となる、55×44cmの焼面を検出した。燃焼部幅はこの硬化面部分で61cm、奥壁部分で幅21cmを測り、平面形は「八」の字状を呈し、住居壁からカマド燃焼部奥壁まで長さ85cm程と奥行のある大型のカマドとなる。カマド埋土は、4・5層がカマド構築土崩落土、6・7層がカマド下層掘り込み。

出土土器 (第55図 7～10) 7は土師器碗形坏で、内外面黒塗りを施す。カマド内出土で、生地は橙褐色。8は土師器甑で、口径30cm、底径10cm、器高29.8cmを測る。把手の有無は不明。外面は工具ナデ、内面はケズリのち一部ナデ調整を行う。外面口縁端部には黒斑が認められる。色は灰黄橙色。カマド内出土。9は弥生後期壺口縁部。色は橙褐色。混入品。

10は当住居跡付近遺構面出土土器である。土師器高坏脚部で、坏底部も残るもの。外面はナデのち薄いスリップ、内面脚部中位以下にも薄いスリップを塗布する。生地は灰黄褐色。

(3) 土坑

2号土坑 (図版20、第56図)

4区南、北東寄りの落ち込み際に位置する。長軸142cm×短軸48cm、深さ25cmの南北に長い不整形な長楕円形土坑である。土坑床面はほぼ平らで、壁の傾斜はいずれもやや急になる。床面付近から岩の礫が出土したが、使用痕が確認できなかったため、図示していない。

出土土器から弥生時代後期終末～古墳時代前期前半の土坑と考えられる。

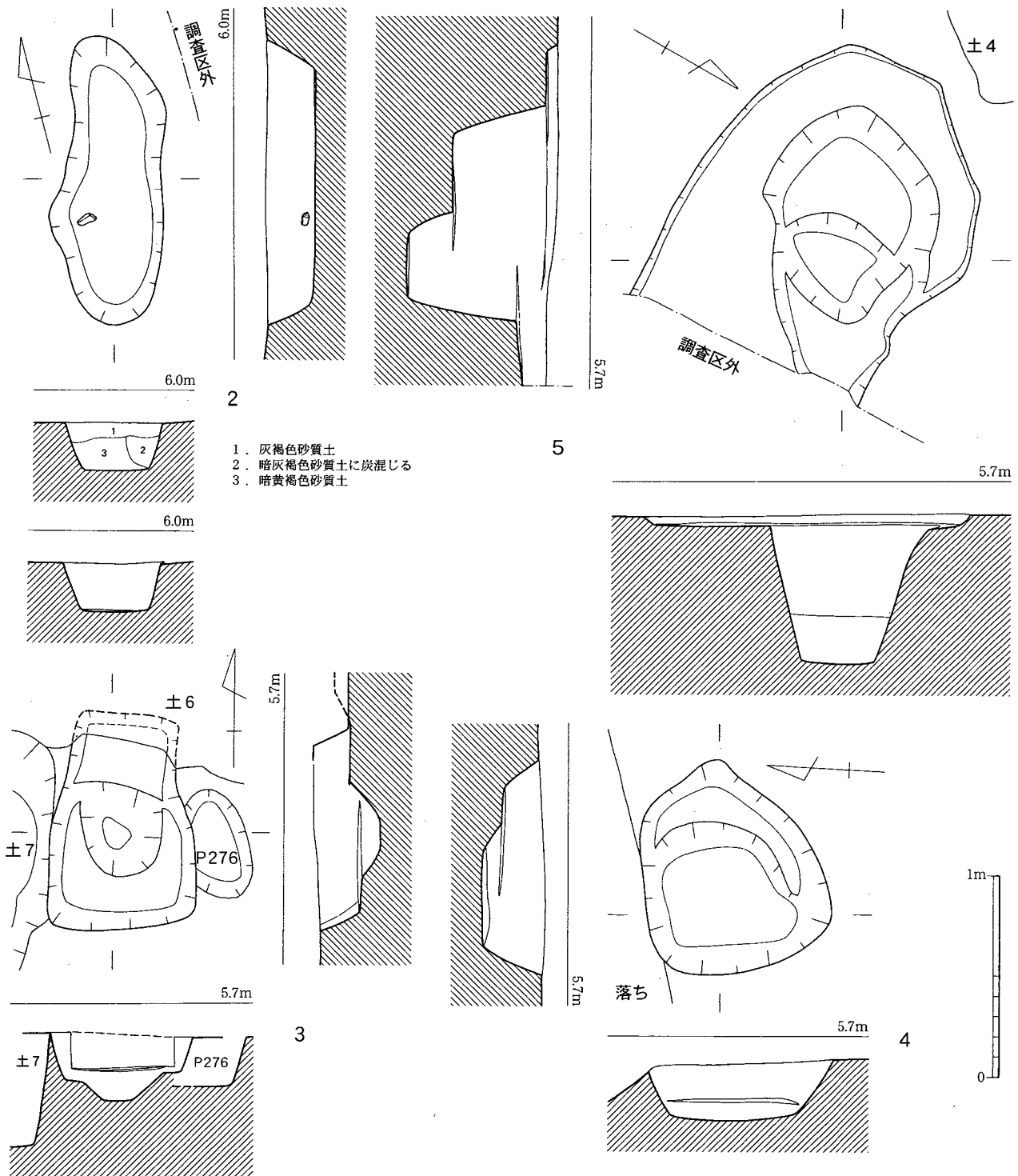
出土土器 (第58図 1・2) 1は弥生後期甕口縁部。色は黄橙色～橙褐色。2は弥生後期高坏口縁部か。色は橙褐色。

3号土坑 (図版20・21、第56図)

4区中央の狭い微高地上に位置し、6号土坑に切られ、7号土坑を切る。長軸108cm×短軸70cmの北側が狭い長台形状を呈する。土坑中央は深さ33cmとピット状に深くなり、その周囲にはほぼ傾斜が平らなテラスを2ヶ所持つ。北壁は不明であるものの、他の3方の壁はやや傾斜が急である。埋土は灰褐色粘質土。

切り合い関係及び出土土器から弥生時代後期終末～古墳時代前期前半の土坑と考えられる。

出土土器 (第58図 3～5) 3は弥生後期直口壺口縁部で、外面には疎な縦方向のミガキが残る。色は橙褐色。4は弥生後期壺頸部～胴部片で、色は灰黄褐色。5は弥生後期器台上部片で、色は灰黄色。



第56図 2～5号土坑実測図 (1/30)

4号土坑 (図版21、第56図)

4区中央、7号土坑西に位置し、土坑北の上端は落ち上端と重なる。長軸105cm×短軸92cmの不整形な五角形状の平面形態で、深さは最も深い中央部で29cmを測り、東～南側にかけてはテラスを持つ。壁の傾斜はいずれも緩やかである。埋土は暗黄褐色粘質土を呈する。

出土土器から弥生時代後期終末～古墳時代前期前半の土坑と考えられる。

出土土器 (第58図6～8) 6は弥生後期甕口縁部で、色は灰黄褐色。7は弥生後期器台下部

片。外面にはタタキを施す。内外面には黒斑が認められる。色は外黒色、内黄褐色。8は弥生中期甕口縁部で、口縁部下に低平な突帯を巡らす。色は白黄褐色～黄褐色。混入品。

5号土坑（図版21、第57図）

4区中央北東隅に位置する。土坑周囲には深さ5cmほどの段が巡るが、この段は遺構検出の際に掘り下げた段である。土坑の規模は長軸137cm×短軸98cmの長楕円形を呈し、最も深くなる中央部で深さ75cmを測り、この周囲には大きなテラスが2ヶ所存在する。深さから井戸としての役割が考えられるが、深さ50cmとなる西側のテラスや井戸中央部の規模は径50cm程度とやや小さいことから、土坑として報告する。いずれの壁の傾斜は急である。埋土上層は灰黄色粘質土、埋土下層は暗青灰色粘質土。

出土土器から弥生時代後期終末～古墳時代前期前半の土坑と考えられる。

出土土器（図版51、第58図9～12）9は弥生後期甕口縁部で、器壁が厚いもの。色は外灰褐色、内灰黄褐色。10は台付甕脚部で、外面には二次加熱痕が残る。色は暗橙褐色。11は弥生後期鉢口縁部。色は黄褐色。12は弥生後期器台下部片。色は灰黄褐色。

6号土坑（図版20、第57図）

4区中央に位置し、3・7号土坑を切る。長軸253cm×短軸104cmの大型長方形土坑で、土坑中央北～西側はトレンチを掘削したために、この部分の床面・テラス等を壊してしまった（図中の破線がトレンチを示す）。土坑床面は中央と西側が最も深く、いずれも深さ25cm程度となり、中央部と東端には低いテラスを持つ。壁の傾斜はいずれもさほど急でない。埋土は灰黄色粘質土を呈する。出土土器から弥生時代後期終末～古墳時代前期前半の土坑と判断される。

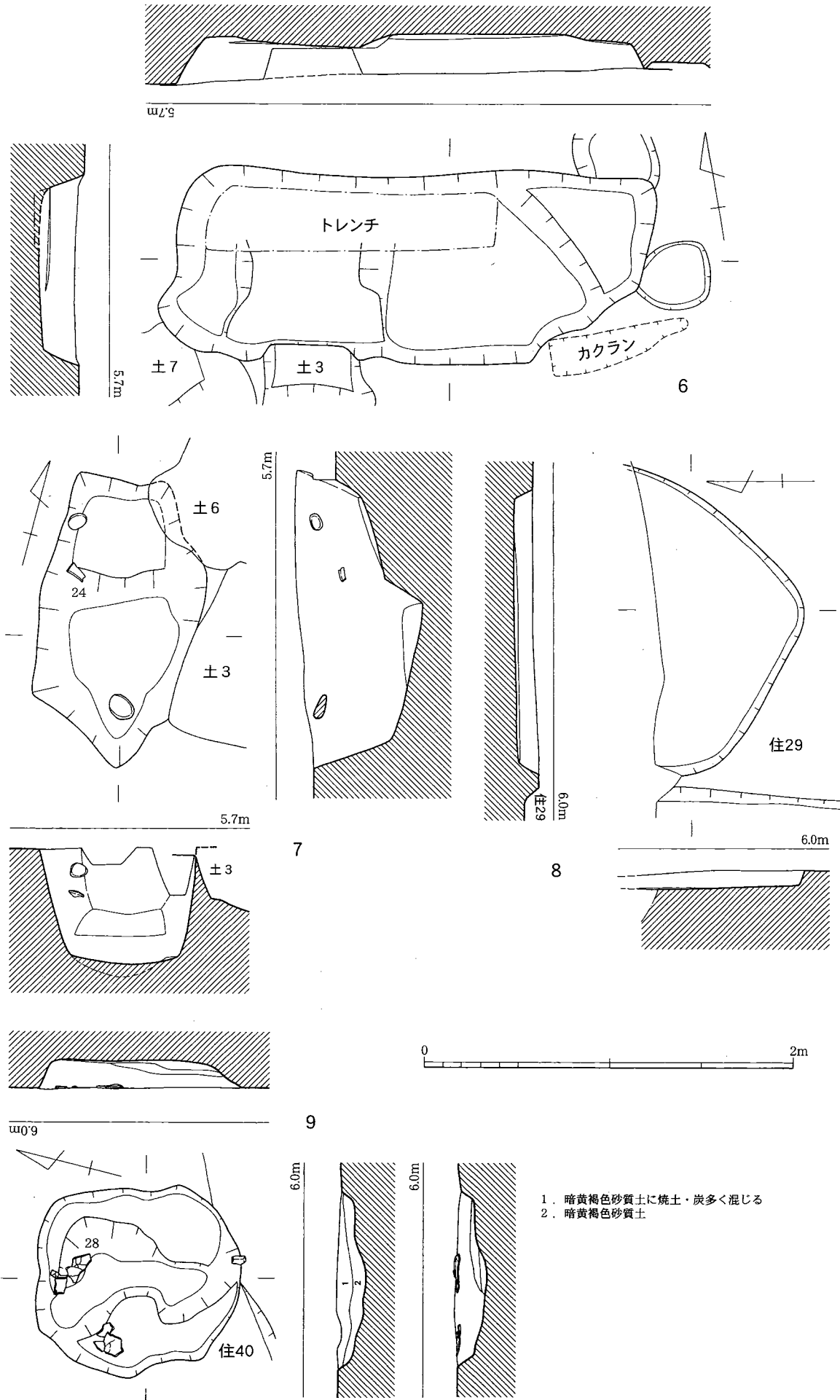
出土土器（第58図9～17）13は胴が全く張らない在地系甕で、色は橙褐色。14は弥生後期大型壺口縁部。「Y」字上に中央が窪んだ口縁両端部には工具による刻みを密に施す。色は茶褐色。15は弥生後期甕口縁部。色は黄褐色。16は古式土師器畿内V様式系精製高坏坏底部～脚部上部片。外面全体は縦ミガキ、坏部内面は横ミガキのち縦ミガキを暗文状に施す。脚部は中実で、充填法で接合する。色は淡橙褐色。17は布留系土師器高坏脚裾部。色は橙褐色。

7号土坑（図版20・22、第57図）

4区中央やや西寄りに位置し、3・6号土坑に切られる。長軸157cm×短軸90cmの南側が突出する不整形土坑で、深さは最も土坑中央部で70cmを測り、北側のテラスも深い。深さがあるため、いずれの壁の傾斜も急である。埋土上層で礫2個出土したが、使用痕が確認できなかったため、図示していない。埋土は灰褐色粘質土。

出土土器から弥生時代後期終末～古墳時代前期前半の土坑になると考えられる。

出土土器（図版51、第58図18～24）18・19は在地系広口壺である。18は直立気味の頸部から口縁部が強く外折し、端部はやや肥厚する。外面頸部以下、内面頸部は太めのミガキを施す。色は灰褐色。19は内外面ミガキ後スリップを薄く施すもので、生地は灰黄褐色。20は布留系直口壺口縁部か。色は黄褐色～橙褐色。21は在地系小型器台下部。色は黄褐色。22～24は混入品。22・23は弥生中期甕口縁部で、23の口縁部には黒斑が認められる。色はいずれも灰黄色～黄褐



第57図 6～9号土坑実測図 (1/30)

色。24は弥生中期甕で、口縁部下には1条の沈線を巡らす。色は黄橙色。

8号土坑（第57図）

4区北、南寄りに位置し、29号住居跡を切る。土坑北半分をクレークによって壊されるため、規模は長軸168cm以上×短軸80cm以上、深さ10cmほどを測る。壁の傾斜はいずれもやや急である。埋土は茶褐色砂質土。出土土器は確認できなかった。

9号土坑（図版22、第57図）

4区北中央西壁際に位置し、40号住居跡を切る。東西109cm×南北96cmの円形を呈する土坑で、深さは最も深い中央部で15cmを測り、東西には大きなテラスを持つ。北壁の傾斜は緩やかであるが、他の3方の壁はやや急になる。

切り合い関係及び出土土器から古墳時代前期前半の土坑になると考えられる。

出土土器（第58図25～29） 25・26は在地系甕口縁部。25の色は黄褐色。26の口縁部内面にはスリップの痕跡が残るが、どの範囲に塗布したかは不明。胎土も在地系甕と同様のものであるため、スリップを保管した土器の可能性もある。外・生地の色は黄橙色。27は在地系壺口縁部。口縁端部には工具による浅い刻みを密に施す。色は黄橙色。28は底部が丸底になる在地系甕胴部片。内面には二次加熱痕が認められる。色は黄橙色～黄褐色～橙褐色。29は弥生中期高坏口縁部か。色は白黄褐色。

(4) 木棺墓・甕棺墓

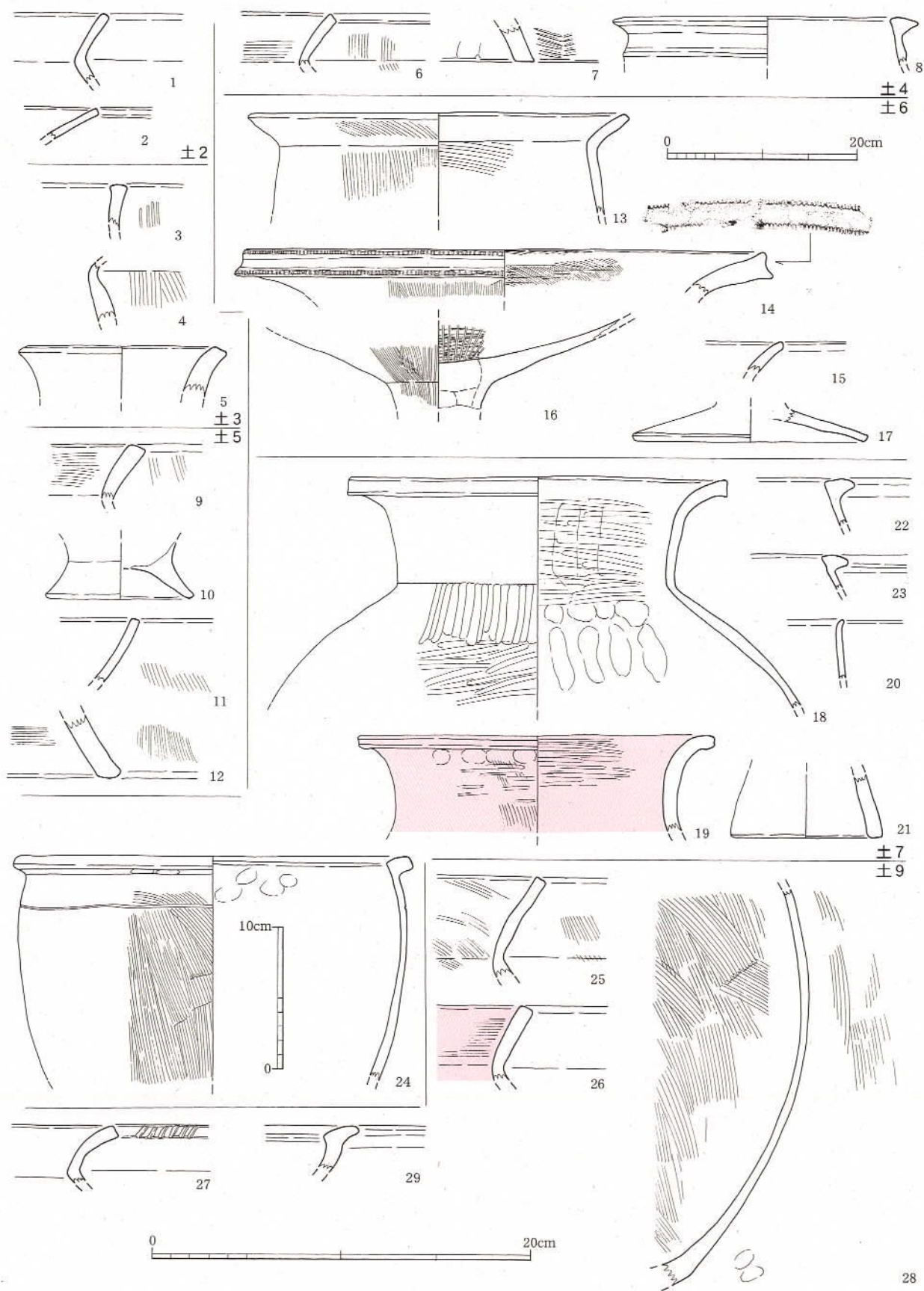
1号木棺墓（図版22、第59図）

4区南中央北西寄りに位置する。墓壇の規模は長軸139cm×短軸52cm、棺の規模は111cm×短軸36cm、深さ30cmの小型に属し、方位は北-74°-西となる。当墓は、まず墓壇を掘り、棺を設置して土で裏込するタイプで、両側板はほぼ直立するが、両木口部は外側に傾く。これは側板・木口板の掘り込みがないことから、底板上で木口・側板を箱形に組み合わせた木棺となる可能性が高く、裏込めと墓壇との間がある木口部は不安定であり、木口板が外側に倒れてしまった結果であると考えておきたい。検出面は削平されているため、2段掘りの墓壇となるかどうかは不明。出土土器から弥生時代後期に属する可能性が高い。

出土土器（第60図5・6） 5は弥生後期器台上部片で、色は白黄褐色。6は弥生中期甕口縁部で、色は黄橙色。混入品。

1号甕棺墓（図版23、第59図）

4区北中央北寄り、41号住居跡の下層に位置し、2号甕棺墓と南側で接する。41号住居跡でも先述したが、41号住居跡を造る際、当甕棺墓上面を壊し、甕棺内に礫・土を多く入れ、最終段階は住居貼床土である黄灰色砂質土で整地している。なお、断面図でみると、石・甕棺片は上・下甕中位以上にまとまるが、中位～下位にかけては住居構築前に甕棺内に流入した暗青灰色砂質土となる。墓壇周辺には多くの掘り込みが存在するが、甕棺墓墓壇に関係するものは少なく、ほとんどが住居床下掘り込みになると考えられる。



第58図 2~7・9号土坑出土土器実測図(8・22~24・29は1/4、14は1/6、他は1/3)



1・2号甕棺墓検出状況（東から）



1・2号甕棺墓完掘状況（東から）

墓壇の規模は長軸220cm×短軸93cmで、東にテラスを持ち、かつ東側が広がる墓壇形態から、東側から甕棺を挿入したことが分かるため、西が下甕・東が上甕となる。甕棺の方位は東-11.5°-南、傾斜角は10°で、合わせ口の成人棺となる。なお、下甕底部には、径5cmの焼成後穿孔が認められたが、甕棺自体がもろく、底部取り上げに失敗したため、実測図では表現できていない。

甕棺（第60図1・2） 1の下甕は平均口径67cmを測り、底部は先述したように取り上げに失敗してしまったため、欠損する。外側に良く伸びる口縁外端部とは対照的に、口縁内端部は内側への突出が弱い。口縁下8cmの位置には径4cmほどの外→内方向の焼成後穿孔が認められ、先述したように底部にも径5cmほどの穿孔が認められた。胴部中位から少し下がった位置に、端部がやや上を向く、1条の三角突帯を巡らす。外面は突帯以上がハケのちナデ、突帯以下は突帯付近以外縦ハケが残る、内面全体はナデ調整。外面突帯以上の1

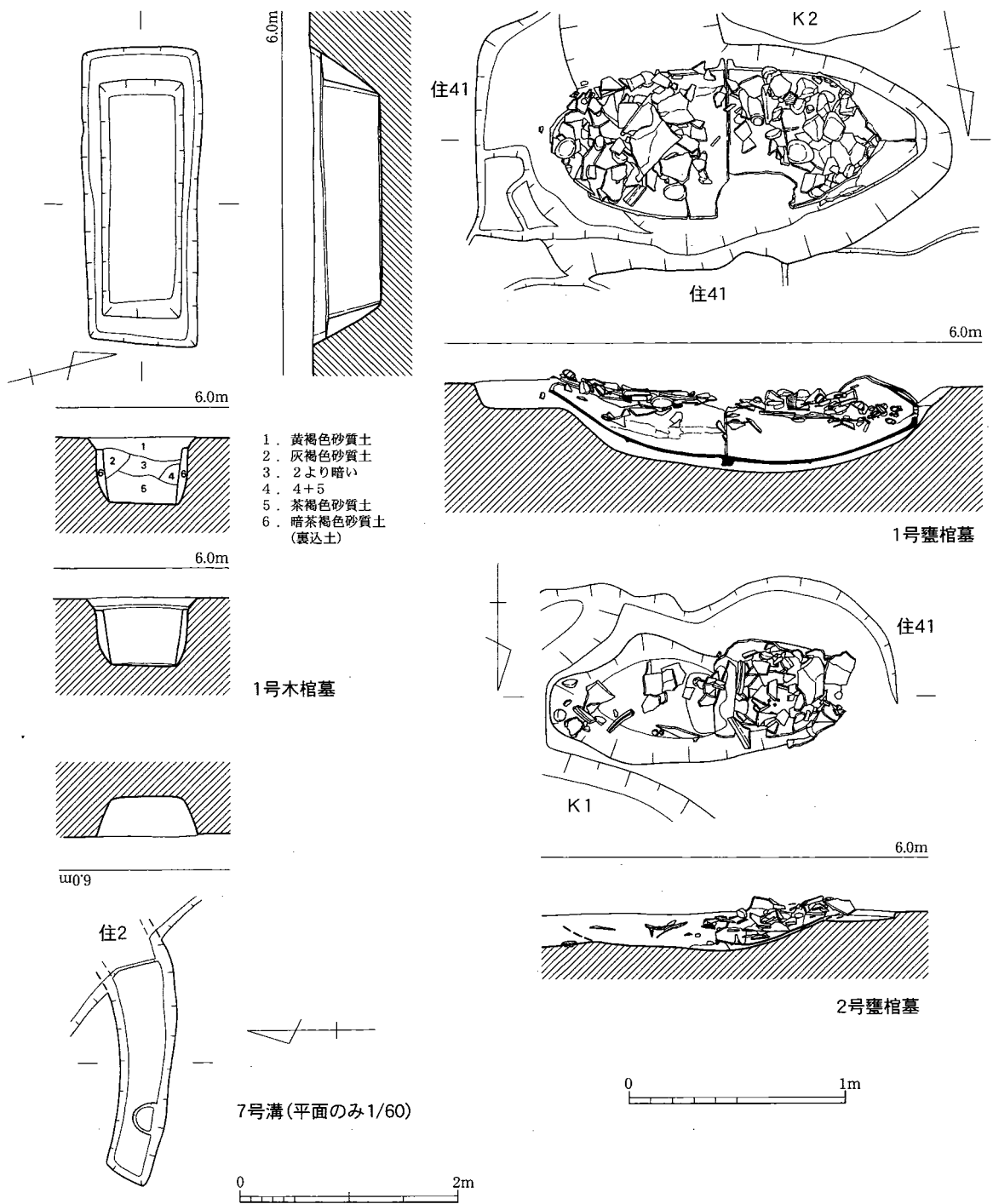
／4は黒斑、口縁部内面には10×15cm程度の黒斑が4ヶ所認められた。口縁部内面は甕棺焼成時の支えに関係するものと考えられる。色は内外面とも橙褐色を呈する。甕棺型式はKⅡb式。

2の上甕は下甕と比べ、口縁外端部の突出は弱い、内端部の突出は強い。胴部中位に下甕と胴形態の突帯を巡らし、底部は欠損しているものの、厚さ3.2cmになるか。突帯以上は突帯付近を除き、縦ハケのちナデ消し、突帯下部は突帯付近以外縦ハケが残るが、一部ナデ消した箇所もある。内面は基本的にナデ調整であるが、上部の一部にはナデ調整前の工具ナデ痕が残る。黒斑は外面底部付近に1ヶ所存在し、内面は突帯以上で2ヶ所帯状に認められた。色は外灰黄色～茶褐色、内茶褐色。上甕と同じく、甕棺型式はKⅡb式。

2号甕棺墓（第59図）

4区北中央北寄り、41号住居跡の下層に位置し、1号甕棺墓墓壇と北側で接する。当甕棺墓は1号甕棺墓よりレベルが高い位置にあったため、下甕のほとんどを抜き取られ、上甕も下1/3ほどしか残存していない。また1号甕棺墓と同じく、甕棺内に土・礫を入れ埋めており、最終段階に41号住居貼床土である黄灰色砂質土で整地する。

墓壇の規模は現状で長軸160cm×短軸80cmで、東側の墓壇が低くなることから、東側が下甕・西側は上甕となる。甕棺の方位は東-0°-南、傾斜角はほぼ水平で、合わせ口の小児棺となる。合わせ口部には暗灰褐色の粘土が認められた。また上甕内埋土には人の歯が混じっていたが、



第59図 1号木棺墓、1・2号甕棺墓、7号溝実測図(1/60、1/30)

甕自体と接せず、浮いていたことから、甕棺墓を壊した際にバラバラになってしまった可能性が高い。なお、この歯は非常にもろく、取り上げは行ったものの、鑑定できなかった。

弥生中期前半の甕棺墓であるが、上下甕棺とも1号甕棺よりやや古い形態となる。

甕棺(第60図3・4) 3・4とも丸みを帯びた系列となる小児棺である。

3の下甕は残りが悪く、口縁部と胴部は点線で復元したものとなる。口径43cmを測る、厚い「コ」の字状の口縁部の内外面は細かいミガキで調整する。丸みを帯びる胴部は最大径が胴部

上位となり、胴部中位より下がった位置に低平な三角突帯を巡らす。色は灰黄色～黄橙色。

4の上甕は口径47cmを測る玉縁状の口縁で、口縁部下には低平な三角突帯を1条巡らす。強く内湾する口縁部から続く胴部は丸みを帯び、最大胴部径は胴部上位となり、胴部下位には低平な三角突帯を1条巡らせる。口縁部外面は口縁部～突帯及び胴部突帯付近以外は縦ハケが残り、内面はナデ調整を行う。外面最大胴部径付近に径5cmほどの黒斑が1ヶ所認められる。色は外灰黄褐色～灰橙褐色、内灰色～灰黒色。

(5) 溝

7号溝 (第59図)

4区南中央に位置するやや南側に湾曲する東西溝で、第1面2号住居跡に切られる。現状で長さ230cm以上×幅65cm、深さは西端が15cm、中央が18cm、東端が15cmを測る。床面では床面から10cmほどを測るピット状に深くなるものが存在する。溝埋土は上層が明黄褐色砂質土、下層が明茶褐色砂質土となる。

出土土器で図示できるものはないが、切り合いから弥生時代後期の溝となる可能性が高い。

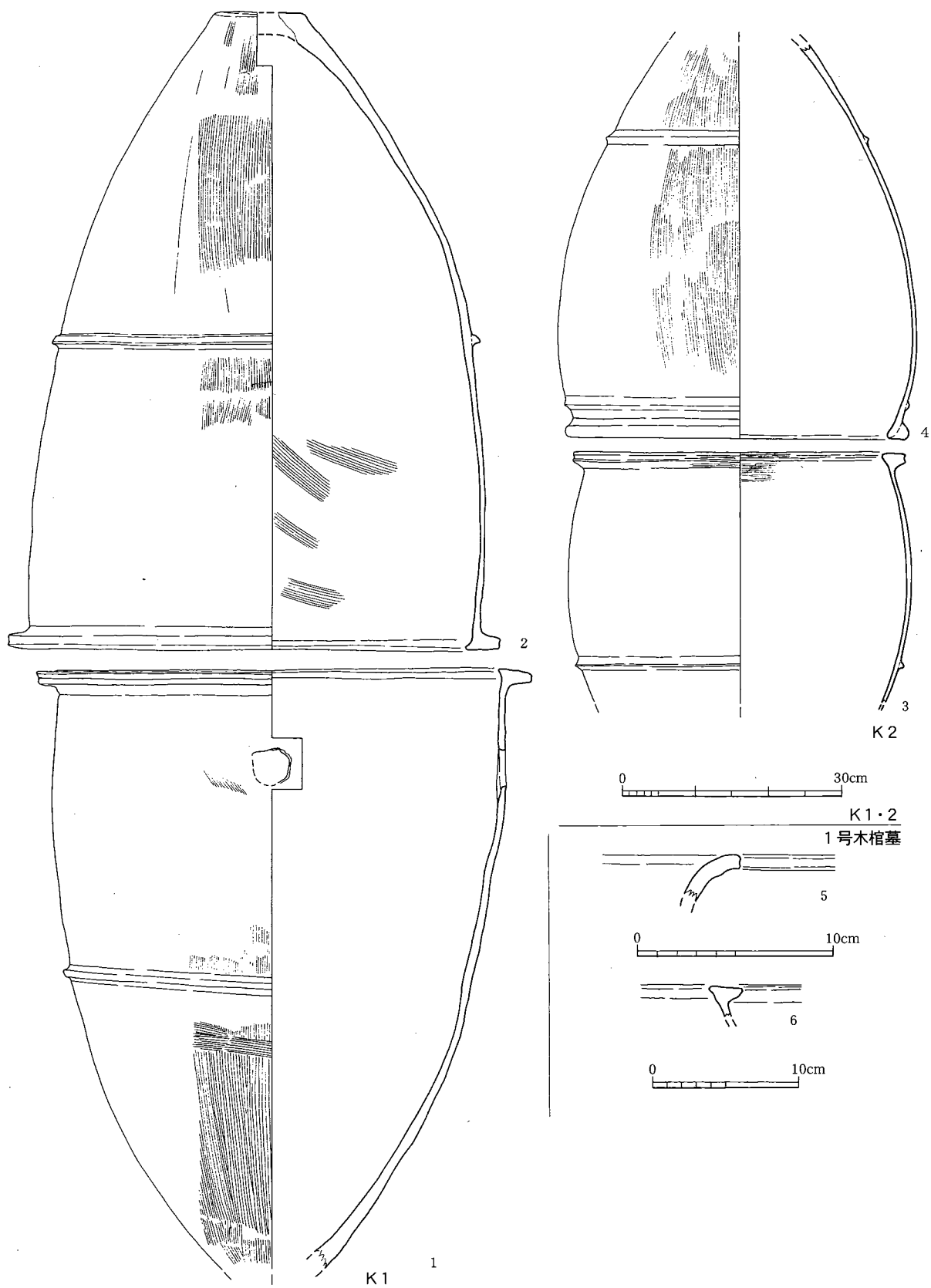
(6) ピット・遺構面等出土土器

ピット出土土器 (第61図1～9)

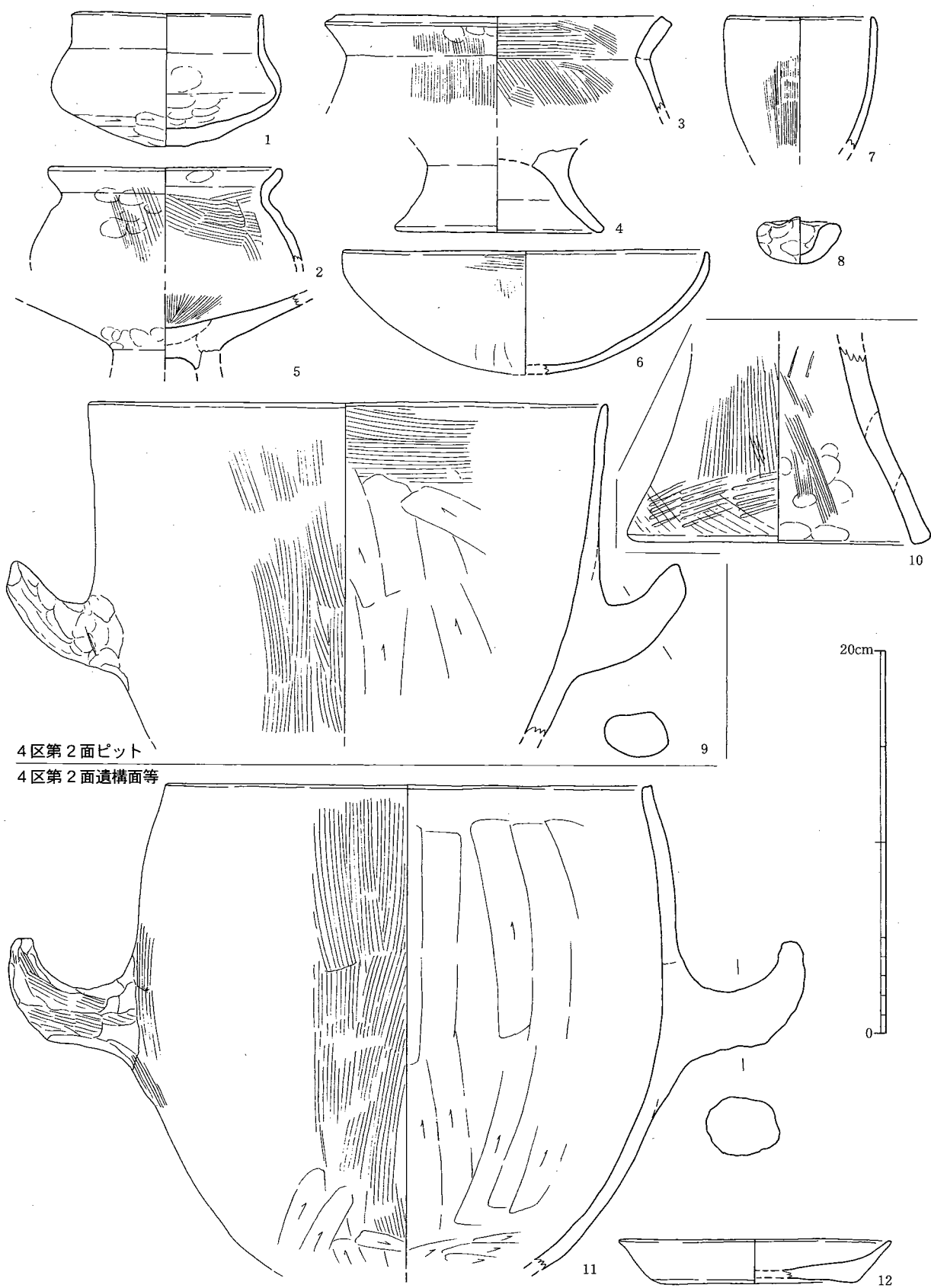
1は弥生後期の直口丸底壺で、わずかに平底を残し、底部外面には黒斑が残る。色は黄褐色。P285出土。2は弥生後期小型粗製甕で、胴部中位にはススが付着する。色は暗黄茶褐色。P236出土。3は器壁が厚めの弥生後期甕で、色は黄褐色。P307出土。4は弥生後期台付甕脚部で、内外面とも二次加熱痕が認められる。色は赤褐色～黄橙色。P291出土。5は弥生後期高坏下部～脚上部片。坏部内面には縦ミガキを施し、充填法で接合される脚部との接合部には刻みを施し、貼り付けやすくする。色は黄茶褐色。P273出土。6は弥生後期鉢。外面は二次加熱による剥離が顕著である。色は橙褐色。P307出土。7はコップ状を呈する弥生後期鉢で、色は灰黄褐色。P307出土。8は弥生手捏ね土器で、完形品。色は灰黄褐色。P295出土。9は土師器甕。口縁部内面は横ハケのちケズリを行った珍しいもの。口縁部内外面にはススが付着し、把手下部には黒斑が認められる。色は外灰黄褐色～こげ茶色、内灰黄色。P295出土。

遺構面等出土土器 (第61図10～12)

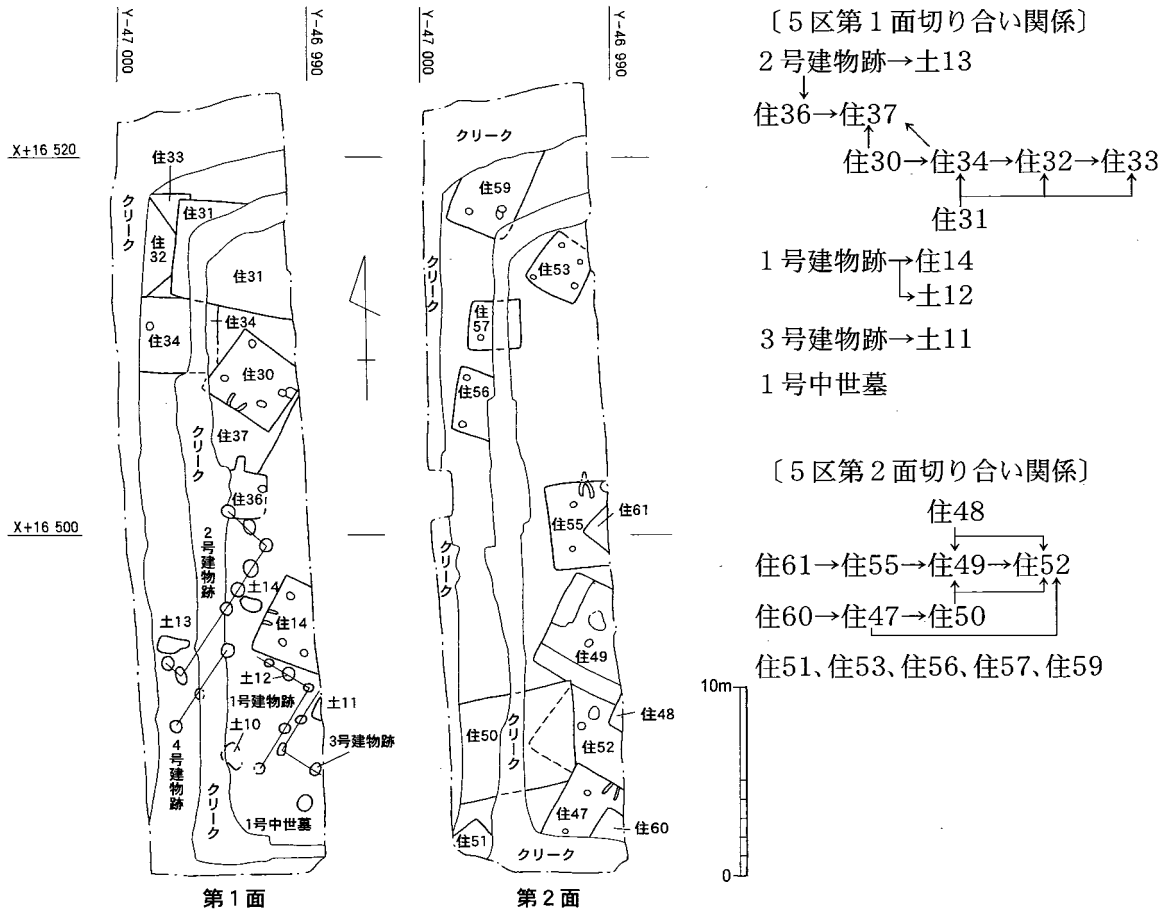
10は弥生後期器台下部。底部外面には左上がり→右上がりのタタキ痕が残り、その後ハケ調整を行う。色は灰黄褐色。11は丸みを帯びた土師器甕で、外面底部付近はハケのちケズリ、把手部分は把手を接合する際にナデのちハケを施す。色は淡橙色。12は土師器坏aで、外面底部はヘラ切りのちナデ調整。口縁部内面には黒斑が認められる。色は外灰橙褐色、内黄褐色～橙褐色～黒色。



第60图 1·2号甕棺、1号木棺墓出土土器实测图 (1/8、1/3、1/4)



第61図 4区第2面ピット、遺構面出土土器実測図(1/3)



第62図 5区第1・2面遺構配置図 (1/400)

6. 5区第1面の検出遺構と遺物

(1) 概要

5区第1面は、4区北端とは水路を挟んで6m北、北の藤の尾垣添遺跡6区南端から旧河川を挟んで100m南に位置する、南北38m、東西約9.5m、面積370㎡の調査区である。第9図の断面図を見ると、当区は4区北をピークとして北側に緩やかに傾斜する自然堤防上に立地する。

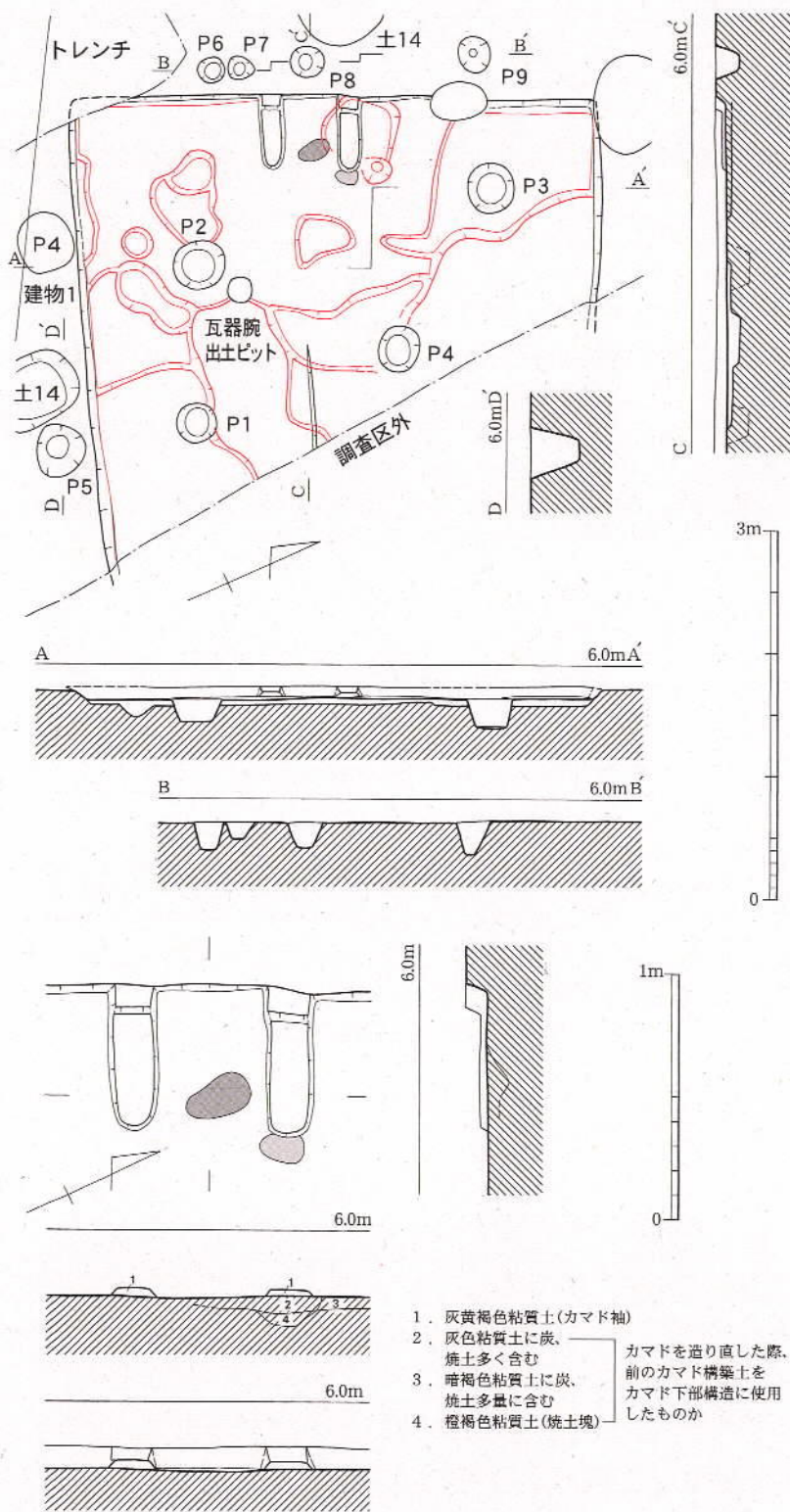
検出した遺構は竪穴住居跡8棟・掘立柱建物跡4棟・土坑5基・中世墓1基・ピット多数を検出し、特に北側の旧河川沿いに竪穴住居群がまとまって分布する。また当区中央・西・北にはクリークが存在し、特に中央～西のクリークで挟まれた南北に長い部分では、地山及び埋土に鉄分が多く沈着していたため、地山と遺構埋土の区別が非常に困難であり、カマドを持つ竪穴住居以外の遺構は検出することができなかった。

遺物はパンケース30箱分出土した。

(2) 竪穴住居跡

14号竪穴住居跡 (図版24・25、第63図)

5区中央東壁際に位置し、1号掘立柱建物跡P4と南壁で接する。住居東半分が調査区外となるが、住居規模は現状で南北420cm×東西388cm以上、深さ10cmを測るやや東側が狭くなる方形住居となる。西壁中央にはカマドが付設され、住居埋土は暗黄褐色粘質土となる。住居床面

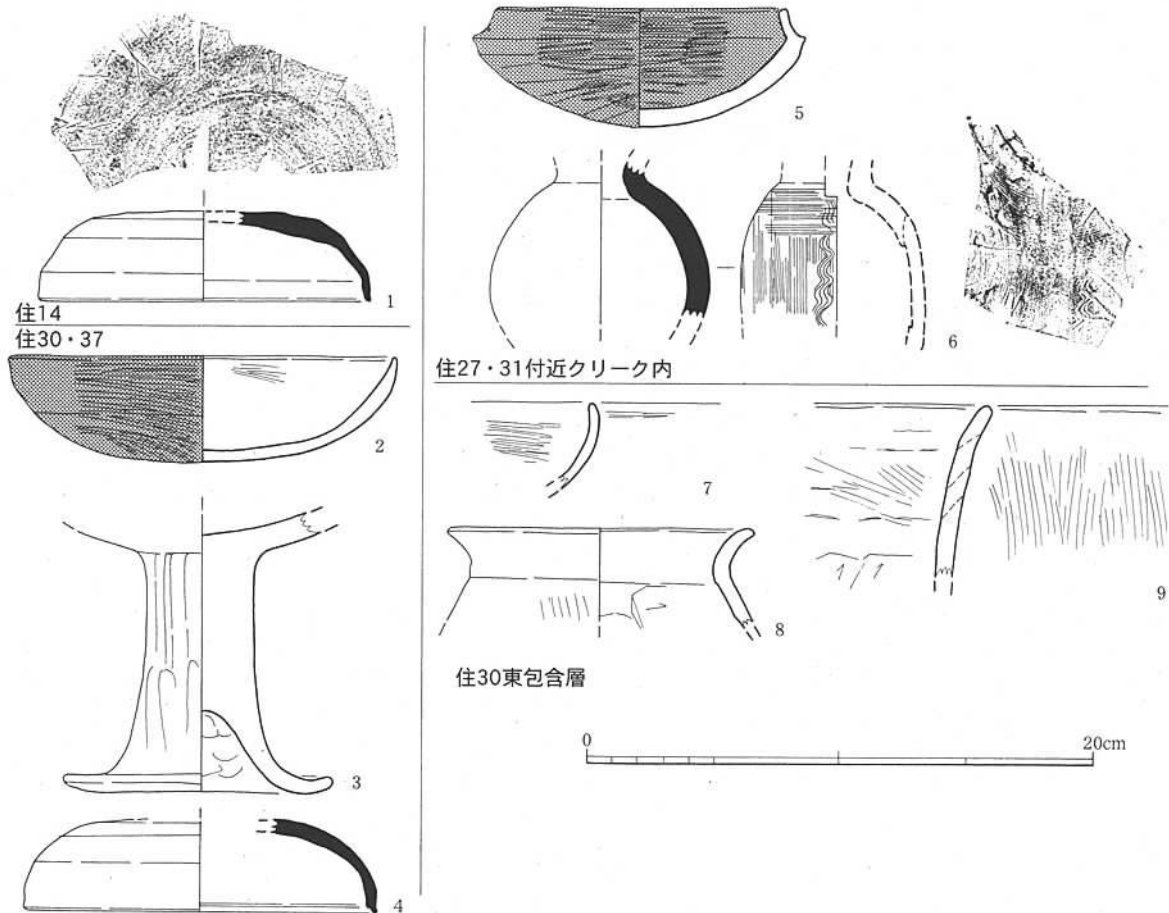


第63図 14号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60、1/30)

から南に37cmの箇所、25×17cmの範囲に広がる弱い焼面を検出した。焼面幅は焼面中心で幅43cm、奥壁で幅42cmを測る直線的な袖となる。右袖先端部で18×12cmの範囲に薄く炭が広がるが、カマドから掻き出した土が広がったものと考えられる。カマドの下層にあたる2～4層

ではピットを4基検出し、P1～3が支柱穴となるのは確実であるが、P4は位置的にやや内側に寄っていることから、支柱穴とするには躊躇する。住居床面下全体で深さ5cm程度の浅い掘り込みを確認した。なお、断面図B-B'・D-D'で示した住居西側のピット4基(P6～9)、住居南側のP5は住居の壁に沿うように並ぶこと、P1-2の支柱穴を結んだ延長線上にP6・7が位置することから(P1-P5、P3-P9も支柱穴線上に位置する可能性あり)、当住居跡の支柱穴的なピットになる可能性がある。

出土土器から古墳時代後期後半の住居と考えられる。なお、当住居覆土内から砥石が出土した(第99図3)。カマド(第63図)住居西壁中央に付設されたカマドで、壁から60cmほど突出する両袖を持つ。カマド埋土には焼土・炭をあまり含まず、調査当初はカマドが存在するとは考えていなかったため、両袖手前側大半を掘り飛ばしてしまい、この部分の袖は高さ3cmほどしか残存していない。焼面奥壁



第64図 14号竪穴住居跡、30・37号竪穴住居跡覆土上層、30・31号竪穴住居付近クリーク内、30号竪穴住居跡東包含層出土土器実測図（1/3）

は焼土・炭を多量に含むことから、カマドを造り直した際に、造り直す前のカマドの構築土を造り直したカマドの下部構造に使用した可能性がある。

出土土器（第64図1） 図示できるのは1のみである。1は歪みがある須恵器坏蓋で、外面天井部にはヘラ記号が1本のみ残る。外面には自然釉が付着し、色は外灰色～黒色、内灰色。

30号竪穴住居跡（図版25・26、第65図）

5区中央北東寄りに位置し、37号住居跡を切り、34号住居跡も切るか。住居北東隅は調査区外、住居南西隅はクリークにより壊される。現状で東西430cm×南北375cmのやや東西に長い長方形住居となる。当初、30・37号住居跡、30号住居跡包含層を同じの一つの大型住居跡として調査したため、出土土器が混ざってしまった。この混ざった土器は、当住居跡出土土器の中で報告する（第64図2～4）。また、検出面から20cmほど下がったレベルで



30号住居跡出土状況(1)（北北西から）



30号住居跡出土状況(2) (北東から)

住居ラインを確定したため、現状では住居跡の深さは10cmほどとなるが、本来は30cmほど壁が残存することとなる。

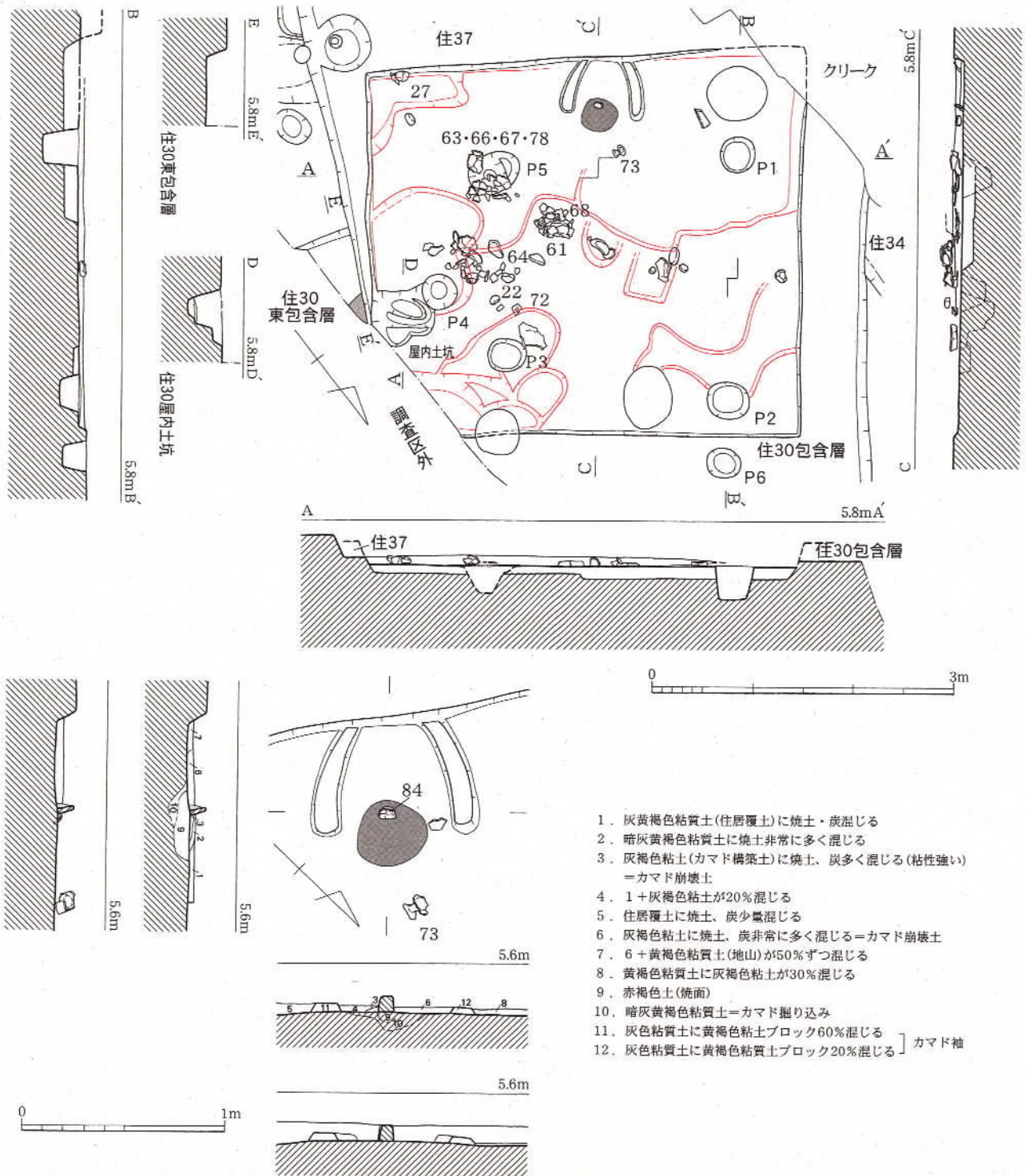
住居南壁中央にカマドを付設するが、カマドと住居跡の主軸が一致しない。本来なら他の住居跡と同じくカマド主軸で断面図を作成すべきであるが、カマド主軸が支柱穴を結んだ軸とも一致しないため、3区第2面24号住居跡と同じく、住居主軸の方を優先して、断面図を作成した。床面上では、東西60cm×南北55cmの長楕円形を呈する屋内土坑を住居東壁際やや北寄りで見出した。屋内土坑の深さは最も深い中央部で深さ35cmを測り、北・西側にはテラスを2つ持つ。また、ピットを5基検出し、P1・2・4・5が支柱穴となる。なお、P5の深さについては、ピット下端のレベルを記録し忘れたため、推定の深さを点線で示す。さらに、P1-2を結んだ線の延長線上に位置するP6は当住居跡の支柱穴となる可能性がある。

覆土上層～床面付近まで多量の土器が出土したが、床面直上の土器は少なく、床面から浮いた住居東側で土器が集中することから、ほとんどが住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。特に南壁に張り付いて出土した土師器甕(27)、カマド前面床直上で出土した土師器高坏(73)は注目される。住居埋土は灰黄褐色粘質土。

なお、当住居跡東には深さ20cmを測り、床面北側には焼土・炭が弱く広がる焼面を持つ、30号住居跡東包含層や当住居跡北・西には30号住居跡包含層が存在する。

出土土器から古墳時代後期後半の住居跡と考えられる。なお、当住居覆土から砥石2点(第99図4・5)、磨石2点(第102図22・23)、覆土上層から磨石1点(第102図25)が出土した。カマド(第65図) 住居南壁中央に付設されたカマドである。住居跡と同じく、本来は残りの良いカマドであったと想定されるが、上部を掘り飛ばしてしまい、両袖とも床面からの高さが4cmのみ残存する。また先述したように、カマドと住居主軸が一致していないが、カマド個別図ではカマドの主軸で断面図を作成した。袖は右袖が63cm、左袖が56cm壁から突出し、土製支脚・焼面を囲むように内湾する袖形態となる。当遺跡では直線か「ハ」の字状を呈するものがほとんどであり、袖内湾形態のカマドは当住居と55号住居跡のみである。カマド燃焼部奥壁から手前40cmの位置に土製支脚が、またその周囲径33cmの範囲にかなり硬化した焼面を検出した。燃焼部幅は支脚部分で幅53cm、奥壁部分で幅28cmを測る。土製支脚は支脚固定ピットで支えるのではなく、燃焼部床面を若干掘り窪め、奥壁側を粘土(赤褐色粘土であることから、カマド構築土を再利用したものである可能性がある)で固定し、使用したものとなる。カマド土層図では3・6がカマド構築土が崩落した土、9層が硬化面、10層がカマド掘り込みとなる。出土土器(図版53～55、第64・66～71図) 先述したように、30・37号住居跡出土土器は混ざってしまったため、当住居跡出土土器の中で30・37号住居跡出土土器は報告し、また30・31号住居跡付近クリーク内及び30号住居跡東包含層出土土器も合わせて報告する。

30・37号住居跡出土土器(第64図2～4) 2は土師器椀形坏で、外面には黒塗りを施す。生



第65図 30号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60、1/30)

地は黄茶褐色。3は土師器高坏下部～脚部で、中実の長い脚柱部を持つもの。脚裾部は反り返る。色は橙褐色で、坏部内面のみ黒色となる。4はやや歪みがある須恵器坏蓋。口縁端部はナデにより窪み、色は暗灰色～暗赤褐色。

30・31号住居跡付近クリーク内出土土器(第64図5・6) 5はほぼ完形の土師器模倣坏で、厚い器壁となる。短い口縁部と底部との境の稜は明瞭であり、内外面黒塗りを施す。生地は暗

灰黄色。6は厚い器壁の小型須恵器提瓶で、外面には縦→横方向のカキ目を施し、側面部にはカキ目のち3条の櫛描波状文が認められる。色は灰色。

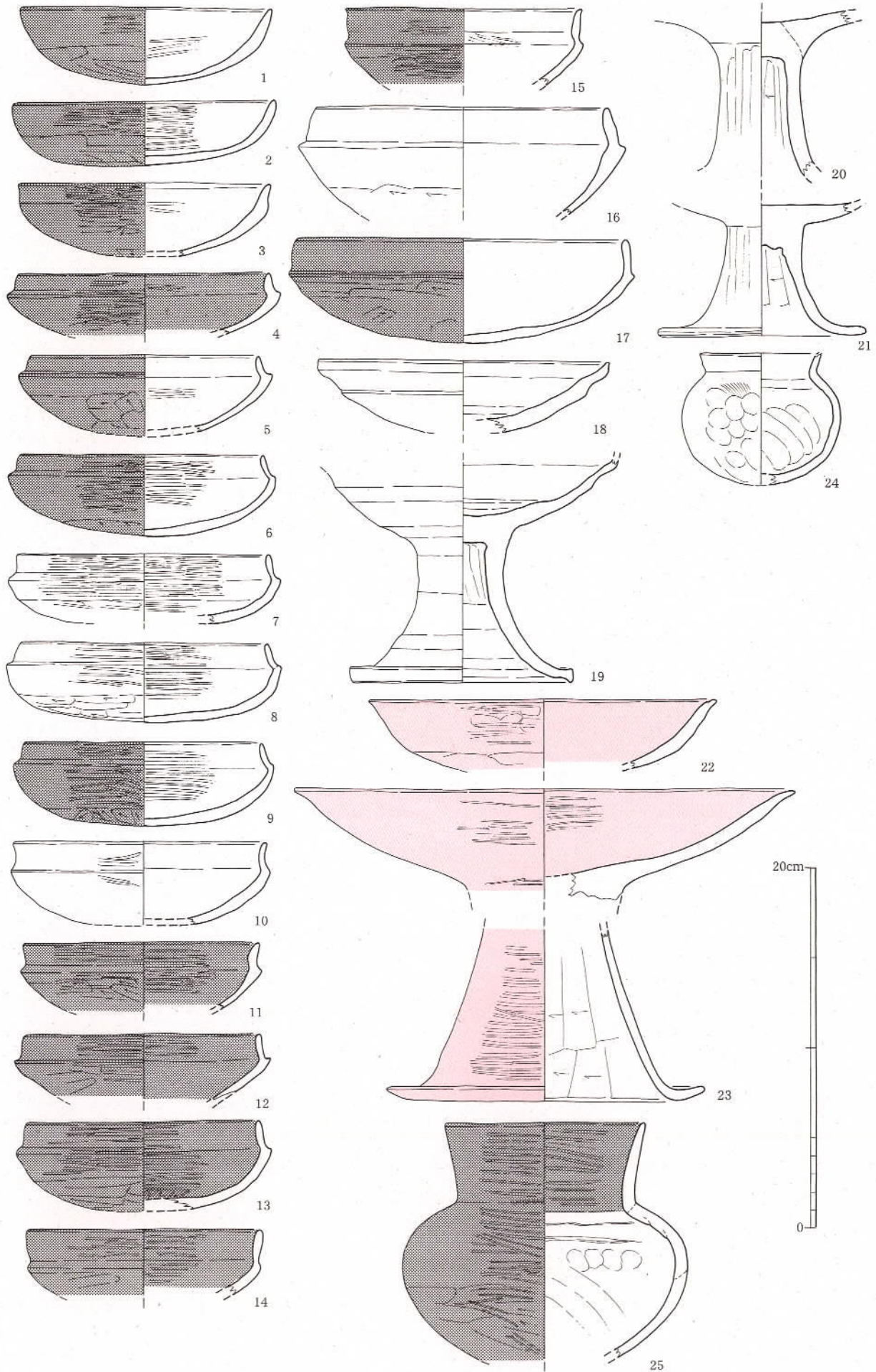
30号住居跡東包含層出土土器（第64図7～9） 7は土師器碗形坏で、色は橙褐色。8は小型土師器甕で、色は暗茶褐色～暗黄褐色。9は土師器甕口縁部で、内面には粘土継ぎ目が明瞭に残り、粘土継ぎ目から幅1.5cm前後の粘土紐の使用が想定される。外面には黒斑が認められる。色は外白黄色～淡橙褐色～黒色、内橙褐色。

30号住居跡覆土上層出土土器（第66～69図1～59） 1～3は皿状を呈する土師器坏。いずれも口径14cm前後、器高4cm前後を測り、外面のみ黒塗りするという規格性が認められる。3の口縁部外面は強い横ナデにより窪む。1・2の内面及び生地の色は橙褐色、3の内面の色は灰白色、生地は橙褐色を呈する。4～17はいずれも受口部が明瞭な土師器模倣坏である。4～9は口縁部の立ち上がりが高く弱く内湾するもの、10・11は口縁部が外反、12・13は口縁部が直線的に内傾するもの、15は口縁端部が外反するもの、16・17は大型品という分類になる。4～15はいずれも口径15cm前後、器高4.5cm前後を測る、規格性が高いもの。5・6、9・15・17は外面のみ、4・11～14は内外面に黒塗りを施す。4は底部付近のみ手持ちヘラケズリを施し、生地は暗灰黄色。5の色は橙褐色。6は完形品で、底部付近のみ手持ちヘラケズリを施す。色は橙褐色。7は口縁部を肥厚させるもので、色は橙褐色。8の外面底部付近には黒斑が認められ、色は灰茶色。9は底部付近のみ手持ちヘラケズリを施すもので、色は橙褐色。10の色は橙褐色。11の生地は灰黄褐色。12の生地は肌色、13・14の生地は橙褐色。15の色は橙褐色。16は直線的に内傾する口縁部で、外面体部は二次加熱により一部器壁が剥離する。色は赤褐色～黒色。17は受部が痕跡的で、稜状となるもの。口径18.4cmを測り、口縁部はほぼ直立する。色は灰黄褐色～橙褐色。

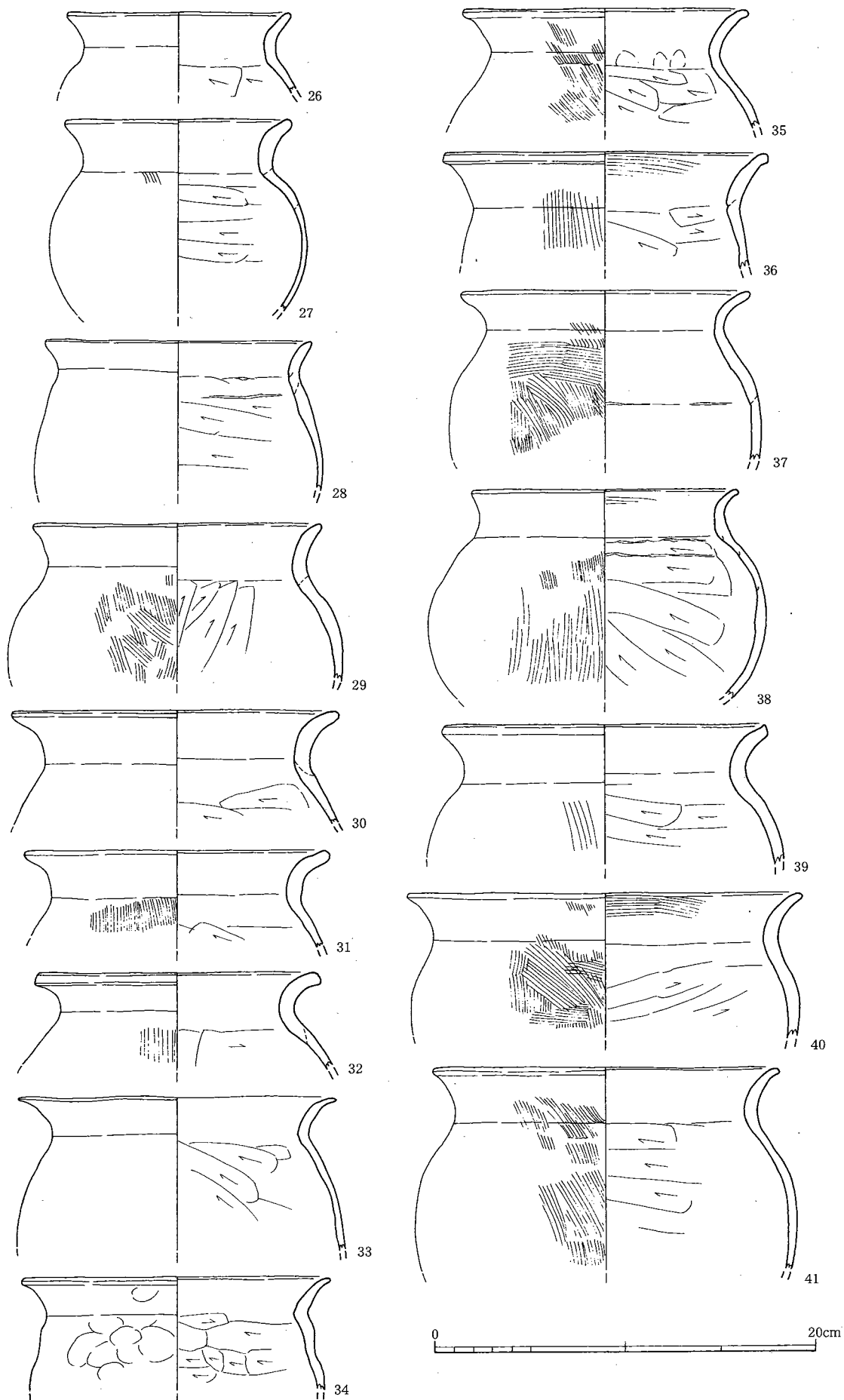
18・19は坏部外面中位に鈍い稜を持ち、口縁部が短く直立する土師器高坏。18は稜部分に工具による沈線が巡る。色は橙褐色。19は口縁端部が欠損するもので、坏部及び脚部裾部外面には黒斑が認められる。胎土にはやや大きめの細粒を含み、色は外白橙褐色、内白橙褐色～灰白色。20・21は土師器高坏脚部。脚部外面はいずれもヘラナデを施す。20は付加法で坏部と脚部を接合したもので、色は淡橙色、21の焼成はやや甘く、色は灰橙色。22・23は坏部が大きく皿状に開き、坏部内外面、脚部外面にスリップを塗布する土師器高坏。このような形態の高坏は古墳時代後期後半の矢部川流域の遺跡に良く見られる資料である。22は歪みがあり、生地は黄橙色。23の坏・脚部は胎土・色調から同一個体となると考えられるが、図上復元すると脚部が長くなりすぎてしまったため、図上復元は行っていない。坏部口径は19cmを測り、脚部との接合部には刻みを施し、脚部裾部は反り上がる。生地は橙褐色。24は土師器小型丸底壺で、色は白黄褐色。25は土師器中型丸底壺で、外面全体、口縁部内面には黒塗りを施す。胴部下位には手持ちヘラケズリ痕が残る、胴部内面には粘土継ぎ目痕が残る。生地は淡橙褐色～茶褐色。

26～51は土師器甕で、26・27は小型、28～41は中型、42～48は普通サイズ、49～51は大型の甕となる。26～31・33～35・37～41・44・46の外面・口縁部内面にはススと二次加熱痕が認められる。28・36・40・43・44・45・49・51の外面には黒斑が認められる。

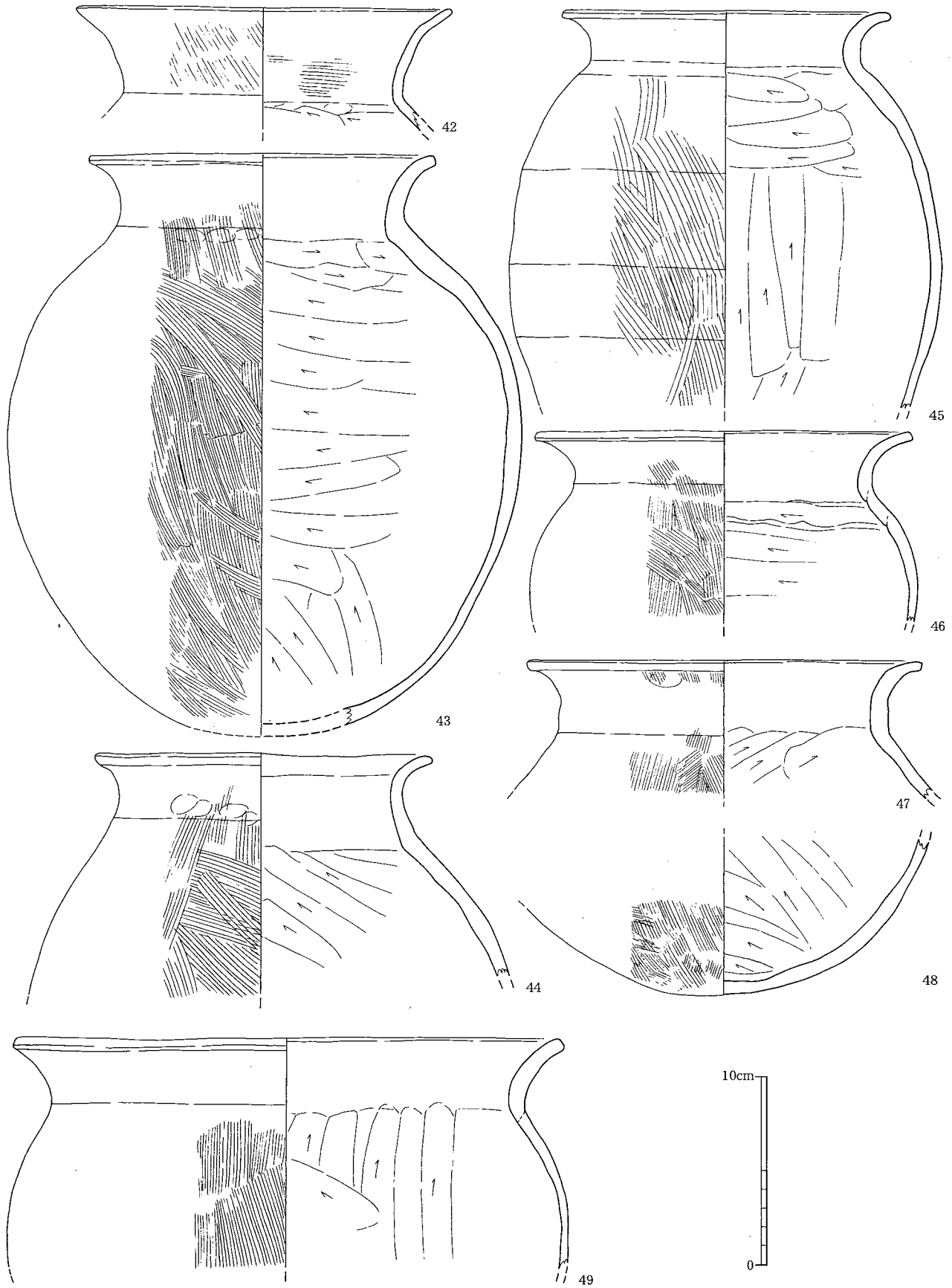
26・27は球形の胴部で、口縁部が強く外反するもの。26の色は灰黄褐色が基調、27の色は橙褐色が基調となる。28・29は口縁部の外反が弱いもので、29の内面ケズリは縦方向となる。28



第66图 30号竖穴住居跡出土土器実測図(1) (1/3)



第67图 30号竖穴住居跡出土土器実測图(2) (1/3)

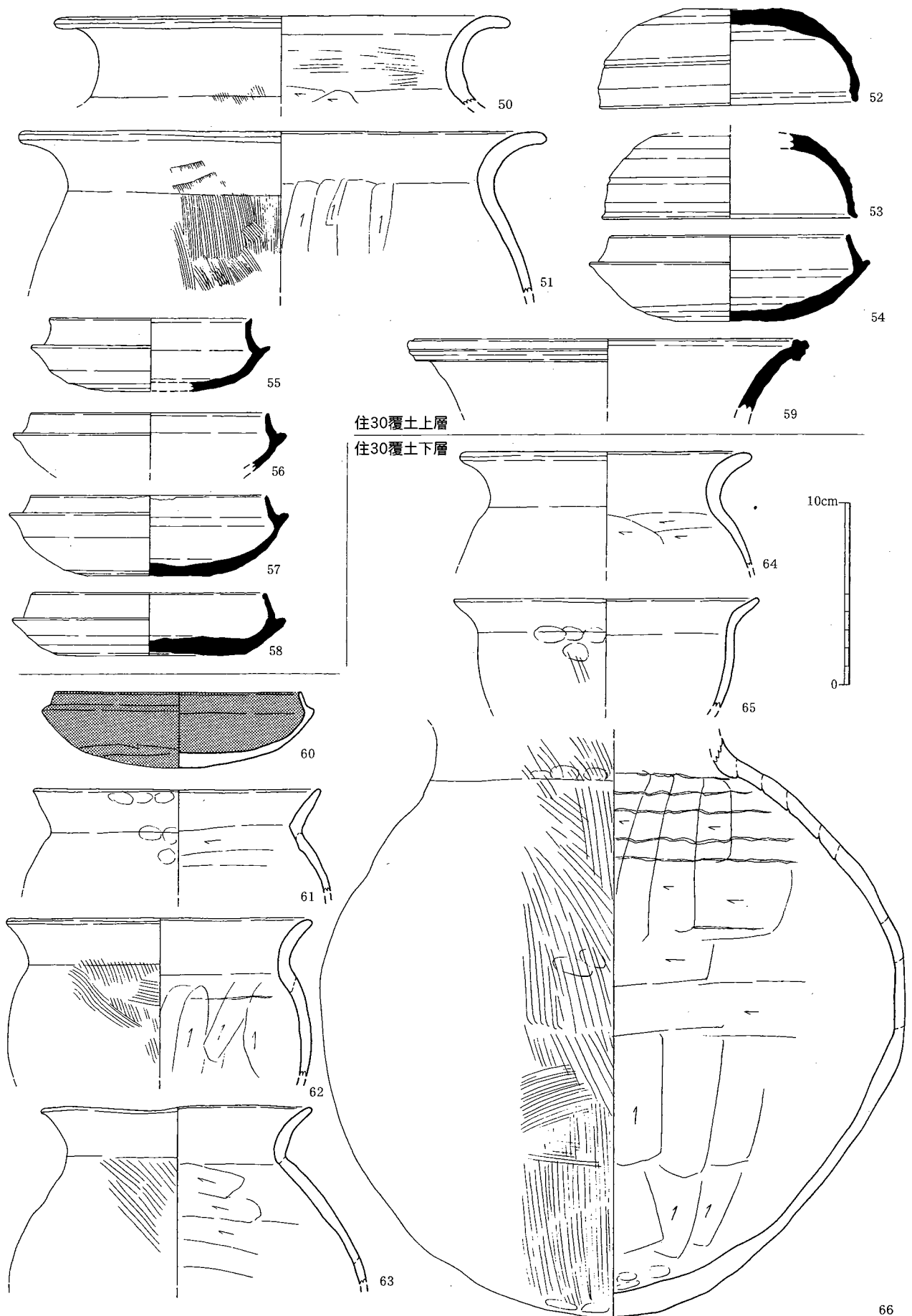


第68图 30号竖穴住居跡出土土器実測図(3) (1/3)

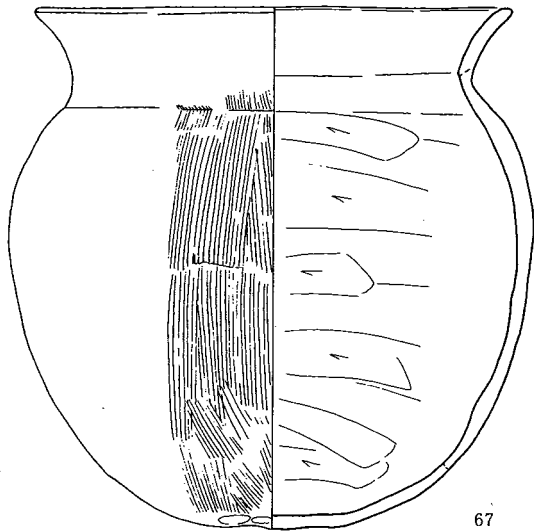
の色は黄橙色が基調、29の色は黄茶褐色が基調となる。30～32は器壁が厚く、外反が強いもの。色は30は橙褐色、31は黄橙褐色、32は灰黄褐色を基調とする。33～35は器壁が薄いもの。33の色は暗黄褐色を基調とする。34は内面頸部付近に短いケズリを施すもので、色は灰黄褐色～橙褐色を呈する。35の色は外橙褐色、内暗茶褐色。36は肩が張らない胴部に強く外反する口縁部を持ち、口縁端部は玉縁状を呈する。色は橙褐色。37の粘土は精良で、色は黄褐色～淡橙褐色を基調とする。38～41は次第に口縁外反度が増すように配置した。38の胴部外面は二種類のハケ工具を用いるもので、内面は黒化する。胴部内面上位には粘土継ぎ目痕が認められる。39は口縁端部の内面に横ナデを施すことにより窪む。色は黄褐色。40は肩が張らない胴部で、色は灰黄色。41は器壁が薄く、色は暗橙褐色を基調とする。42は口縁部が長く、器壁が薄いもの。色は橙褐色。43は底部以外がほぼ完形のもので、口径18.5cm、復元器高31cmを測る。色は灰黄色。44～47は口縁部が強く外反するもの。44は肩が張らない胴部で、色は淡橙褐色。45は胴部外面に凹凸が顕著なため、短く粗いハケとなる。色は灰黄色。46は長い口縁部で、胴部内面上位には粘土継ぎ目痕が認められる。色は黄褐色を基調とする。47の色は橙褐色を基調とする。48は甕底部で、色は灰黄褐色。49は口縁部が胴部よりもかなり器壁が厚くなるもので、色は灰黄褐色～橙褐色を基調とする。50・51は口縁部が強く外折するもの。50の色は黄褐色を基調とする。51の色は暗灰黄色を基調とする。

52・53は須恵器坏蓋である。52は口縁部と天井部との境に工具による浅い沈線が巡り、口縁部内面には工具による沈線が巡る。全体的にやや歪みがあり、胎土は細粒を含み、色は黒灰色。53は口縁端部を短く外反させるもので、口縁部と天井部との境にはヘラ工具による沈線を施す。色は灰色。54～58は須恵器坏身である。54の底部外面はケズリのち一部ナデを施す。55は口縁端部を短く外反させるもので、底部外面には自然釉が付着する。色は灰白色。56の色は暗灰色。57は口縁端部に打ち欠きを施すものか。色は黒灰色。58は器壁が厚く、低平な形態のもので、内面底部はナデによる凹凸が顕著である。色は灰色。59は口縁端部を外に折り曲げ肥厚させる須恵器甕口縁部で、口縁部内面には薄く灰が付着する。色は灰色。

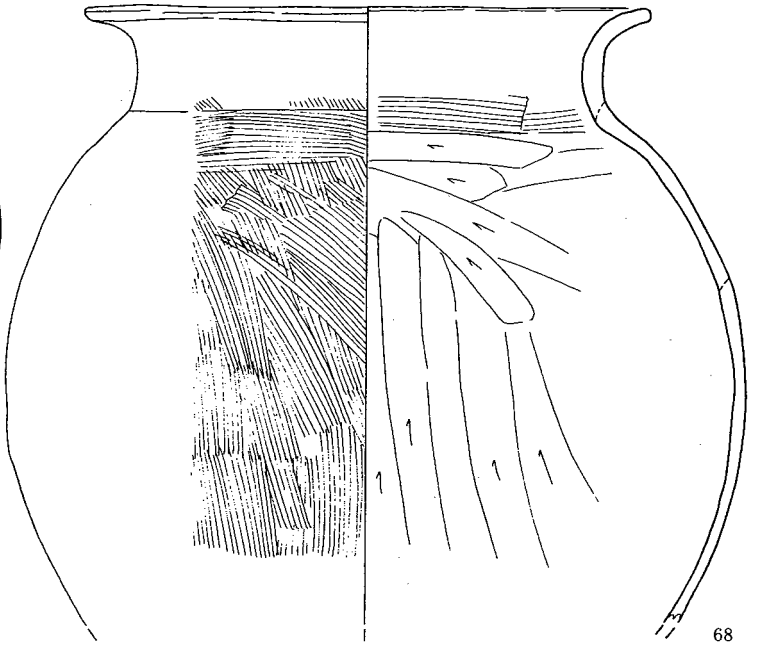
30号住居跡覆土下層出土土器（第69～71図60～82） 60は土師器模倣坏で、口縁部が短く内傾しながら立ち上がるもの。内外面には黒塗りを施し、生地は灰黄色。61～70は土師器甕で、61～65は中型品、66～70は普通サイズのもの。61～66・69～70は外面に二次加熱・ススガ、68はススのみ認められる。63・66・68～70は外面に黒斑が認められる。61は口縁部が直線的に外傾するもので、二次加熱により、器表がボロボロになる。色は黄橙色が基調となる。62は胴部が張らない器形で、色は外暗茶褐色、内灰褐色。63は歪みが顕著なもので、色は外灰黄褐色、内灰褐色。64は口縁部が胴部に比べかなり器壁が厚くなるもので、色は外赤褐色、内暗茶褐色。65は口縁部が開く鉢状の甕で、色は外灰黄褐色～褐色、内暗赤褐色～灰褐色。65は口縁部以外の2/3ほどが残存する、歪みの顕著な甕である。胴部外面は上下でハケ原体が異なり、下→上の切り合いとなる。内面頸部付近は粘土継ぎ目痕が明瞭に残り、幅1.5cm程度の粘土紐を使用したことが分かる。最大胴部径は32cmを測る。色は外黄茶色～淡橙褐色～白黄褐色、内黄橙色～灰色。67はほぼ完形品で、外面底部付近は薄く黒化する。色は黄褐色。68は球形の胴部に強く外反する口縁部を持つ。口縁端部はナデにより凹線状に窪む。色は灰黄褐色を基調とする。69・70はほぼ完形の甕。69は口径19cm、器高30cmを測り、色は外橙褐色～灰黄色、内橙褐色。



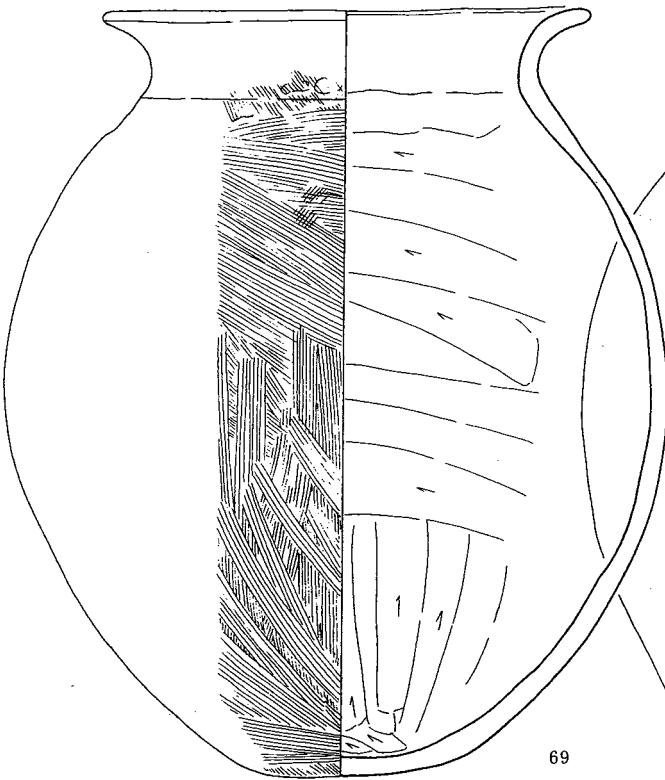
第69图 30号竖穴住居跡出土土器实测图(4) (1/3)



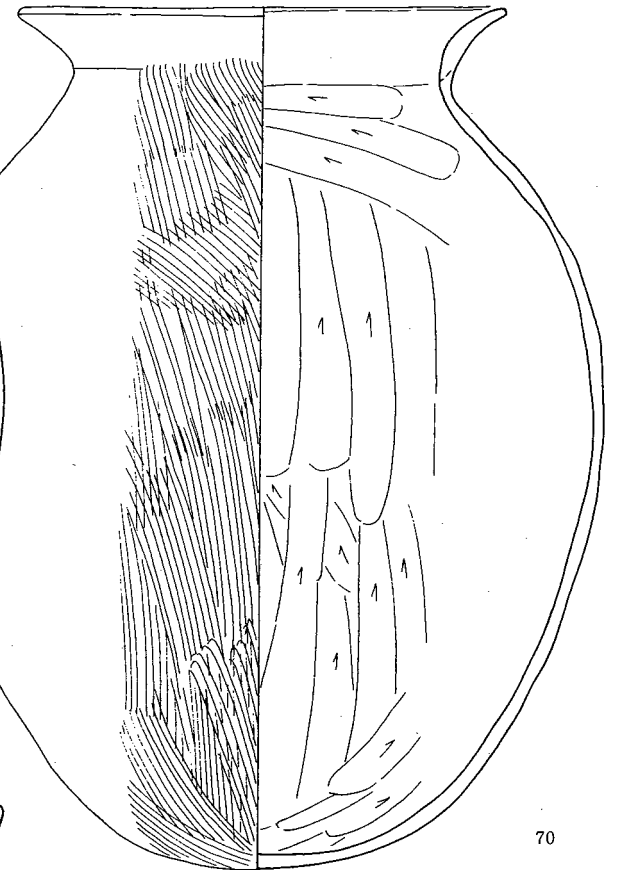
67



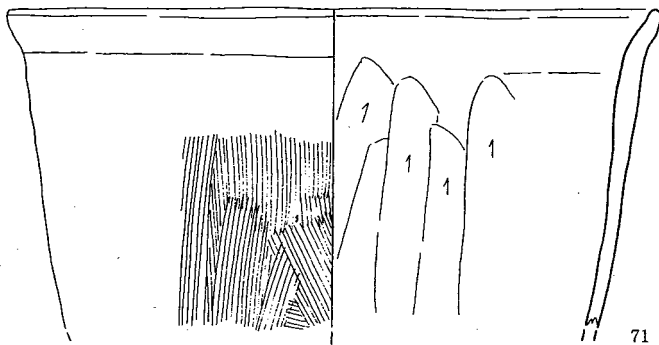
68



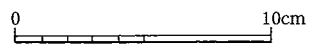
69



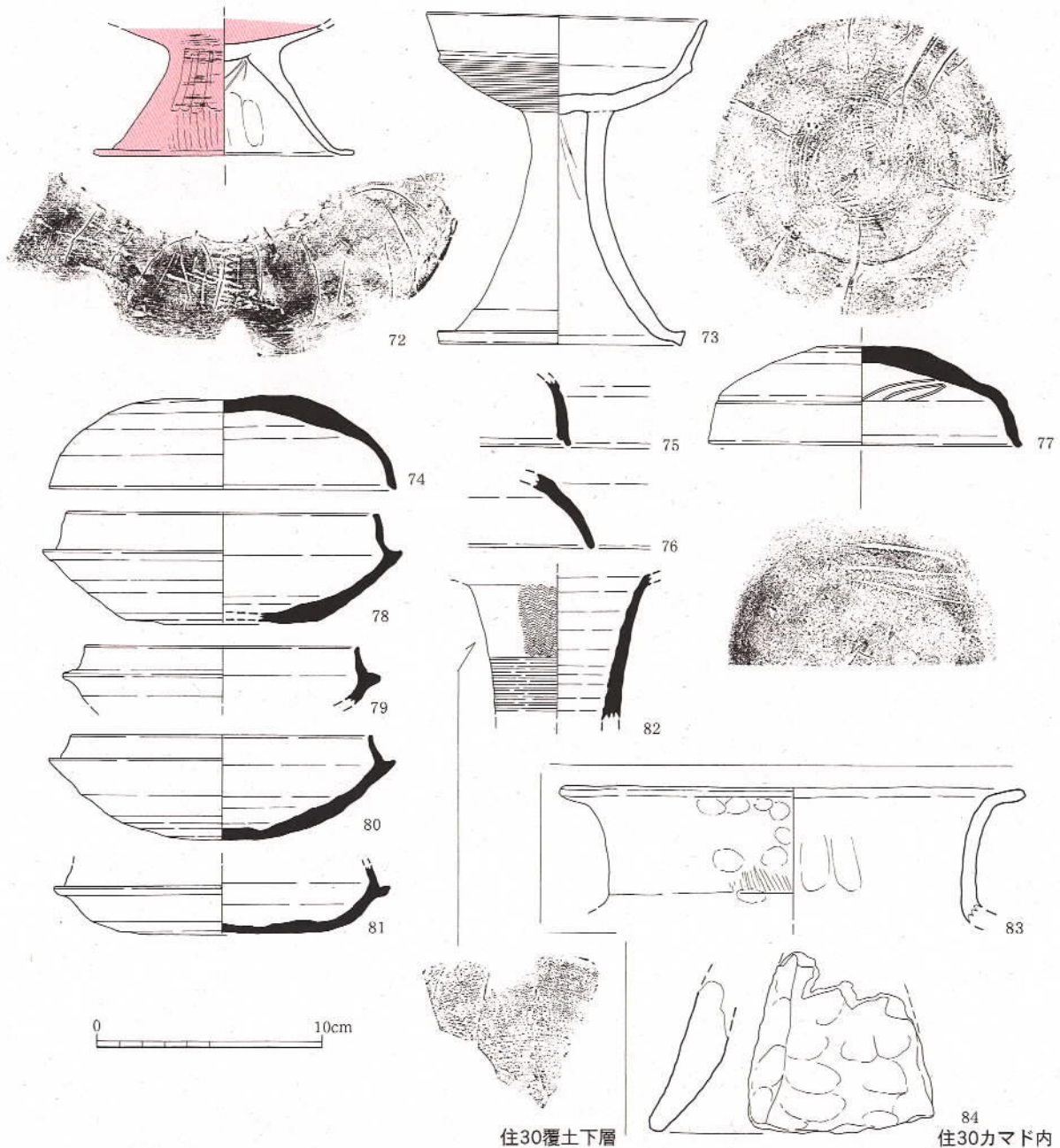
70



71



第70图 30号竖穴住居迹出土土器实测图(5) (1/3)



第71図 30号竪穴住居跡出土土器実測図(6) (1/3)

70は口径19.3cm、器高34cmを測る。器壁が薄く、胴部内面は丁寧なヘラケズリを施し、焼成も非常に良い。色は灰黄色～橙褐色。71は土師器甑口縁部で、口縁端部を弱く外反させるもの。外面には黒斑あり。色は黄褐色～橙褐色。

72は坏部内外面・脚部外面にやや厚めのスリップを施す土師器高坏で、脚部外面は縦ハケのち上部のみ縦方向のヘラナデ後さらに横ミガキを施す。脚柱部外面にはヘラナデの際の工具痕及び細粒の動いた痕跡が残る。脚裾部の器壁は非常に薄い。生地は灰橙褐色。73はほぼ完形の似非須恵土師器高坏であり、口径12.4cm、底径10.9cm、器高14.9cmを測る。坏口縁部と底部との境には鈍い稜を持ち、稜以下はカキ目を施す。脚内面上部には工具による絞り痕が認められ、色は橙褐色。

74～77は須恵器坏蓋である。74は焼成が甘く、色は灰白色。78とセットになるか。75の外表面にはナデによる凹線が巡り、口縁部内面はナデにより窪む。色は灰色。76の色は灰色。77の口縁端部は短く外反し、外面口縁部と天井部との境にはナデ凹線を施す。外面天井部にはいずれも先端が丸い工具を使用した、浅く長い3本線と5本の短い浅い線で構成されたヘラ記号が認められ、短い線の内2本が長い線と交わる。このヘラ記号は通常使用される工具と異なることから、単に工具痕である可能性もある。内面には3本の平行する線で構成されたヘラ記号が認められる。色は灰色。78～81は須恵器坏身である。78は焼成が甘く、色は灰白色。74とセットとなるか。79・80は立ち上がりが短いもの。79はやや歪みのあるもので、色は黒灰色。80の色は外灰茶色、内青灰色。81は低平な器形で、外面受部以下は薄く灰が被る。色は暗灰色。82は須恵器長頸壺頸部で、外面上部には28条以上の櫛描波状文を、下部にはカキ目を施す。外面には薄く自然釉が付着し、色は黒灰色。

83・84はカマド内出土である。83は土師器甕口縁部。外面には二次加熱痕あり。色は灰黄褐色。84は土製支脚で、当住居跡カマド支脚として使用したもの。右上面が欠損するものの、下面幅8.3cm、高さ8.1cm程度を測る。他の土製支脚とは異なり、両側面はなく、表面一面のみとなる。正面形は台形状を呈し、縦断面でみると中央～上面が最も厚くなる。裏面は丁寧にナデ調整され、表面はかなり火を受け、灰黄色に変色する。胎土にはスサを含み、色は黄褐色。

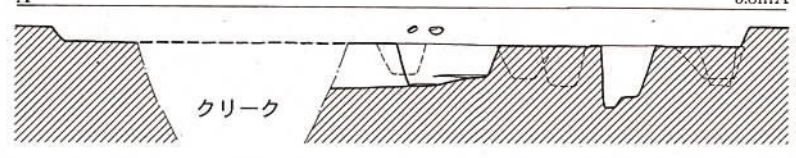
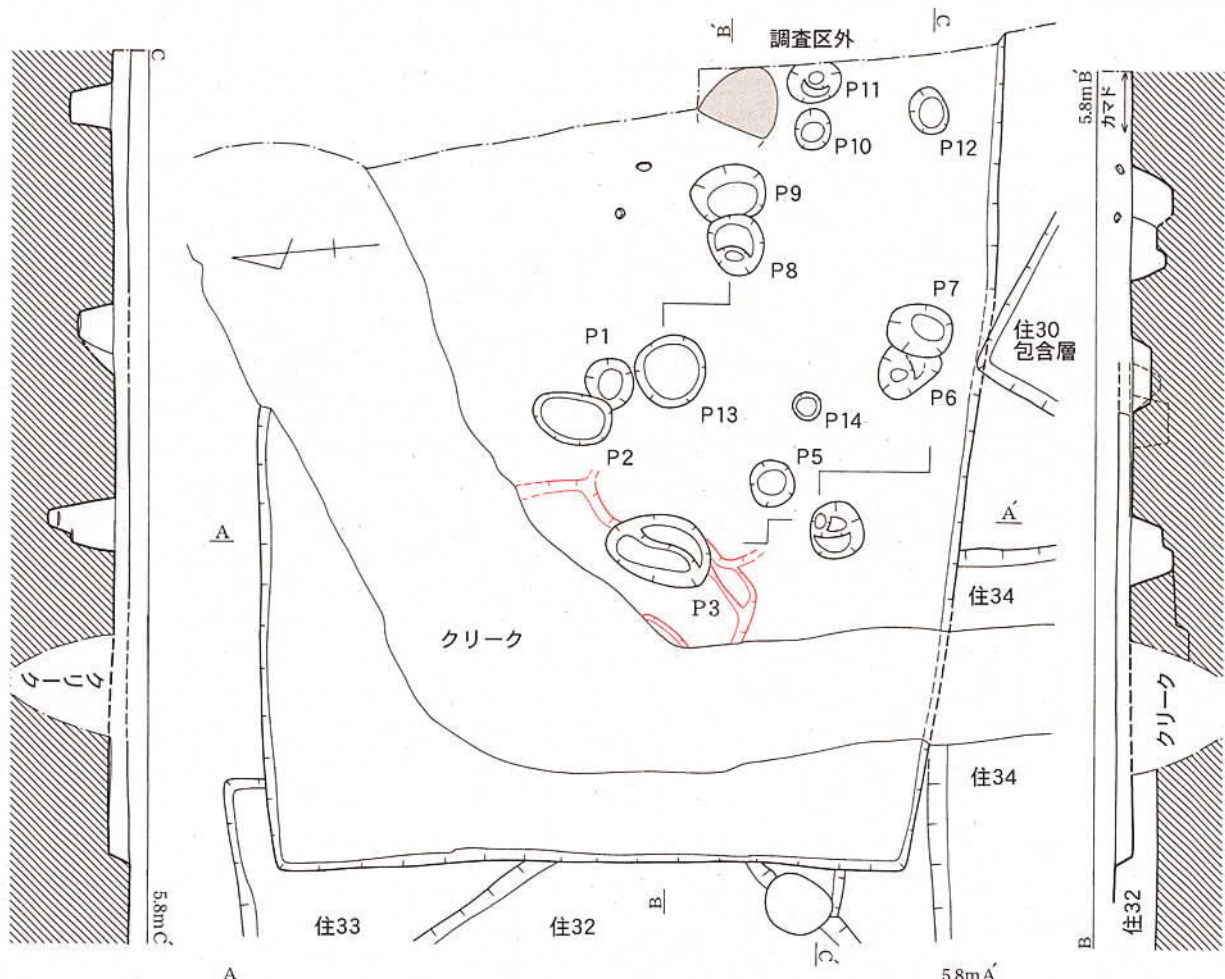
31号竪穴住居跡（図版26、第72図）

5区北端に位置し、32～34号住居跡を切る。当住居跡東は調査区外であり、住居南西～北東はクリークで壊される。また30号住居跡包含層が南壁の一部を切る図面となっているが、先述したように、30号住居跡包含層は掘り間違えた遺構であるため、切り合うことはない。住居規模は南北565cm×東西660cm以上、深さ12cmほどの、やや東側が広がる。

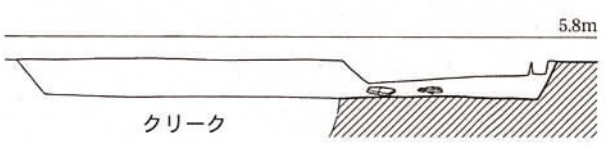
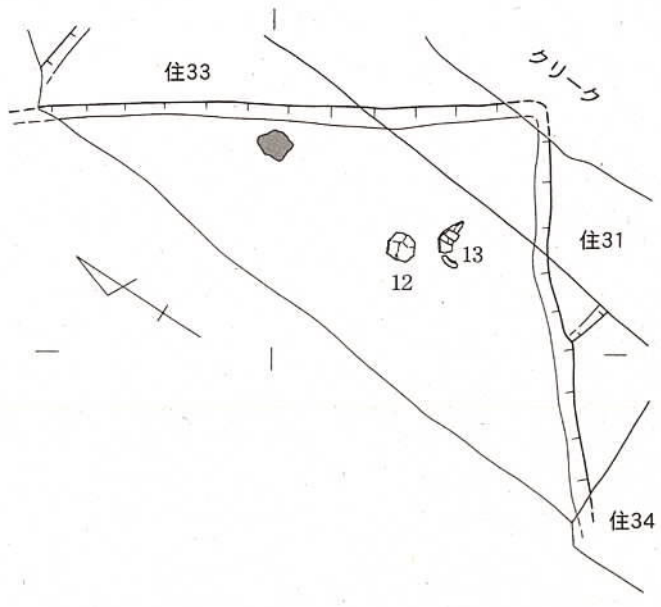
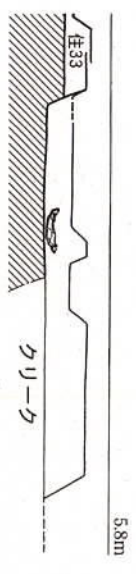
当住居跡を一つの住居跡として認定するには、以下の問題点が挙げられる。まず第1に短辺の住居東端やや南寄りで60×50cm以上の範囲に広がる弱いカマド焼面を検出したこと、第2に床面上でピットを14基検出したが、すべて住居中央～南東側に集中すること、第3に、先述したようにクリークの影響で、住居西側部分は埋土と地山の区別が困難であったこと、第4に当住居の時期である古墳時代後期末と同時期の、当遺跡内の他の住居跡と比較すると住居規模が大型すぎる点、第5にP1・4・6・8を結ぶと方形を呈するため、この部分に住居が存在した可能性があること、第6に下層にあたる53号住居跡も古墳時代後期末と考えられるため、複数の住居跡を一つの住居として調査した可能性が高い。

住居埋土は上層が灰黄褐色砂質土、下層が黒褐色砂質土70%+灰黄褐色砂質土30%で、住居西側埋土は鉄分を多く含む暗灰色粘質土となる。住居中央で住居床下掘り込みを確認した。

出土土器（図版56、第73図1～7）。1は土師器甕口縁部～肩部。強く外湾する長めの口縁部で、外面肩部は縦ハケのち3条の筋状のナデを施す。色は淡橙褐色。2は須恵器坏蓋。天井部と口縁部との境には鈍い稜を持ち、口縁内端部はナデにより凹線状に窪む。色は灰色。3・4は須恵器坏身。いずれも色は灰色を呈する。4は長めの立ち上がりを有する。5・6は混入品。5は古式土師器高坏脚柱部。坏部と接合する脚柱部内面上部には孔が貫通する。色は橙褐色。6は弥生後期器台上部片で、端部には工具による浅く大きめの刻みを施す。色は黄褐色。



31



32

第72図 31・32号竪穴住居跡実測図 (1/60)

7は31号住居跡付近クリーク内出土の完形の土師器中型精製直口壺。外面全体及び口縁部内面には薄いスリップを施す。胎土は精良で、生地は淡橙褐色。

出土土製品（図版56、第74図） 住居覆土から出土した粘土塊のうち、面を持ったものを選別し、図化したのが第74図である。1号溝と同じく、住居の土壁の可能性を考え、図化を行った。1・2は平らな面を持ち、表面はナデ調整のままであり、弱い凹凸が認められる。厚さは1が4cm以上、2が6cm以上を測り、1号溝出土のものよりもかなり厚い。いずれも胎土にはスサを少量含み、色は黄橙色を基調とする。以上が観察記録であるが、いずれも1号溝より厚いことが特徴で、時期も古墳時代後期末でかつ竪穴住居内出土、また面を持つことから、竪穴住居跡の土壁の一部となる可能性が高い。

32号竪穴住居跡（図版27、第72図）

5区北西隅に位置し、31・34号住居跡に切られ、33号住居跡を切る。住居西側2/3はクリークで壊され、また調査区外となり、住居東隅もクリークによって壊される。住居規模は北東-南西320cm以上、北西-南東405cm以上、深さ30cmほどとなる。住居北壁でカマド焼面を検出した。北壁中央にカマドが存在したとすると、北西-南東幅は440cmほどとなる。住居埋土は暗青灰色粘質砂に炭が多く含む土である。先述したように当住居跡付近は埋土及び地山に鉄分が多く沈着し、かつ水分が多いため地山・埋土とも青く変色していた。このため、カマドは袖を検出できず、焼面のみ確認した。焼面は25×20cmほどの範囲で、かなり硬化した焼面となる。床面ではピットは検出できなかったが、土師器甕を床面直上で検出している（第73図12・13）。

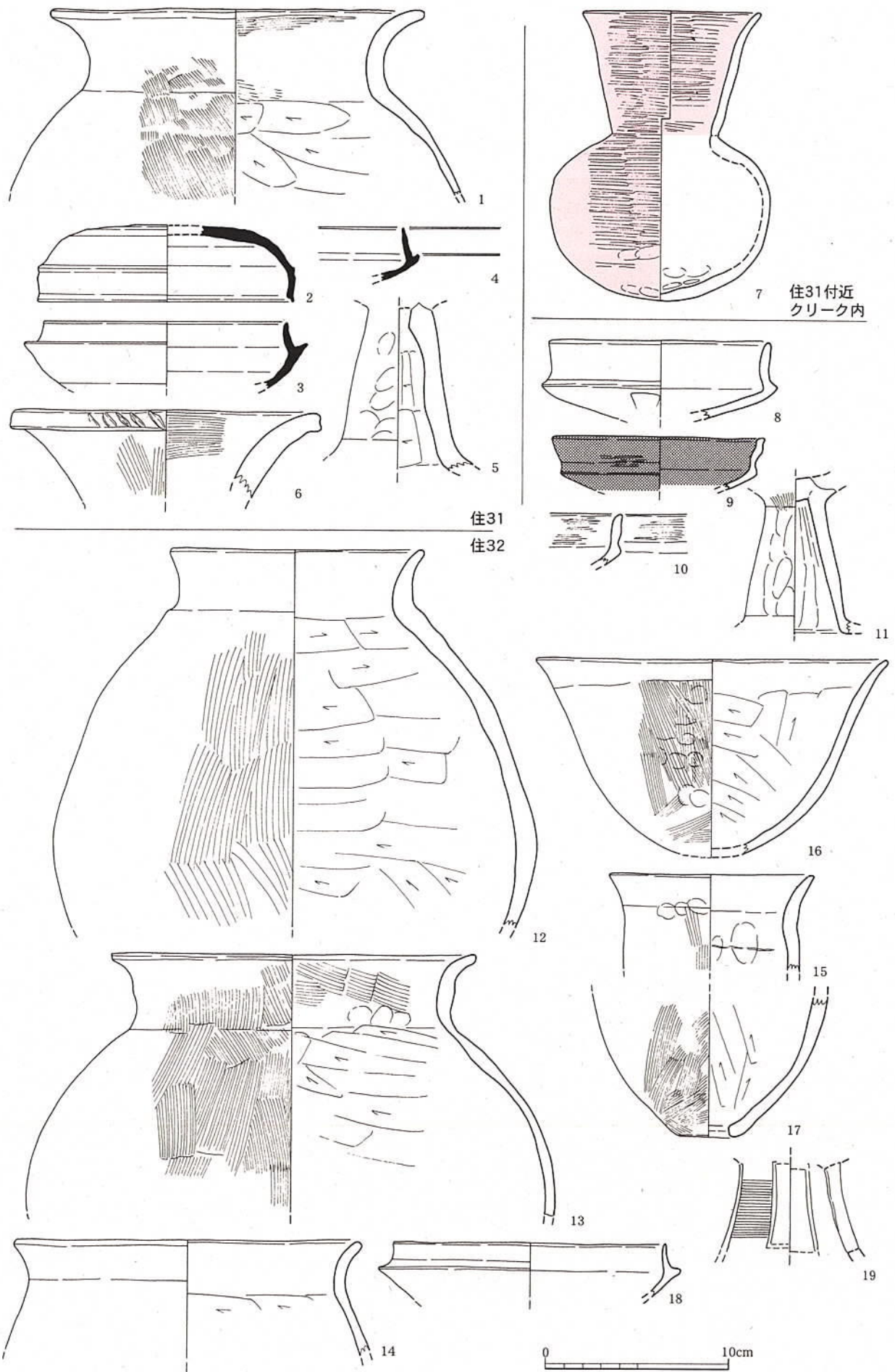
切り合い関係及び出土土器から古墳時代後期末の住居跡と考えられる。

出土土器（第73図8～19） 8～10は土師器模倣坏である。8は弱く外反する長めの口縁部を持ち、口縁部に対して稜より下部は低平な器形となる。色は肌色～灰褐色。9は口縁部が外傾し、口縁外端部を外側に弱くつまむ小型品である。内外面には黒塗りを施す。生地は灰黄褐色。10は弱く外傾する坏身口縁部で、稜は鈍いもの。色は橙褐色。11は充填法で接合された土師器高坏脚部で、色は灰黄褐色。12～15は土師器甕。12は長胴で、肩が張らない胴部から短く外反する口縁部を持つ。外面のハケは上下で原体が異なる。外面には顕著な二次加熱痕及びススが認められる。色は黄橙色を基調とする。13は口縁端部が強く外折する口縁部を持ち、特に頸部付近は器壁が薄い。外面には二次加熱痕と黒斑が認められる。色は橙褐色を基調とする。14は

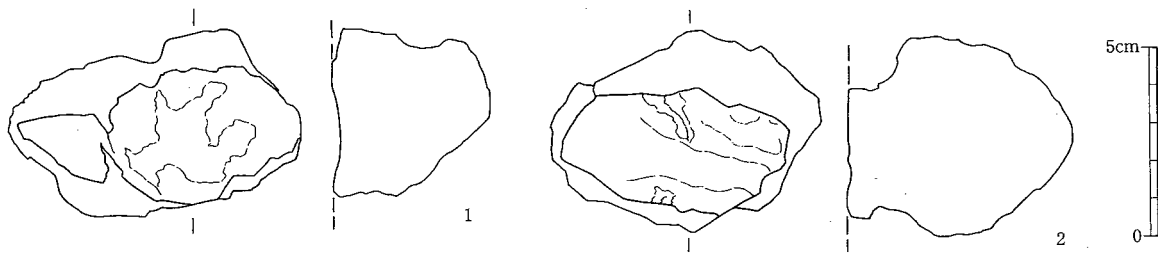
肩が張らない胴部から弱く外反する口縁部を持つ。口縁部内外面に二次加熱痕・ススが認められる。色は橙褐色を基調とする。15は土師器小型甕で、ほぼ直立する胴部から緩やかに開く口縁部を持つ。口縁部内面は黒化する。色は外橙褐色～灰橙色、内灰黄色～灰茶色。16は鉢状の土師器甕。外面には黒斑が認められる。色は灰黄色を基調とする。17は土師器小型甕底部で、径2cmの孔を焼成前に穿孔する。色は灰橙色。



32号住居跡カマド（南西から）



第73図 31・32号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第74図 31号竪穴住居跡出土土製品実測図(1/2)

18は生焼けの須恵器坏身で、色は橙褐色。19は生焼け須恵器高坏脚部。外面にはカキ目を施し、その後3方向に長台形の透かし孔を入れる。上部断面は坏部と接合する箇所となる。色は橙褐色。

33号竪穴住居跡(図版26、第75図)

5区北西隅に位置し、31・32号住居跡に切られる。住居西半分以上をクリーク及び32号住居跡により壊され、住居規模は現状で南北490cm×東西225cm以上、深さは残りの良い部分で20cmほどを測る。住居床面ではピット等は検出できなかった。住居埋土は暗灰黄色粘質土。

切り合い関係及び出土土器から古墳時代後期末の住居跡と考えられる。

出土土器(第76図1・2) 1は口縁部が外傾するやや小型の土師器模倣坏である。内外面には黒塗りを施し、生地は暗褐色。2は土師器小型甕である。色は外淡橙褐色、内灰褐色。

34号竪穴住居跡(図版27、第75図)

5区北西寄りに位置し、31号住居跡に切られ、32号住居跡を切り、また30号住居跡に切られる可能性がある住居跡である。住居中央東寄りをクリークによって壊されるが、住居規模は東西420cm以上×南北400cm、深さ25cmほどを測り、カマド焼面で反転すると、東西幅は560cmの東西に長い長方形住居となる。住居北壁から50cmほど南で、径20cmほどの硬化したカマド焼面を検出し、焼面上には焼土塊・土師器片(3)が広がっていた。カマドの袖は、32号住居跡と同じ理由で検出できなかった。住居床面ではピット2基検出し、深さ・位置からP1は主柱穴となる。住居埋土は暗黄褐色粘質土に鉄分が多く混じる土。

切り合い関係及び出土土器から古墳時代後期末の住居跡と考えられる。

なお、当住居跡南には34号住居跡南包含層が存在する。個別の住居跡として調査したが、先述したように、地山と埋土の区別が難しく、硬化したカマド焼面・土製支脚を検出したものの、住居ラインを確定することができなかったため、包含層として報告する。深さは16cmほどで、カマド焼面付近の埋土は灰色粘質土+明黄褐色粘質砂に炭が多く混じる土となる。包含層覆土中から砥石1点が出土した(第99図7)。

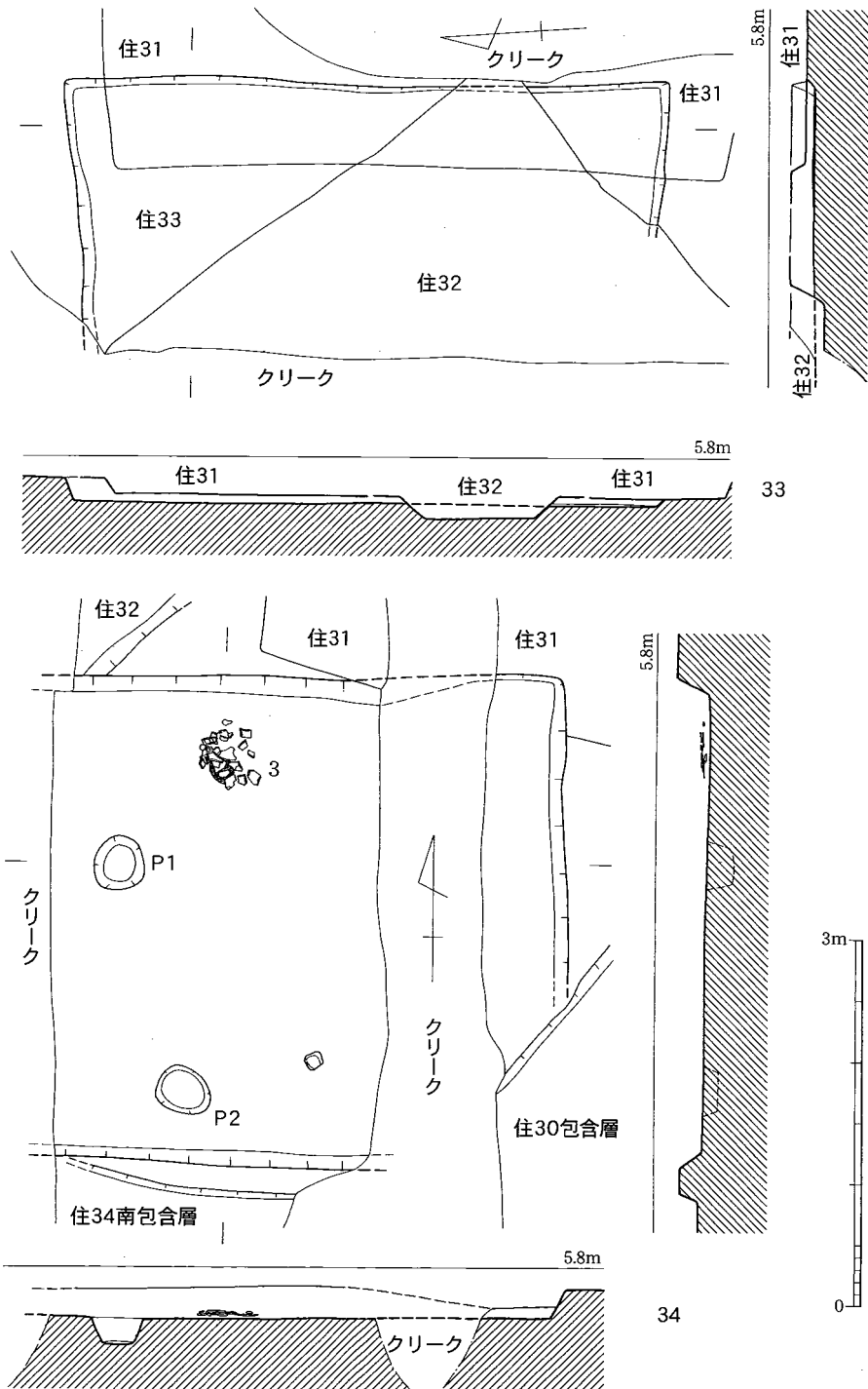
出土土器(図版56、第76図3~11) 3・4は口縁部が弱く内湾する土師器碗形坏である。3の内外面には二次加熱痕及び黒化が認められ、色は茶褐色。カマド上面出土。4は深さのある器形で、外面底部には黒斑が認められる。色は褐色を基調とする。5は土師器高坏坏部で、口縁部と底部との境には鈍い稜を巡らせる。色は灰黄色。6~8は土師器甕である。6は小型甕で、外面頸部は横ナデにより凹線状に窪む。色は灰黄褐色。7は内湾する口縁部を持つ甕で、肩部は張らない胴部となる。外面には二次加熱痕及び黒斑が認められる。色は灰黄色を基調と

する。8は口縁部が強く外反する土師器甕で、口縁端部はナデで面取りする。色は茶褐色。9は口縁外端部をわずかに外につまみ出す土師器鉢で、外面にはススが付着する。色は外灰黄褐色、内黄褐色を呈する。10は土師器手捏ね土器で、色は白黄褐色。

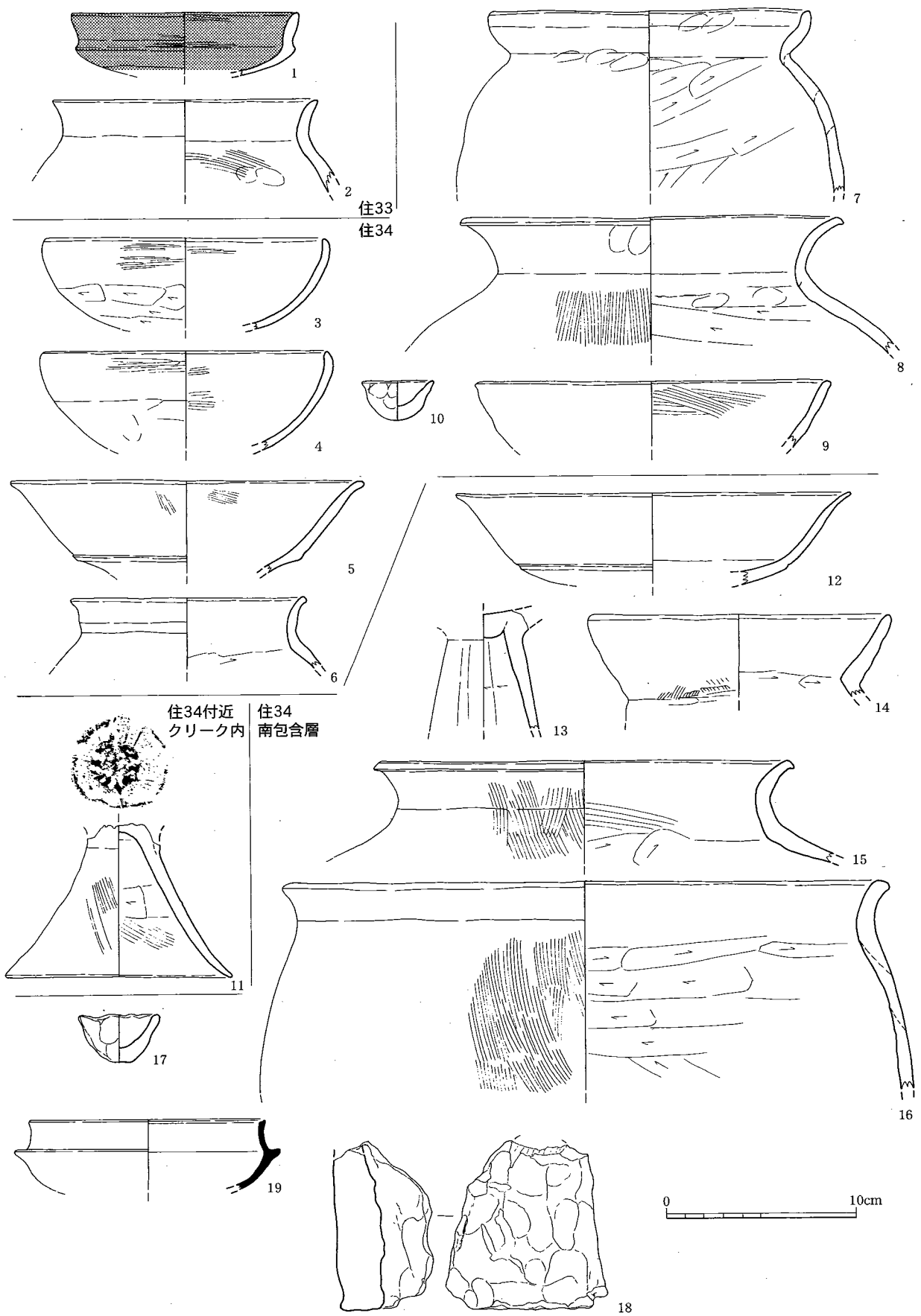
11は34号住居跡付近クリーク内出土の「八」の字状に開く土師器高坏脚部。坏部との接合部には刻みを施す。色は外灰黄色、内灰色。

34号住居跡南包含層出土土器（第76図12～19）12は土師器高坏坏部で、口縁部と底部の境には沈線を巡らせる。色は橙褐色。13は充填法で接合した土師器高坏脚柱部。外面には縦ナデの稜が残る。坏底部も一部残存し、色は灰褐色。14は須恵

器平瓶の形態を呈する土師器甕口縁部。平瓶と同じく、口縁部中軸線が胴部中軸線と一致しないもの。色は灰黄褐色～灰褐色。15は強く外反する土師器甕口縁部で、口縁端部はナデで面取りする。外面にはススが付着し、色は外灰茶褐色～橙褐色、内肌色を呈する。16は頸部の屈曲がほとんどない、口径32cmを測る大型土師器甕。外面には二次加熱痕、口縁部内面にはススが付着する。色は灰黄褐色を基調とする。18はカマドに設置されたほぼ完形の土製支脚で、横断面は「U」の字を呈する半円柱形を呈するもの。上端部は土器などと直接接したためボロボロ



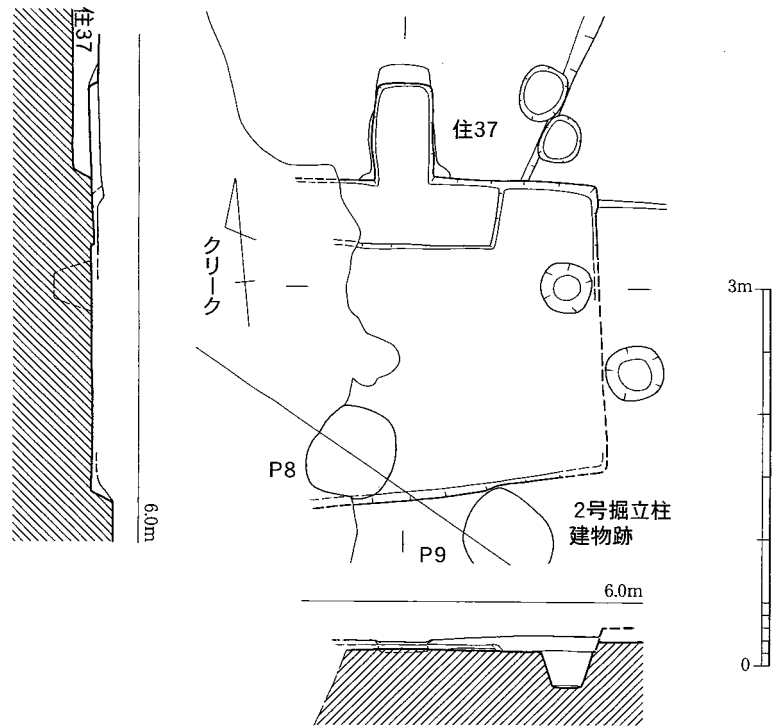
第75図 33・34号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第76図 33・34号竪穴住居跡、34号竪穴住居跡南包含層出土土器実測図 (1/3)

であり、裏面は支え用粘土と接していたため、器表が荒れる。正面は指押さえ痕が残り、二次加熱が顕著なため、黄灰色に変色する。胎土にはスサを含み、色は外灰黄色～灰茶色、内灰橙色を呈する。

19は当包含層付近クリーク内出土の須恵器坏身。口縁端部はナデで面取りし、外面受部以下は自然釉が付着する。色は灰色～灰白色。

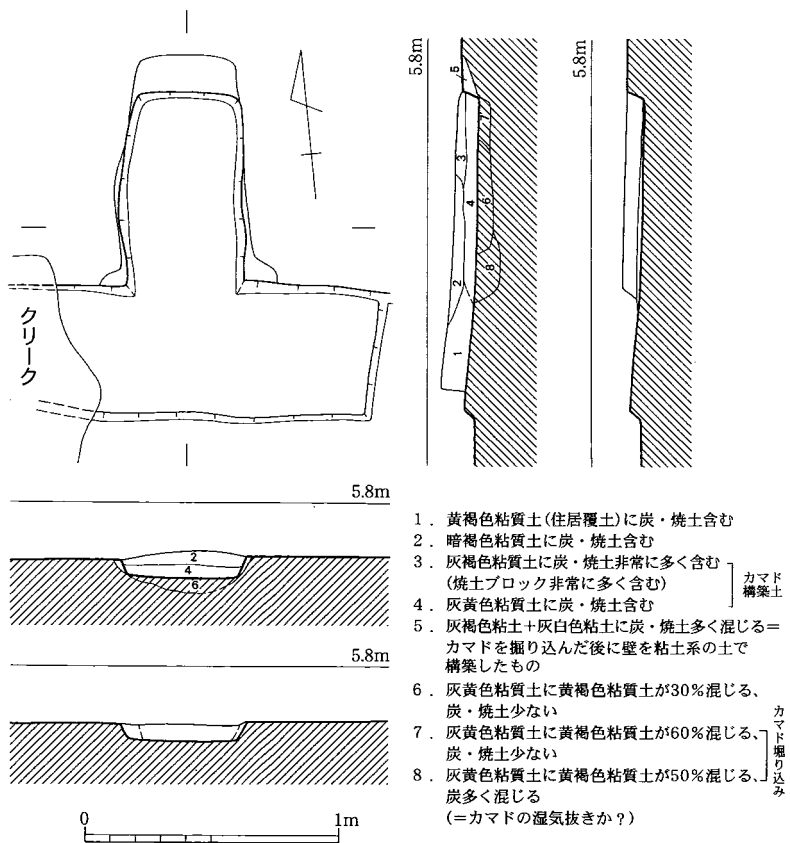


36号竪穴住居跡 (図版28、第77図)

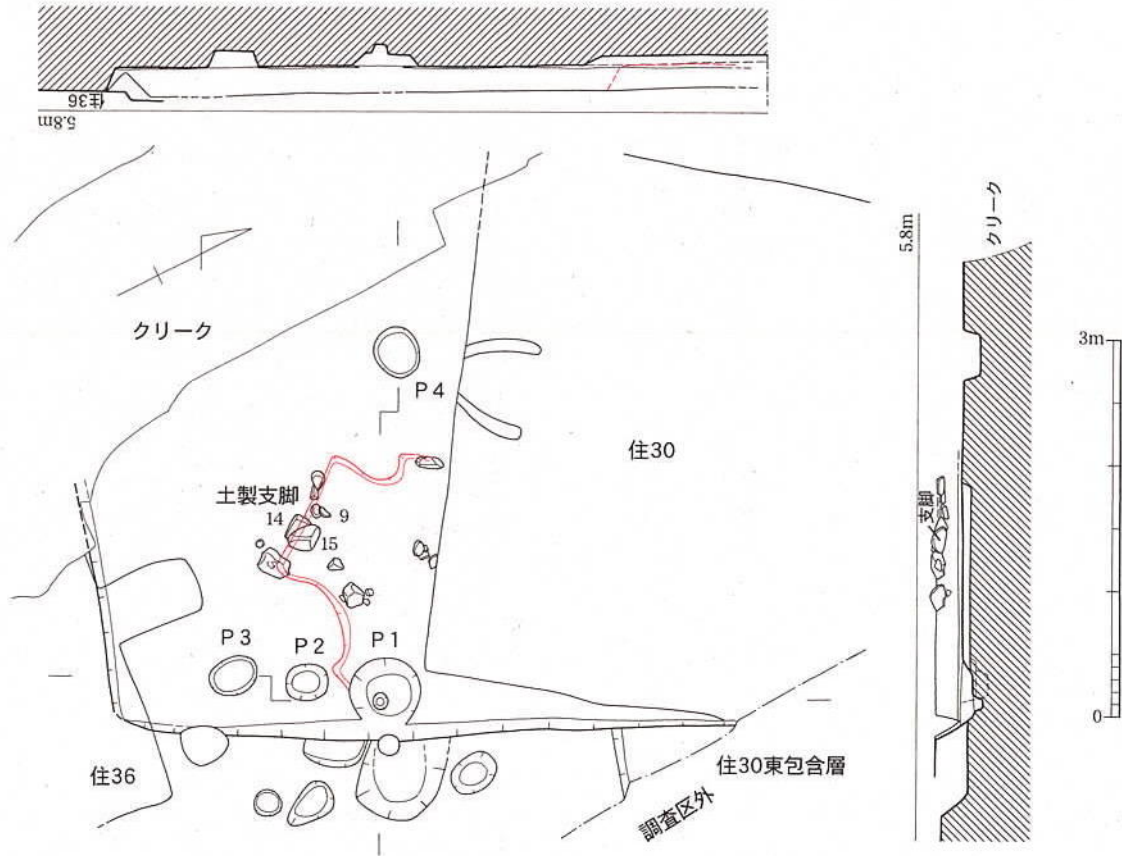
5区中央に位置し、37号住居跡を切り、2号掘立柱建物跡P8・9に切られる。住居西側1/3ほどがクリークによって壊され、東側の大部分は遺構検出時に掘り下げたため、東壁は北東の一部のみ残存する。住居規模は東西205cm以上×南北252cm、深さ10cmを測り、北壁中央にカマドが付設された可能性が高いため、反転すると、東西幅310cmを測る東西に長い小型長方形住居となる。住居北壁には突出タイプのカマドを付設し、住居埋土は黄褐色粘質土。住居床面上ではピット1基検出し、位置・深さから支柱穴となる可能性が高い。

なお、カマド前面の段は、調査時に貼床を掘り抜いたために付いた段であり、カマド床面が本来の床面レベルとなる。

切り合い関係及び住居・カマドの形態から、7世紀前半の住居跡となるか。



第77図 36号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60、1/30)



第78図 37号竪穴住居跡実測図 (1/60)

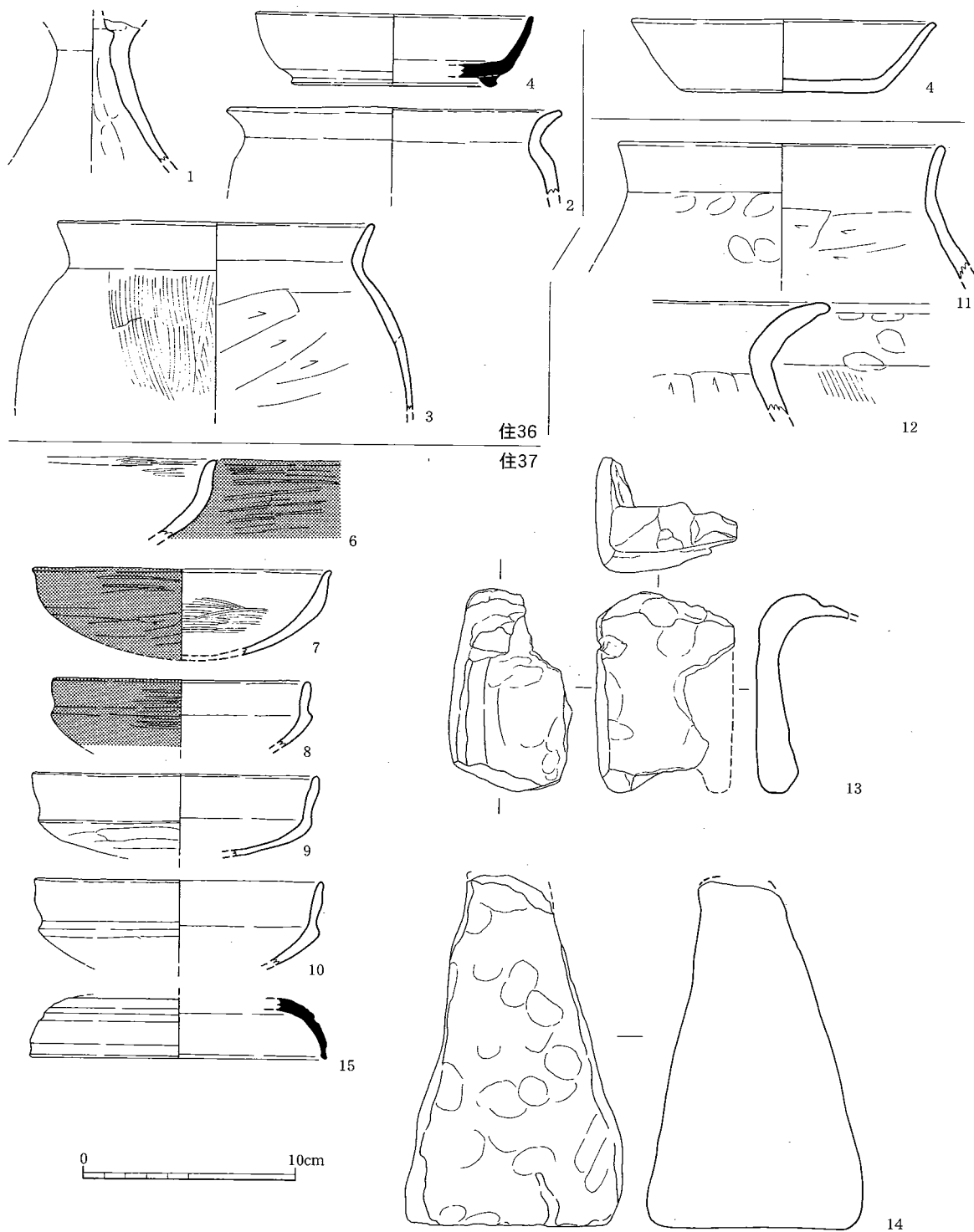
カマド (第77図) 住居北壁中央に付設されたと考えられる突出タイプのカマドである。4区第1面3・6・9号住居跡カマドと同じく、カマドをまず大きく掘り込み、掘り方内に粘土を充填し壁を構築するタイプのカマドとなる。カマド両袖は検出できなかったが、掘り飛ばしてしまった可能性が高い。燃焼部は断面作成部分で幅42cm、奥壁部分で幅35cmとやや奥壁側が狭くなり、奥行は78cmを測る奥行のあるカマドとなる。焼面は検出できなかった。また3・4層はカマド構築土が崩落したもの、5層はカマド掘り方充填粘土、6～8層はカマド掘り込みとなり、特に8層は炭を多く含み、支脚の想定位置であることから、カマドの湿気抜き役割を持つ可能性がある。

出土土器 (図版56、第79図1～5) 1～3はカマド内出土。1は土師器高坏脚部で、上部断面には刻みを施す。色は黄橙褐色。2は強く口縁部が外反する小型土師器甕で、色は灰黄褐色。3は短く直線的に外傾する口縁部で、外面には二次加熱痕、ススが認められる。色は外暗褐色～赤褐色、内褐色～橙褐色。4は低平な高台付の須恵器坏身で、外面には薄く自然釉が付着する。色は灰色。混入品となる。

5は当住居跡付近遺構面出土の土師器坏。外面口縁部付近には二次加熱痕が認められる。色は橙褐色～灰黄褐色。

37号竪穴住居跡 (第78図)

5区中央北寄りに位置し、30・36号住居跡に切られ、34号住居跡との切り合い関係の有無は



第79図 36・37号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

不明である。先述したように、当住居跡と30号住居跡出土土器の一部は混じっており、30号住居跡出土土器の中で、30・37号住居跡出土土器として報告している (第64図5・6)、参照されたい。住居西側はクリーク、北側は30号住居跡によって大きく壊され、住居規模は東西430cm以上×南北495cm以上、深さ20cmほどを測る。床面ではピットを4基検出し、P1・4が位置から主柱穴となる可能性が高く、P2も深さ・位置から主柱穴となる可能性がある。床面

から10cmほど浮いたレベルで礫・土器を検出し、完形の土製支脚（14）の出土は注目される。床面中央で掘り込みを検出した。

切り合い関係及び出土土器から古墳時代後期後半の住居跡と考えられる。

出土土器（図版52・56、第79図6～15） 6・7は土師器碗形坏で、いずれも口縁部外面には黒塗りを施す。6は口縁端部をわずかに外につまみ出すもので、生地は灰茶色。7は口縁端部を弱く外反し、生地は橙褐色、内面の色は灰白色。8～10は土師器模倣坏で、混入品と考えられる。8は小型品で、外面のみ黒塗りを施す。生地の色は灰黄色。9は稜が痕跡的になるもので、色は淡橙色。10の色は暗褐色。

13・14は土製支脚である。13は左側面及び正面・上端面・下端面の一部が残存する、長方形を「コ」の字状にカットした形態のもの。正面形態は長方形状を呈し、下面が「U」の字状に窪む箇所は、支脚として使用する際に支え用粘土を入れたと考えられる。縦断面で見ると、下端分は厚く、上端部に行くにつれやや薄くなり、上端部は凹凸が顕著である。内外面とも丁寧なナデで調整し、胎土にはスサが入る。外面全体には二次加熱痕が認められ、内面は黒化する。色は外橙褐色～灰茶色、内灰褐色。14は中実の長台形を呈するほぼ完形に近い形態のもので、底部は10×10cmほどの正方形、高さは17cm、重さ1.17kgとなる。胎土には精良で、粘土のみで丁寧なナデ調整により成形したもの。表面は二次加熱が顕著であり、正面と考えられる面は白く変色するため、実際に使用されたことが分かる。色は橙褐色を基調とする。

15は須恵器坏蓋で、口縁部と天井部との境には工具による沈線を巡らす。外面には薄く灰を被り、色は灰色。

(3) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（図版28～30、第80図）

4区南中央に位置し、P4で14号住居跡南壁と接し、3号建物跡と東側で接する。当初は、4号掘立柱建物跡を当建物跡西側柱穴列と考えていたが、軸が合わず、かつ柱間寸法も異なることから、別の建物跡であると判断した。このため、当建物跡は建物北東部のみ確認したことになる。

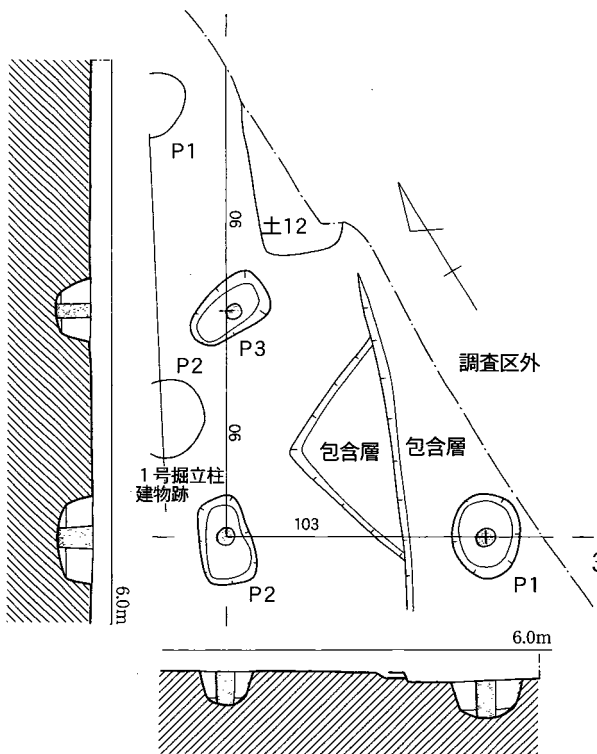
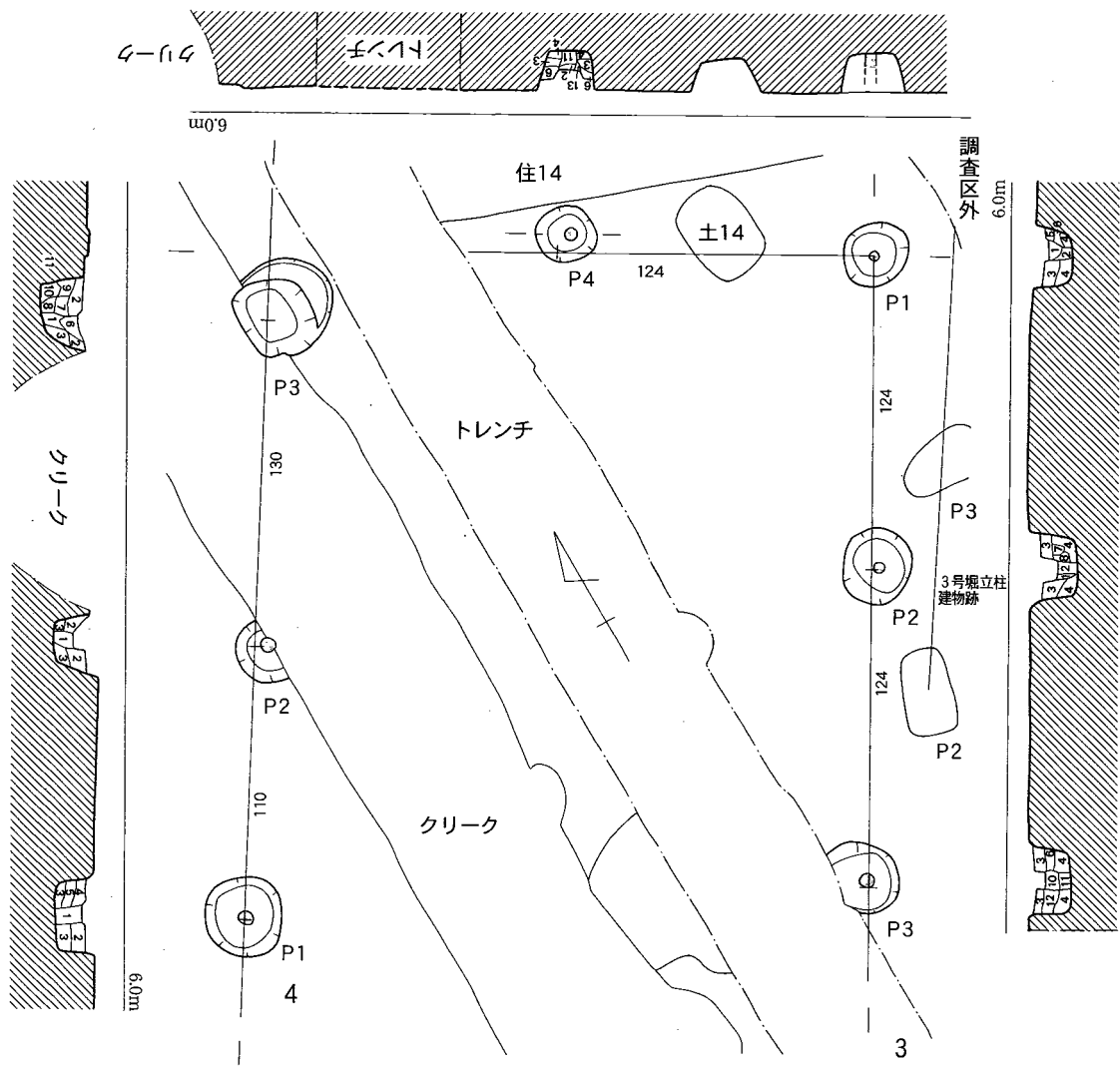
当建物は梁行1間以上、桁行2間以上の南北棟になる可能性が強い。建物主軸方向は北-30.5°-東、桁行柱間寸法は心々距離で124cm（4尺）の等間で、一尺30.1cm前後の尺度となる。梁行も桁行と同じ柱間寸法・尺度となると考えられるが、P4が桁行から導き出した推定位置とはやや北東側にずれるため、桁行と梁行は直交しない可能性もある。

柱穴掘形はいずれも径50cm前後の円形、深さは30～40cm前後を測り、すべての柱穴で確認できた柱抜き取り痕から径10cmほどの細い柱の使用が想定される。2・3号建物跡柱穴埋土との類似することから、7世紀中葉前後の建物跡となるか。

出土土器（図版56、第82図1） 1はP1出土の土師器甕で、色は橙褐色。

2号掘立柱建物跡（図版30～33、第80図）

4区中央に位置し、P8・9で36号住居跡を切り、P3で14号土坑と接する。先述したように当建物跡西柱穴列の存在が予想される、幅2mクレーク間においては、クレークの影響で鉄



(1号掘立柱建物跡柱穴土層)

1. 灰黄色粘質土 } 柱抜き痕
2. 灰褐色粘質土 } 柱抜き痕
3. 黄褐色粘質土(鉄分含む)
4. 暗黄褐色粘質砂
5. 3より明るい
6. 3より暗く、鉄分少ない
7. 4より明るく、粘性がある
8. 4より明るい
9. 黄褐色粘質土に灰褐色粘質土ブロック
少量混じる(3が柱抜き後に流入したもの)
10. 2に炭混じる
11. 4より明るい粘質砂 } 柱抜き痕
12. 灰黄色粘質土に炭混じる
13. 黄褐色粘質土に鉄分多く混じる
(柱抜く際、上層から流入したもの)

(4号掘立柱建物跡柱穴土層)

1. 灰茶褐色粘質砂=柱抜き痕
2. 茶褐色粘質砂
3. 灰褐色粘質砂
4. 灰褐色粘質砂(土質が強い)
5. 3より明るい
6. 灰褐色粘質土=柱抜き痕
7. 暗茶褐色粘質土
8. 暗灰色粘質砂
9. 7より土性が強い
10. 8より明るい
11. 地山

第80図 1・3・4号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

分が多く沈着し、20cmほど掘削すると土自体も青みを帯びる。このため、柱穴ラインの検出が困難であり、かつ柱穴の可能性があると調査したピットも土層で柱穴として認定できなかったため、確実な建物跡となる東側のみ報告する。

当建物は梁行2間以上、桁行はP4-5間の柱穴がクリークにより壊されているものの、桁行6間の南北棟の大型建物跡になる。建物主軸方向は北-32.5°-東で、桁行を基準にすると北側梁行が40.5°北に振れ、南側梁行も40.5°北側に振れる、やや歪な平面形態となる。桁行柱間寸法は心々距離で北から156・120・116・125・125・190cm、また梁行心々距離もバラバラであるため、尺度は不明である。柱穴掘形はいずれも径70~80cm前後の円形で、深さは30~40cm前後を測る。すべての柱穴で確認できた柱抜き取り痕から径12cmほどと、建物規模にしては細い柱の使用が想定される。また柱抜き取り痕埋土から、抜き取り後は埋め立てを行わず、自然堆積となる可能性が高い。当建物跡と1・3号建物跡柱穴埋土との類似から、時期的に近いことが予想させる。

P1掘形埋土上層から出土した完形の土師器高坏坏部(3)は、建物を建てる際に意図的に埋めた地鎮的な意味合いを持つ土器となる可能性がある。

3から7世紀中葉前後の建物となる可能性が高い。

出土土器(第82図2~6) 2はP7掘形内出土の土師器模倣坏口縁部。口縁部と天井部の境の稜は鈍く、内外面黒塗りを施した可能性がある。色は白黄灰色。3はP1掘形内出土の意図的に埋納したと考えられる完形の土師器高坏坏部。口縁部は外傾する体部から直立し、さらに端部は外反させたもので、体部との間にはわずかな稜が認められる。形態・調整から模倣坏の最も新しい段階の形態を示すと考えられる。脚部との接合部は付加法となる。色は橙褐色。4はP4掘形内出土の、口縁部が「八」の字に開く、土師器小型甕。直立する胴部内面にはススが付着する。色は灰黄褐色~灰褐色。5はP6出土の須恵器坏身底部。色は灰色。6はP3掘形内出土の弥生後期高坏口縁部。色は外灰黄橙色、内白黄褐色。

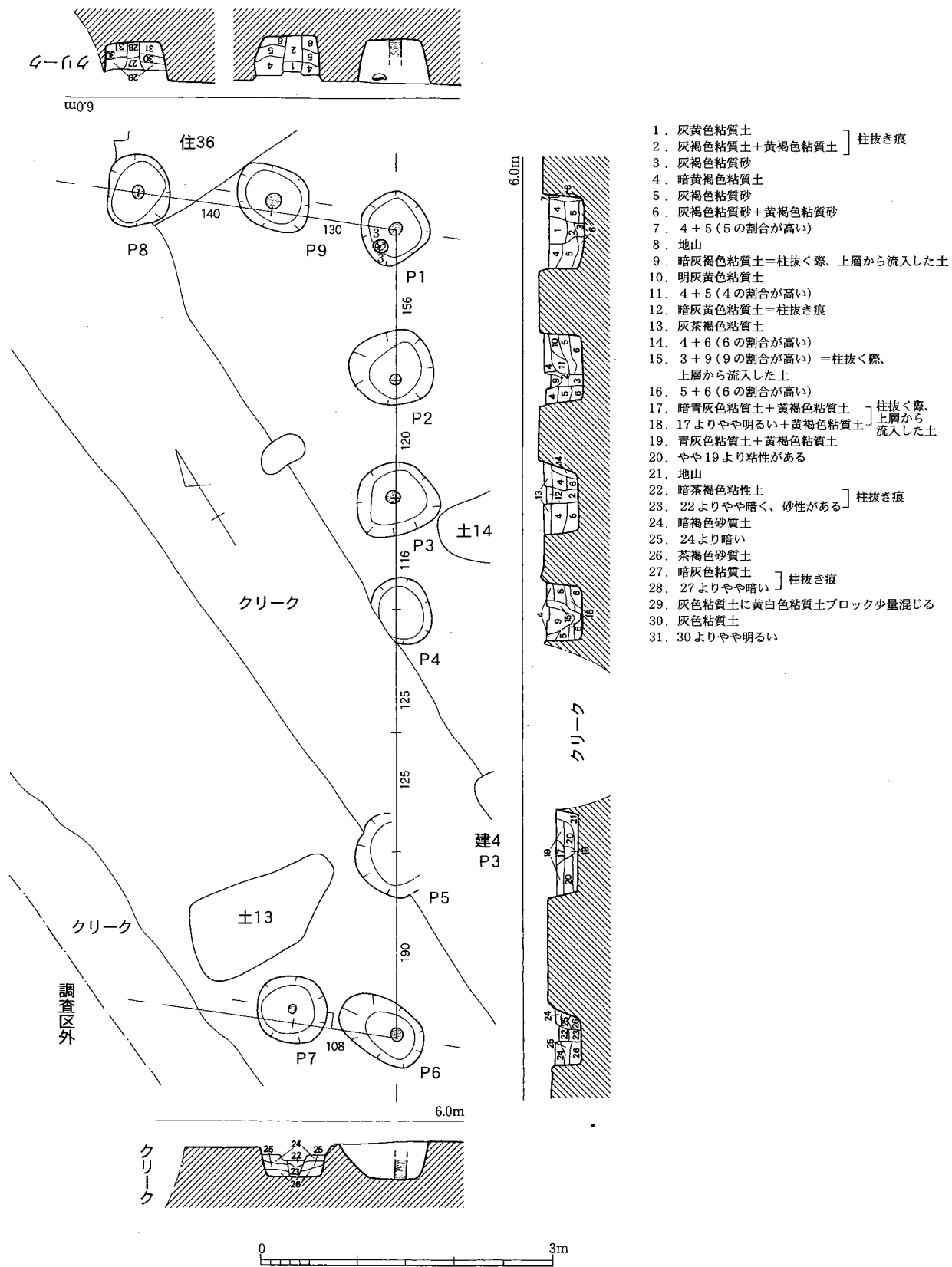
3号掘立柱建物跡(図版33、第80図)

4区南中央東壁際に位置し、1号建物跡と西側で接する。当建物跡東の大部分は調査区外となるため、調査では建物南東部の一部のみ確認したことに留まる。現状で梁行・桁行1間以上となり、P1-2柱間寸法が103cm、P2-3柱間寸法が90cmとなることから、P1-2の東西柱穴列が梁行、P2-3の南北柱穴列が桁行の南北棟となる可能性が高い。

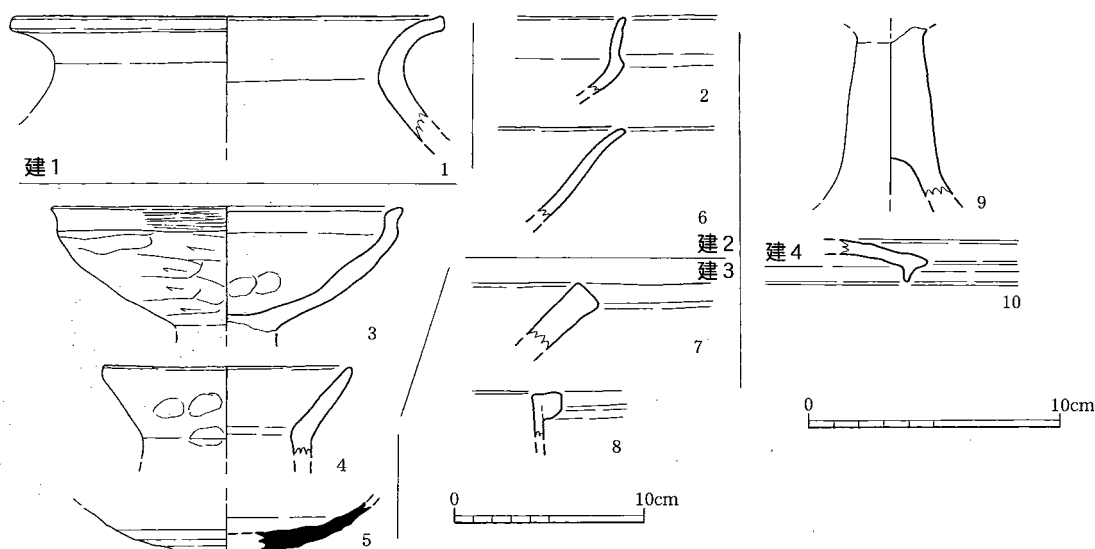
建物主軸方向は北-32.5°-東、桁行・梁行柱間寸法は心々距離で梁行が一尺34cm、桁行が一尺30cmとなり、一致しない。柱穴掘形は70×40cm前後の長楕円形で、深さは30cm前後を測り、すべての柱穴で確認できた柱抜き取り痕から径12~15cmほどの柱の使用が想定される。また、P1~3柱掘形内の埋土は下層が黄褐色粘質土、上層が暗黄褐色粘質土となる。

1・2号建物跡柱穴埋土との類似することから、7世紀中葉前後の建物となるか。

出土土器(第82図7・8) 7はP3出土の弥生後期器台上部の口縁部片。外面には黒斑が認められる。色は黄褐色。8はP3出土の弥生中期甕口縁部。色は赤茶褐色。



第81図 2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第82図 1～4号掘立柱建物跡柱穴出土土器実測図（8は1/4、他は1/3）

4号掘立柱建物跡（図版28・34、第80図）

4区南中央西寄りに位置する。当初は当建物跡を1号建物跡西柱穴列と考えていたが、1号建物跡東柱穴列と軸が合わずかつ柱間寸法も異なることから、別の建物跡であると判断した。南北方向の柱穴列のみのため、どのような規模・形態の建物となるか、また柵となるかは不明である。

当建物跡は現状では南北柱穴列のP1～3を検出しており、主軸方向は北-32.5°-東、柱間寸法は心々距離で北から130cm、110cmとバラつきが認められる。柱穴掘形はいずれも径50～60cm前後の円形で、深さは30cm前後を測る。すべての柱穴で確認できた柱抜き取り痕から径10cmほどの柱の使用が想定される。1～3号建物跡と同じ、7世紀中葉前後の時期となるか。

出土土器（第82図9・10）9はP2掘形内出土の中実の土師器高坏脚部で、色は灰黄褐色。10は受部のある須恵器坏蓋口縁部で生焼けのもの。色は橙褐色。

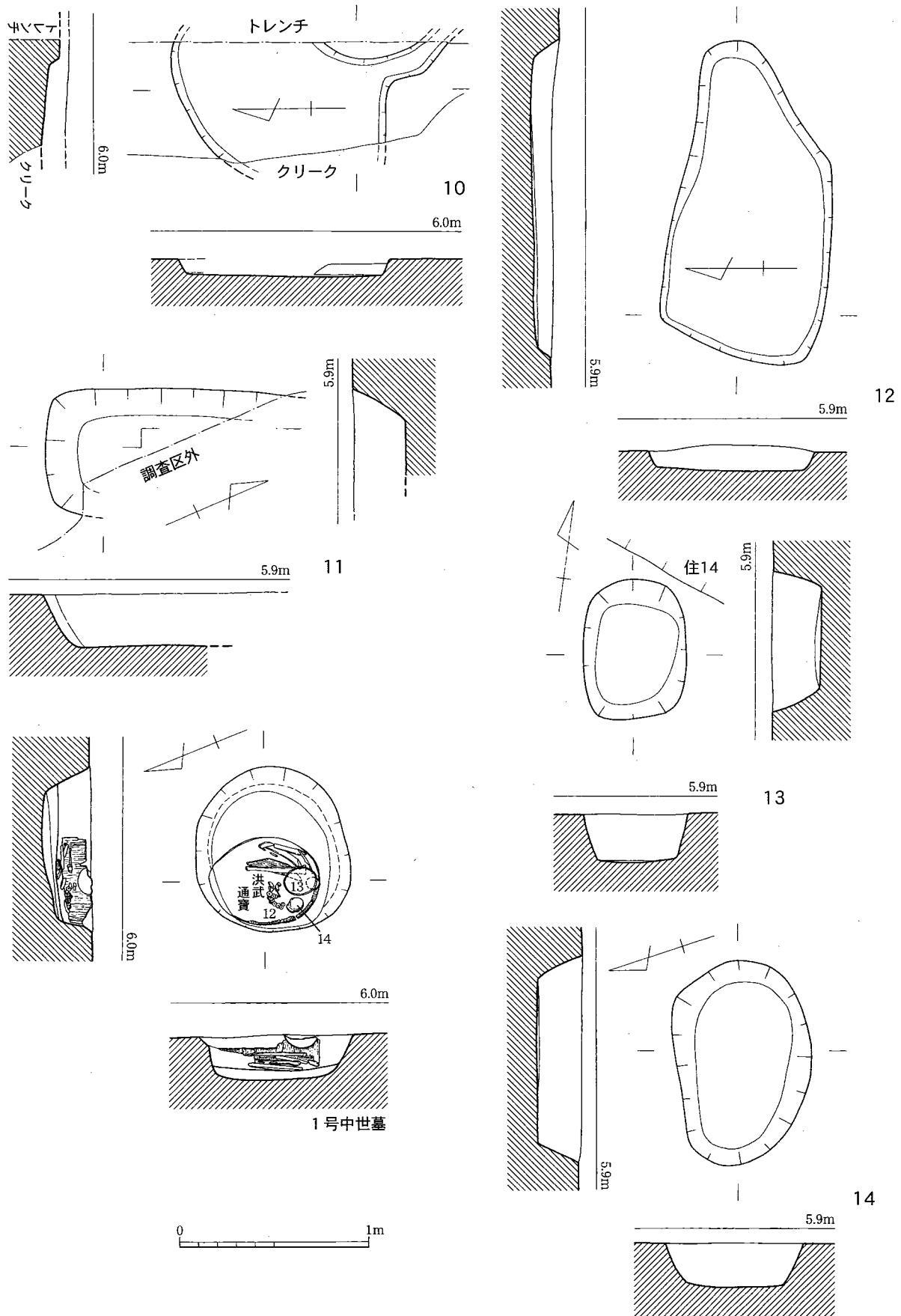
(4) 土坑

10号土坑（第83図）

5区南中央に位置する。土坑東側を試掘トレンチ、西側をクレークにより壊される。当土坑は東西65cm×南北146cm以上、深さ8cmの南東側が突出する平面形態となる。また土坑中央南東寄りにはテラスが存在し、壁が残存する南北壁は比較的急である。

出土土器から古墳時代後期の土坑になると考えられる。

出土土器（第84図1～3）1・2は土師器甕である。1は口縁部が直角に屈曲し、外面は二次加熱により、器表がボロボロである。色は外橙褐色、内橙褐色～灰黄褐色。2は胴部外面に工具痕、頸部内面には粘土継ぎ目痕が認められる。口縁部内外面にはススが付着。色は外薄こげ茶色、内灰黄褐色。3は土師器甕把手で、色は灰黄褐色。



第83図 10~14号土坑、1号中世墓実測図 (1/30)

11号土坑（第83図）

5区南中央東壁際、3号建物跡柱穴列内に位置する。土坑北東半分程度が調査区外となり、長軸125cm以上×短軸65cm、深さ26cmの長方形土坑となる。土坑床面はほぼ平らで、土坑壁の傾斜は壁が残る西・南壁はやや急となる。土坑埋土は灰褐色粘質土。

出土土器から古墳時代後期の土坑になると考えられる。

出土土器（第84図4・5） 4は土師器小型甕口縁部で、丸く収める口縁端部をさらに外反させる。色は白灰黄色。5は弥生後期甕口縁部。色は橙褐色。混入品。

12号土坑（図版34、第83図）

5区南中央西寄りに位置する。長軸165cm×短軸87cm、深さ13cmの東側が狭くなる長楕円形土坑で、土坑埋土は灰黄褐色粘質土。土坑床面はほぼ平らで、壁の傾斜はいずれの壁も比較的緩やかである。

埋土から古墳時代後期の土坑になると考えられる。

出土土器（第84図6～8） 6～8はいずれも混入品と考えられる。6はやや直立気味の弥生後期甕口縁部。内面は黒化し、色は黄褐色を基調とする。7は弥生後期台付甕脚部で、色は外白灰色、内黒色。8は弥生中期甕口縁部。色は黄褐色。

13号土坑（図版35、第83図）

5区南中央北東寄り、14号住居跡南壁に接し、1号建物跡P1-4間に位置する。長軸75cm×短軸55cm、深さ25cmの小型長楕円形土坑で、土坑埋土は灰褐色粘質土。土坑床面はほぼ平らで、壁の傾斜はいずれの壁もやや急である。

埋土から古墳時代後期の土坑となるか。

出土土器（第84図9） 9は球形の胴部を有する土師器甕で、口縁部は緩やかに外反する。外面にはススが付着する。色は灰黄色～淡橙褐色。

14号土坑（図版35、第83図）

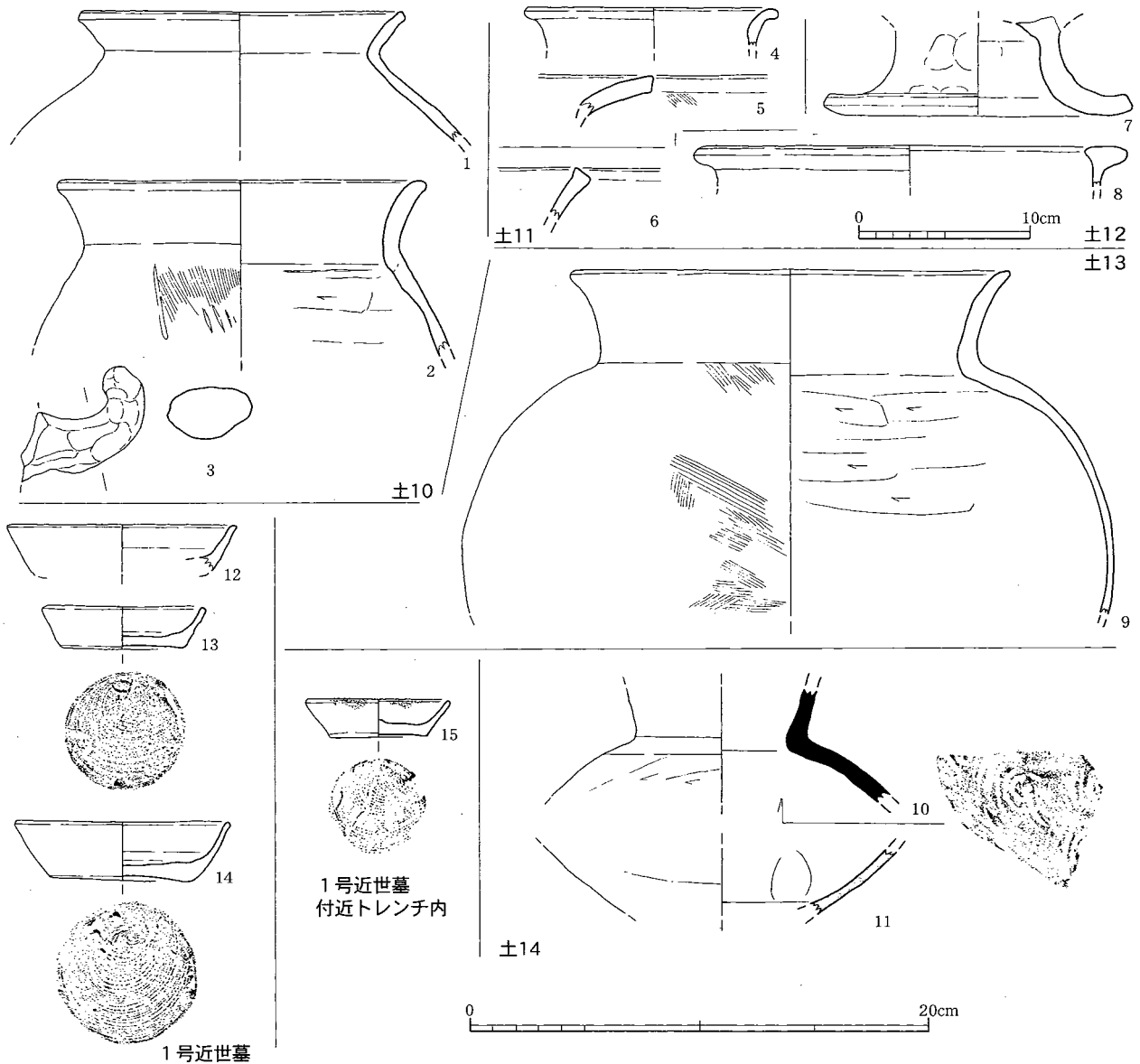
5区中央南東寄りに位置し、2号建物跡P3と西側で接する。長軸109cm×短軸72cm、深さ23cmの長楕円形土坑で、土坑埋土は灰褐色粘質土。土坑床面は平らで、壁の傾斜はいずれの壁もやや急である。出土土器から中世前期の土坑になると考えられる。

出土土器（第84図10・11） 10は須恵器壺頸部。胴部外面の一部はケズリで調整し、内面には当て具痕が残る。色は灰色。11は白磁碗片で、大宰府分類Ⅶ類となるか。内面には沈線状の段が付き、体部内面にはヘラによる草花文様が陰刻される。上部のみ施釉し、下部は露胎となる。やや厚めの灰色味の暗い透明釉で、気泡が目立つ。器壁は薄く、胎土は灰白色の粗いもので、黒斑も混じる。12世紀中葉～後半の標識磁器である。

(5) 中世墓

1号中世墓（図版35、第83図）

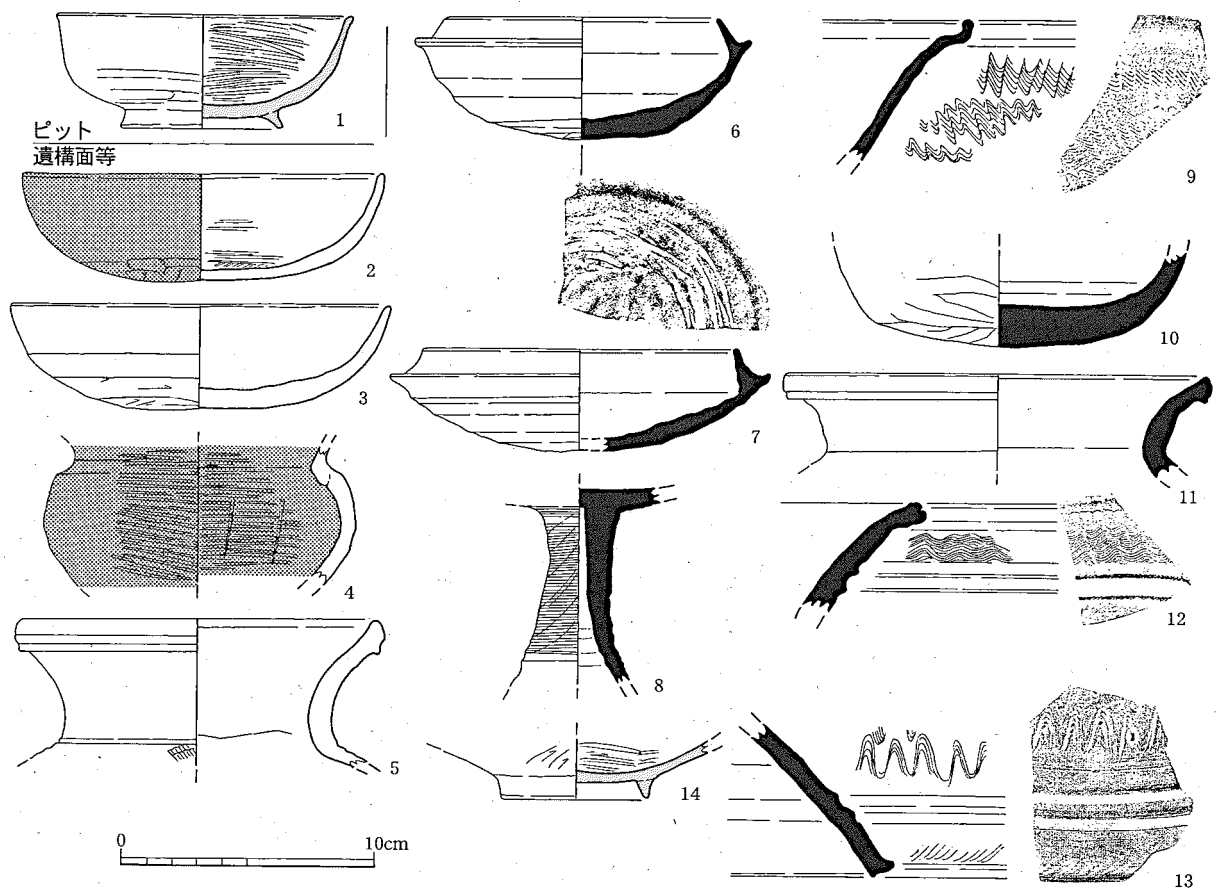
5区南東端で単独で検出した。南北82cm×東西86cm、最も深い中央部の深さ26cmとなる正円



第84図 10～14号土坑、1号中世墓出土土器実測図（8は1/4、他は1/3）

形の墓壙をまず掘削する。墓壙床面はやや凹凸があったため、最大8cmほどを土で埋めて平らにし、その上に南北59cm×東西46cmのやや歪んだ、ヒノキ科の材を使用した墓桶を入れていた。この埋め立ての下端ラインは図では破線で示す。墓桶は幅10～15cmほどの縦方向の材使用しており、墓桶内北側では人骨等も出土しなかったことから、南北方向の歪みは土圧によるもので、元々は円形の桶であったと考えられる。墓桶内には底板はなく、墓桶下端は直接埋め立てたレベルよりも2cmほど浮いていたが、人骨等は埋め立て土直上から出土した。

この墓桶内から人骨1体分、鉄分が付着して錆膨れ及び癒着の顕著な「洪武通寶」40枚（第104図4～10）及び土師皿が出土した。人骨は1体分がほぼ存在したが、骨質がほぼ土と同化し、骨表面しか残存していないため、人骨の同定は行っていない。性別は不明であるが、残りの良い左大腿骨から藤井式で推定すると、150cm前後の身長となるか。土坑埋土は暗灰褐色粘質土。



第85図 5区第1面ピット、遺構面等出土土器実測図(1/3)

「洪武通寶」は铸造時期は1368～1398年で、出土土師皿は16世紀中頃と考えられる山門前田遺跡3号溝出土土師皿よりも古い形態であることから、16世紀前後に比定される。

なお、墓桶の樹種同定結果はIV-2 (p173～174) で掲載しているので、参照されたい。
 出土土器 (図版56、第84図12～15) 12～14は土師皿である。いずれも底部は厚めで、口縁部は薄くなる。12は口径10cmを測り、色は白灰色。13は完形品で、口径7.2cm、器高1.9cm、底径5.3cmを測る。底部には静止糸切り痕が残り、内面には油ススが残る。色は白灰色。14は口径9.4cm、器高2.6cm、底径6.1cmを測るもので、底部には静止糸切り痕が残る。色は灰白色。

15は1号近世墓付近トレンチ内出土土師皿で、当区では1号近世墓以外に近世の遺構が存在しないこと、また出土地点も近いことから、この近世墓に属した可能性が非常に高い資料である。口径6.3cm、器高1.7cm、底径4.2cmを測る土師皿で、底部には静止糸切り痕が認められる。口縁部内外面には油ススが付着し、内面底部には工具痕が残る。色は灰黄白色。

(6) ピット・遺構面等出土土器

ピット出土土器 (図版56、第85図1)

1は14号住居跡を切るピットから出土した瓦器碗で、体部外面下部は板ナデで調整する。色は黒灰色。

遺構面出土土器（図版56、第85図2～14）

2・3は皿状を呈する土師器坏。いずれも手持ちヘラケズリは底部付近のみ施す。2は外面のみ黒塗りを施し、焼成はやや甘く、生地は灰白色。3の体部中位は横ナデにより稜状に盛り上がり、色は橙褐色。4は内外面黒塗りを施す、土師器小型丸底壺胴部。器壁は厚く、内外面横ミガキを施すことから、短い口縁部を持つと予想される。生地は淡橙褐色。5は口縁端部を肥厚させ、端部外下端面は突帯状に盛り上がる須恵器壺口縁部で未還元のもの。外面頸部にはタタキが認められる。色は黄橙色。

6・7は須恵器坏身である。6の底部外面には手持ちヘラケズリを施す、珍しいもの。色は灰色～灰白色。7の坏内面底には当て具痕が明瞭に残る。色は暗灰色。8は須恵器高坏脚部で、外面は斜め方向のナデ絞りのちカキ目を施したもの。外面・坏底部には自然釉が付着し、色は灰色～黒灰色。9は口縁端部を直立させる須恵器甕口縁部で、外面には3重の櫛描波状文を施す。色は暗灰色。10は須恵器壺底部で、器壁が厚いもの。外面は不定方向のケズリのちナデを施し、色は灰白色～灰色。11は須恵器甕口縁部で、肥厚させた口縁下端部にはナデより窪む。色は黒灰色。12は須恵器大甕口縁部で、肥厚させた口縁端部はナデにより窪み、2重に重複して施された櫛描波状文を挟み、2条のナデ凹線を巡らせる。櫛描波状文は下→上の切り合いとなる。また口縁下端部には櫛描波状文工具痕が波状に残る。内面には自然釉が付着する。色は暗灰色。13は須恵器器台裾部。外面裾部付近にはハケ状工具痕が残り、その上に2条のナデ凹線、さらにその上に1単位6条の櫛描波状文を2重に施す。色は暗灰色。

14は瓦器椀底部。外面にはケズリ痕が残り、内面には油ススが付着する。色は灰色～灰白色。

7. 5区第2面の検出遺構と遺物

(1) 概要

5区第2面で検出した遺構は竪穴住居跡13棟・ピットで、地形的に高い当区南では弥生時代後期～古墳時代前期及び古墳時代後期の住居が重複して存在する。当区北側は第1面よりさらに青色を帯びる埋土・地山であったため、遺構検出が困難であった。そのため、第1面における調査手法の反省から、重機でカマド焼面付近まで掘削し、遺構検出を行った。この方法では、カマドを付設する住居では有効であるものの、その他の遺構については掘り飛ばした可能性がある。また検出した住居もほとんど壁が残存していないため、住居ラインが不明確になったものも存在する。遺物はパンケース9箱分出土した。

(2) 竪穴住居跡

47号竪穴住居跡（図版37・38、第86図）

5区南東隅に位置し、60号住居跡に切られ、50・52号住居跡を切る。住居東側1/3は調査区外、南側はクレークによって壊されるが、住居規模は現状で東西340cm以上×南北425cm以上、深さ20cm前後を測る。なお、北壁中央に付設されたと考えられるカマドで反転すると、住居東西幅は460cmとなる。また当初60号住居跡の存在に気づかず、床面まで掘り下げた段階で住居の存在と切り合い関係を認識したため、出土土器が混ざってしまった。出土土器はすべて47号住居跡出土土器として取り上げたため、すべて47号住居跡出土土器として報告する。おそらく、第87図に掲載した土器はすべて47号住居跡出土土器となると考えられる。



47号住居跡カマド（西から）

住居床面上では多量の炭化材を検出した。この炭化材はカマド左袖先端部上でも検出され、東西方向の大きな炭化材片が多いことから、住居上屋構造材の一部であると想定される。また焼失住居の可能性もあるが、まず焼失住居にしては、炭化材の量が少なくまた小ぶりの材が多いこと、カマド左袖部で出土したカマド廃棄に関わる可能性が高い土師器（3・5～8・17）の存在、またカマド封じを行っている可能性があることから、焼失住居

ではなく、住居廃棄の際に再利用できる構造材は抜き、再利用できない構造材は竪穴住居内で焼いた状態が当住居の出土状況であると判断した。

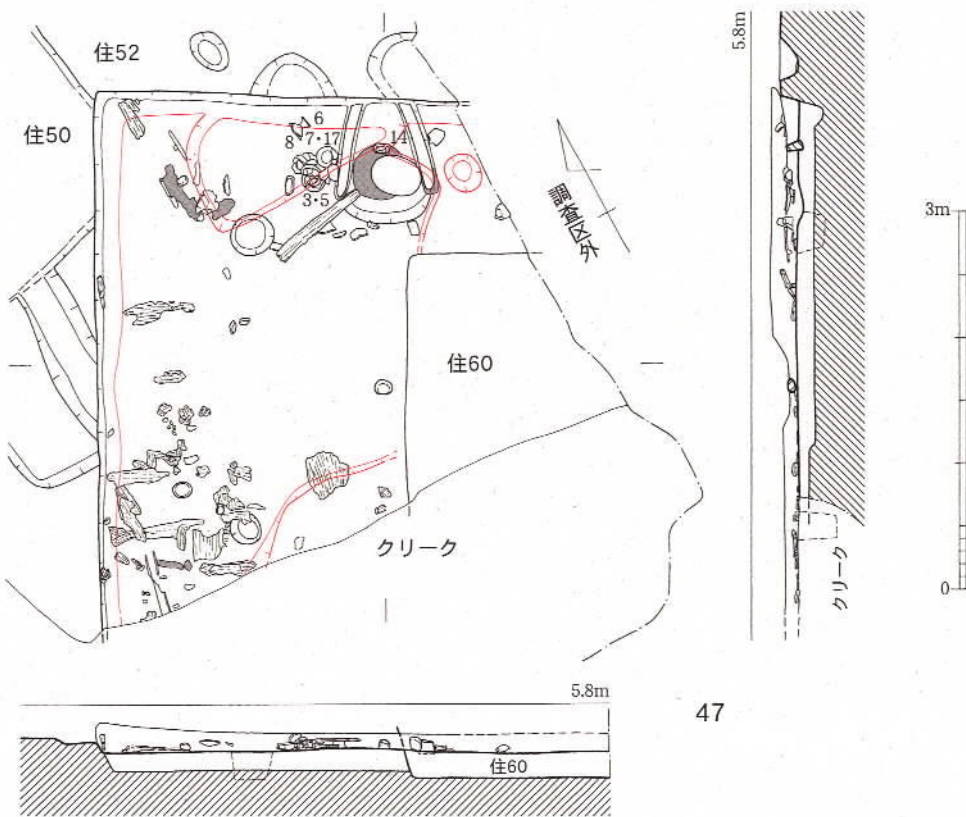
住居床面上ではピットを2基検出し、いずれも位置・深さから主柱穴となる。住居床面下前面で深さ18cmほどの深い掘り込みを確認した。住居埋土上層は黄茶褐色砂質土、埋土下層は灰白色細砂。出土土器から古墳時代後期中葉の住居跡と考えられる。

カマド（第86図） 住居北壁中央に付設されたと考えられるカマドである。両袖とも壁から80cmほどほぼ直線的に突出し、両袖とも先端部は火を受け、赤く硬化する。燃焼部奥壁から32cm南で土製支脚を確認し、その手前には一部上層ピットで壊されているが、40×37cmの範囲で硬化した焼面を検出した。支脚部分で燃焼部幅は47cm、奥壁幅は24cmの「ハ」の字状に開く平面形態となる。また焼面手前の浅い段は、カマド内の焼土・炭を掻き出した際に付いたものと考えられる。カマド内の薄いトーンで示したものは、カマド天井部構築土が崩落したものである。

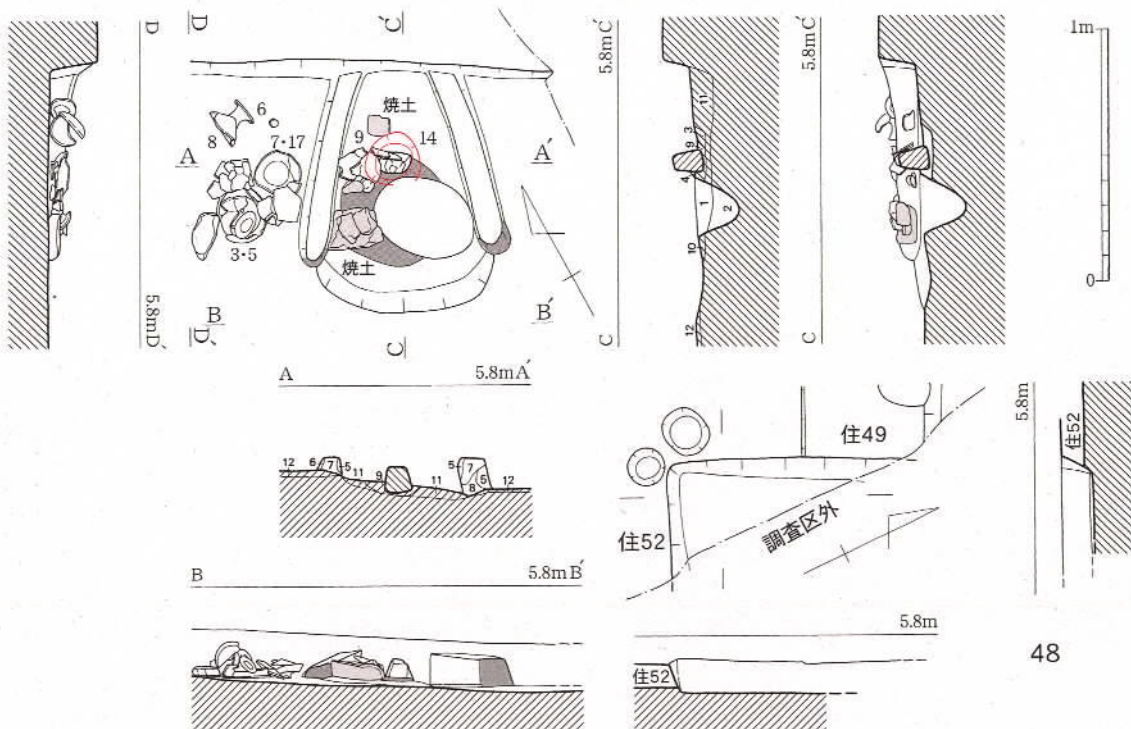
土製支脚は径20cm、深さ4cmの支脚固定ピットで固定され、前面は若干の粘土で支える構造となる。カマド内土層は記録できなかったが、カマド埋土上層は焼土・炭があまり混じらない黄灰色系砂質土であり、カマド封じの痕跡となる可能性がある。また、袖構築土である黄灰褐色土は住居検出面より5cmほど下がったレベルでしか検出できなかったこと、天井部構築材（薄いトーン）がカマド床面直上で検出できたことも、カマド封じの裏付けとなる。

住居平面図カマド焼面南の「×」の箇所は、炭化種子がまとまって出土した箇所であり、IV-3（p174～176）で種実同定を行い、煮炊きしたコメ・アワが主体となると分析結果が出ている。なお、IV-3の分析結果内においても記載されているが、カマド燃焼部内では骨片が点在して広がっていた。

出土土器（図版57、第87図） 1・2は口縁部がやや内湾気味に直立する土師器碗形坏である。いずれも手持ちヘラケズリを口縁部近くまで丁寧な施す。1の色は橙褐色。2は口縁外端部が横ナデにより窪む。色は外橙褐色、内黄白色～橙色。3は口縁端部が短く外反する土師器碗形坏で、高坏坏部となる可能性がある。口縁部外面には黒斑が認められる。胎土はやや細粒を含み、色は橙褐色。4～8は碗形坏が坏部となる土師器高坏で、いずれも完形品である。4は口径9.6cm、底径7.5cm、器高7.4cmを測る、低脚・中実の小型品で、脚柱部外面には縦ナデの稜が残る。坏部外面には黒斑が認められ、色は灰黄色～黒色。5・6はカマド付近出土。5は口径13.7cm、底径8cm、器高11.9cmを測り、口縁端部は弱く外反させる。脚柱部外面にはヘラナデを



47



48

1. 暗青灰褐色粘土
2. 暗青灰色砂質土
3. 暗灰色土=支脚固定ピット埋土
4. 焼けた粘土塊=支脚固定土
5. 黒灰色土で部分的に赤化(火の影響によるもの)
6. 暗橙灰褐色土
7. 黄橙灰褐色土
8. 黄灰褐色土

カマド袖構築土
(5, 6, 7は8が火を受け、赤味を帯びたもの)

9. 橙灰色砂質土=支脚固定ピット埋土
10. 暗橙灰色砂質土
11. 暗黄灰褐色土=カマド掘り込み
12. 黄灰色土(住居貼床土)

第86図 47・48号竪穴住居跡、47号住居跡カマド実測図 (1/60、1/30)

施す。内外面は二次加熱が顕著である。胎土は精良で、色は黄褐色～橙褐色。6は坏部が歪み、傾く形態となる。口縁端部は弱く外反し、脚柱部外面はヘラナデで調整する。脚裾部は反り上がり、坏部内外面は二次加熱痕が顕著で黒斑も認められる。色は黄褐色～黄橙色が基調。

7～9は土師器甕で、いずれもカマド付近出土。7は短く外傾する、肥厚させた口縁部を持つもので、外面には二次加熱痕が認められ、胴部内面は黒化する。外はこげ茶色、内は黄橙色～黒色。8は口縁端部を下方につまみ出す形態の甕で、胴部外面に黒斑、口縁部外面にススが付着する。色は灰黄褐色。9は甕底部で、外面には黒斑、内面には炭化物が付着する。色は灰黄褐色～黒色。カマド内出土。10は土師器甕口縁部で、外面には二次加熱痕が認められる。内面のケズリは横方向となる。色は黄橙色。11・12は土師器手捏ね土器。11の色は黄橙色、12の色は灰黄褐色～灰橙色。

13・14は土製支脚である。13は円柱を縦方向に半裁した形態で、横断面が円形となる可能性もあるが、半円形のままとなる可能性が高い。器高は11.7cmを測り、長さがあるもの。外面は丁寧なナデ調整で、胎土はスサ含まず粘土のみで成形され、色は灰黄色。外面に二次加熱痕は顕著でない。14は中実で長台形の正面形となる土製支脚で、上部は欠損し、外面には二次加熱痕が顕著なもの。底部は7.5cm角の正方形で、正面・側面部は丁寧なナデで調整する。37・55号住居跡出土土製支脚と同じく、胎土はスサを含まない精良なもので、色は灰黄褐色。

15は須恵器坏身。底部には2本線のヘラ記号が残存する。底部外面には点状に自然釉が付着する。色は灰色～灰茶色。

16・17は混入品。16は弥生後期大型壺口縁部。口縁上下端面に工具による浅い刻みを施す。色は茶褐色。17は弥生後期甕底部で、底部には中軸線とはややずれた、半乾燥時に外→内に穿孔する孔が認められる。胴部外面には二次加熱痕・ススが認められる。色は淡橙褐色。

48号竪穴住居跡（第86図）

5区南中央東壁際に位置し、49・52号住居跡を切る。住居北東部分大半が調査区外であり、住居南西隅の一部を調査したに留まる。住居規模は現状で南北185cm以上×東西85cm以上、深さは25cmほどを測る。住居埋土は灰黄褐色粘質土に炭が少量混じる土。

出土土器は図示できないが、埋土から古墳時代後期の住居跡となる可能性が高い。

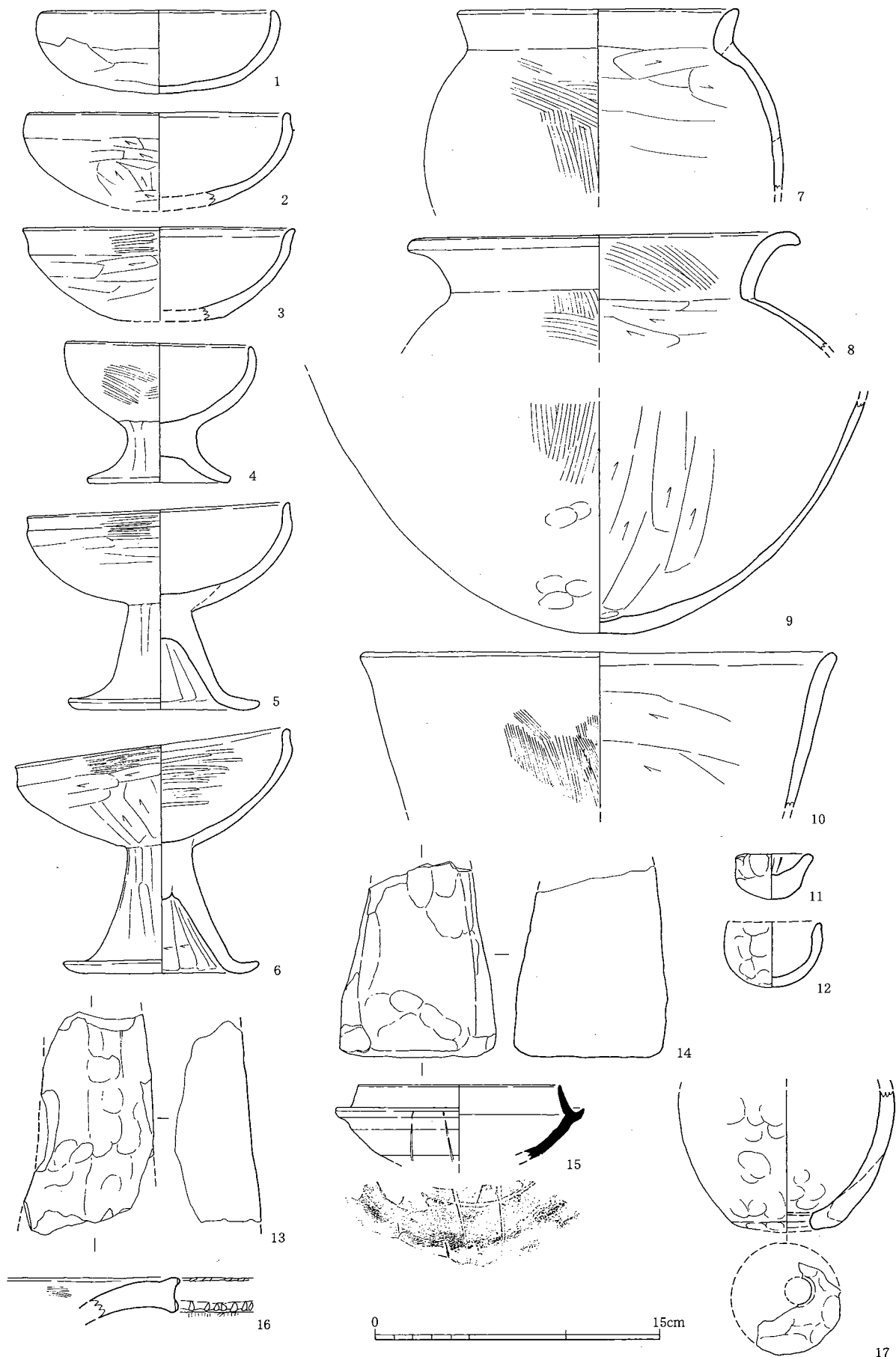


49号住居跡出土状況（北から）

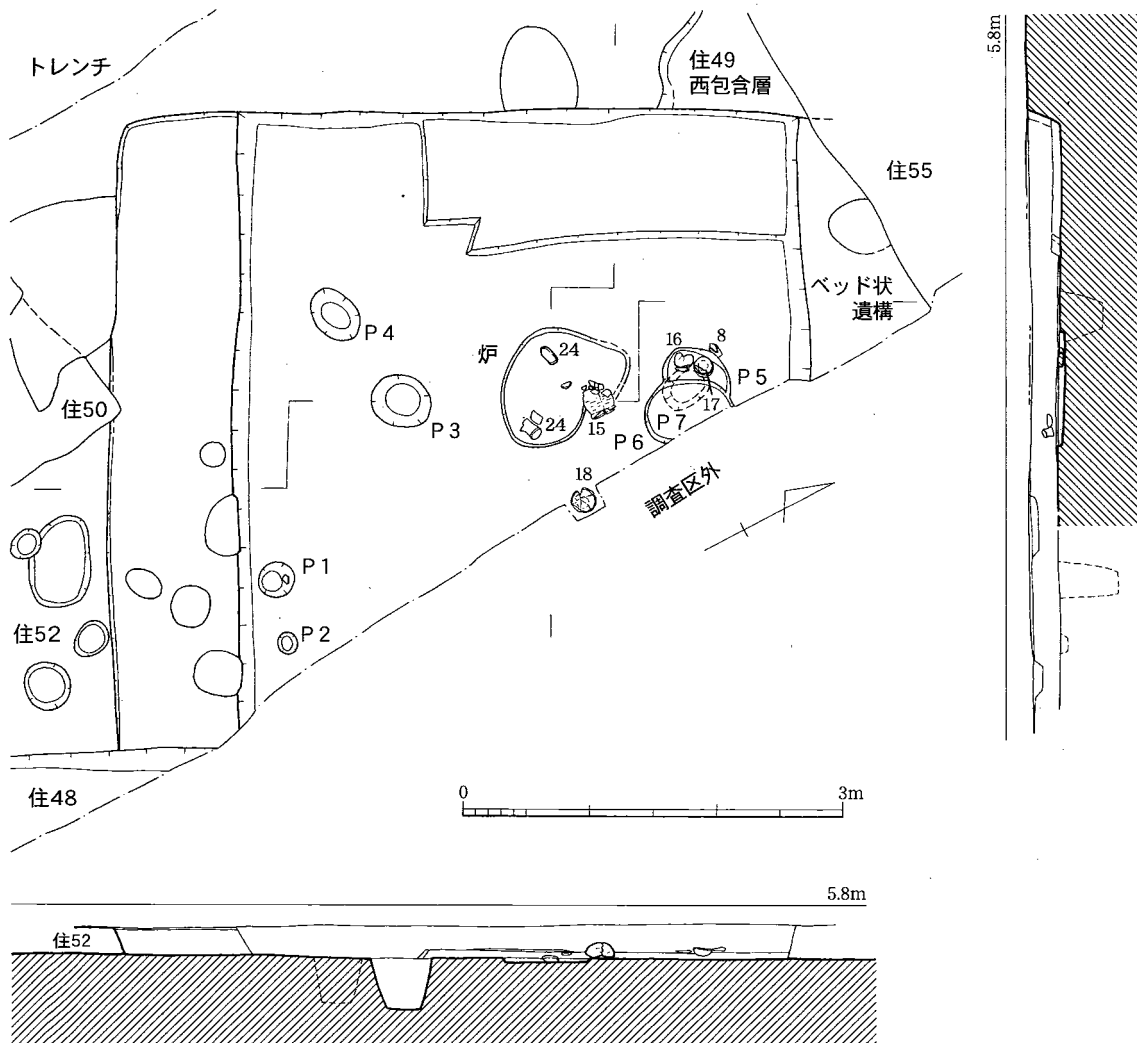
49号竪穴住居跡（図版38・39、第88図）

5区中央南東壁際に位置し、48・50・55号住居跡に切られ、52号住居跡を切る。住居北東1/3ほどが調査区外となるが、現状で南北650cm以上×東西500cm以上の南北にやや長い長方形住居となり、住居中央竪穴部は深さ25cmを測る。

住居北・西・南壁際にはいずれも貼りベッドとなる、ベッド状遺構を付設する。ベッド状遺構の規模・構造は、上層を暗黄褐色粘質



第87图 47号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/3)



第88図 49号竪穴住居跡実測図 (1/60)

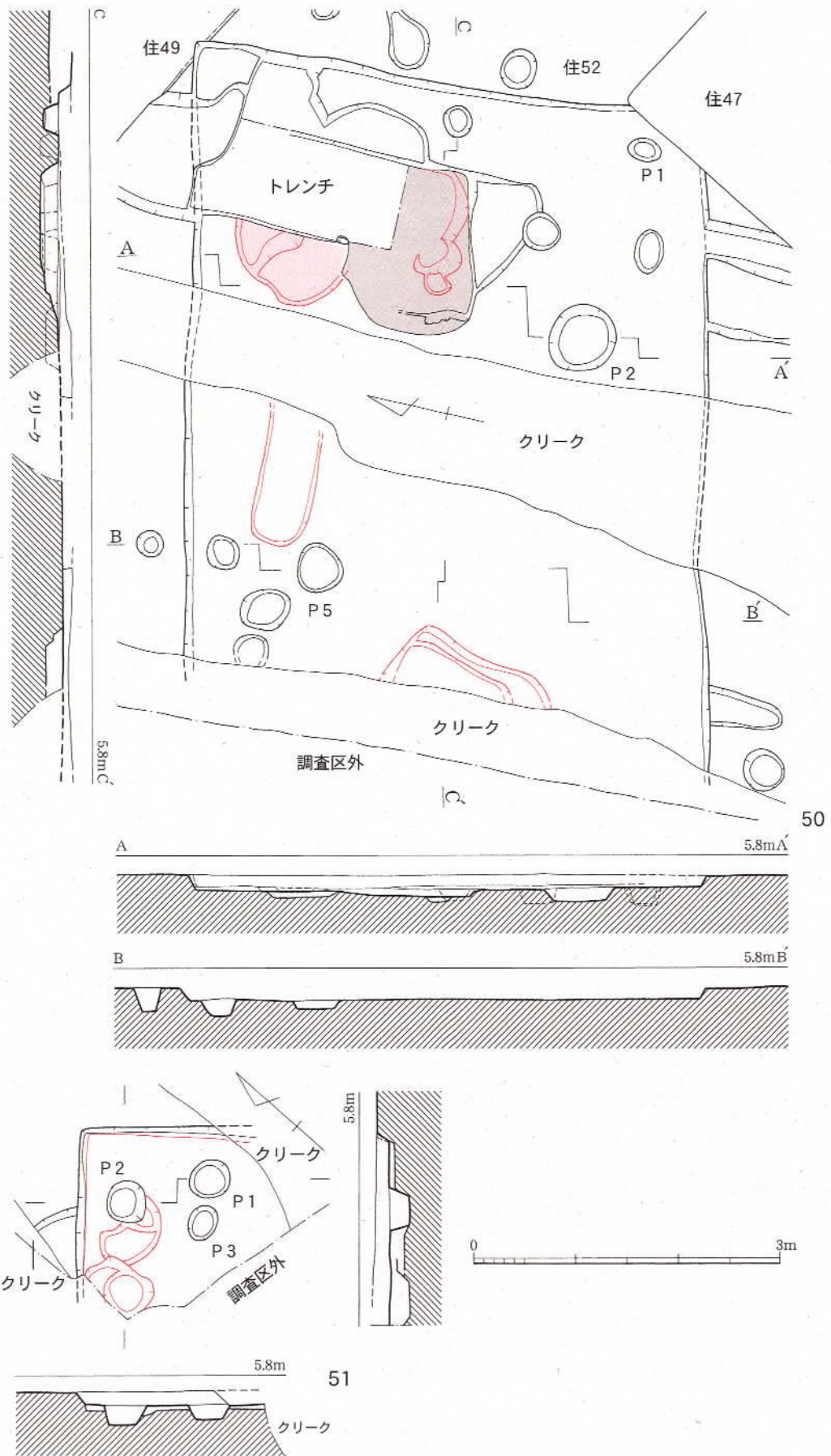
土・下層を白灰黄褐色粘質土で構築した北側ベッドは高さ25cmで幅は不明、白灰黄褐色粘質土で構築した西側ベッドは竪穴部南西隅部分で途切れ、高さ5cmと低いが、幅は110cmを測る。黄褐色粘質土で構築した貼りベッド手前に暗黄褐色粘質土を貼り付け拡張したと考えられる南側のベッド状遺構は、高さ22cm、幅110cmを測る。

竪穴部床面では、竪穴部中央やや北寄り、北西側が突出する南北96cm×東西95cm、深さ4cmの炉を検出した。炉の埋土は黄褐色粘質土に炭が多く混じる土となる。床面上では炉以外にピット7基検出し、位置・深さからP3が主柱穴であることは確実である。当住居は2本柱の住居跡と考えられることから、P3対の主柱穴を精査したが(P5～7は一段掘り下げた痕跡)、検出できなかったため、主柱穴は調査区外に存在するものか。住居竪穴部の埋土は黄茶褐色粘質土を基調とするが、炉上面付近は暗黄茶褐色粘質土がレンズ状に堆積する。住居床面直上の炉付近で、甕(15)・器台(24)、炉北側で鉢2点(16・17)、高坏(8)が出土した。

切り合い関係及び出土土器から古墳時代前期前半古相の住居跡と考えられる。また当住居覆土中から磨石が出土した(第102図24)。

当住居跡北西には49号住居跡東包含層が存在する。

出土土器(図版57、第91図1～24) 1は平底を残す凸レンズ底の弥生後期下大隈式新段階の



第89図 50・51号竪穴住居跡実測図 (1/60)

無頸壺。器形は卵型で、口縁端部はナデで面取りする。外面下位には黒斑が認められ、内面底部付近は黒化する。色は褐色。2は弥生後期壺底部。色は外白灰褐色、内灰黄褐色。3は在地系壺口縁部。大きく外反する口縁部で、口縁上端部はナデにより窪む。内面は黒化する。色は灰黄褐色。4は弥生後期壺口縁部で、口縁端部外面に黒斑が認められる。色は黄橙色。炉付近出土。5は小型丸底壺胴部で、胎土には細粒をかなり含む。色は橙色～黄橙色。6は土師器小型丸底壺で、色は淡橙褐色。P1出土。7は弥生後期高坏下部～脚部上部。坏部外面は二次加熱痕があり、色は外黄褐色、内灰褐色。8は弥生後期高坏の脚部上部片で、付加法で接合される坏部との接合部には刻みを施し、貼り付けやすくしたもの。9は布留系小型高坏脚裾部で、焼成前穿孔が1ヶ所残る。色は淡橙褐色。10は布留系高坏脚部か。半乾燥時に穿孔した孔が1ヶ所残る。色は灰茶色。炉付近出土。

11は在地系甕で、直線的に外傾する口縁部を持ち。色は外白灰黄色、内白灰黄色～灰褐色。

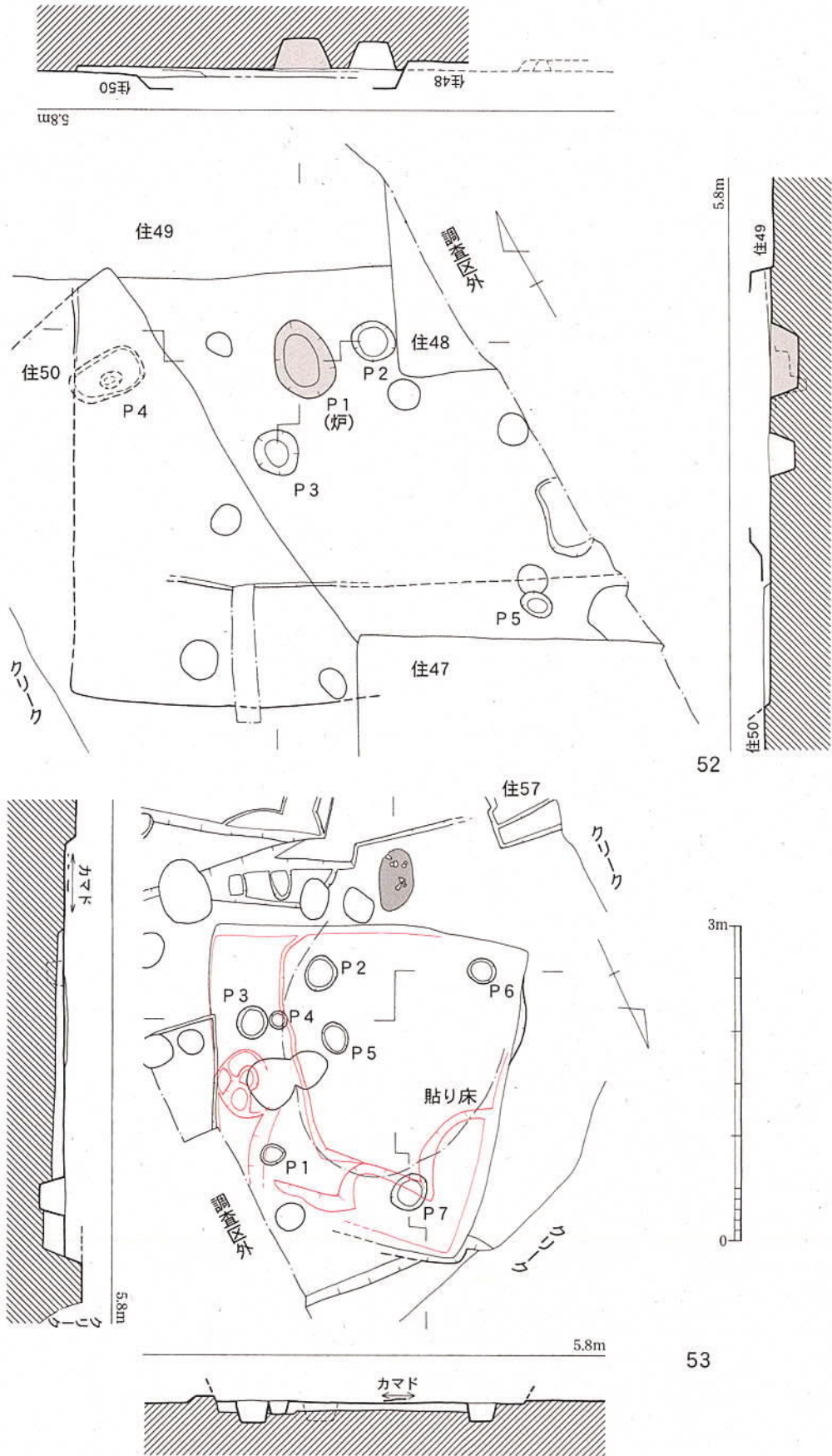
12は直立気味の在地系甕口縁部で、外面には二次加熱痕と黒斑が認められる。色は白肌色～赤褐色。炉付近出土。13は在地系甕で、胴部上位には左上がりのタタキ痕が残る。胴部内面は工具によるナデ調整を行う。外面には黒斑あり。色は外白黄色～灰黒色、内黄褐色～黒色。14は長胴の大型在地系甕で、頸部内面に明瞭な稜を形成する。外面頸部付近にはススが認められる。色は外灰茶色、内白黄褐色～灰茶色。15は完形の在地系甕で、口径14.7cm、器高22.8cmを測る。外面胴部上位には左上がりのタタキ、下部は板ナデを施す。外面には黒斑あり。色は外灰橙褐色～灰茶色、内灰黄褐色。

16～19は在地系の鉢。16は直口する口縁部で、外面底部には黒斑が認められる。色は橙褐色～灰黄色。17は口縁部が弱く内湾し、深さのあるほぼ完形の鉢。口径15.9cm、器高8.4cmを測る。外面は二次加熱により一部剥離し、薄くススも付着する。また内面は黒化する。色は外橙褐色～白黄褐色、内橙褐色～灰褐色を呈する。18は完形の大型鉢で、口径18.9cm、器高9cmを測る。外面は板ナデで調整したため、工具痕が残る。外面には黒斑が認められ、色は外白黄灰色、内淡灰色。19は炉付近出土の鉢で、色は外肌色、内灰黄色。20～22は口縁部が短く屈曲する在地系土師器外反口縁鉢。20は底部が突出気味のもので、外面には薄く黒斑が認められる。色は白黄褐色～灰色。21は体部が低平なもので、色は外黄褐色、内白黄褐色。22は口縁部が大きく開くもので、外面には黒斑が認められる。色は外白黄褐色、内白黄褐色。

23は在地系大型器台脚部で、当該期の有明海沿岸の遺跡で良く出土する形態の器台である。欠損する器台上部は椀形の体部から口縁部が大きく屈曲する形態になると考えられる。脚部中位には外→内の焼成前穿孔が1ヶ所存在し、脚柱部外面にはナデの稜が認められる。脚裾部には黒斑あり。色は灰茶褐色。24は完形に近い在地系器台で、色は白黄褐色。

50号竪穴住居跡（図版39、第89図）

5区南中央に位置し、47号住居跡に切られ、49・52号住居跡を切る。住居中央・西端をクリーク、住居北東隅付近を試掘トレンチにより壊されるが、現状で南北510cm×東西650cm以上、深さ12cmの東西に長い長方形住居となる。住居東側の床面上の薄いトーンで示した範囲に薄く炭が広がるが、炉ではないものの、近くに炉が存在する可能性がある。床面上ではピット9基検出したが、支柱穴は不明である。また住居南西ではピットを検出できなかったことから、



第90図 52・53号竪穴住居跡実測図 (1/60)

ベッド状遺構が存在した可能性が高い。住居床下掘り込みを4ヶ所確認し、炭が広がる範囲下の掘り込みは炭が混じるため、貼床を貼り直した際に混じたものである可能性がある。住居埋土は黄茶褐色粘質土。

切り合い関係及び出土土器から古墳時代前期前半古相の住居跡と考えられる。

出土土器（第93図25・26） 25は球形の胴部から短く外反する口縁部を持つ土師器丸底壺で、色は黄橙褐色。26は口縁部が「く」の字状に折れる在地系高坏口縁部で、口縁端部は弱く外反させる。色は淡橙褐色。

51号竪穴住居跡（図版39、第89図）

5区南東隅に位置し、南は調査区外、東西をクリークにより壊されてしまったために、住居北西隅の一部のみ調査したに留まる。住居規模は北西—南東210cm以上、北東—南西190cm以上、深さ14cmを測る。床面ではピットを3基検出し、位置・深さからP2が支柱穴となる。住居床下全体で掘り込みを確認した。住居埋土上層は灰褐色砂質土、埋土下層は茶褐色粘質砂となる。出土土器から古墳時代後期後半の住居跡と考えられる。

出土土器（第93図27） 27は強く内湾する土師器碗形坏で、色は橙褐色。

52号竪穴住居跡（第90図）

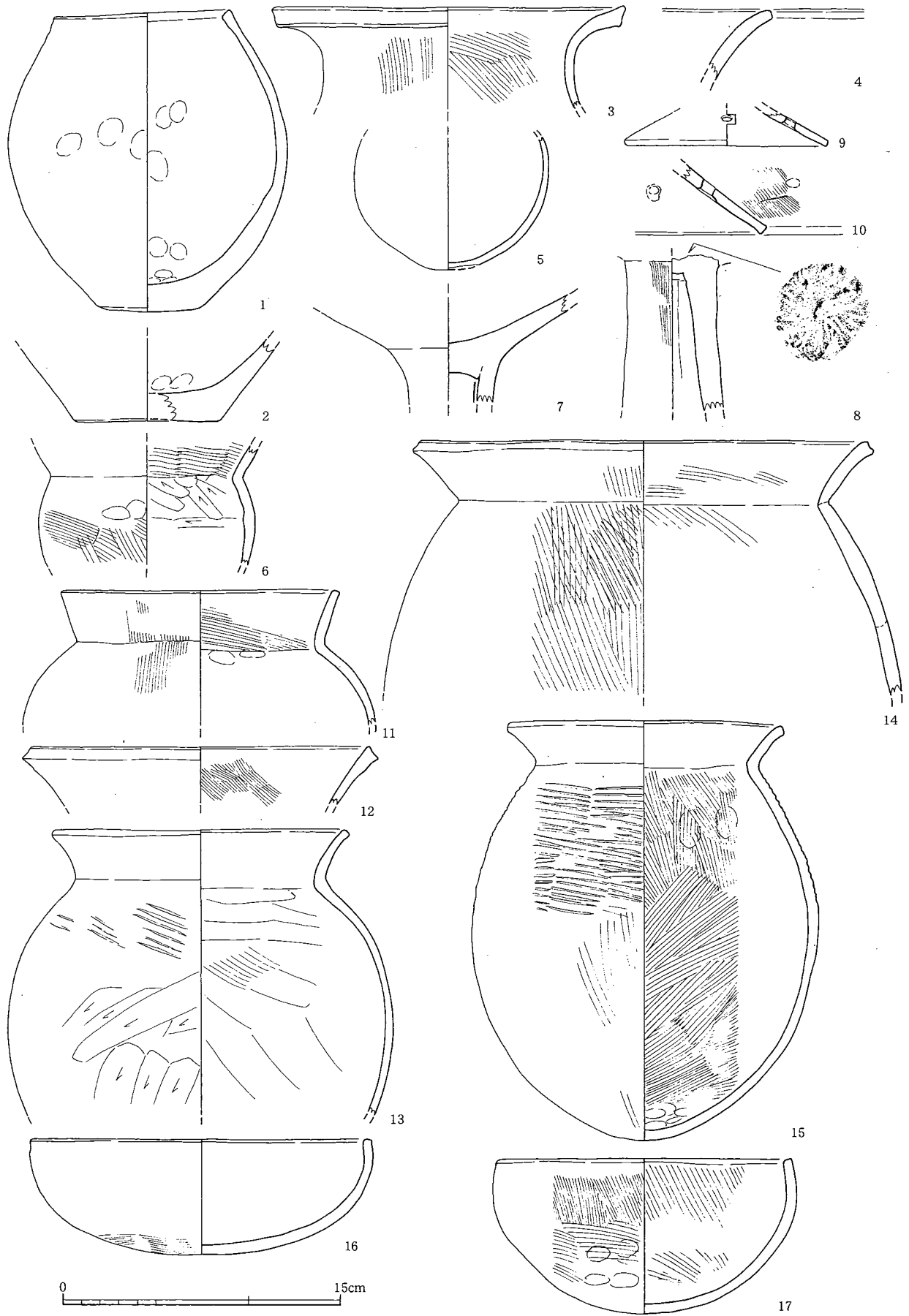
5区中央東壁際に位置し、47～50号住居跡に切られる。住居東側は調査区外であり、住居規模は現状で東西560cm以上×東西410cm以上の長方形住居になると考えられる。壁が僅かに残る住居中央竪穴部西壁・南壁の深さはいずれも6cmを測る。住居南壁には明黄茶褐色粘質土で構築された貼りベッドを付設し、ベッドは幅118cm、高さ6cmを測る。竪穴部床面ではピットを5基検出し、P1は炉となる。P1の埋土上層は暗黄褐色粘質土に炭が多く混じり、下層は暗黄褐色粘質土となる。P2は位置から支柱穴となる可能性が高い。2本柱の住居跡となる可能性が高いため、P2対の支柱穴はP4となる可能性があるが、P4西上端が住居壁推定ラインを超えてしまうことから、P4は下層の遺構となる可能性がある。またP5もベッド状遺構下に位置することから、下層の遺構となるか。住居埋土は黄茶褐色粘質土。

切り合い関係及び出土土器から弥生後期中葉、下大隈式古段階の住居跡と考えられる。

出土土器（第93図28～31） 28～30は弥生後期甕で、28・30は炉内出土。28は頸部内面の屈曲が緩やかで、色は黄褐色。29は口縁端部がナデにより窪み、色は黄褐色。30は口縁下端部が横ナデにより窪む口縁部で、口縁部内面は黒化する。色は黄褐色。31は弥生後期甕底部で平底を残し、底部と体部との境が明瞭な凸レンズ底である。色は白黄褐色。

53号竪穴住居跡（図版40、第90図）

5区北東隅に位置する。当住居跡は第1面31号住居跡の下層に当たるため、壁のほとんどは壊されており、北西隅・東西壁の一部のみ壁を確認した。住居北東隅は調査区外になる。住居規模は現状で東西300cm×南北310cm、深さは最もよく残る北西壁で18cmを測る、やや歪な小型正方形住居となる。住居南壁中央には突出タイプのカマドを付設するが、削平のため、やや強く焼けた焼面のみ確認した。焼面は壁から15cm南に突出し、33×60cmの範囲に広がる南北に長



第91图 48·49(1)号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/3)

い大きな焼面で、焼面直上で土器片が出土した。

住居床面ではピットを7基検出し、P1・3・6・7が位置・深さから支柱穴になると考えられる。また床面中央部の一点破線で示した範囲で黄色細砂の広がりを検出し、厚さは10cmを測る貼り床となる。住居埋土は粘性が強い灰色粘質土。住居床面下全面で掘り込みを確認した。出土土器から古墳時代後期末の住居跡と考えられる。

出土土器（第93図32～37） 32は土師器模倣坏である。外反する口縁部と底部との境の稜は非常に鈍い。色は橙褐色。33は小型の土師器高坏下部～脚部片。脚柱部外面はケズリで調整。外面は二次加熱により赤変し、色は黄茶褐色。

34は焼け歪みがある須恵器坏蓋。やや鋭く突出する稜を持ち、口縁内端部はナデにより窪む。外面には厚く自然釉が付着し、色は外灰色～黒灰色、内青灰色。混入品と考えられる。35は直立する立ち上がりの受部を持つ須恵器坏身で、かなりの歪みと焼き膨れが認められる。外面受部下には須恵器坏片と考えられる破片が付着する。36は口縁外端部を突帯状に肥厚させた須恵器甕口縁部で、外面には薄く自然釉が付着する。色は灰色。

37は53号住居跡付近遺構面出土の土師器甕口縁部で、口縁端部は玉縁状に肥厚させる。口縁部外面には粗いハケ目が残り、色は外白黄色、白黄褐色。

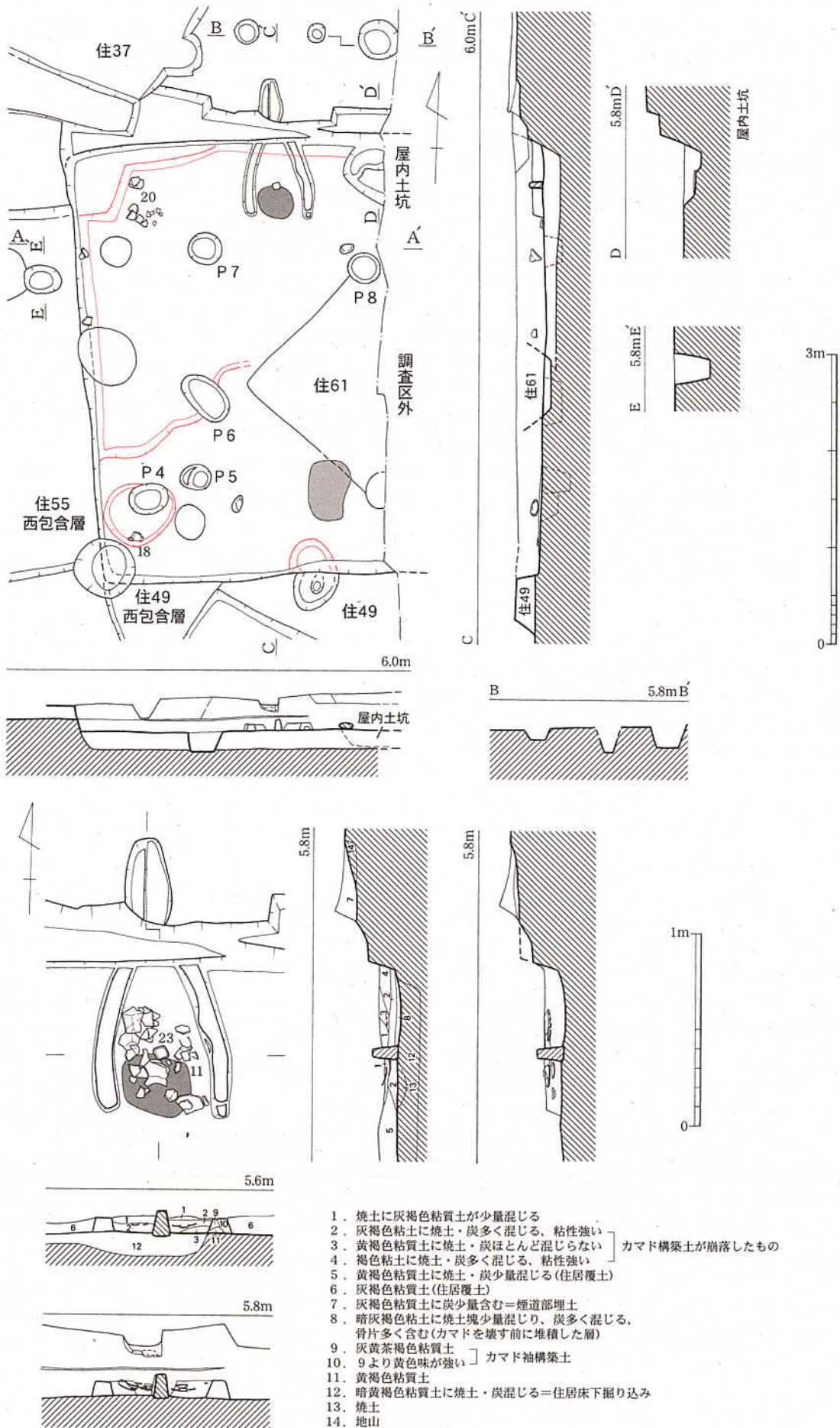
55号竪穴住居跡（図版40・41、第92図）

5区中央東壁際に位置し、61号住居跡に切られ、49号住居跡を切る。当住居跡と61号住居跡は第1面で検出できた遺構であり、第1面においてほぼ当住居の範囲を一つの住居跡として調査し、当住居跡床面より10cm以上上面が第1面住居の床面と判断した。しかし、下層遺構の調査のため、第2面調査時に第1面住居床面を再度掘り下げた際にカマドを検出したことにより、第1面の調査の誤りに気が付いた。第1面住居の壁は、30cmほど北側まで掘りすぎてしまったため、当住居壁北側には段が付き、カマド煙道部の一部も壊してしまった。なお、第1面で調査した際に出土した土器は当住居跡覆土上層出土土器として報告する（1～9）。

住居東側1/3は調査区外であるが、住居規模は現状で東西315cm以上×南北460cm、最も良い北壁で深さ35cmを測る。北壁中央に付設されたと考えられるカマドで反転すると、住居東西幅は420cmとなる。また当初61号住居跡の存在に気付かず、当住居床面まで掘り下げた際に61号住居跡焼面を検出したため、住居の存在及び切り合い関係を認識でき、また出土土器が混ざってしまった。切り合い関係に気付く前に取り上げた土器は、すべて55号住居跡出土としたため、そのまま当住居跡出土土器として報告する。

住居床面上ではピットを4基及び屋内土坑を検出し、ピットはP5・7が深さ・位置から、ややカマドに近いことは気になるが、支柱穴と考えられる。屋内土坑は住居北壁際に位置し、規模は55cm×45cm以上、深さ17cmで、南側にテラスを持つ。住居床面ほぼ全面で深さ20cmほどと深い掘り込みを確認した。住居埋土上層は灰黄色粘質土、埋土下層は黄褐色粘質土。

住居北壁から80cmほど北に位置する東西方向に並ぶピット3基は、当住居跡北壁に平行することから、当住居跡の支柱穴の可能性があり、またE-E'断面図を作成した当住居跡西に位置するピット1基も住居跡埋土とピット埋土が類似しているため、当住居跡の支柱穴の可能性もある。なお、当住居跡覆土上層から砥石が出土した（第99図6）。



第92図 55号竪穴住居跡実測図 (1/60、1/30)

出土土器から古墳時代後期後半の住居跡と考えられる。

カマド（第92図） 住居北壁中央に付設されたと考えられるカマドである。両袖とも壁から83cmほど支脚を囲むようにやや内湾しつつ突出する。右袖先端部の段は掘り過ぎてしまったためについたものである。燃焼部奥壁から40cm南で先端が欠損したほぼ完形の土製支脚（23）を確認し、土製支脚手前では35×30cmの範囲で硬化した焼面を検出した。支脚部分で燃焼部幅は49cm、奥壁幅は20cmのやや内湾しつつ「ハ」の字状に開く平面形態となる。支脚周囲の床面から5cmほど浮いた位置で土師器椀形坏（11）、甕片を検出したが、これらの土器の出土状況は1・3層と対応することから、カマド使用時のものではないと考えられる。土製支脚は47号住居跡カマド土製支脚のように支脚固定ピットで固定されず、6・30号住居跡カマドのように若干掘り窪めて、支脚を固定するが、支脚固定粘土は認められなかった。8層はカマド使用時堆積土となるが、47号住居跡カマドと同じく、埋土中から骨片が出土した。また1～4層はカマド構築土が崩落した土となる。

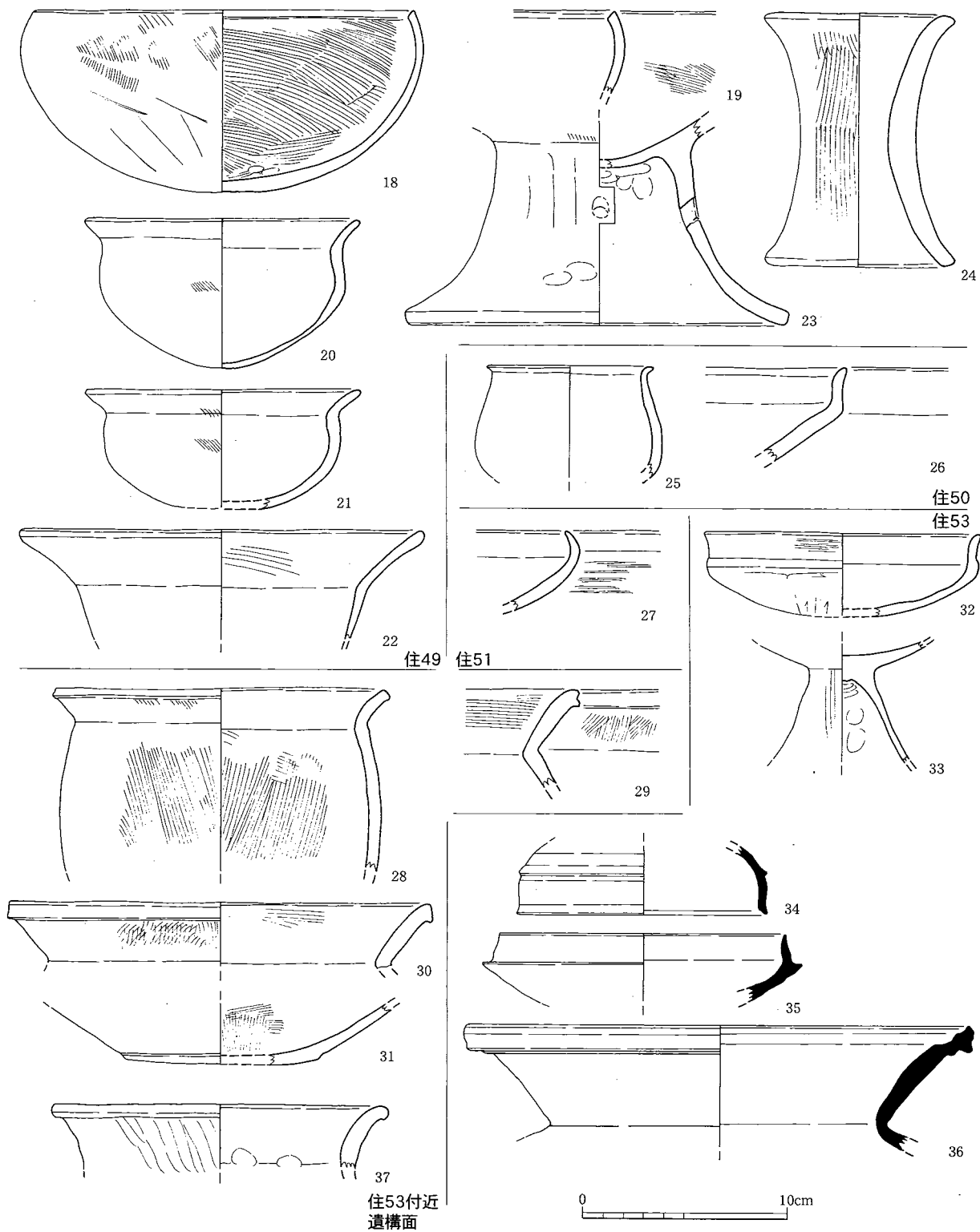
燃焼部奥壁から20cm北で、長さ41cm、南側で幅24cmほど残存する、煙道部主軸がカマド燃焼部主軸より7cmほど東にずれた煙道部を検出した。カマド煙道部と燃焼部奥壁間は先述したように掘り飛ばしてしまっていたが、長さ61cmほどを測る煙道部となる。煙道部床面は北側に向かって緩やかに上昇する一方、煙道部床面の傾斜と燃焼部奥壁の傾斜が全く異なることから、燃焼部奥壁の傾斜のままトンネル状に煙道部床面レベルまで上がり、そこから強く屈折し、煙道部床面の傾斜に至ると考えられる（見通し図の破線が推定ライン）。なお、煙道部東側床面は掘りすぎてしまったため、下端推定ラインを黒破線で示す。

出土土器（図版58、第94図） 1～9は覆土上層、10～20は覆土下層と分けて報告する。

1は口縁部がほぼ直立する土師器椀形坏で、外面のみ黒塗りを施す。内面にはナデの稜が残る。胎土は精良で、生地と内面の色は肌色を呈する。2は短く直立する立ち上がりを持つ土師器模倣坏である。色は灰黄色。3は土師器椀形坏で、口縁部下はナデにより稜状に突出するため、模倣坏の可能性もあるが、時期・形態的に見て椀形坏の一種となると考えられる。内外面には黒塗りを施し、生地は灰褐色。4は弱い屈曲部を持つ土師器高坏口縁部。色は黄橙色～橙褐色。5は土師器高坏脚部。上部は坏部との接合のため窪む。色は淡橙褐色。6は土師器丸底壺で、頸部内面付近には粘土継ぎ目痕が残る。外面全体、口縁部内面に黒塗りを施し、外面全体にはススが付着する。生地はこげ茶色。

7は須恵器坏。外面底部はヘラ切りのちナデ調整。色は灰色。混入品。8は須恵器壺口縁部。口縁外端部は工具により突帯に隆起させ、上端部はナデにより窪む。頸部外面には薄く灰がかかる。色は灰色。9は弥生後期～古墳前期の器台下部片。上下が鼓形に開く形態の器台であり、4つの長方形透かし孔が認められることから、有明海沿岸地域の遺跡でよく出土する形態の器台となる。外面中位には工具による5条の沈線を巡らし、その沈線上にハケ工具で斜めに刻み目を施す。沈線下には長方形透かし孔をヘラ工具で切り取り、孔断面には切り取った際の稜が認められる。色は黄橙色。混入品。

10～13は土師器椀形坏である。10はほぼ直立する口縁部で、外面には黒斑あり。色は橙褐色。11・12は弱く内湾する器形となる。11は口縁部近くまで手持ちヘラケズリを施し、内外面に二次加熱痕が認められる。色は橙褐色～暗褐色。カマド内出土。12の色は橙褐色。13は3と同様



第93図 49(2)~53号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

の稜を持つ坏となる。内外面黒塗りを施し、生地は灰色。14~16は土師器高坏脚柱部。14の外
 面には細かい横ミガキを施し、内面には縦ナデの稜が残る。坏部底部には工具痕が認められる。
 焼成はやや甘く、色は外暗橙色~灰黒色、内灰黒色。15は短い脚部で、色は橙褐色。16は中実
 の脚柱部外面に縦方向のケズリを行うもので、色は橙褐色。

17～19は土師器甕。17は張りのない胴部から口縁部が強く外反する形態の中型甕。外面底部付近にはケズリを施し、内面には粘土継ぎ目痕が残る。外面には二次加熱痕・ススが認められ、内面は黒化する。色は外橙褐色～灰茶色、内灰黄色～灰茶色。18は口縁部が「く」の字状に屈曲し、色は灰黄褐色。19は球形の胴部から、口縁部が短く直立気味に立ち上がるもので、色は灰黄褐色～白黄褐色。20～22は土師器甕である。20の外面はナデによる凹凸が顕著で、また歪みがある。口縁部外面には黒斑が認められ、色は灰黄褐色。21の外面には黒斑が認められ、色は肌色。22は甕底部で、外面底部にはハケ目が残る。色は灰黄褐色～灰褐色。

23は当住居跡カマドで使用した土製支脚である。上部は調査時に欠損したが、37・47号住居跡出土土製支脚と同じく、中実で正面形が長台形を呈するもの。調査段階では非常に脆い状態で出土したため、支脚下部半分ほど取り上げに失敗した。底面は9cm角の正方形を呈し、裾部はやや広がる形状となる。側面・表裏面には指頭圧痕が明瞭に残る。正面・両側面は二次加熱痕が顕著であり、一部白灰色に変色する。胎土はスサを含まず、粘土のみで構成され、色は灰黄色～灰黄褐色。

56号竪穴住居跡（図版41、第95図）

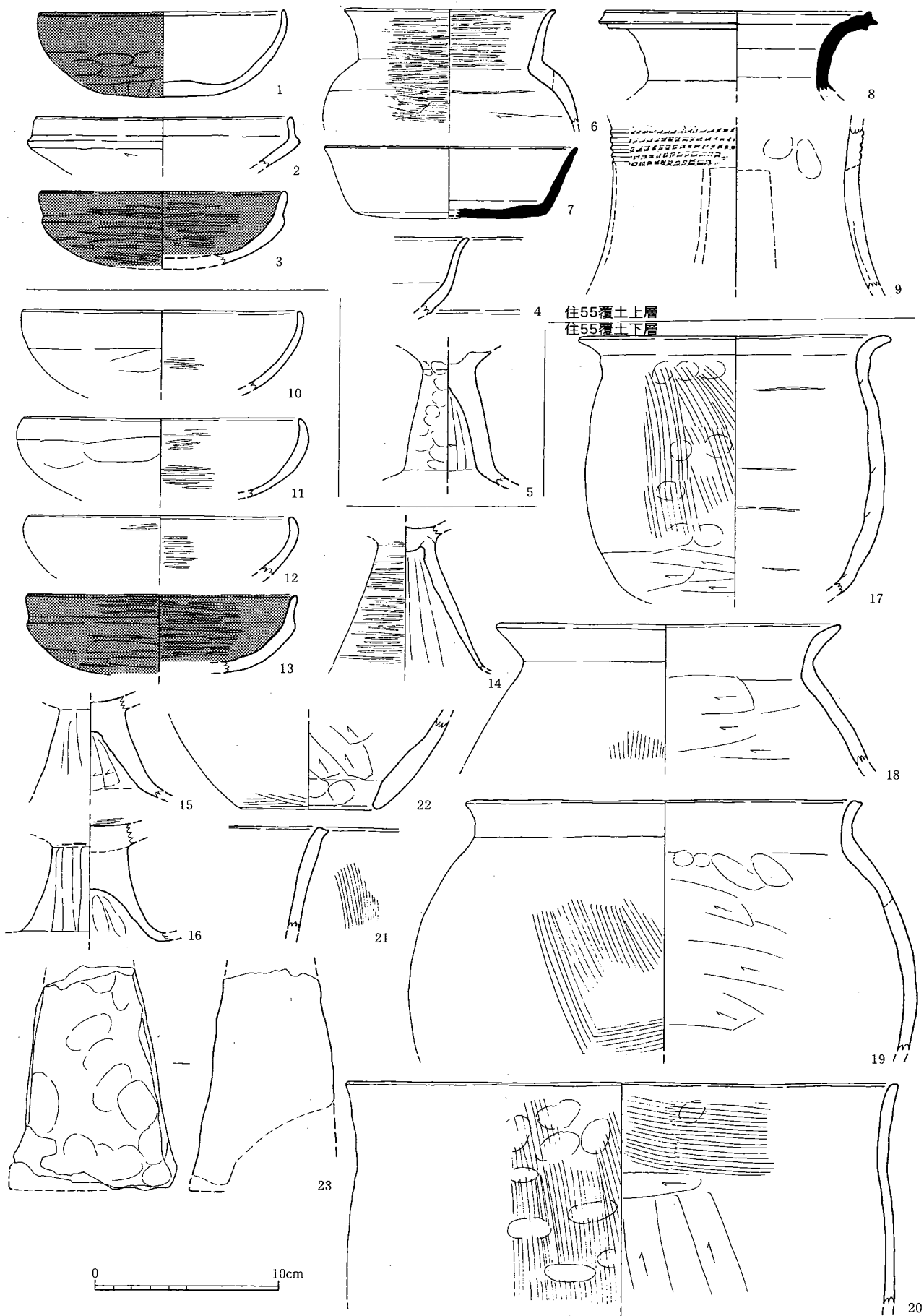
5区中央北西寄りに位置し、第1面30号住居跡と切り合い関係を持つ可能性がある。先述したように、当住居跡付近はクリークの影響により、埋土と地山の区別が非常に困難であったため、重機によりカマド床面付近まで下げて遺構検出を行った。そのため、住居壁は下端のみ検出した。当住居東半分はクリークで壊されるが、住居規模は住居壁下端部分で東西215cm以上×南北345cmの小型方形住居になる。また西壁下端を基準に断面図の作成を行ったが、当住居の平面形態は平行四辺形を呈するため、壁下端の認定にやや不安が残る。住居西壁中央から30cmほど手前で30×23cmの範囲に硬化した焼面を検出したため、当住居跡カマドは袖が大きく壁から突出するタイプのカマドになると推測できる。床面上ではピットを4基検出し、位置・深さからP1・4が支柱穴となる。住居床下東側では掘り込みを確認した。住居埋土は暗灰色粘質砂。出土土器から古墳時代後期末の住居跡と考えられる。

出土土器（第97図1～6） 1は土師器模倣坏で、口縁部と底部との境の稜は痕跡的となる。色は外橙褐色、内灰黄色。2は短く外反する土師器坏口縁部。色は橙褐色。3は土師器高坏脚柱部。脚柱部外面には工具によるヘラナデを施す。色は外黄褐色、内灰黄色。4は土師器手捏ね土器で、色は白黄褐色。5は須恵器坏身受部片で、口縁端部は打ち欠きされた可能性がある。色は灰色。6は古墳時代前期在地系の高坏口縁部。「く」の字状に大きく屈曲する長い口縁部となる。外面には黒斑があり、色は外灰橙色、内灰白色。混入品。

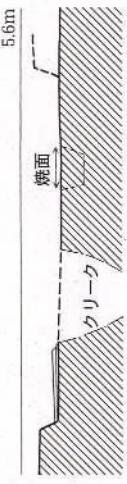
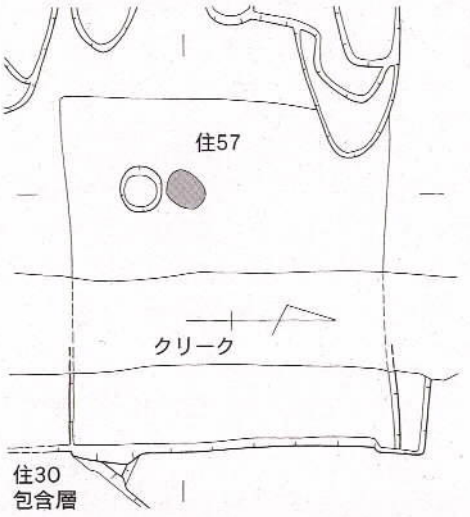
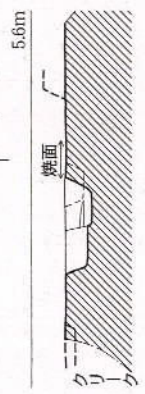
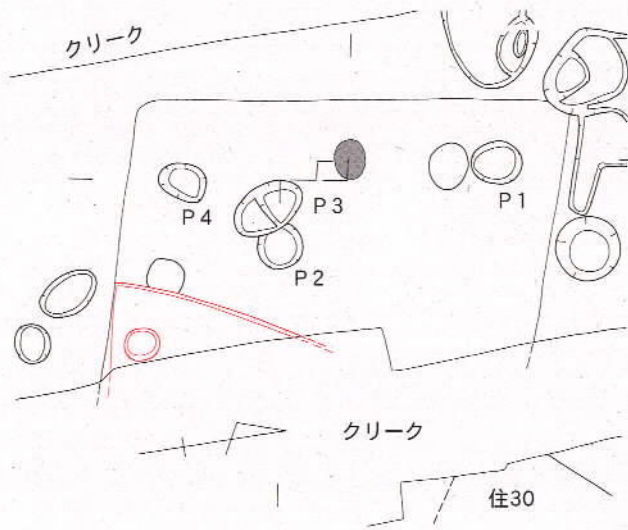
57号竪穴住居跡（図版41、第95図）

5区北中央やや西寄りに位置する。56号住居跡と同じ理由で、当住居跡西側は壁下端のみ検出した。当住居中央はクリークにより壊されるが、住居規模は住居壁下端部分で東西260cm×南北262cmの小型正方形住居となるが、東壁の位置は第1面34号住居壁と同じであるため、当住居跡東壁は少し西側に位置していた可能性が高い。

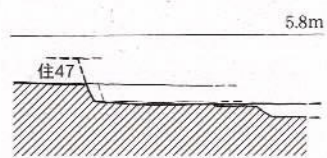
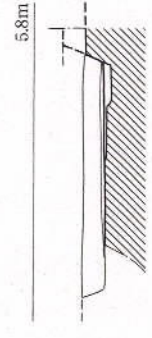
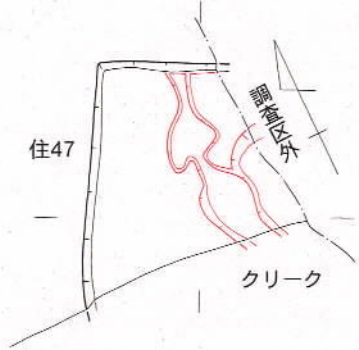
また西壁中央南寄り、西壁から56cm東側で径30cmほどの硬化したカマド焼面を検出した。焼



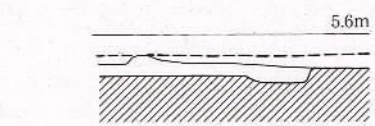
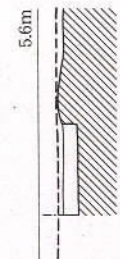
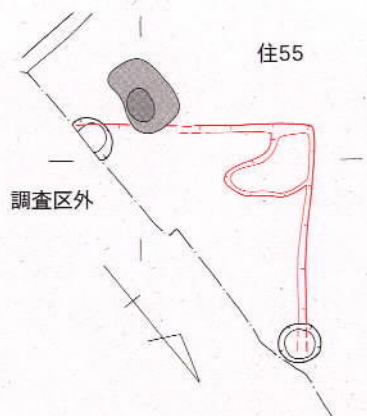
第94图 55号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/3)



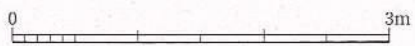
56



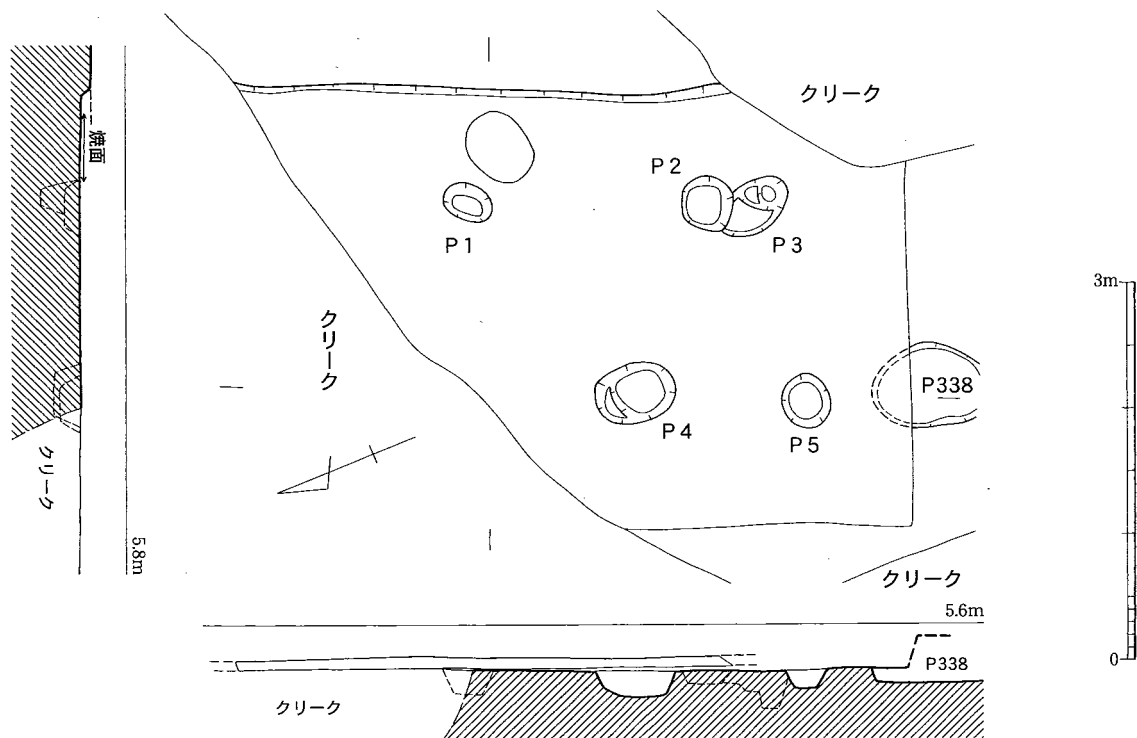
60



61



第95図 56・57・60・61号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第96図 59号竪穴住居跡実測図 (1/60)

面は南に寄りすぎることから、住居が存在することは確実であるものの、住居東壁下端ラインは間違って検出した可能性がある。住居床面ではピットを1基検出したが、カマド焼面南に接するため支柱穴とはならず、上層から切り込むピットとなる可能性が高い。住居埋土は青灰色粘質砂に黄褐色粘質土ブロック多く混じる土。

出土土器から古墳時代後期末の住居跡と考えられる。

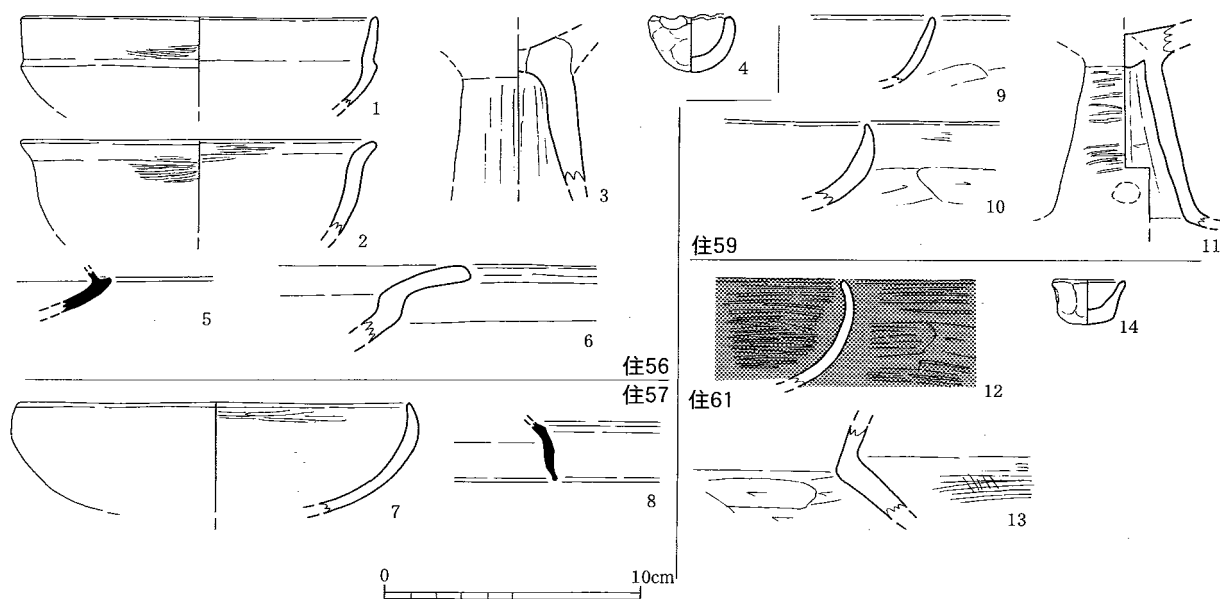
出土土器 (第97図7・8) 7は土師器碗形坏。口縁部内外面には黒斑があり、色は外黄茶褐色、内灰色。8は口縁端部が外反し、さらに口縁内端部がナデにより窪む須恵器坏蓋。口縁部と天井部との境には工具による沈線を巡らす。色は灰色。

59号竪穴住居跡 (図版41、第96図)

5区北端に位置する。56・57住居跡と同じ理由で、住居南側は壁下端ラインのみ検出した。当住居跡は南東隅及び北西部分1/3はクリークによって壊され、住居規模は現状で東西345cm×南北528cm以上の南北に長い長方形住居となり、東壁中央に付設されたと考えられるカマド焼面で反転すると、東西幅650cmを測る。住居東壁から13cm西で径53cmの弱いカマド焼面を検出し、袖が壁から大きく突出するタイプのカマドになると推測できる。床面上ではピットを5基検出し、位置・深さからP1・3・5が支柱穴となる。またP3を切るP2は上層のピットの可能性がある。住居埋土は青灰色粘質砂に黄褐色粘質土ブロックが非常に多く混じる土。

出土土器から古墳時代後期末の住居跡と考えられる。

出土土器 (第97図9~11) 9・10は土師器碗形坏。いずれも口縁部付近まで手持ちヘラケズリを施す。9の色は黄茶褐色。P3出土。10は器壁が厚い精製品で、色は橙褐色。P4出土。



第97図 56・57・59・61号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

11は土師器高坏脚柱部で、下部には3方向に施したと考えられる孔が1孔残る。内外面二次加熱を受けるため、色は桃色。

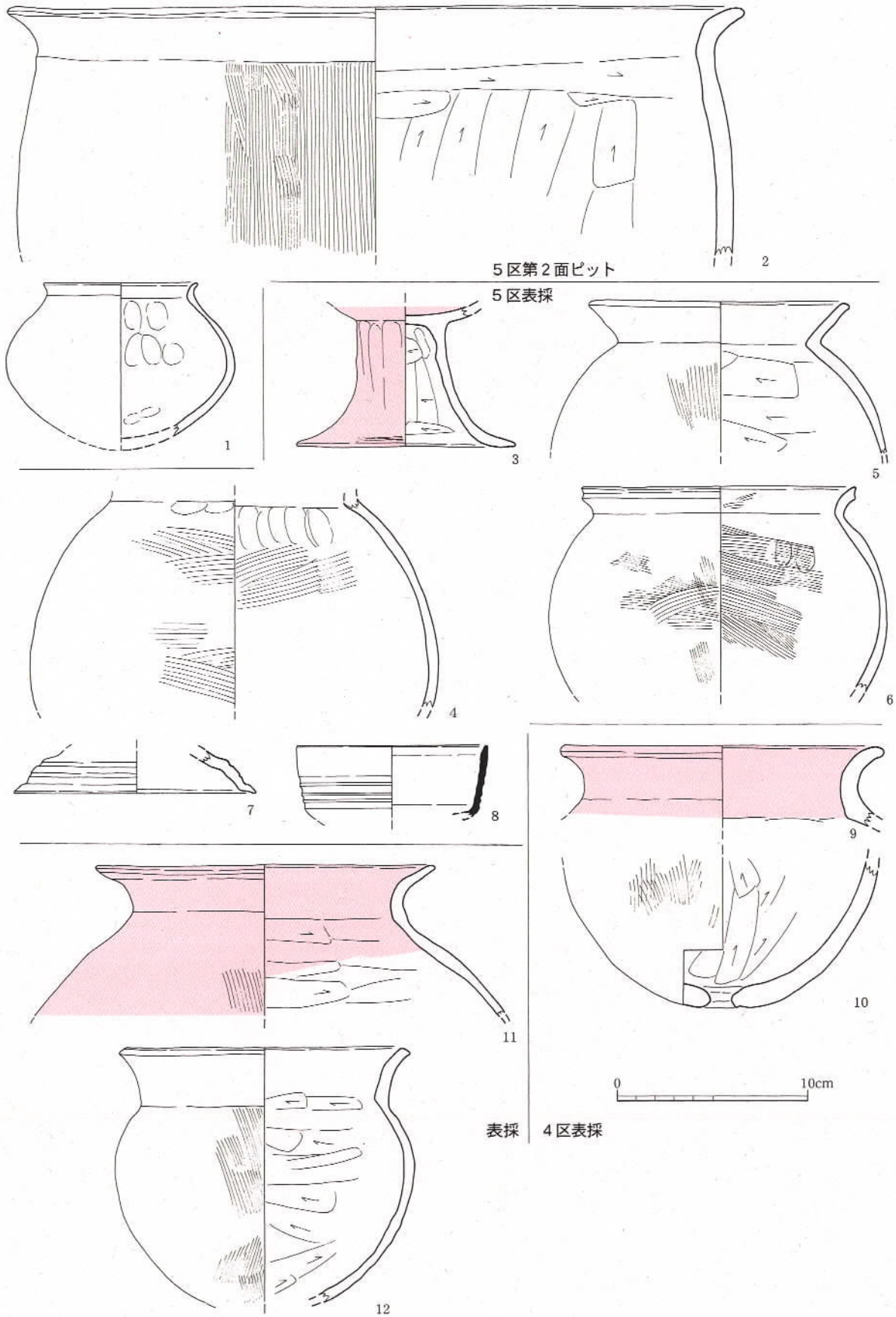
60号竪穴住居跡 (図版37、第95図)

5区南東隅に位置し、47号住居跡を切る。住居東側の大部分は調査区外、南側はクリークによって壊され、住居北西部の一部のみ検出したに留まる。住居規模は現状で東西175cm以上×南北195cm以上を測る。遺構検出時には当住居跡の存在に気づかず、47号住居跡を床面まで下げた段階で、47号住居跡南東部では炭化材がない範囲が認められことから、再度床面及び調査区壁を精査したところ、やっと当住居跡の存在を確認した。そのため、47号住居跡と当住居跡出土土器が混ざってしまったが、すべて47号住居跡出土土器として取り上げたため、47号住居跡出土土器として報告するが (第87図)、おそらく掲載した土器の中で当住居跡に属するものは存在しないと考えられる。また住居壁も深さ17cmほどしか検出できなかったが、本来は40cmほど残存していたと推測される。床面ではピットは検出できず、床下掘り込みのみ確認した。住居埋土は灰黄褐色砂質土である。

出土土器で図示できるものはないが、埋土及び切り合い関係から古墳時代後期後半～末の住居跡と判断される。

61号竪穴住居跡 (第95図)

5区中央東壁際に位置し、55号住居跡を切る。住居北東部の大半が調査区外であり、調査では住居南東部の一部を検出したに留まる。検出段階では当住居跡の存在に気づかず、55号住居跡を床面付近まで掘り下げた際に、当住居跡カマド焼面を検出したため、当住居跡の存在を認識できた。調査区壁付近には上層ピットが存在していたため、調査区壁で当住居跡の検出はで



第98図 5区第2面ピット出土、5区表採、4区表採等土器実測図 (1/3)

きず、平面のみの検出となった。当住居跡埋土である灰黄色粘質土と55号住居跡埋土がほぼ同じであったことから、住居ラインの検出は非常に苦勞し、本来の床面から10cmほど下がった、55号住居跡床面でやっと住居床下掘り込みを検出できた。この床下掘り込みを基準に住居規模を推定するというやや不確実な計測方法であるが、住居規模は現状で東西195cm以上×南北190cm以上、カマドで反転すると東西幅2.5mほどの小型方形住居となるか。断面図の破線で示している線が当住居跡の本来の床面レベルとなる。また、55号住居跡と当住居跡出土土器が混ざってしまっているが、床下掘り込み以外の出土土器はすべて55号住居跡出土として取り上げたため、55号住居跡出土土器の中に当住居出土土器が混ざっている可能性がある。

カマド焼面は中央部が非常に良く硬化し（濃いトーン）、60×45cmの範囲に広がるもので、カマドの形態は壁から燃焼部が突出するタイプとなるか。

住居形態・切り合い関係及び出土土器から古墳時代後期末の住居と考えられる。

出土土器（第97図12～14） いずれも住居床下掘り込み内から出土した。12は内湾する精製土師器模倣坏で内外面黒塗りを施すもの。生地は茶褐色。13は土師器甕頸部。色は肌色。14は土師器手捏ね土器。色は灰黄色。

(3) ピット・遺構面等出土土器

ピット出土土器（第98図1・2）

1は土師器無頸壺。短く外反する口縁部に玉葱型の胴部が付く。外面には二次加熱痕及び黒斑が認められ、色は橙褐色を基調とする。P318出土。2は口径38.4cmを測る大型土師器甕。色は外黄褐色～淡橙褐色、内淡橙褐色。P331出土。

遺構面等出土土器（第98図3～8）

3は土師器高坏脚部で、坏部内外面・脚部外面にはスリッパを塗布する。生地は橙褐色。4は弥生後期甕胴部で、外面には黒斑が認められる。色は黄褐色を基調とする。5は布留系土師器甕。胴部内面には丁寧なヘラケズリを施し、外面胴部下部にはススが付着する。色は黄褐色。6は球形の胴部に短く外湾する口縁部を持つもので、口縁端部はナデにより大きく窪む。胴部外面はハケのちナデを基調とするが、一部工具ナデを用いる。外面にはススが付着し、色は灰黄褐色を基調とする。7は生焼け須恵器蓋となるものか。外面はナデによる凹凸が顕著で、凹部分に工具による2条の沈線を巡らす。外方に突出する口縁部は丁寧にナデで面取りする。色は淡橙褐色。8は須恵器高坏坏部で、体部外面には4条の沈線を巡し、上の1条はナデ、下の3条は工具によるもの。外面には自然釉が付着し、色は外暗灰色、内灰色。

8. 表採土器等出土土器

(1) 4区表採土器（第98図9・10）

9は内外面にスリッパを塗布した土師器甕口縁部。器壁は厚い。生地は白黄色。10は土師器甕底部で、底部中央に生乾きの際に外→内に穿孔した孔が存在する。底部外面には黒斑があり、色は橙褐色を基調とする。

(2) 表採土器 (第98図11・12)

11は外面全体と内面頸部下までスリップを塗布した土師器甕。生地は黄橙色。12は中型土師器甕で、外面全体は二次加熱痕、外面全体と口縁部内面にはススが認められる。色は外黄灰色、内暗茶褐色を基調とする。

9. 石器・石製品・土製品・金属器

(1) 石器・石製品 (図版59～60、第4表)

磨製石包丁 (第99図1)

1は石包丁。3区第2面の27号竪穴住居跡の床下掘り込みから出土した。完形品で2ヶ所に両面からの穿孔がある。全体としてもよく研磨されており、丁寧に仕上がる。

砥石 (第99・100図2～10)

2～10は砥石。このうち2～6は竪穴住居跡から出土した。2は4区2号住居跡の覆土上層、3は5区14号住居跡覆土から出土。いずれも小片で目が細かく、仕上げなどに手持ちで用いられたと考えられる。3は使用痕のある4面のうち1面に非常に浅い筋状の擦痕が認められる。4・5は5区30号住居跡覆土から出土。4は「く」の字に屈曲する形状で、横断面は五角形を呈する。使用面が多く手持ちで用いられたと思われる。表面の破損が激しい。5は粗砥石。風化が進んでいる。6は5区第2面の55号住居跡覆土上層から出土した。大きな破片で原形は不明。使用面は1面残る。7は5区34号住居跡南の包含層出土。使用による摩滅もあって三角形に近い形状を呈する。使用痕が広く残り安定して据わる表面のほか、幅が狭く使用に不安定な側面にも使用の跡が見られる。8は4区北トレンチ出土の破片。使用痕は4面のほか、溝状のものが1条残る。9は5区第1遺構面の出土。目が細かい小片である。摩滅が進んでいる。10は4区の第2遺構面出土。4つの使用面はいずれもよく使用されている。

敲石 (第100図11・12)

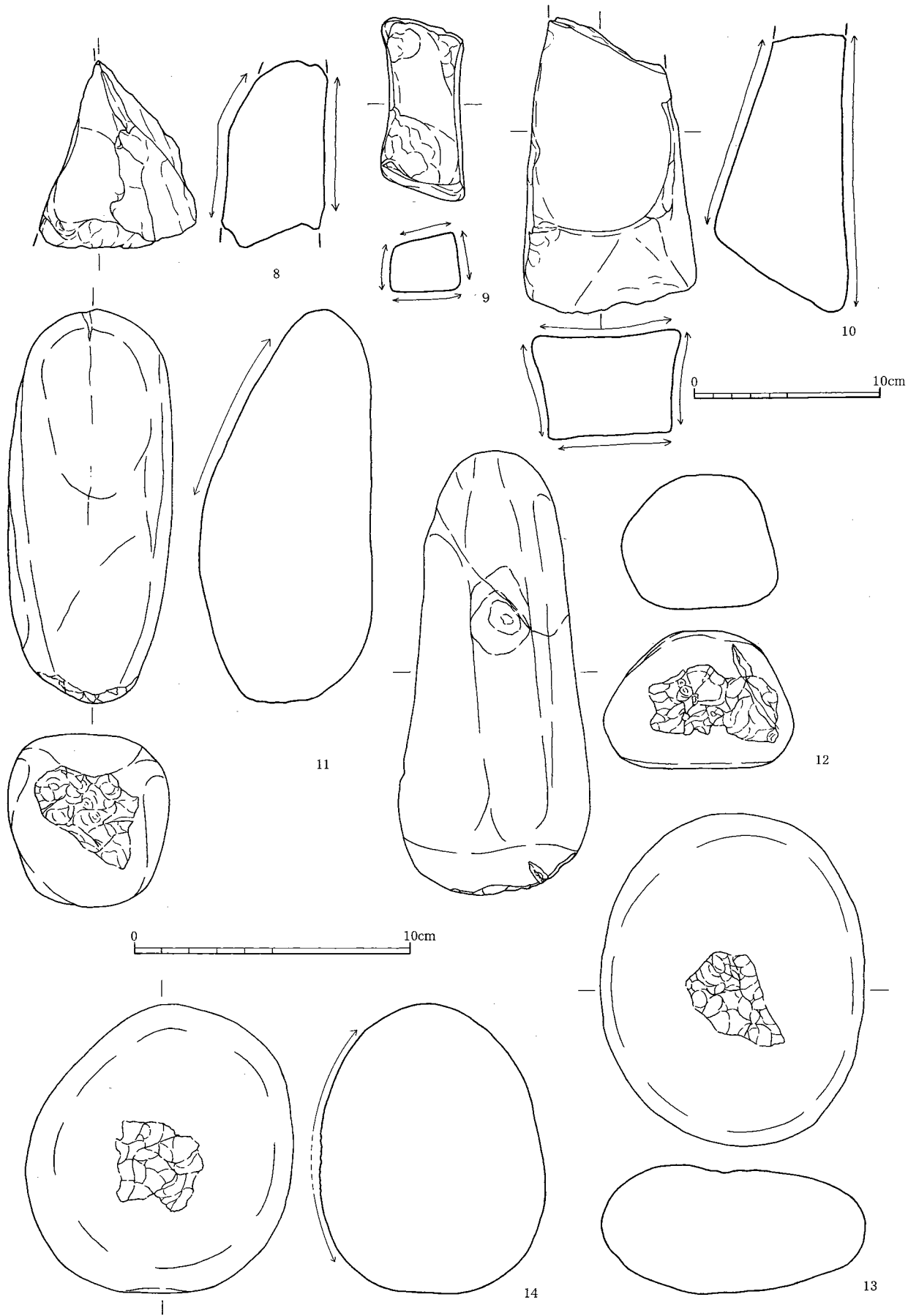
11・12は敲石で、いずれも細長い石材の端部を使用する。11は4区の第2遺構面から出土した。側面に一部平滑な面があり、擦り具としても用いられた可能性がある。12は3区第2面の16号竪穴住居跡覆土から出土。

凹石 (第100～102図13～20)

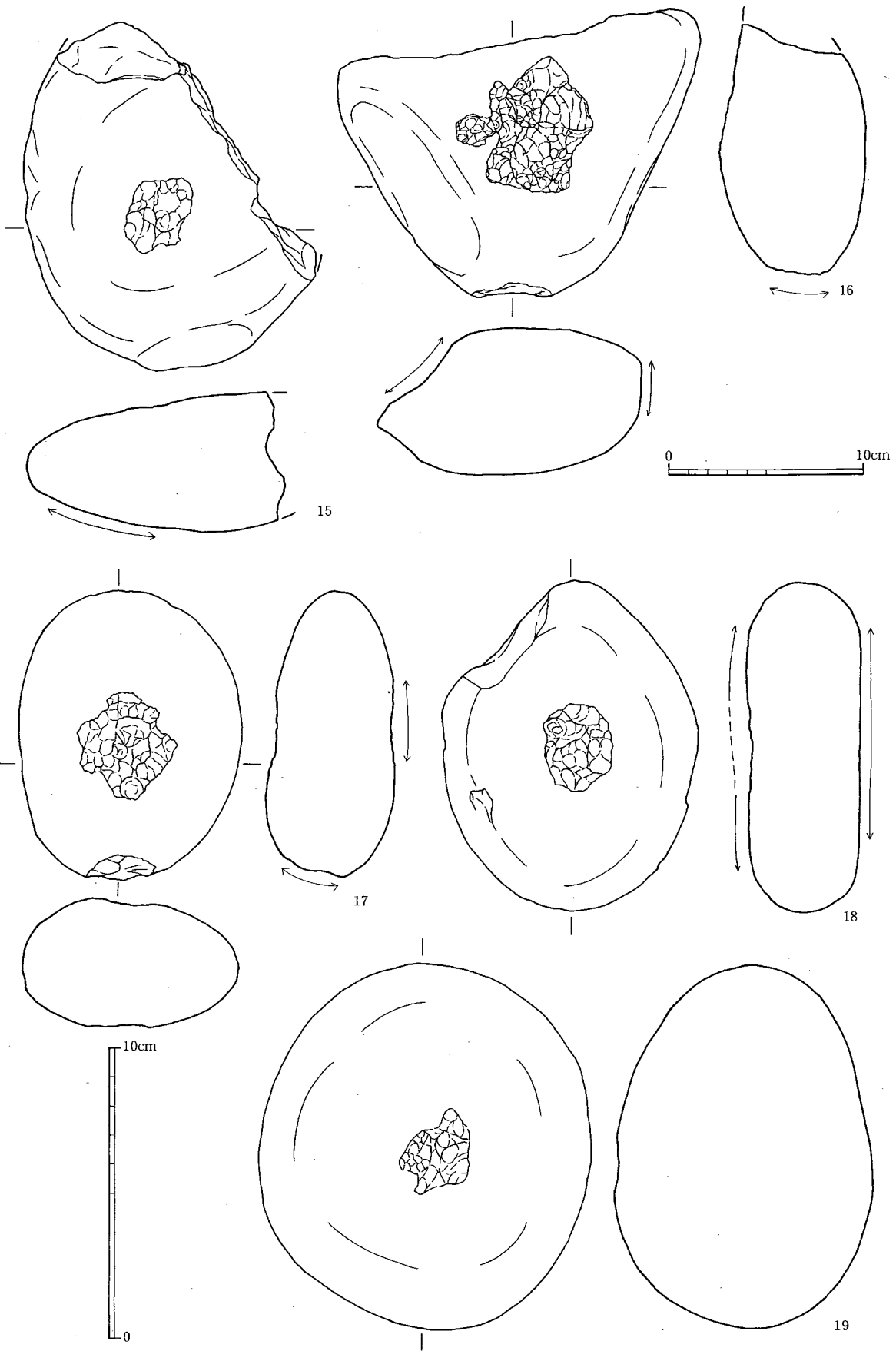
13～20は凹石。うち13～17が竪穴住居跡から出土。14・15は4区3号住居跡の覆土から出土。14はほぼ球形、15は扁平な石材を用いる(一部欠損)。いずれも擦痕が認められ、擦り具としても使用されている。16は4区4号住居跡覆土の出土。不整形で一部欠損している。表面の使用痕のほか、端部に敲打痕、側面には擦痕もみられる。17は4区8号住居跡覆土下層の出土。やや扁平で表裏両面が使用されるほか、端部と側面に敲打痕が残る。18～20は4区の第1遺構面から出土した。うち18・20は8号住居跡付近の出土。18は扁平で表面に使用痕、表裏両面に擦痕が見られる。19はほぼ球形。20は扁平で一部を欠損する。表裏両面が使用されている。



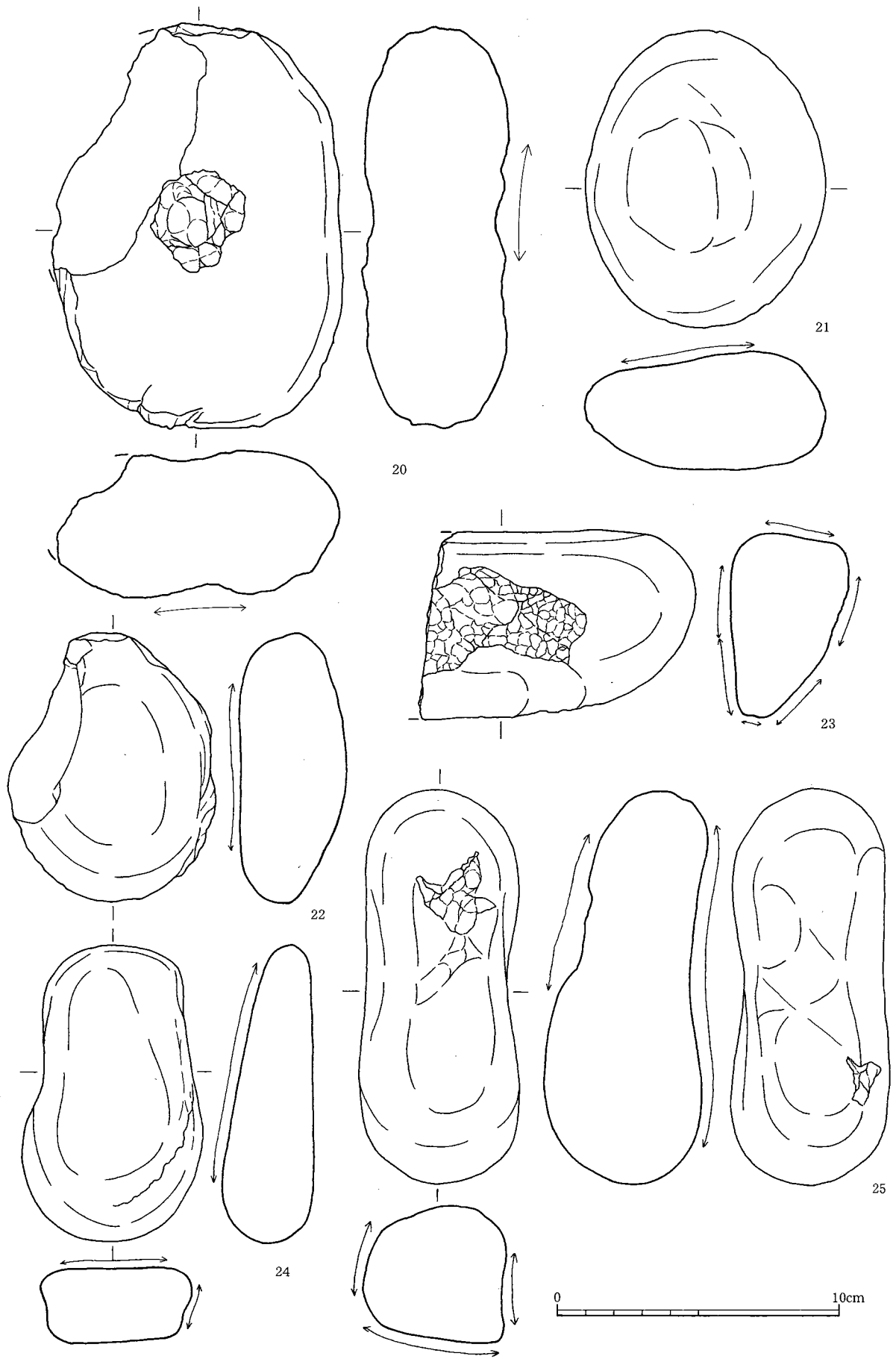
第99図 石器・石製品実測図① (1~5は1/2、6・7は1/3)



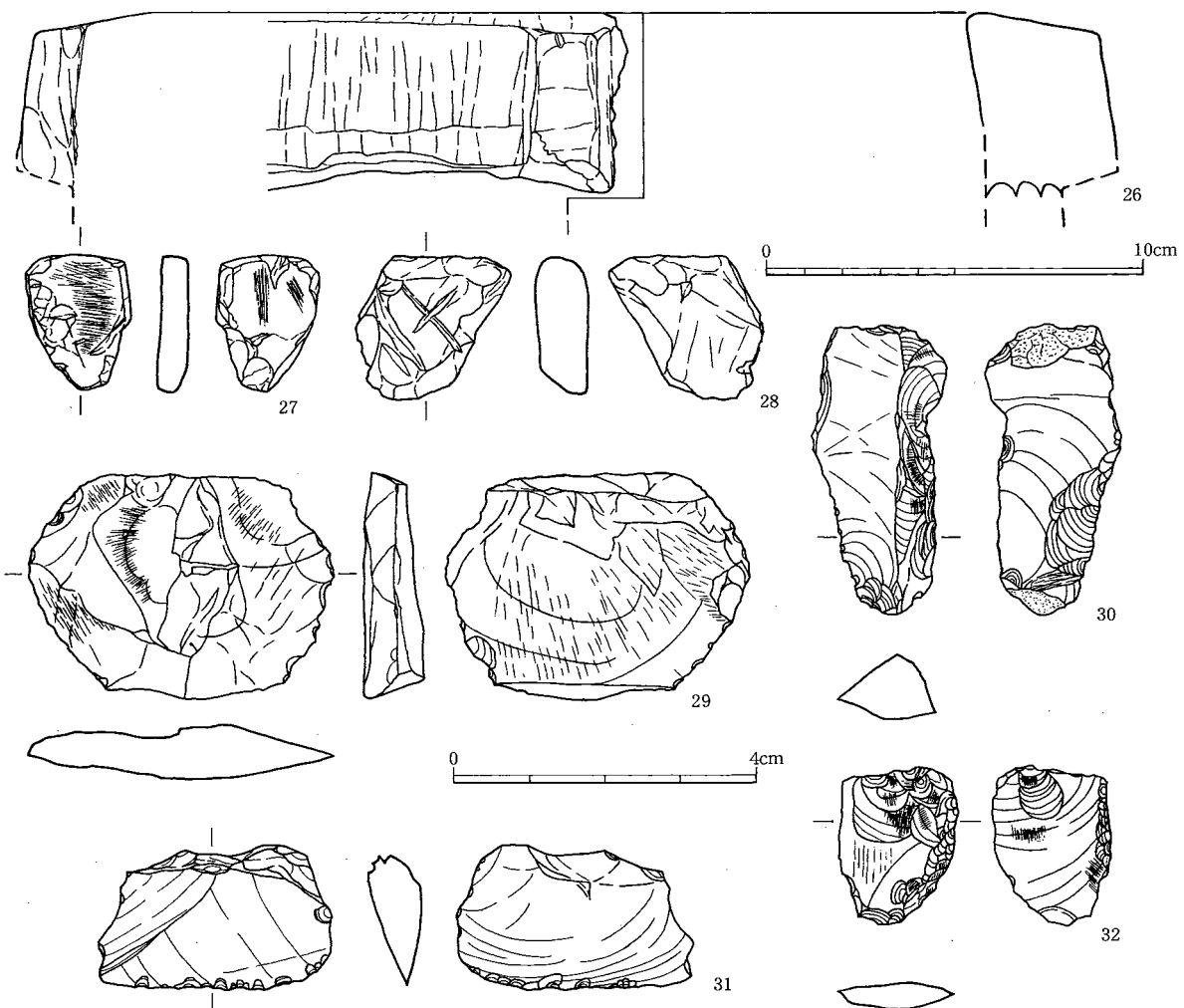
第100図 石器・石製品実測図② (1/2、10のみ1/3)



第101図 石器・石製品実測図③ (1/2、6のみ1/3)



第102図 石器・石製品実測図④ (1/2)



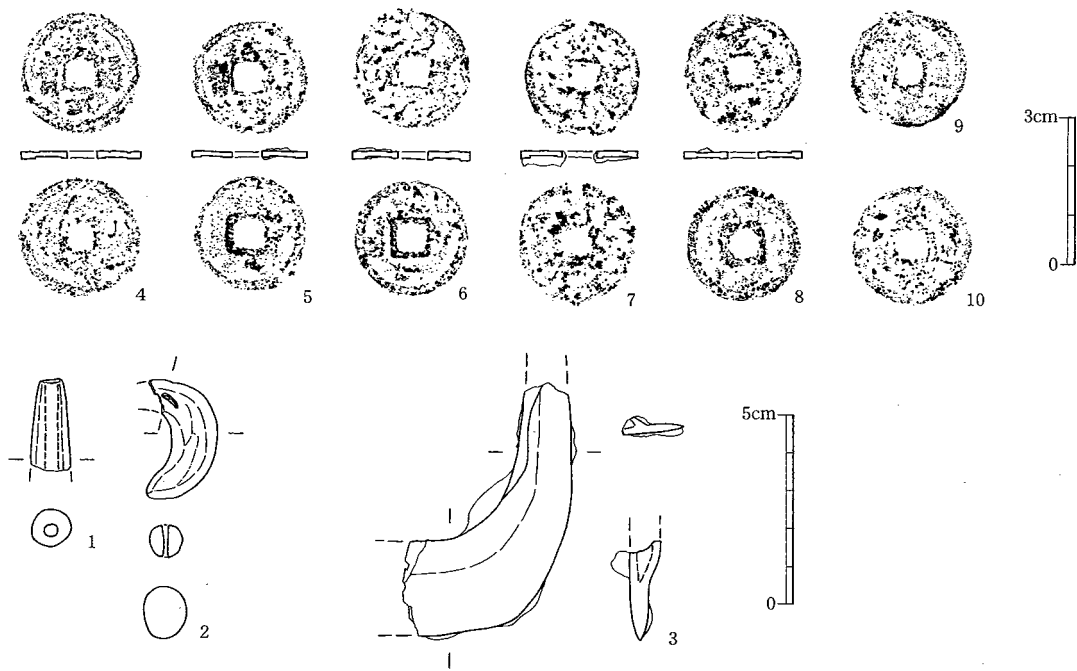
第103図 石器・石製品実測図⑤ (26~28は1/2、29~32は1/1)

磨石 (第102図21~25)

21~25は磨石。いずれも竪穴住居跡から出土した。21は4区8号住居跡の覆土出土。形状はやや扁平である。22・23は5区30号住居跡覆土から出土した。22もやや扁平だが小振りて一部を欠損する。23は長形で断面は三角形に近い。1/2以上を欠損するが擦痕と敲打痕が共に数面見られ、全体的に使用されている。24は5区第2面の49号住居跡覆土の出土。扁平で表面の使用面ほか、側面にも平滑な面が認められる。25は5区30号住居跡の覆土上層から出土。細長い石材に使用痕と思しき平滑な面が4面確認できる。

滑石製品 (第103図26~28)

26~28は滑石製品。26は石鍋。3区第1遺構面の出土。口縁部1/6程の破片で、復元口径は22.0cm。断面方形の把手一対が口縁に接して付くタイプで、口縁部内面は内湾する。体部内面の調整は摩滅のため不鮮明だが(横方向のケズリか)、外面には縦方向のケズリ痕が確認できる。また口縁部上面には放射状、把手の外面には横方向、側面には縦方向にそれぞれケズリを



第104図 土製品・金属器実測図（1～3は1/2、4～10は2/3）

施す。体部外面の一部には煤が付着する。27・28は石鍋転用品。いずれも用途は不明だが、27は表裏と4側面が面取りされている。28は未調整で石鍋外面のケズリ痕がわずかに残る。27は4区第1遺構面、28は3区2号溝の出土。

打製石器（第103図29～32）

29～32は打製石器。いずれも二次加工が施された剥片である。29はサヌカイト製。4区第2遺構面の43号竪穴住居付近から出土した。円形に近い剥片の側縁を刃部とする。刃部の調整は粗い。30～32は黒曜石製。30は43号住居跡の覆土上層出土。縦長剥片の側縁を使用したもので、刃部となる両側縁に片面からずつ剥離調整が行われる。上下端部に礫面が残る。31は鋭利な下部を刃部とし、両面から微細な剥離を施す。4区第2面の41号竪穴住居跡覆土から出土した。32は両側縁に表裏片面から微細剥離を行い刃部とする。5区第1遺構面から出土した。（一瀬）

(2) 土製品（図版58、第104図1・2、第4表）

1は管状土錘で、下部は欠損する。3区第1面P108出土で、色は橙褐色。2は土製勾玉で、上端部は欠損するが、平面はU字状、断面は正円形を呈するもの。上端部には孔径1mmの非常に細く、孔上端が細長い形態の孔が存在する。孔は、細い針金状の棒を入れて穿孔したもので、上端部の細長い形態は棒を抜き取る際に付いたものと考えられる。4区表採で、色は黄橙色。

(3) 金属器

鉄器（図版60、第104図3、第4表）

3は1/2ほど残存する小型のU字形鍬鋤先片。着柄部は一方のみ折り曲げ、また着柄部内は

挿図番号	種類	区	面	出土地点	長・口径 (cm)	幅・径 (cm)	厚・高 (cm)	孔径 (cm)	重量(g)	残存率	石材	備考
第99図1	石包丁	3	2	住27床下堀り込み	13.2	5.2	1.0	0.6	121.5	完形	片岩	両面穿孔
第99図2	砥石	4	1	住2覆土下層	(7.8)	3.1	1.8		52.2	1/2以下	砂岩	目が細かい
第99図3	砥石	5	1	住14覆土	6.6	4.1			61.8	ほぼ完形か	砂岩	目が細かい
第99図4	砥石	5	1	住30覆土	11.8	4.0	4.7		323.2	完形	砂岩	使用面は8面、「く」の字に屈曲
第99図5	砥石	5	1	住30覆土	(8.2)	5.9	3.6		186.4	1/2以下	砂岩	粗砥石、風化進む
第99図6	砥石	5	2	住55覆土上層	(15.1)	(10.8)	(8.6)		1506.4	破片	砂岩	
第99図7	砥石	5	1	住34南包含層	25.5	19.4	5.5		2595.7	完形	砂岩	
第100図8	砥石	4		北トレンチ	6.8	(5.7)	3.8		130.5	破片	砂岩	
第100図9	砥石	5	1	遺構面	6.7	3.0	2.7		61.7	ほぼ完形	砂岩	目が細かい、風化進む
第100図10	砥石	4	2	遺構面	16.2	9.4	7.5		1304.4	1/2以下	砂岩	
第100図11	敲石	4	2	遺構面	14.2	6.0	6.3		790.9	完形	玄武岩	表面の一部が平滑となる
第100図12	敲石	3	2	住16覆土	15.0	6.9	5.0		774.5	完形	玄武岩	
第100図13	凹石	4	1	住2覆土上層	12.1	9.6	4.7		811.8	完形	玄武岩	
第100図14	凹石	4	1	住3覆土	10.5	9.7	8.1		1215.4	完形	玄武岩	擦痕あり
第101図15	凹石	4	1	住3覆土	12.0	(10.0)	4.8		637.3	1/3欠損	玄武岩	擦痕あり
第101図16	凹石	4	1	住4覆土	15.1	(19.0)	(7.6)		2413.6	1/3欠損	玄武岩	敲打痕・擦痕あり
第101図17	凹石	4	1	住8覆土下層	10.0	7.7	4.5		462.3	完形	玄武岩	表裏両面に使用痕あり、敲打痕あり
第101図18	凹石	4	1	住8付近遺構面	10.4	8.8	4.0		512.7	ほぼ完形	玄武岩	擦痕あり、風化進む
第101図19	凹石	4	1	遺構面	12.5	11.4	8.9		1737.3	完形	玄武岩	
第102図20	凹石	4	1	住8付近遺構面	14.4	10.3	5.2		1089.3	1/4欠損	玄武岩	表裏両面に使用痕あり
第102図21	磨石	4	1	住8覆土	10.5	8.5	4.2		481.3	完形	玄武岩	
第102図22	磨石	5	1	住30覆土	9.5	7.3	3.8		317.6	1/3欠損	玄武岩	
第102図23	磨石	5	1	住30覆土	9.7	6.7	4.2		429.7	1/2	玄武岩	敲打痕あり
第102図24	磨石	5	2	住49覆土	10.6	6.4	2.7		312.0	完形	玄武岩	側面にも平滑面あり
第102図25	磨石	5	1	住30覆土上層	14.1	5.6	5.7		671.6	完形	玄武岩	
第103図26	石鍋	3	1	遺構面	(22.0)		(4.9)		337.0	口縁部1/6	滑石	断面方形の把手が1対、体部外面に煤付着
第103図27	用途不明品	4	1	遺構面	2.8	2.8	0.8		13.5	ほぼ完形か	滑石	石鍋破片の転用品か、表裏面・4周とも面取りされる
第103図28	用途不明品	3	1	溝2	3.7	3.2	1.4		33.6	ほぼ完形か	滑石	石鍋破片の転用品か、面取りなし、未製品か
第103図29	二次加工剥片	4	2	住43付近遺構面	3.0	4.0	0.8		10.1	完形	サヌカイト	刃部の調整粗
第103図30	二次加工剥片	4	2	住43覆土上層	3.9	1.8	0.9		5.5	完形	黒曜石	隣面残る、刃部は片面剥離
第103図31	二次加工剥片	4	2	住41覆土	1.9	3.1	0.7		3.3	完形	黒曜石	刃部は両面剥離
第103図32	二次加工剥片	5	1	遺構面	2.1	1.6	0.4		1.3	完形	黒曜石	刃部は片面剥離
第104図1	管状土錘	3	1	P106	(2.5)	1.0		0.3	1.8	1/2		
第104図2	土製勾玉	4		遺構面	3.1	(1.8)	0.9	0.1	5.7	4/5		
第104図3	鍬鋤先	5	1	遺構面	(6.8)	(4.5)	0.8			1/2		U字形鍬鋤先
第104図4	銅銭	5	1	1号墓		2.4	0.15	0.6	3.6	完形		洪武通寶
第104図5	銅銭	5	1	1号墓		2.3	0.15	0.6	2.0	完形		洪武通寶
第104図6	銅銭	5	1	1号墓		2.3	0.2	0.6	2.8	完形		洪武通寶
第104図7	銅銭	5	1	1号墓		2.3	0.15	0.6	2.9	ほぼ完形		洪武通寶
第104図8	銅銭	5	1	1号墓		2.3	0.15	0.6	2.8	完形		洪武通寶
第104図9	銅銭	5	1	1号墓		2.3	0.15	0.6		完形		洪武通寶
第104図10	銅銭	5	1	1号墓		2.3	0.15	0.6		完形		洪武通寶

第4表 石器・石製品・土製品・金属器一覧表

鑄がひどく、推定厚を破線で示す。長さ6.8cm、基部幅4.5cm残存する。5区第1遺構面出土。

銅銭(図版60、第104図4～10、第4表)

4～10は5区第1面1号中世墓から出土した「洪武通寶」である。総数40枚出土したが、覆土及び地山は鉄分を多く含み、また出土状況から紐に通した状態で副葬されたと考えられるため、ほとんどがくっ付いたままで出土した。その後の保存処理で1枚に分けることができた5枚と、またくっ付いた状態の銅銭の中で、銭文を判読できるもの2枚の拓本を図示した。

4～10はいずれも鉄分が多く付着し、「洪武通寶」という銭文がわずかに判読でき、背字はない。いずれも径は2.3-2.4cm、孔径5-6mm、厚さ1.5mm前後を測り、重さは鉄分が付着するため、一定にならない。図示していないものもすべて「洪武通寶」と考えられる。

IV. 自然科学分析

1. 山門北池遺跡 3区1号溝出土炭化材の樹種同定

植田 弥生 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

ここでは、3区1号溝から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。

3区1号溝は出土遺物が少なかったため、試料に含まれていた複数小破片のうち、1破片を用いて放射性炭素年代測定が実施されている (IV-4、P177~179参照)。

(2) 試料と方法

取上げられていた試料から、形状や大きさの異なる炭化材を選び、樹種同定試料とした。

同定は、炭化材の横断面 (木口) を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に材の3方向 (横断面・接線断面・放射断面) の断面を作成し、走査電子顕微鏡で拡大された材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡 (日本電子(株)製 JSM-5900LV型) で観察と写真撮影を行った。

同定した炭化材の残り破片は、福岡県教育庁総務部文化財保護課太宰府事務所に保管されている。

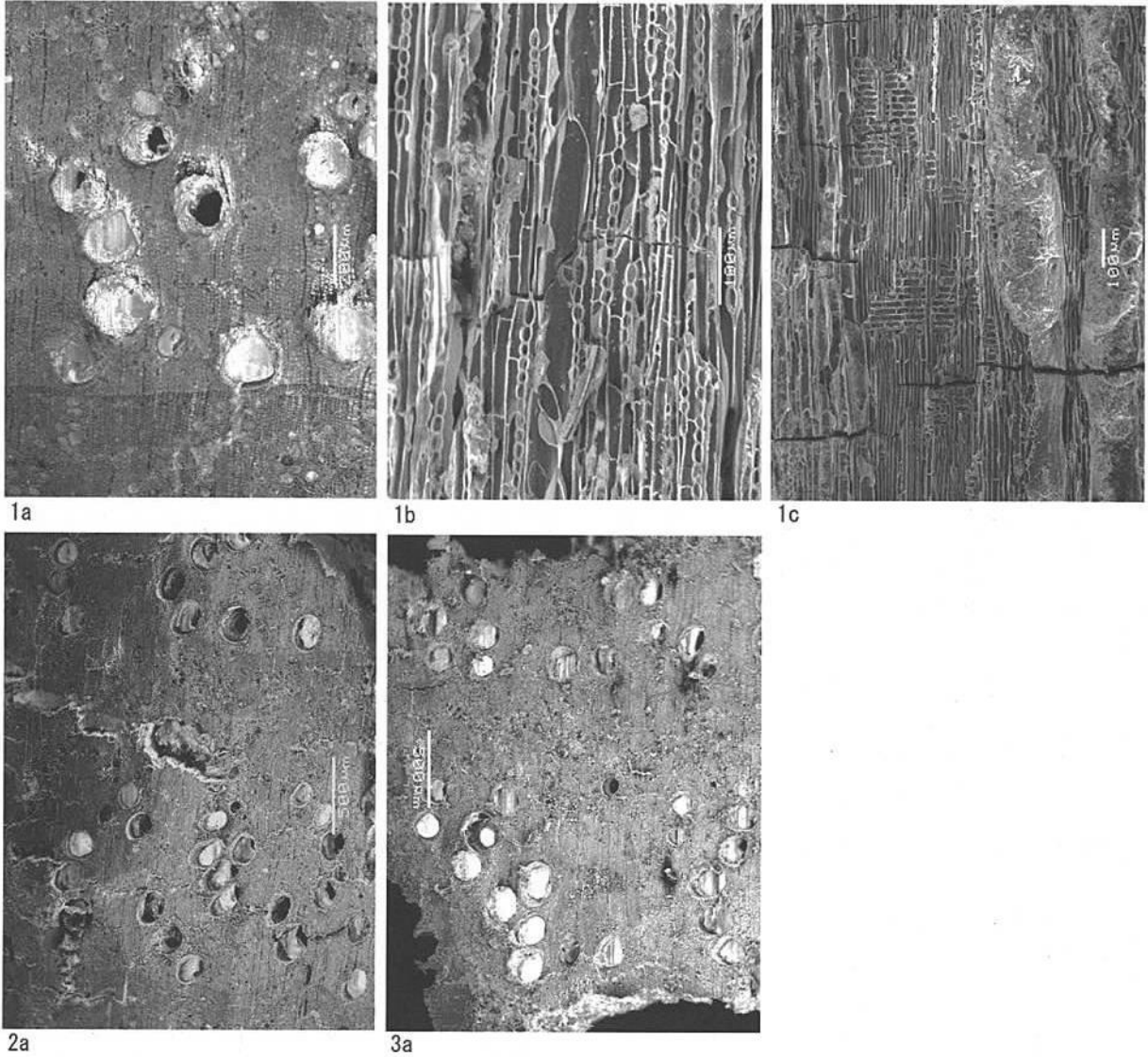
(3) 結果

試料に含まれていた0.5~1.0cm角ほどの複数の破片について、横断面を実体顕微鏡下で観察した結果、すべてクリと同定した。ただしどの破片も年輪始めの管孔配列は、典型的なクリ材のように密接して配列はしておらず、道管と道管の間がやや空いている部分が見られた。従ってシノキ属の可能性もあるのかも知れないが、いずれの破片も接線方向の幅が1cm以下の小破片であり部分的に管孔配列が乱れている可能性や、年輪始めの道管と道管の間隔は典型的なシノキ属のように広く開いて配置はしていないことから、これらの試料はクリと同定した。クリは有用材であり、様々な木製品に利用され、燃料材としても利用度は高い。また山地や里山に多く生育し、集落内でも栽培されているなど、入手も容易な樹種として知られている。

3区1号溝 炭化材	樹種	備 考
年代測定用破片	クリ	PLD-6200 (第105図 1a-1c)
そのほかの破片複数	クリ	うち2点 (第105図 2a・3a) の横断面撮影

第5表 炭化材樹種同定結果

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の3方向の組織写真を提示した。
 クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 第105図 1a-1c (年代測定用破片) 2a、3a
 年輪の始めに中型～大型の管孔が配列し除々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列している環孔材である。道管の穿孔は単穿孔、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性である。年輪始めの管孔配列は、やや間隔が開く部分もあった。



1a-1c: クリ (年代測定用破片) 2a: クリ 3a: クリ
 a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面

第105図 3区1号溝出土炭化材材組織の光学顕微鏡写真

2. 山門北池遺跡 5 区 1 号中世墓出土墓桶の樹種同定

植田 弥生 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

ここでは、5 区第 1 号中世墓から出土した墓桶と思われる材破片の樹種同定結果を報告する。

(2) 試料と方法

材の 3 方向 (横断面・接線断面・放射断面) を見定めて、剃刀を用い各方向の薄い切片を剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロラルで封入し、永久プレパラート (材組織標本) を作成した。この材組織標本を、光学顕微鏡で 40~400 倍に拡大し観察した。材組織標本は、パレオ・ラボに保管されている。

(3) 結果

材は、乾燥変形が激しく材組織の保存が悪い状態のため、針葉樹のヒノキ科であるがそれ以上は分類群を特定できなかった。東京都中央区の江戸時代の木棺は、ヒノキ科のサワラ・ヒノキが多く、次にスギ科スギが多いことが報告されている (鈴木・能城 2004)。用材選択性が全国的に均一化してくる江戸時代より以前の、中世後期の当遺跡においてもヒノキ科が利用されていたことは注目される。

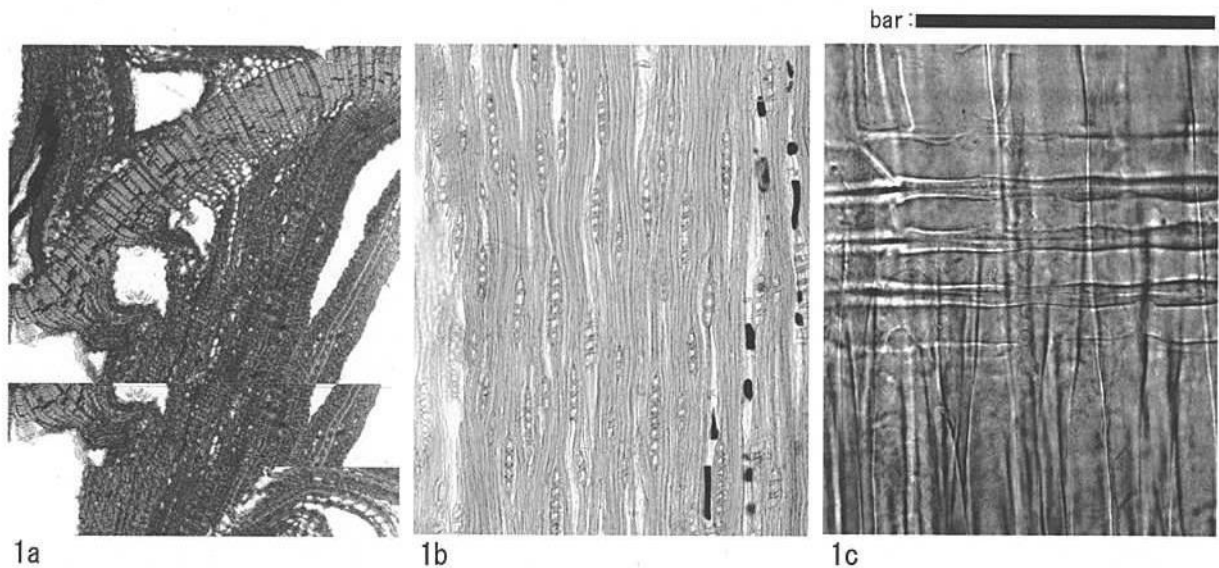
以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の 3 方向の組織写真を提示した。

ヒノキ科 Cupressaceae 第106図 1a-1c (1号中世墓 墓桶)

仮道管・放射組織・樹脂細胞からなる針葉樹材である。晩材の量は多く仮道管は厚く肥厚している。放射柔細胞の壁は平滑である。分野壁孔は 1 分野に主に 2 個あるようで、壁孔の外形は丸い。仮道管にらせん肥厚は無い。このような形質からヒノキ科の材であることが分かる。しかし細胞壁が不朽しており、分野壁孔の型は確認できず、これ以上は分類群を絞ることができなかった。

引用文献

鈴木伸哉・能城修一 (2004) 東京都中央区八丁堀三丁目遺跡より出土した江戸時代の木棺の形態と樹種. 植生史研究 第12巻第2号: 75-86.



1a-1c: ヒノキ科 (1号近世墓)

a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面 bar: a=1.0mm, b=0.4mm, c=0.1mm.

第106図 5区1号中世墓桶状木製品材組織の光学顕微鏡写真

3. 山門北池遺跡5区47号竪穴住居跡カマド内から出土した炭化種実

新山 雅広 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

ここでは、古墳時代後期中葉 (6世紀中頃) と考えられる5区47号竪穴住居跡から出土した炭化種実を検討し、利用植物を明らかにすることを試みた。

(2) 試料と方法

炭化種実の検討は、5区47号竪穴住居跡カマド内から出土した1試料について行った。炭化種実は、取り上げ済みであり、プラスチックケースに乾燥保存されていた。炭化種実は、小塊を成して土付着であったため、水洗洗浄によるクリーニングを行った。これを自然乾燥させた後、実体顕微鏡下で同定・計数・採集を行った。なお、炭化種実のうち、イネ炭化胚乳3個を放射性炭素年代測定 (AMS法) の試料とした。その結果、 ^{14}C 年代で 1605 ± 25 年、暦年代では 1σ (44.4%の確率) で480-540calBC、 2σ (95.4%の確率) で410-540calBCの年代値が得られ、古墳時代中期~後期中頃の年代であった。

(3) 出土した炭化種実

含まれていた炭化種実は、イネ炭化胚乳とアワ炭化胚乳であった。洗浄した結果、多量の炭化種実が含まれており、まず、礫、骨?などの未炭化のものと炭化材 (微量) をできる限り取り除いた。その後、イネを採集した。残ったものは、アワ主体であるが、採集困難なイネの微細破片や小礫なども混じる。イネは、塊状のものや微細破片を含んでいたが、できる限り正確な計数を試みた。完形136個、破片722個 (うち、胚側の破片98個) であり、胚側の破片の個数から推定して、破片は完形98個分に換算される。したがって、全体では、完形234個分のイネ

炭化胚乳が含まれていたことになる。アワは、多量に含まれており、塊や微細破片も含むため、計数が困難であった。完形100個を抽出した結果、その重量は0.05 gであった。アワ主体の炭化物は、10.09 gであるため、単純計算で約20000個、仮にイネの微細破片や小礫が半分の重量混じっていたとしても約10000個というオーダーである。

(4) 形態記載

a. イネ *Oryza sativa* Linn. 炭化胚乳

側面観・上面観共に楕円形。両面の表面には、縦方向の2本の筋が入り、3等分される。これの真ん中は隆起し、両端は一段下がる。

b. アワ *Setaria italica* Beauv. 炭化胚乳

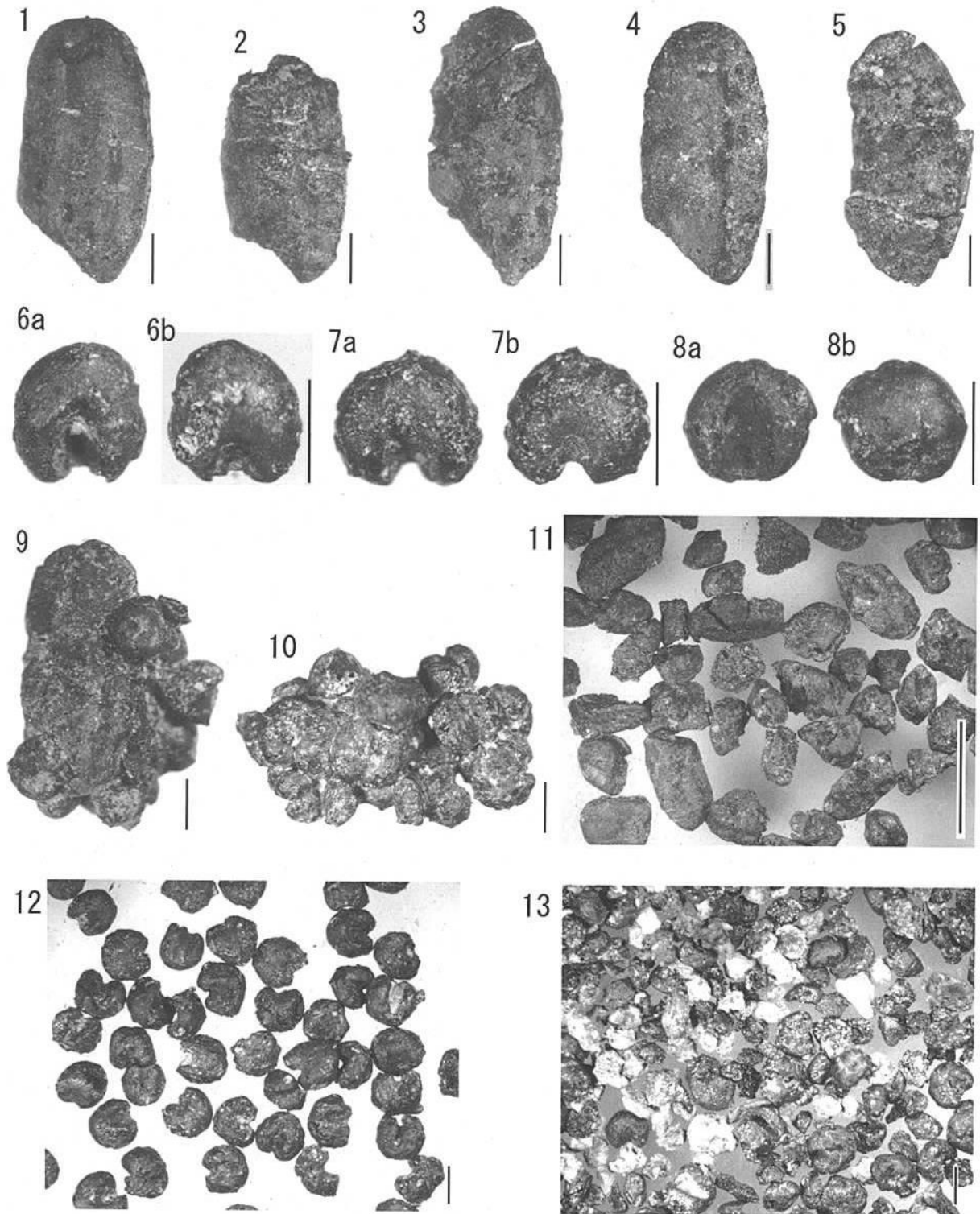
側面観は卵円形でやや厚みがある。胚の長さは胚乳の長さの2/3程度。腹面下端中央の窪んだ位置に細長い楕円形の小さな臍がある。

(5) 考察

検討した結果、古墳時代後期中葉（6世紀中頃）の5区47号竪穴住居跡では、イネとアワが利用されていたと考えられる。出土部位は、食用部分の胚乳のみであり、穎は確認されなかった。つまり、脱穀されたものと考えられる。胚乳は、各々が癒着して数粒～数住粒の塊状を成したものが目立ち、イネとアワが混合しているものも見られた。また、イネもアワも変形していたり、細長く伸びていたりして、原形をとどめていないものが目立った。このような状況から、出土したイネとアワは、煮炊きされたもの（調理済み）であった可能性が考えられる。試料は、多量のアワの中に少しイネが混じるという状況であったことから、イネが貴重であり、アワの中に少しだけイネを混ぜて食していたのであろうか。なお、出土したイネとアワが住居内に備蓄されていた調理前のものであったとすれば、イネとアワを混合して保管する習慣があったことが推定される。

(6) おわりに

古墳時代後期中葉（6世紀中頃）の5区47号竪穴住居跡では、イネとアワが利用されていたと考えられた。出土したイネとアワは、煮炊きされたものである可能性が考えられた。



1~5. イネ、炭化胚乳(1~3は年代測定に使用) 6~8. アワ、炭化胚乳 9. イネと数粒のアワの塊 10. アワの塊
 11. 抽出したイネの集合写真(破片を多く含む) 12. 抽出したアワの集合写真 13. アワ主体の炭化物(小粒混じる)

第107図 5区47号竪穴住居跡から出土した炭化種実(スケールは1~10、12、13が1mm、11が5mm)

4. 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

小林紘一・丹生越子・伊藤 茂・山形秀樹・瀬谷 薫

Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani・藤根 久

(1) はじめに

山門北池遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

(2) 試料と方法

測定試料の情報、調整データは第6表のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-6199	位置：5区 遺構：住47カマド	試料の種類：炭化種実(イネ炭化胚乳) 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N) 処理時の知見：炭化米2粒使用	PaleoLabo： NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-6200	位置：3区 遺構：溝1 遺物No：16	試料の種類：炭化材(クリ) 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクト AMS・1.5SDH

第6表 測定試料及び処理

(3) 結果

第7表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行った¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に校正した年代範囲、暦年校正に用いた年代値を、第108図に暦年校正結果をそれぞれ示す。暦年校正に用いた年代値は、今後暦年校正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年校正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年校正の詳細は以下の通りである。

暦年校正

暦年校正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期 5730 ± 40 年）を校正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年校正にはOxCal3.10（校正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の

百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年校正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	¹⁴ C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代を暦年代に校正した年代範囲		暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)
			1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲	
PLD-6199	-25.51 \pm 0.23	1605 \pm 25	410AD(23.8%)450AD 480AD(44.4%)540AD	<u>410AD(95.4%)540AD</u>	1604 \pm 23
PLD-6200	-26.82 \pm 0.21	890 \pm 20	1050AD(22.4%)1080AD <u>1150AD(45.8%)1210AD</u>	1040AD(30.6%)1100AD <u>1110AD(64.8%)1220AD</u>	889 \pm 21

第7表 放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果

(4) 考察

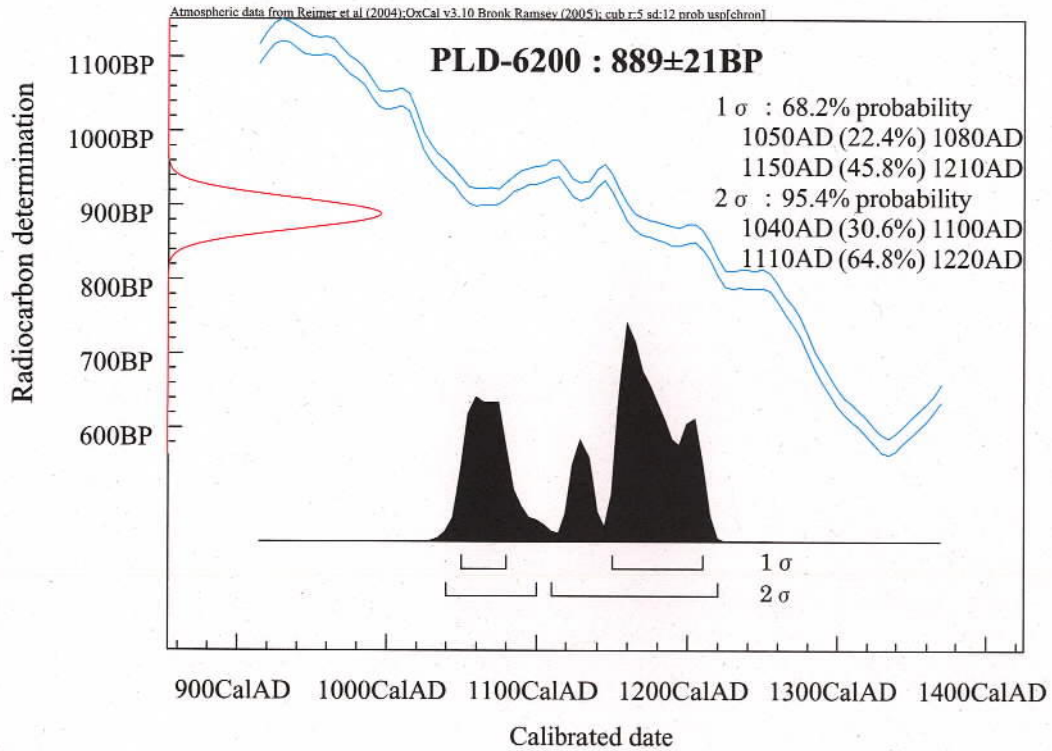
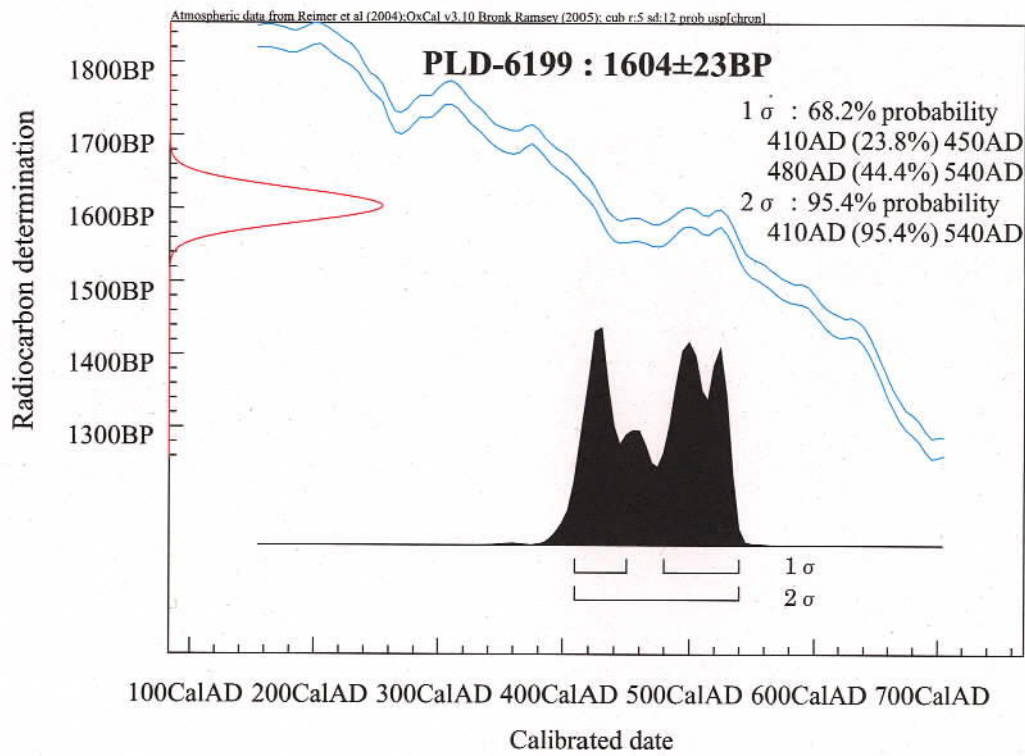
試料について、同位体分別効果の補正及び暦年校正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

5区47号竪穴住居跡(PLD-6199)出土炭化種実(イネ炭化胚乳)は、測定の結果、1605 \pm 25yrBPであった。さらに、暦年校正を行った結果1 σ 暦年代範囲では480-540 cal AD (44.4%)、2 σ 暦年代範囲では410-540 cal AD (95.4%)であった。調査の知見では、古墳時代後期中葉(6世紀中頃)と推定されており、測定の結果においても5世紀末~6世紀中頃となっている。

一方、3区1号溝から出土した炭化材(クリ; PLD-6200)は、測定の結果890 \pm 20yrBPであった。さらに、暦年校正を行った結果、1 σ 暦年代範囲では1150-1210 cal AD (45.8%)、2 σ 暦年代範囲では1110-1220 cal AD (64.8%)であった。測定した試料は、最外年輪ではなく伐採年代を示すものではないが、12世紀初め~13世紀初めの年代範囲を示している。

参考文献

- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, 355-363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代, 3-20.
- Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26 cal kyr BP, Radiocarbon, 46, 1029-1058.



第108図 暦年較正結果

V. まとめ

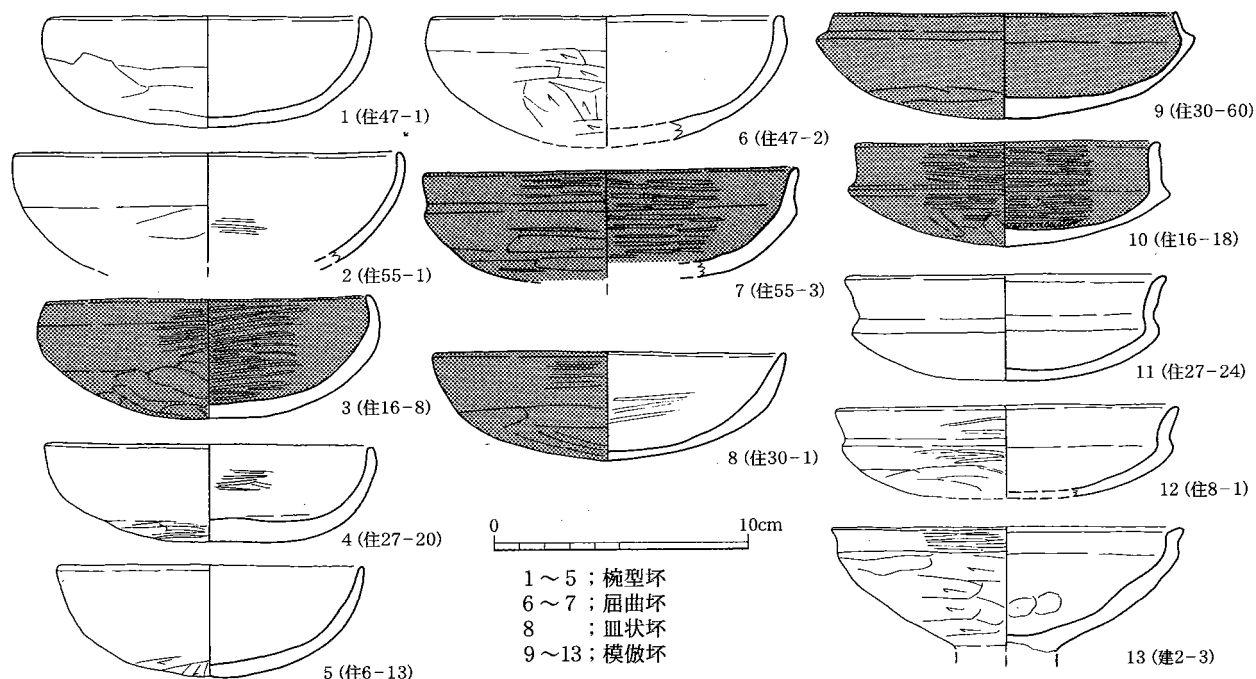
1. 山門北池遺跡出土古墳時代後期の土師器について

(1) はじめに

V-③では、まとめとして当遺跡における集落の変遷について検討するが、その前提条件として各遺構の時期比定が必要である。当遺跡では古墳時代後期後半～末前後の竪穴住居跡等を多く検出したが、遺構内からの出土遺物が少ないのと同時に、編年研究が進む須恵器の出土割合が1割以下であり、土師器が9割以上を占める。この出土傾向は、当遺跡の北東約2kmに位置する大道端遺跡でもほぼ同様の出土傾向となる（関編1977）。このことについて、重藤輝行氏は、「八女古窯跡群は6世紀後半に操業を開始すると考えられ、重藤6期併行期（MT15～TK10型式）の筑後川～矢部川流域では須恵器供給量が不足しており、それを補うために模倣坏が盛行した」と指摘する（重藤2002）。当遺跡出土須恵器のほとんどが八女古窯跡群塚ノ谷4号窯跡産であり、八女古窯跡群操業後も、矢部川以南の当地域は供給量が少なかったことが予測されることが土師器の出土割合に表れていると考えられる。また出土した少量の須恵器のみでの時期比定は、遺構の重複が多いことから危険である。そのため、出土した土師器で甕と並んで出土割合が高く、形態変化が顕著な土師器坏に注目し、編年的な整理を行う。

(2) 土師器坏の分類

土師器坏については、当地域では大道端遺跡報告書の中で分類されたのみであったが、「古墳時代中・後期の土師器」をテーマにした第5回九州前方後円墳研究会で、重藤氏・小松譲氏は福岡県内と佐賀県内の土師器編年と地域性について発表する中で（重藤2002・小松2002）、坏の分類及び形態変遷について取り上げており、今回の検討も両氏の成果に寄る所が大きい。この土師器坏について、両氏は6型式に分類し、小松氏はさらに細分できる可能性を指摘する。



第109図 山門北池遺跡出土土師坏の型式分類 (1/3)

今回、当遺跡及び周辺遺跡出土土師器杯のみを対象とし、両氏の分類基準を参考に、全体・口縁部形態、成形、調整、黒塗りの有無などから、以下の13型式に分類した。

出土遺構	椀形杯					屈曲杯		皿状杯	模倣杯					相伴須恵器型式	切り合い関係(表掲載遺構同士のみ)	
	1	2	3	4	5	1	2	1	2	3	4	5				
山門北池遺跡	5区住47	○					○							TK10		
	5区住30						○		○	○				TK43	住37→住30	
	5区住55		○					○							建物2→住55	
	3区住16		○	○						○					住17→住27→住16	
	5区住32									○	○			TK43		
	4区住43			○	○											
	4区住4			○							○					
	4区住7			○	○						○			TK209		
	3区住27				○						○				住17→住27→住16	
	5区住57				○									TK209		
	3区住17					○					○				住17→住27→住16	
	5区住53											○		TK209		
	5区建物2												○		建物2→住36・55	
松延遺跡	東1住4		○	○			○								住3→住4	
	東2住1			○												
	東1住3					○			○				TK209	住4→住3		
	東北住11					○							TK209			
権現塚南遺跡住5								○	○				TK43	重藤7期		
大江南遺跡住2		○							○							
大道端遺跡	B区住23		○							○				TK43		
	B区住47		○							○				TK43		
	C区住15		○							○				TK43		
	C区住26		○							○				TK43		
	C区住30		○							○				TK43		
	C区住44		○											TK43		
	B区住46											○		TK209		
D区1号竪穴					○								TK217			

椀形杯 (椀形を呈する杯)

1類 口縁部がほぼ直口し、口縁部外面に強い横ナデを行う。外面は口縁部近くまで手持ちヘラズ

第8表 山門北池遺跡及び周辺遺跡における土師器杯の相伴関係

りを施し、全体的に丁寧なつくりとなる。内外面に黒塗りは認められない(第110図1)。

2類 口縁部が弱く内湾するか、ほぼ直口気味で、1類より口縁部が長くなったために、直口気味のものは、最大径部分が平坦になるものがある。手持ちヘラケズリは外面中位以下となるものが多い(第110図2)。

3類 口縁部が強く内湾し、また底部が突出し、深さがあるものが多い。内外面に黒塗りを施す割合が高い(第110図3)。重藤杯2式、小松杯A3a式。

4類 口縁部がほぼ直口するか、弱く内湾する。1・2類との違いは、底部の突出が弱く平坦部を持つ、口縁部が長い、つくりが粗雑という点である(第110図4)。小松杯A4式。

5類 口縁部が内湾せず、そのまま開く。黒塗りを施さない(第110図5)。小松杯A4式。

その後、さらに口縁部が開き、口径も大きくなると同時に、底部の平坦化が進み、7世紀後半～末段階には低平な皿状を呈する杯が主流となるが、5類の形態も残存する(例：大道端遺跡B区108号、C区17号住居跡出土土器)。

屈曲杯 (口縁部が外反する杯)

1類 椀形杯1類の口縁部が外反した形態のもの。元々は、強い横ナデにより口縁部外面が外反気味となったものが、起源となった可能性がある(第100図6)。重藤杯3式。

2類 弱く外反する口縁部と底部との間に鈍い稜を持つが、稜に対応して内面が屈曲しない所が、模倣杯とは異なる(第110図7)。

皿状杯 (皿状を呈する杯)

器高が低い杯であるが、椀形杯5類以降の形態とは異なり、底部に平坦部を持たない。また口縁部と底部の境は肥厚する例が多い(第100図8)。

模倣杯 (須恵器杯身を模倣した杯)

1類 口縁部が短く内傾するもので、内外面を黒塗りするものが多い（第110図9）。重藤模倣杯1式、小松杯C1式。

2類 1類より長い口縁部が直立か外傾するもので、口径が受部最大径を上回らないもの。受部の痕跡である稜は明瞭である。椀形坏3類と同じく、底部が突出する。内外面に黒塗りするものが多い（第110図10）。

3類 口径が受部最大径を上回り、口縁部が強く外反・外傾する（第110図11）。

4類 短い口縁部が強く外反するもので、底部に平坦面を持つ。内外面に黒塗りを施すものは認められない（第110図12）。

5類 口縁部が更に短くなり、稜は痕跡的となる。図示したものは高坏坏部であるが（第110図13）、当遺跡では当類の坏は出土していない。当遺跡北約100mに位置する藤の尾垣添遺跡の6号住居跡出土土師器坏（田中編1989のp23、第17図53・56）は5類であり、当遺跡周辺では4→5類からの形態変遷が確認できる。

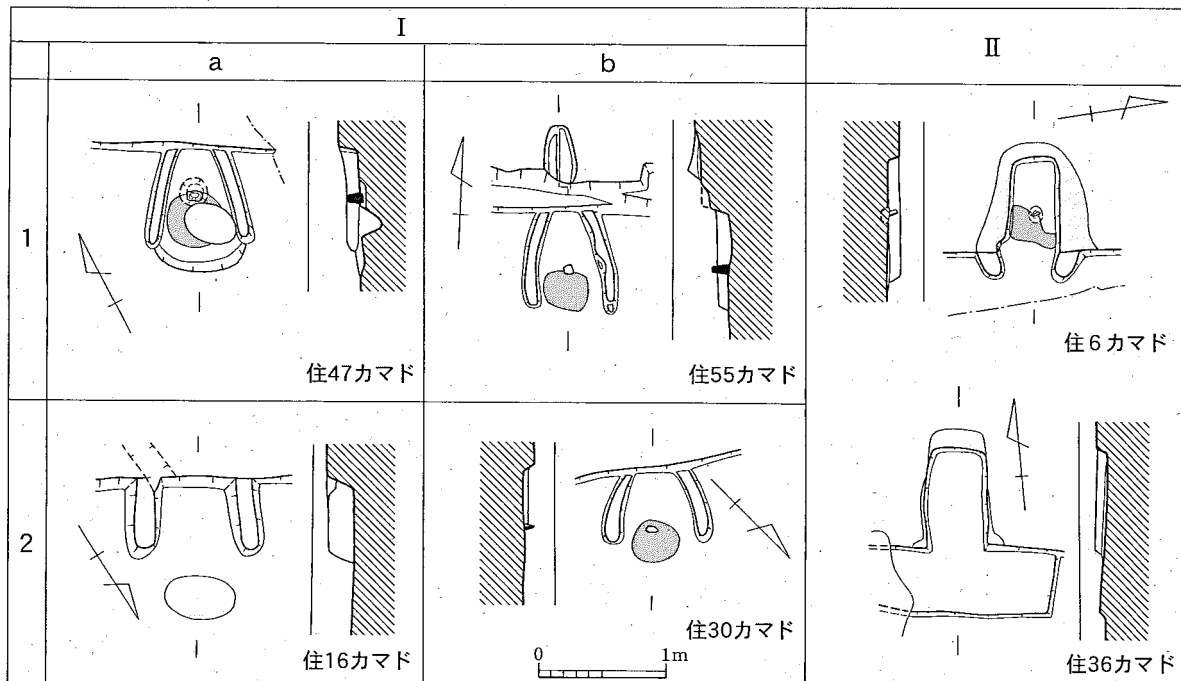
(3) 分析結果

以上の分類をもとに、各類の当遺跡及び周辺遺跡での共伴、須恵器との共伴、遺構の切り合い関係を検討し、型式変遷順に並べたのが第8表である。表によると、当遺跡では椀形坏2・3類と模倣坏2類、椀形坏4・5類と模倣坏3類がセットで出土することが多い。47号住居跡では椀形坏1類と重藤分類高杯C1式（重藤5期）に後出する型式及び小松分類高杯C式（小松5A期）の高坏が共伴する。また先述したように椀形坏5類は7世紀末段階まで残る。以上から、当遺跡出土土師器坏は4段階に分けることが可能であり、共伴した須恵器の型式、切り合い関係からもこの4段階の時期区分は追認される。

また、当遺跡では遺構重複が激しく、遺物が混入した可能性や住居出土土器は少量のものが多いため、周辺遺跡における共伴関係を調べた（第8表）。大道端遺跡・大江南遺跡では椀形坏2類と模倣坏1類、椀形坏2類と皿状坏1類がセットとなり、権現塚南遺跡では皿状坏と模倣坏1類の共伴など、当遺跡で見られた型式変遷をある程度検証できた。この4時期区分は須恵器との共伴関係から田辺昭三氏の陶器須恵器型式にはほぼ一致するするため、須恵器型式順に整理してみると、以下のようになる。

後期中葉	TK10型式	椀形坏1類	屈曲坏1類
後期後半	TK43型式	椀形坏2・3類	皿状坏 屈曲坏2類 模倣坏1・2類
後期末	TK209型式	椀形坏4・5類	模倣坏3・4類
7世紀前半	TK217型式	椀形坏5類・(模倣坏5類)	

なお、第8表に見られるTK43型式段階の模倣坏2・3類、TK209型式段階の椀形坏4・5類の共伴事例の存在は、各型式が多少の重複期間を持ちながら型式変化したこと示すと理解できる。また、模倣坏5類は須恵器と共伴する例がないため、括弧を付けたが、7世紀前半と考えられる36号住居跡を切る2号掘立柱建物掘形内出土坏をこの類の標識とすることから、この模倣坏5類は7世紀中葉以降に位置づけられるか、またこの段階にも残存する形態となる可能性がある。以上の4段階の時期区分で、V-2・3を検討する。



第110図 カマド分類図 (1/60)

2. 山門北池遺跡で検出した竪穴住居跡カマドについて

(1) はじめに

ここでは、当遺跡で検出した竪穴住居跡カマドを分類・検討し、また竪穴住居の規模の変遷や土製支脚についても合わせて取り上げていく。当遺跡では、6世紀中葉～7世紀前半に属する竪穴住居跡42棟の内、67% (28棟) でカマドを確認し、そのうち61% (17棟) が分析対象となる。

(2) カマドの型式分類と検討

まず、当遺跡カマドは住居の北東・北西・北・南東・南西・南・東・西壁の全方位に付設され、位置的・時期的にもバラバラであるが、同一家族の住居建て替えを表すと考えられる、重複住居群ではほぼカマドの方位が一致する。また、住居及びカマド主軸が磁北より45°程度傾くものが多い理由は、東→西方向に緩やかに傾斜する地形に沿って集落が展開したためと考えられる。なお、当遺跡では7世紀末までこの地形に沿った集落の展開が認められ、集落の廃絶は時期的に条里制の施行と関係する可能性が高い。

当地域のカマドの先行研究としては、小田和利氏が北部九州のカマドを検討する中で、「筑紫平野南部地域」(筑後川以南の八女～大牟田)として、カマドの様相を検討する(小田1994)。小田氏は、カマド・煙道部の平面・断面形態と位置、焚口部の掘り込み及び支脚・袖石の有無という属性から型式分類し、検討を行っている。当遺跡カマドは上部が削平され、煙道部を検出できたのは55号住居跡カマドのみであることから、小田氏の分類を参考に、当遺跡カマドの実態に合わせて型式分類したのが、以下の分類である。

I類 住居壁にカマド袖を直接貼り付けるもの(造り付け型)

Ⅱ類 壁と凸型に掘り込んだ突出型

I類は更に型式を細分し、袖が直線的に広がるものをa、袖がやや内湾するものをb、袖が長いもの(60cm以上)は1類、短いもの(60cm以下)は2類と、計5型式に分類した。この型式を図で示したものが第110図である。

まず、カマド型式の時間的な変遷を検討してみると、古墳時代後期中葉は47号住居跡カマド(I a-1類)のみである。後期後半はI a-2、I b-1・2類とI類のみ確認される。後期末になるとI類はI a-2類のみで、袖内湾タイプであるb類は消滅した可能性が高く、また突出型カマドのⅡ類が出現する。7世紀前半と考えられる6・23・36号住居跡カマドはⅡ類で、I類は確認できない。住居の切り合い関係からこの変遷を検討してみると、24号住居跡(I a-2類)←23号住居跡(Ⅱ類)、55号住居跡(I b-1類)←61号住居跡(Ⅱ類)と、重複期間はあるものの、I→Ⅱ類への時間的な変遷を追認することができ、大道端遺跡でも当遺跡とほぼ同じ変遷過程を辿ることを確認している。このことから、やや資料不足ではあるが、当遺跡においてI類はI a-1・I b-1類→I a-2・I b-1類→I a-2類と変遷する可能性が高いことを指摘しておきたい。後期末に出現するⅡ類では、掘り方内に粘土を充填し、燃焼部壁を構築する3・6・9・36号住居跡カマドの存在は注目されるが、このような構築方法のカマドの類例は見当たらないため、今後の調査の進展に期待したい。

他のカマド属性では、燃焼部奥壁から支脚までの距離は各型式とも40cm前後となり、燃焼部幅も支脚(推定)部分で50cm前後が最も多く、時間的な変化は認められない。

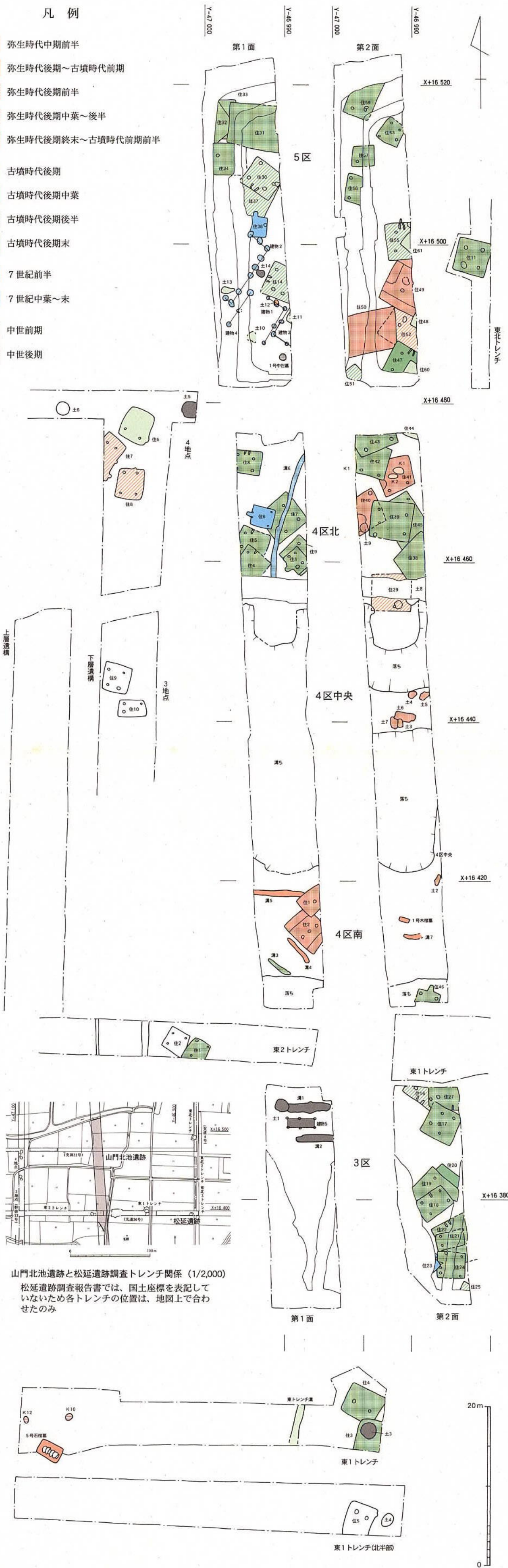
また当遺跡カマド内で出土したカマド支脚はすべて土製品であり、大道端遺跡におけるカマド支脚のほとんどが石製であるのとは対照的である。古墳時代後期中葉・後半の47・55号住居跡土製支脚は長台形・中実・粘土のみ成形されるのに対し、後期後半の30号住居跡及び7世紀前半の6号住居跡土製支脚は小型の長台形・片面のみで、胎土はスサを含む粗製品となる。覆土出土であるが、後期後半の7号住居跡土製支脚は長台形・1/2・スサを含むものとなり、上記の土製支脚の時間的な変遷を繋ぐ資料となる。さらに、後期中葉の47号住居跡覆土内から円形・中実?・粘土のみで成形する土製支脚が出土し、後期中葉の大道端遺跡18号住居跡や後期末の藤の尾垣添遺跡1・6号住居跡では円形・中実・粘土のみで成形した土製支脚が出土することから、土製支脚の平面形態は当初から長台形系・円形系という2つの系譜が存在する可能性が高い。

最後に当遺跡における竪穴住居跡の面積について検討してみると、古墳時代後期後半までは住居形態は正方形で床面積16~18㎡程度が主となるが、後期末になると18~20号住居跡、3・9号住居跡、55・61号住居跡の切り合いで認められるように、住居規模が縮小する傾向が認められる。7世紀前半と考えられる6号住居跡は床面積9㎡とさらに住居規模が縮小し、支柱穴も壁際に位置する。

当遺跡におけるカマド及び住居形態の変遷については、小田氏の指摘とほぼ同様な傾向を示すが、掘り方に粘土を充填し、壁を構築するカマドや土製支脚の多用などは当遺跡を特徴付けるものとなる。今回は時間的な制約のため、ほぼ当遺跡のみでの検討となったが、今後、矢部川流域に対象を広げ、カマドの様相を検討する機会を持ちたい。

凡例

- 弥生時代中期前半
- 弥生時代後期～古墳時代前期
- 弥生時代後期前半
- 弥生時代後期中葉～後半
- 弥生時代後期末～古墳時代前期前半
- 古墳時代後期
- 古墳時代後期中葉
- 古墳時代後期後半
- 古墳時代後期末
- 7世紀前半
- 7世紀中葉～末
- 中世前期
- 中世後期



第111図 山門北池遺跡遺構変遷図 (1/400)

3. 山門北池遺跡における集落の変遷について

当遺跡で検出した主な遺構は、弥生時代中期前半～奈良時代の竪穴住居跡52棟・掘立柱建物跡5棟・土坑14基・溝7条・木棺墓1基・甕棺墓2基及び中世墓1基であるが、新幹線用地幅内という限られた調査区のため、今回の調査では集落構造の一部が判明したにとどまる。

当遺跡を含めた山門地区における集落様相の整理については、今後刊行予定である「藤の尾垣添遺跡報告書」の中で取り扱うが、ここでは同一遺跡である松延遺跡（田中編1988）の調査成果を含めた、当遺跡の集落の変遷について若干の整理を行い、まとめに替えたい。

縄文時代

3区では、縄文時代後期の北久根山式・西平式の鉢が各1点出土した。土器自体に摩滅が少ないことから、当遺跡周辺に当該期の遺構が存在する可能性がある。

弥生時代～古墳時代前期

当遺跡で検出した最も古い遺構は中期前半の1・2号甕棺墓である。成人・小児棺各1基のみであり、墓群の在り方については不明だが、4区北の安定した微高地に位置することは注目できる。1・2号甕棺墓の約280m南西の松延遺跡1地点では、列状構造を示す中期前半～中頃の甕棺墓9基と後期の可能性が高い箱式石棺墓3基、石蓋土壇墓1基を検出しているが、Ⅲ-1の検討及び位置から当遺跡とは別の自然堤防上に立地する、異なる集団の墓地となる可能性が高い。また4区南で木棺墓を単独で検出しているが、松延遺跡東1トレンチ西側で検出した後期前半の10・12号甕棺墓及び5号箱式石棺墓と同一の墓群となる可能性が高い。

後期中葉～後半になると、29・52号住居跡及び松延遺跡7・8号住居跡の存在から、当遺跡での集落の形成が確認される。この段階の住居形態は、29号住居跡に代表される長方形ベッド付住居（2本柱の主柱穴）と想定され、この後古墳時代前期にかけて住居規模がやや大型化する傾向にある（49・50号住居跡）。後期終末～古墳時代前期前半になると、住居跡・土坑を中心とする遺構が急激に増加し、当遺跡の一つの画期となる。4区北～5区の安定した微高地には後期後半から引き続き住居が営まれ、1・2号住居跡、2～7号土坑のように4区中・南の狭小な微高地にも遺構が認められる。また住居形態も40号住居跡で見られる、ベッド無し4本柱主柱穴の方形住居も出現する。なお、松延遺跡では古墳時代前期の遺構は確認されておらず、遺物も遺構東側のみで出土することから、当遺跡における遺構数の増加は、調査区周辺への「集住」の可能性を指摘しておきたい。

古墳時代後期～奈良時代

古墳時代中期に属する遺構・遺物は中期前半の松延遺跡6号土坑及び2地点包含層出土の初期須恵器甕の出土のみであり、後期中葉まで遺構・遺物ともは確認されていない。

後期中葉になると、20・47号住居跡の存在から再び集落の形成が認められ、後期後半になると、後期中葉の住居跡と同じ微高地内のみ徐々に住居数が増加するが、後期中葉と後期後半の住居跡同士は遺構の切り合いがない。また重複関係の顕著な20号住居跡を除き、住居にはカマドを付設し、そのすべてがⅠ類となる。

後期末には、4区北～5区及び3区内で重複関係の顕著な多数の住居跡を検出し、当遺跡の一つの画期となる。この重複住居群は、3区16・27・17号住居跡及び18～20号住居跡、4区北

4・5号住居跡及び3・9号住居跡から、住居主軸方位が一致しないものも多いが、同一場所での建て直しの結果による重複関係を示していると考えられる。このことから、後期中葉以降は、集落構成員が集落内の限定された空間内での竪穴住居の造営を行う、土地規制が行われていたと推測される。

後期中葉～末及び7世紀前半の当遺跡の住居跡及び松延遺跡の住居跡は、住居主軸方位が北東―南西か南東―北西と磁北とは45度程度ずれるものが多い。このことは、北東→南西方向へ旧地形が傾斜するためと考えられ、7世紀中葉前後と考えられる、1～4号建物跡の主軸方位も北東―南西方向を示し、集落が廃絶される7世紀末まで旧地形に沿った集落の展開が認められる。また後期末は突出カマドであるⅡ類が出現し、Ⅰ類と並存する。7世紀前半と考えられる6・23・36号住居跡はすべてⅡ類であり、当地域では以後Ⅱ類がカマド形態の主流になると考えられる。またⅡ類カマドの中には、大きく掘り方を掘り込んだ後に粘土を充填し壁体を構築した例が認められ、今後の調査の進展により、類例の増加とともに構築技法の系譜の解明が期待される。

7世紀中葉以降、当遺跡では竪穴住居は検出されていないが、5区では7世紀中葉前後と考えられる1～4号建物跡を確認した。1・3号建物跡は近接し、同時並存は不可能であるため、少なくとも2時期が考えられる。この段階は7世紀前半と考えられる36号住居跡を整地して、2号建物跡を建てることから、集落内の再編が行われたと推測される。しかし、再編から間もない7世紀末の地形に沿った溝である6号溝をもって当遺跡は中世まで一旦途絶える。

この中断する契機としては、時期的に条里制の実施によるものと推測されるが、一方大道端遺跡においては、奈良時代になっても遺構数は減少するものの集落自体は継続する。今後資料の蓄積により、両遺跡を含めた7・8世紀代の当地域の様相が明らかになることを期待したい。

中世

中世前期では遺構は3区の5号建物跡、1号土坑、1・2号溝ほかピットのみと非常に少ない。5号建物の土壁と考えられる粘土塊が1号溝から出土したことは注目される。また松延遺跡では中世前期の土坑・溝などを検出していることから、当該期の集落の中心は当遺跡西側に広がる可能性が高い。

中世後期では1号中世墓のみ確認した。墓構造は円形墓壇内にヒノキ材の墓桶を埋葬するものとなるが、当地域では中世墓の調査例がなく、比較できない。なお、山門前田遺跡では1号中世墓よりはやや後出する16世紀前半～17世紀前半の集落を確認している。

引用・参考文献

- 関晴彦編1977『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告―XIV―』福岡県教育委員会
田中康信編1989『藤の尾垣添遺跡Ⅱ』瀬高町文化財調査報告書第5集 瀬高町教育委員会
小田和利1994「北部九州のカマドについて」『文化財学論集』文化財学論集刊行会
田中康信1998『瀬高地区遺跡群Ⅱ』瀬高町文化財調査報告書第15集 瀬高町教育委員会
重藤輝行2002「福岡県における古墳時代中期～後期の土師器」『古墳時代中・後期の土師器』第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料
小松讓2002「肥前地域における古墳時代中・後期土師器の編年」『古墳時代中・後期の土師器』第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料

图 版

1 山門北池遺跡遠景
(南から)



2 山門北池遺跡遠景
(北から)



3 山門北池遺跡第2面全景
(上から、右が北)





1 山門北池遺跡第1面
全景(南から)



2 3区北 東壁土層
(西から)



3 4区南 東壁土層
(西から)



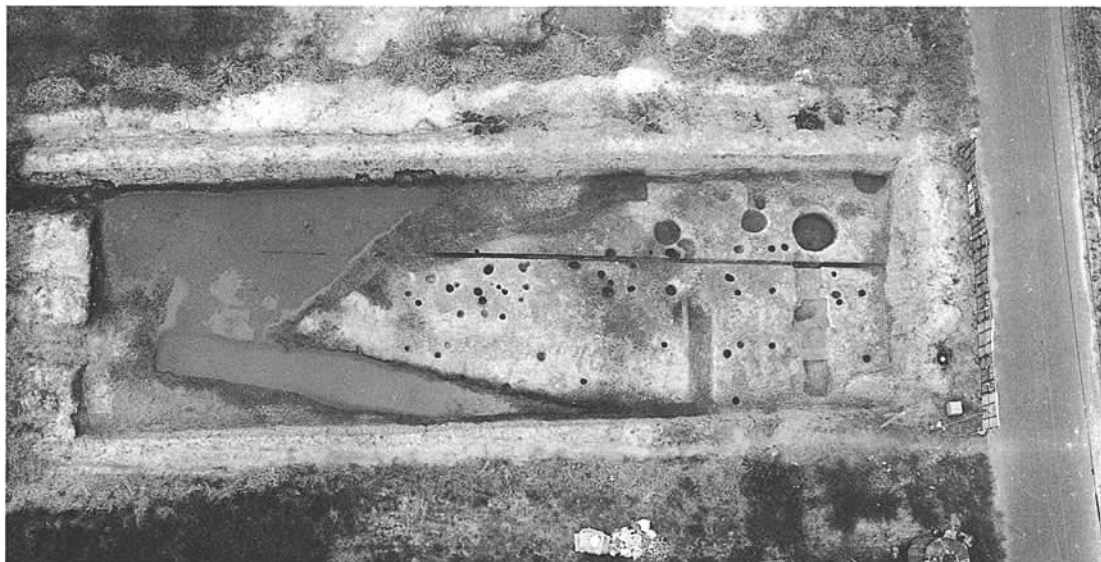
1 4区中央 東壁土層
(西から)



2 4区北 東壁土層
(西から)



3 5区 東壁土層
(西から)



1 3区第1面全景
(上から、右が北)



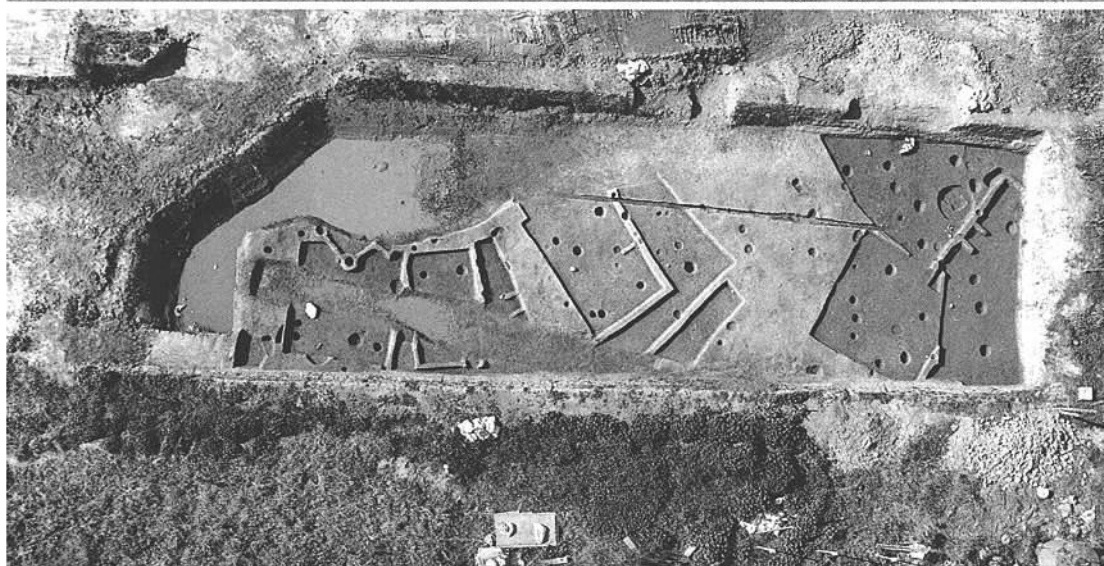
2 3区1号土坑
(北東から)



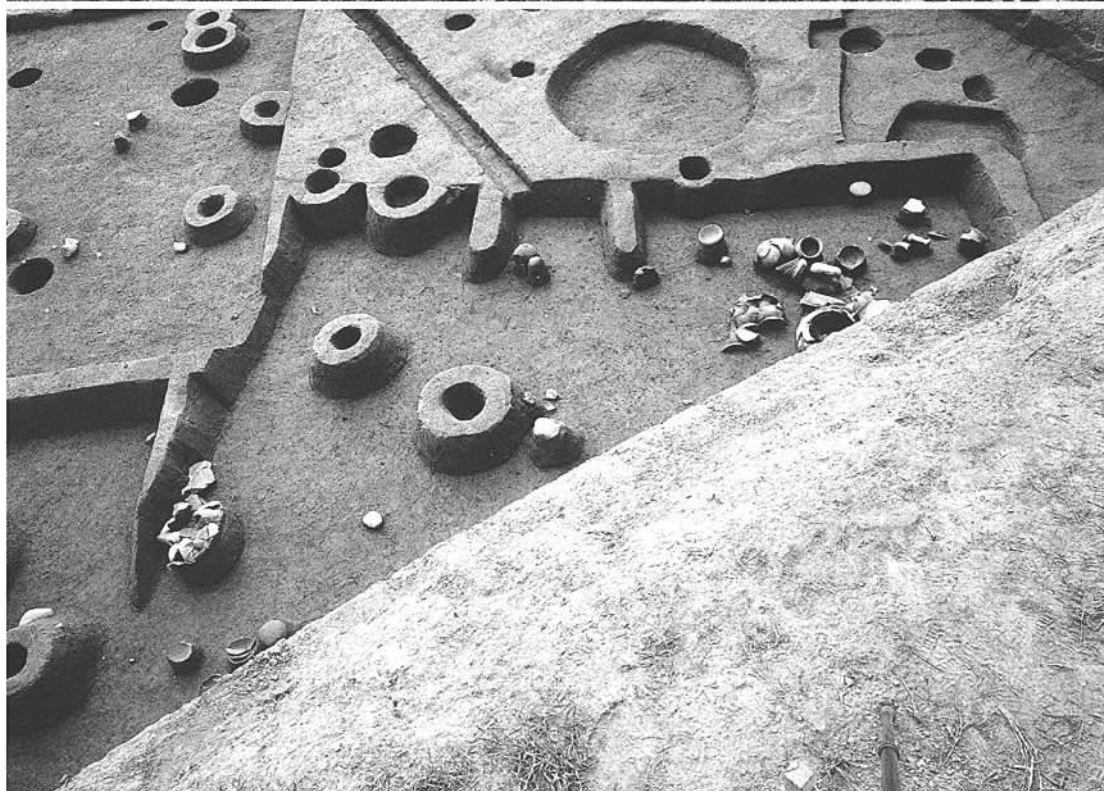
3 3区1号溝
(東から)



1 3区1号溝出土状況
(北から)



2 3区第2面全景
(上から、右が北)



3 3区16号竪穴住居跡
(北東から)



1 3区16号竪穴住居跡
出土状況(1)(西から)



2 3区16号竪穴住居跡
出土状況(2)(南東から)



3 3区16号竪穴住居跡
出土状況(3)(南西から)



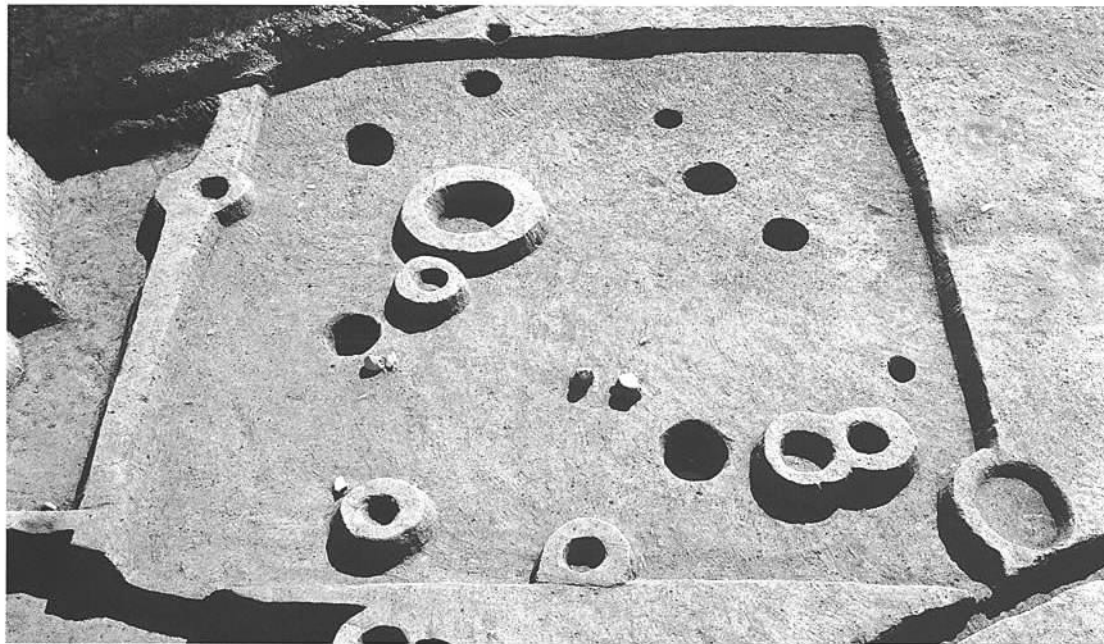
1 3区16号竪穴住居跡
出土状況(4)(東から)



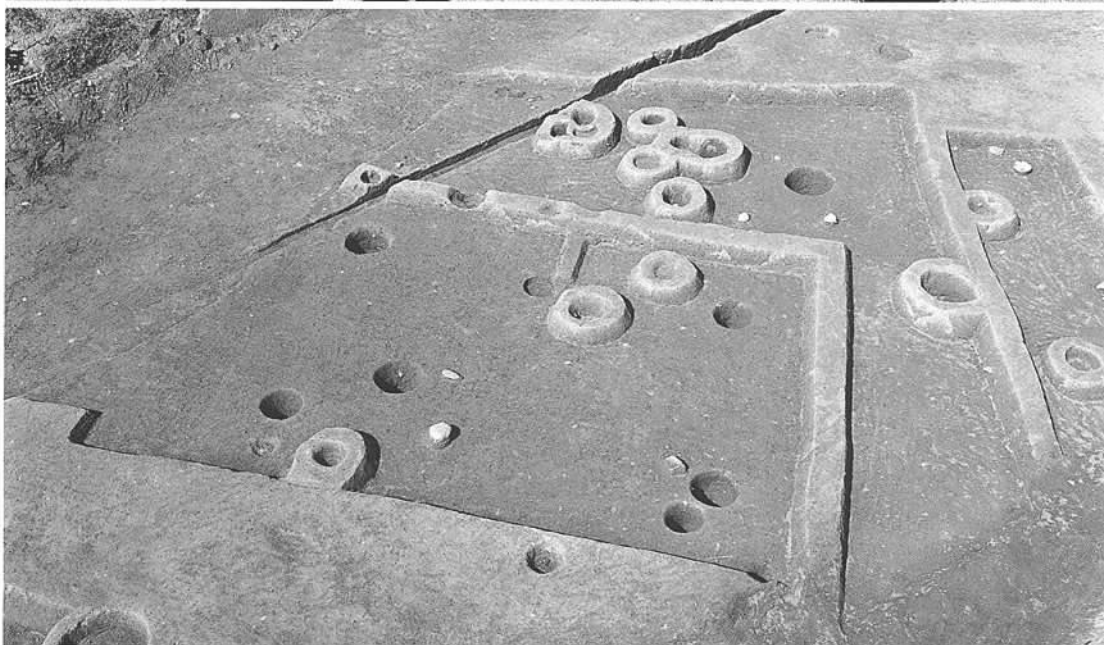
2 3区16号竪穴住居跡
出土状況(5)(東から)



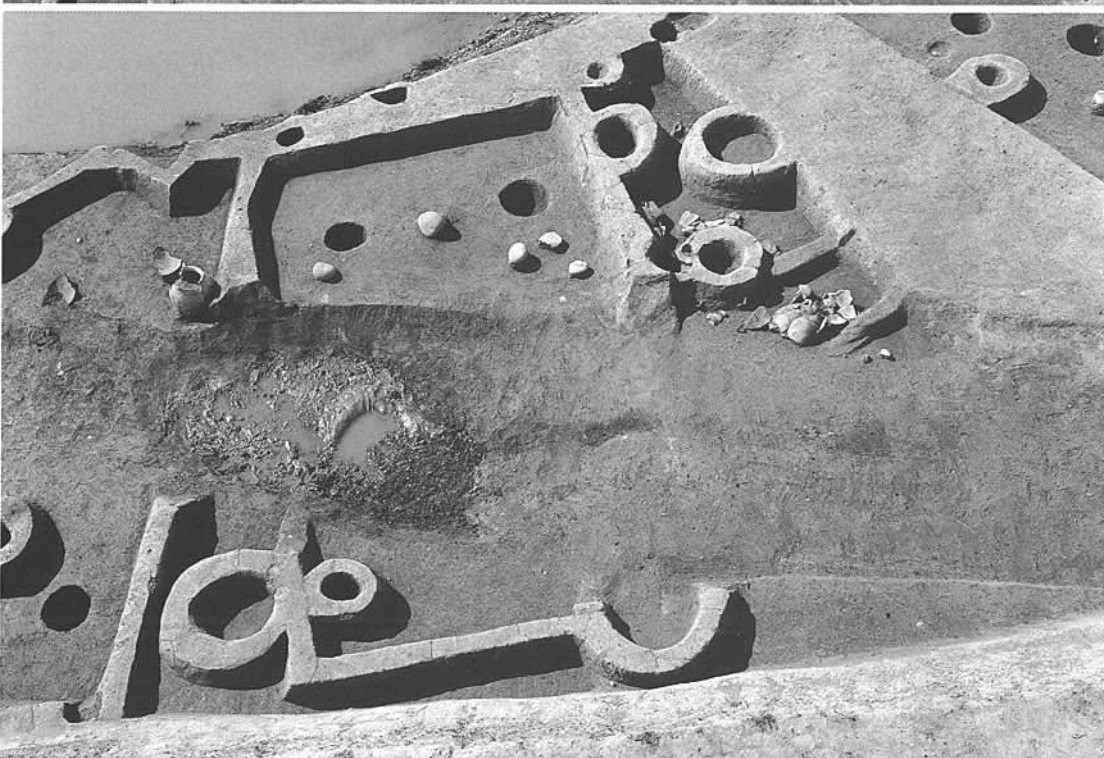
3 3区16号竪穴住居跡
カマド(北東から)



1 3区17号竪穴住居跡
(西北西から)



2 3区18・19号竪穴住居跡
(南東から)



3 3区21・22号竪穴住居跡
(東から)

1 3区22号竪穴住居跡
カマド出土状況
(南南東から)



2 3区22号竪穴住居跡
カマド完掘状況
(南南東から)



3 3区23・24号竪穴
住居跡(東から)





1 3区・4区第1面全景
(上から、右が北)

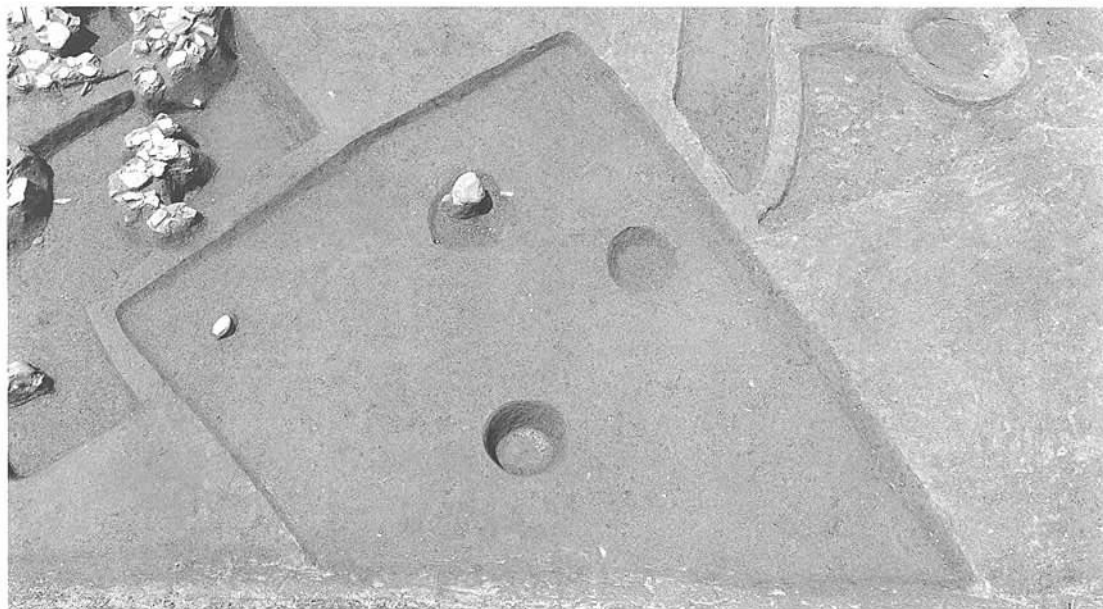


2 4区第1面南全景
(上から、右が北)

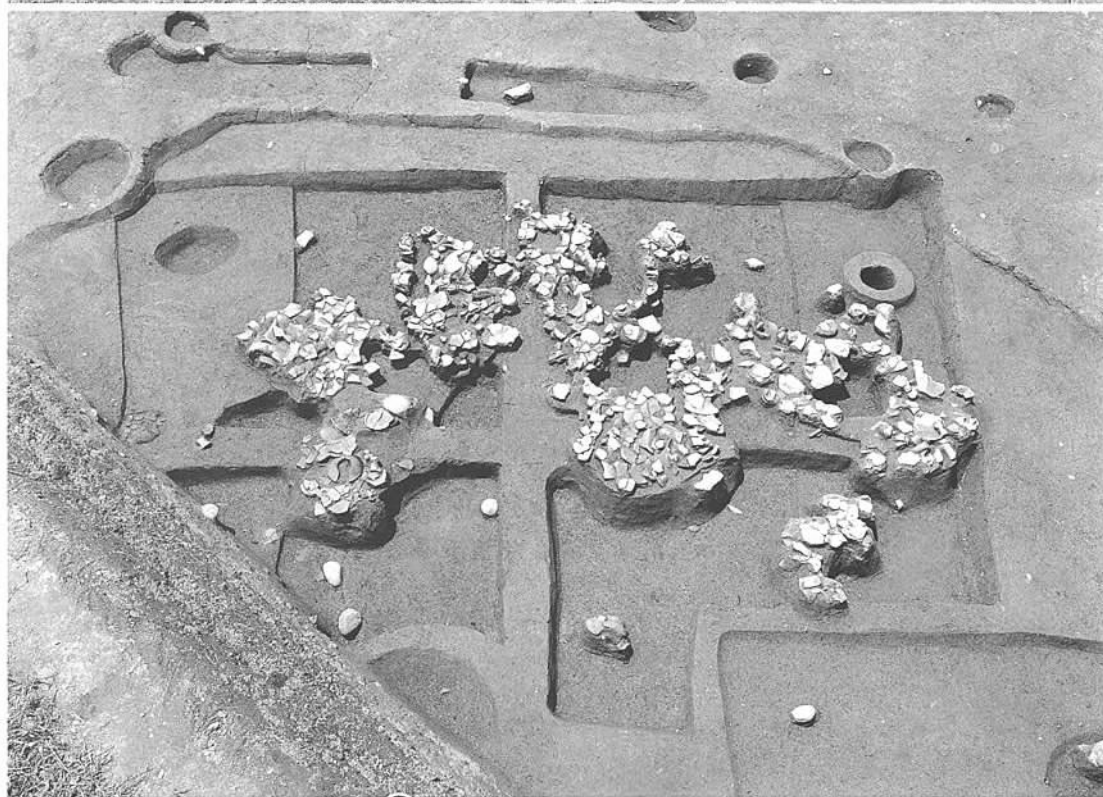


3 4区第1面北全景
(上から、右が北)

1 4区1号竪穴住居跡
(東から)

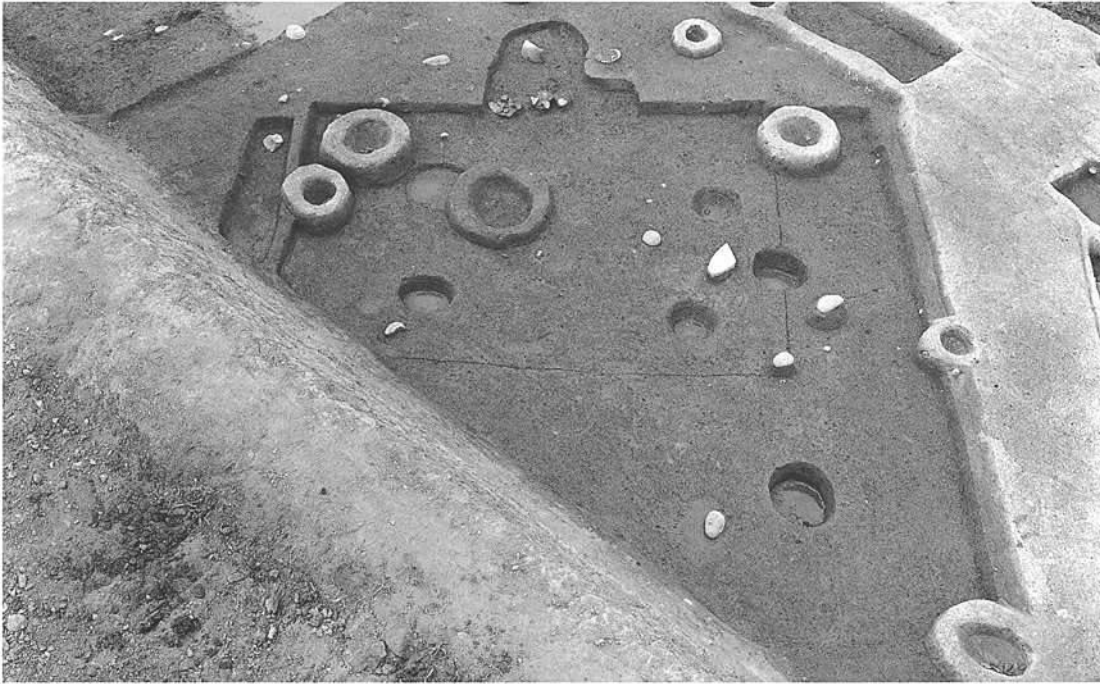


2 4区2号竪穴住居跡
出土状況(北東から)



3 4区2号竪穴住居跡
完掘状況(北東から)





1 4区3・9号竪穴住居跡
(北東から)



2 4区3・9号竪穴住居跡
カマド(北東から)

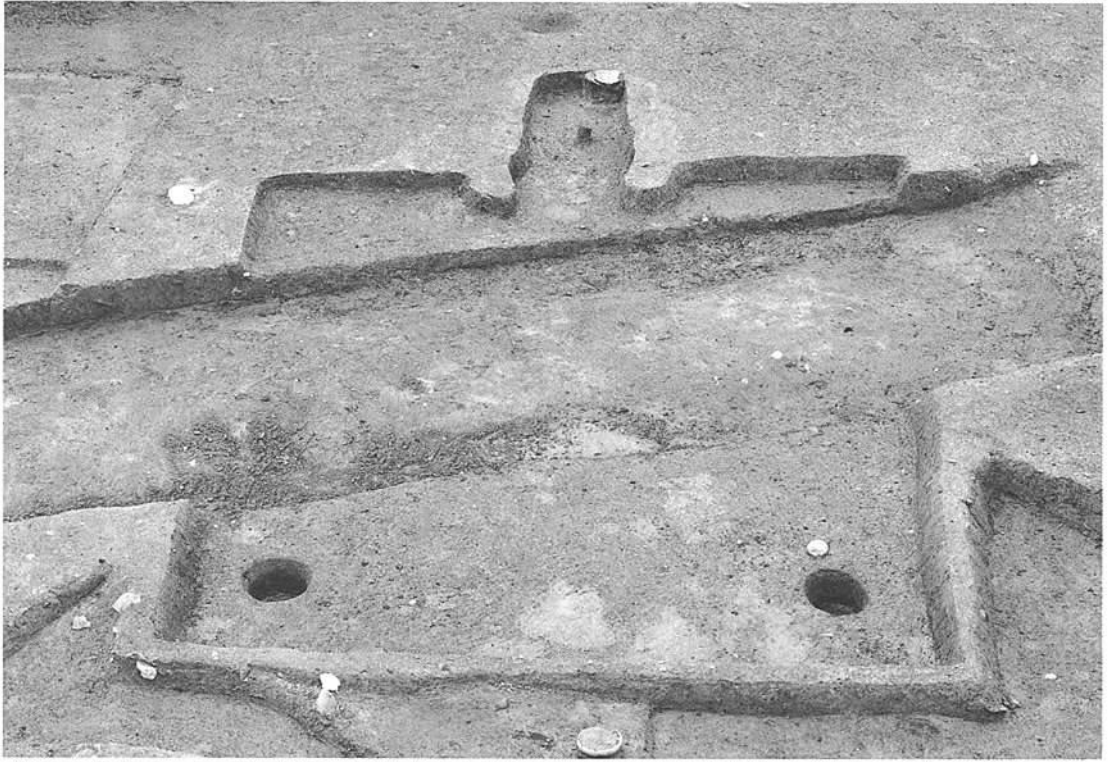


3 4区4・5号竪穴住居跡
(南西から)

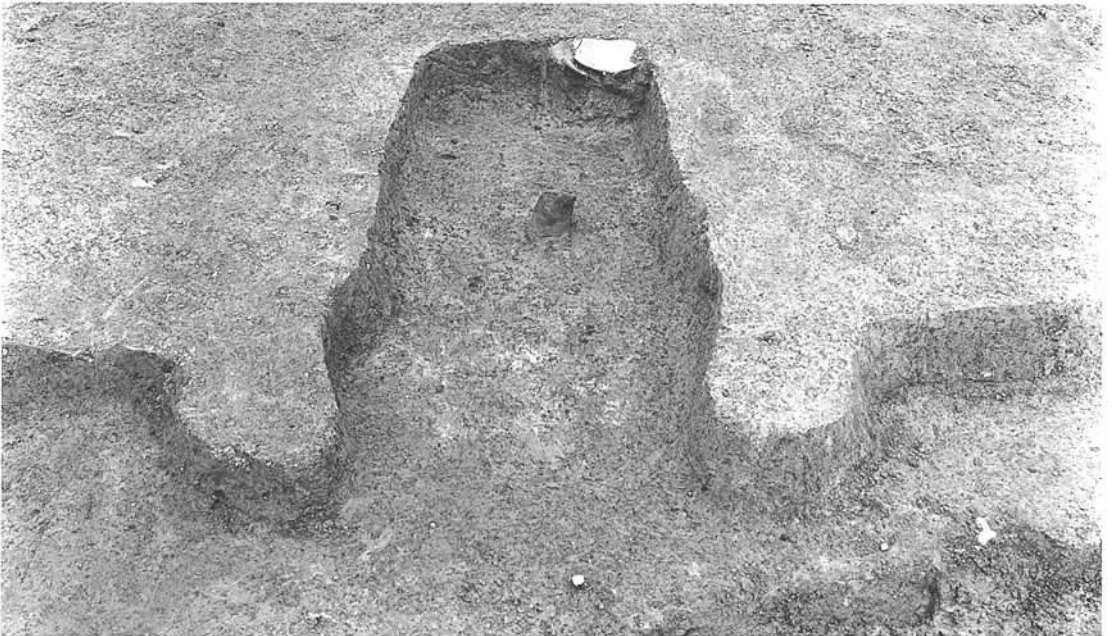
1 4区4号竪穴住居跡
カマド(南西から)

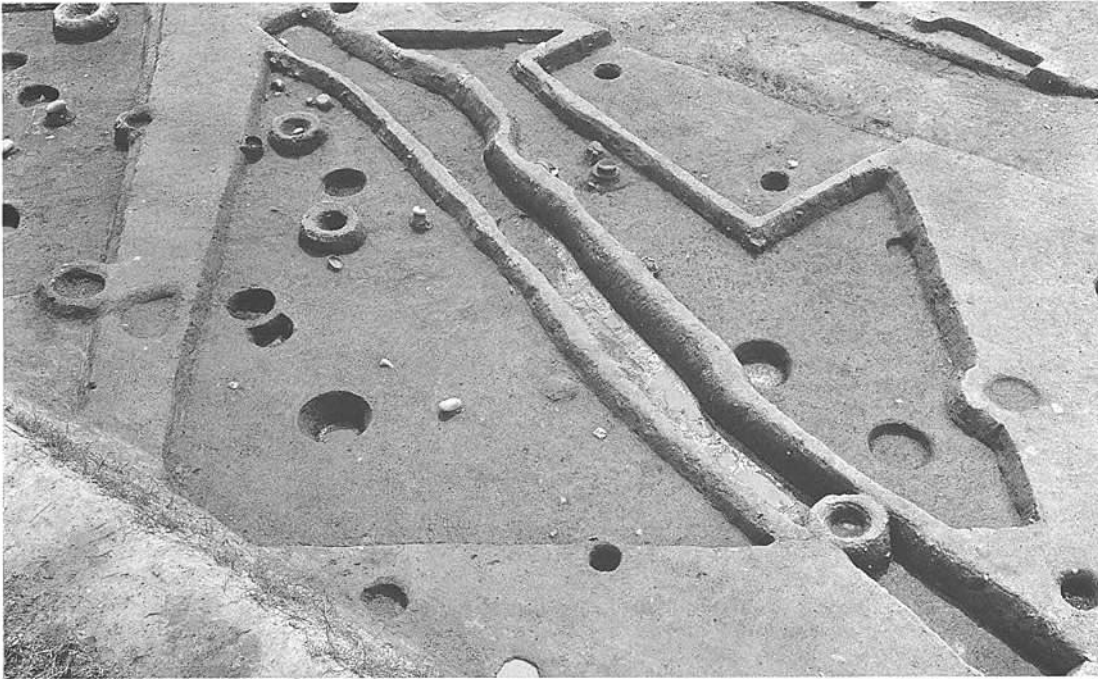


2 4区6号竪穴住居跡
カマド(東南東から)



3 4区6号竪穴住居跡
カマド(東南東から)





1 4区7号竪穴住居跡
(北東から)

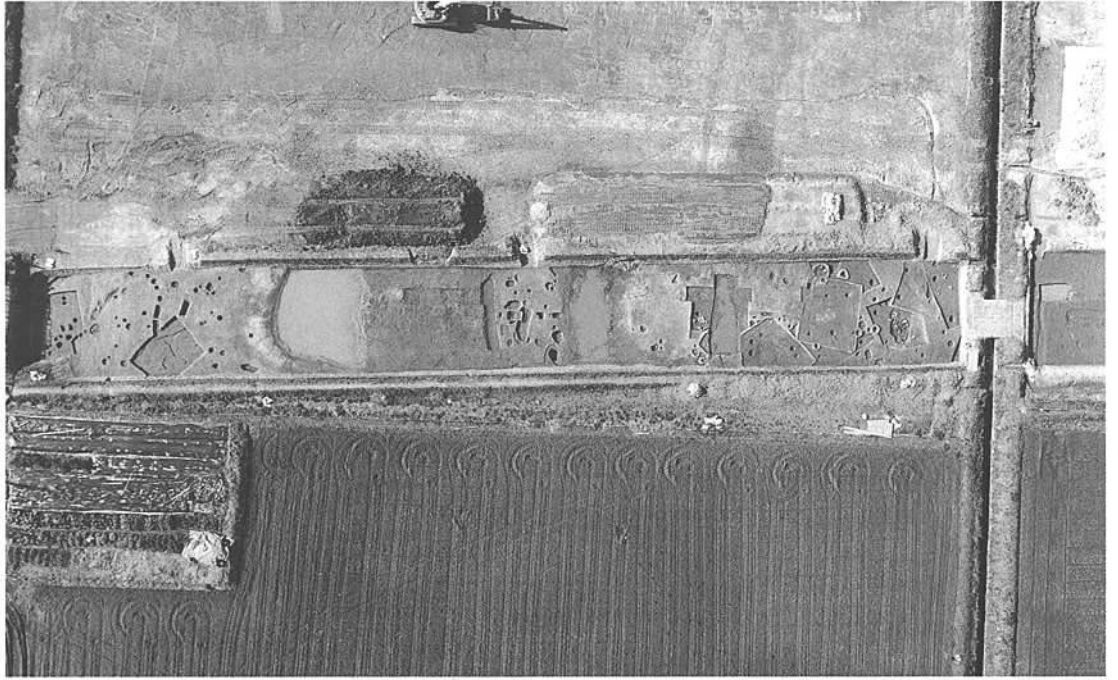


2 4区8号竪穴住居跡
(南から)



3 4区8号竪穴住居跡
カマド(南から)

1 4区第2面全景
(上から、右が北)



2 4区第2面南全景
(上から、右が北)



3 4区第2面北全景
(上から、右が北)





1 4区29号竪穴住居跡
(西から)



2 4区29号竪穴住居跡
屋内土坑出土状況
(南西から)



3 4区38号竪穴住居跡
(北東から)



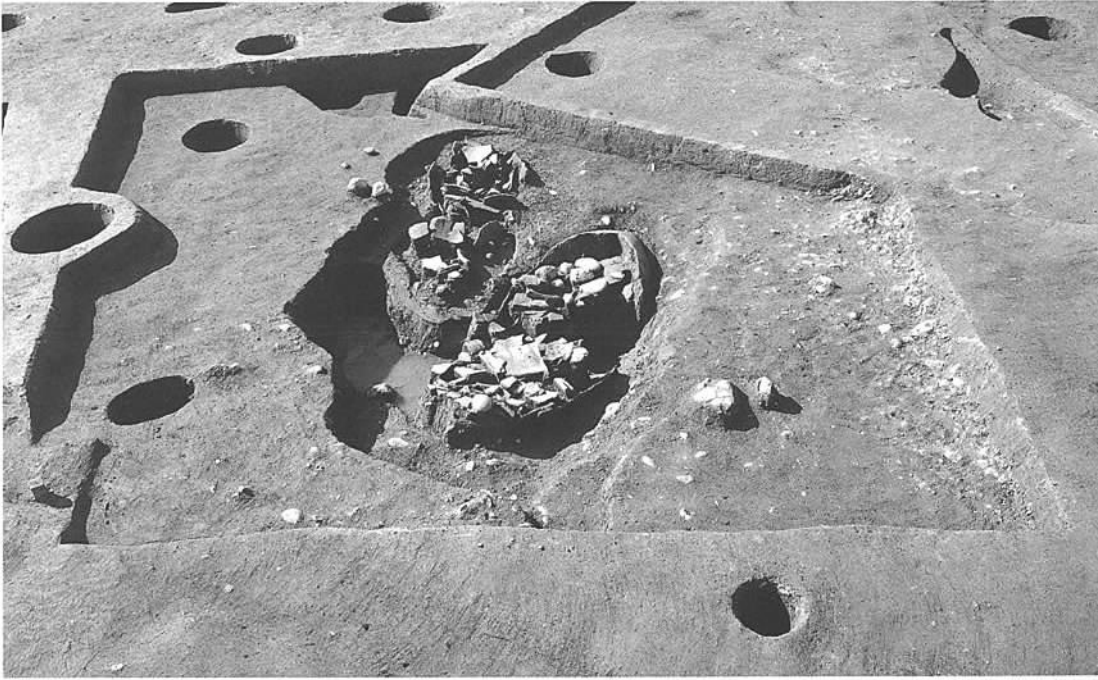
1 4区39・45号竪穴住居跡(東から)



2 4区40号竪穴住居跡
9号土坑(西から)



3 4区40号竪穴住居跡
屋内土坑(西から)



1 4区41号竪穴住居跡
(東から)



2 4区41号竪穴住居跡
(西から)



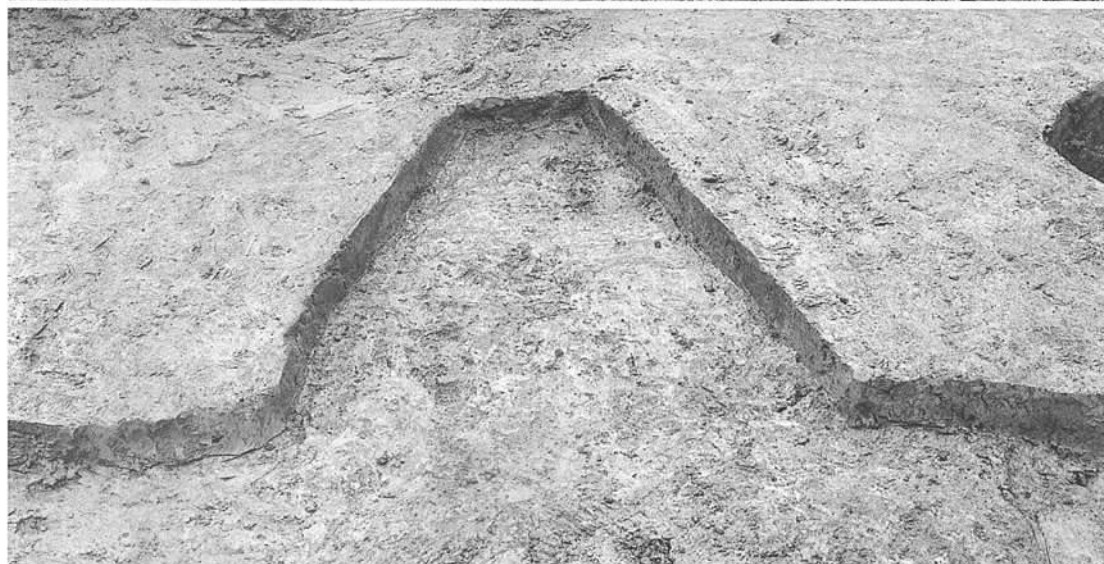
3 4区42号竪穴住居跡
(北西から)



1 4区42・43号竪穴
住居跡(北西から)



2 4区46号竪穴住居跡
(南から)



3 46号竪穴住居跡カマド
(南から)



1 4区2号土坑
(南西から)



2 4区3・6・7号土坑
(南から)



3 4区3・6・7号土坑
(西から)

1 4区3号土坑
(南から)



2 4区4号土坑
(北西から)



3 4区5号土坑
(南西から)





1 4区7号土坑
(北東から)



2 4区9号土坑
(南東から)



3 4区1号木棺墓
(南東から)



1 4区1・2号甕棺墓
検出状況(西北西から)



2 4区1・2号甕棺墓
完掘状況(西北西から)



3 4区2号甕棺墓
(東から、中央に歯)



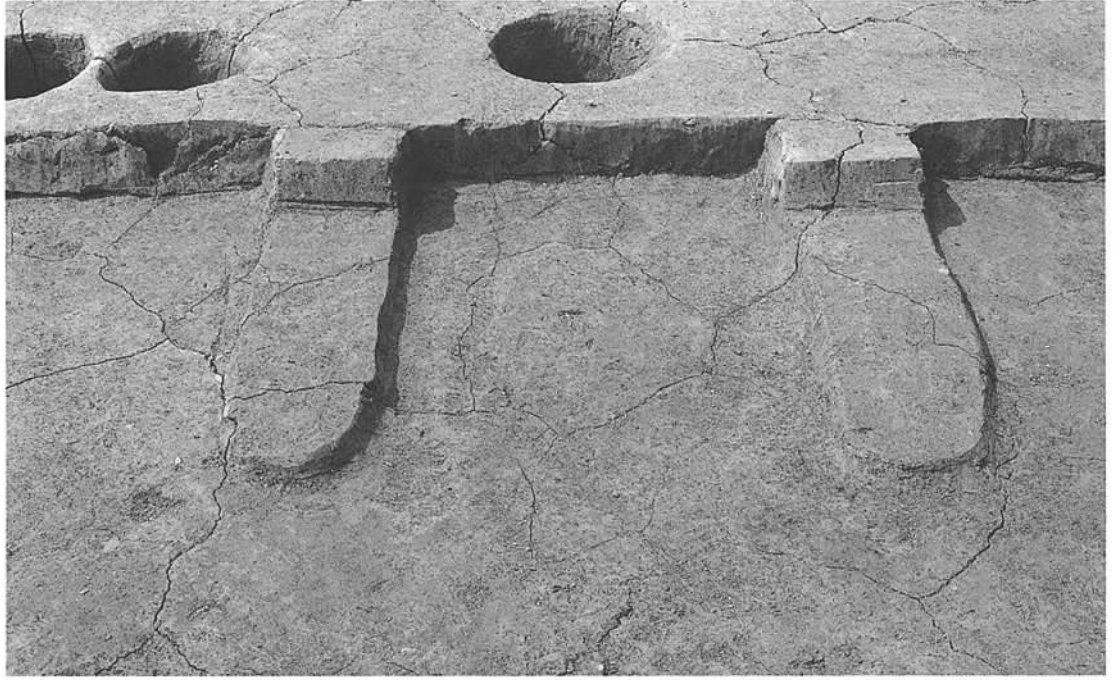
1 5区第1面全景
(北側は未掘)
(上から、右が北)



2 5区第1面北全景
(上から、右が北)



3 5区14号竪穴住居跡
(南東から)



1 5区14号竪穴住居跡
カマド(南東から)



2 5区30号竪穴住居跡
上層出土状況
(西から)



3 5区30・37号竪穴
住居跡(北東から)



1 5区30号竪穴住居跡
カマド(北東から)



2 5区31号竪穴住居跡
(東から)



3 5区31~33号竪穴住居跡
(西から)



1 5区32号竪穴住居跡
出土状況(北西から)



2 5区34号竪穴住居跡
(西から)



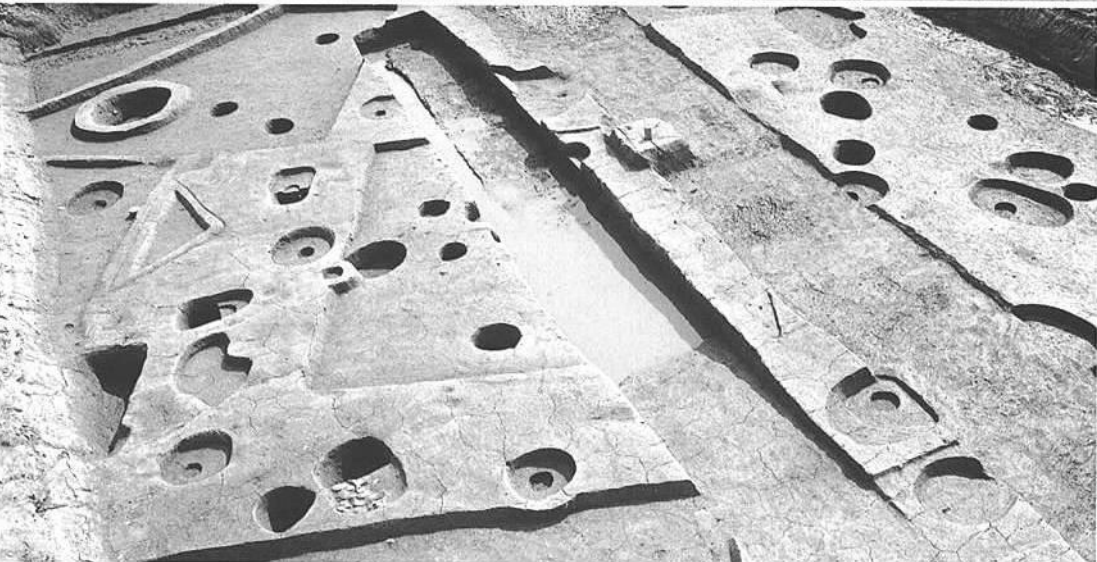
3 5区34号竪穴住居跡
カマド(南から)



1 5区36号竪穴住居跡
(南から)



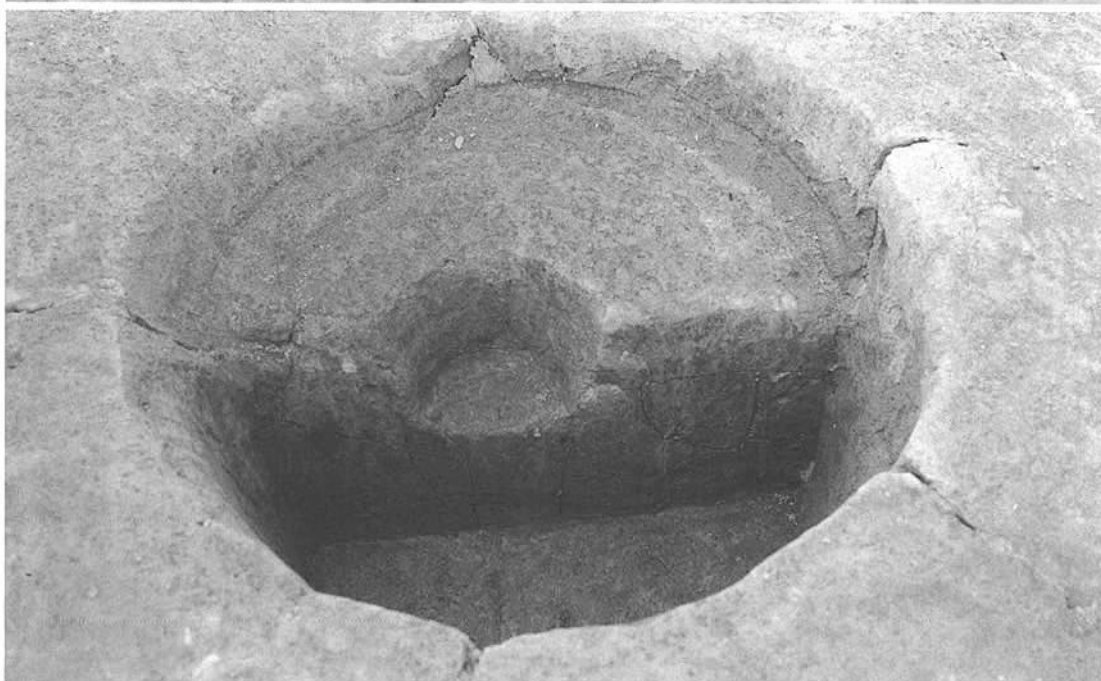
2 5区36号竪穴住居跡
カマド(南から)



3 5区1・4号掘立柱建物跡
(北北東から)



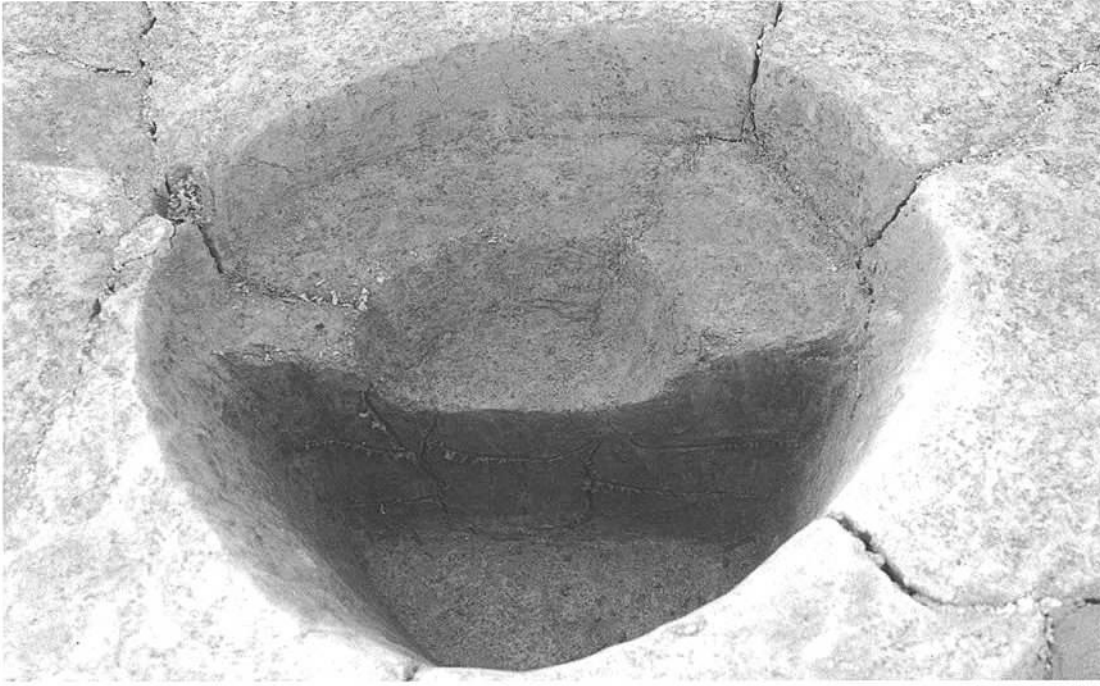
1 5区1号掘立柱建物跡
P1土層(東南東から)



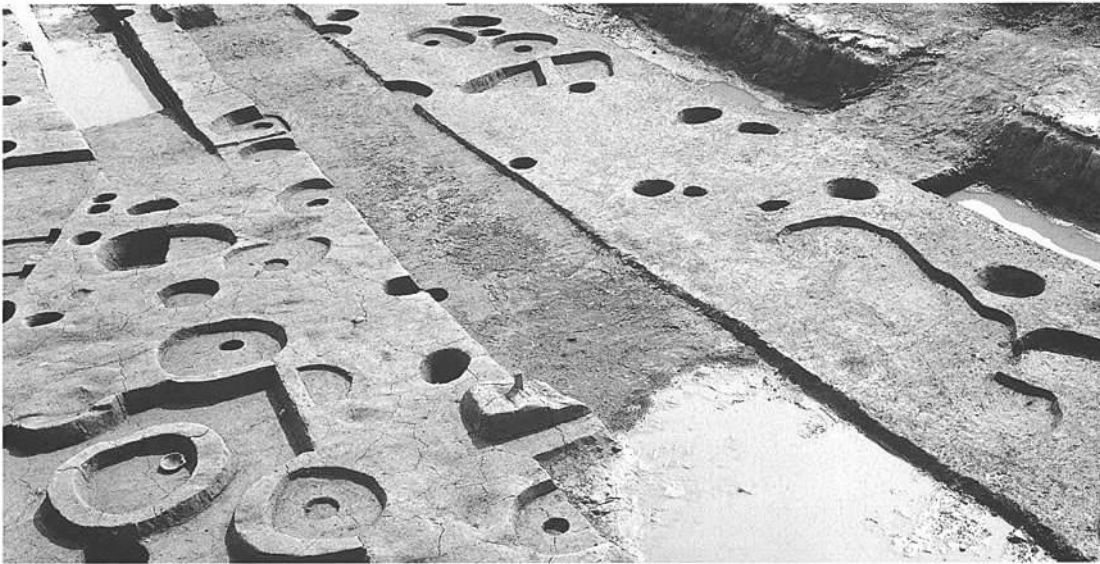
2 5区1号掘立柱建物跡
P2土層(東南東から)



3 5区1号掘立柱建物跡
P3土層(東南東から)



1 5区1号掘立柱建物跡
P4土層(北北東から)



2 5区2号掘立柱建物跡
(北東から)



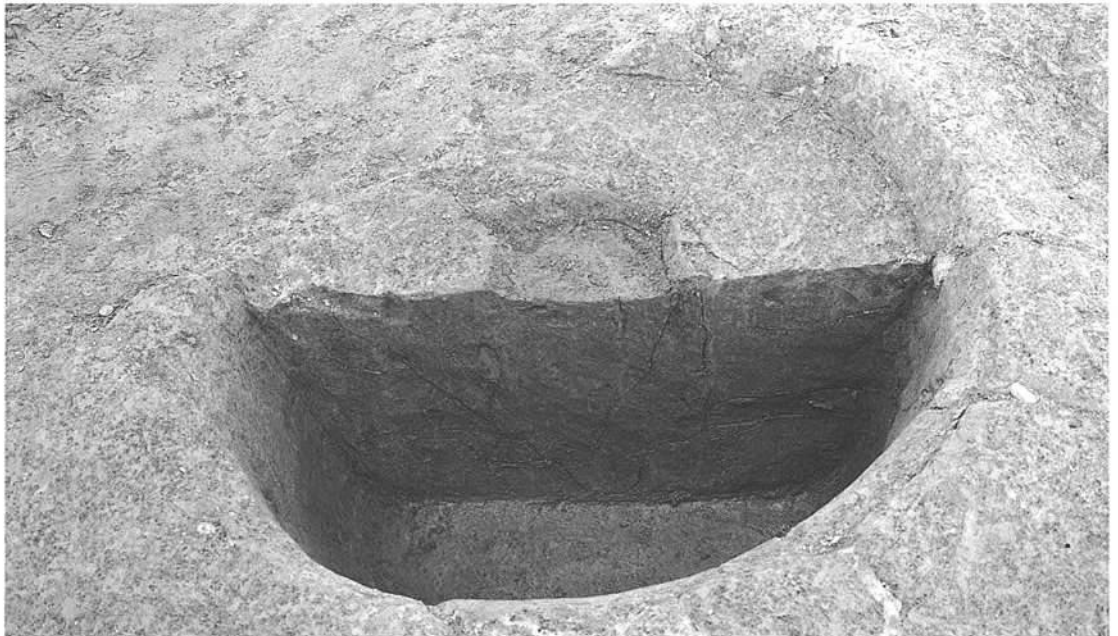
3 5区2号掘立柱建物跡
P1土層(南東から)



1 5区2号掘立柱建物跡
P2土層(南東から)



2 5区2号掘立柱建物跡
P3土層(南東から)



3 5区2号掘立柱建物跡
P4土層(南東から)



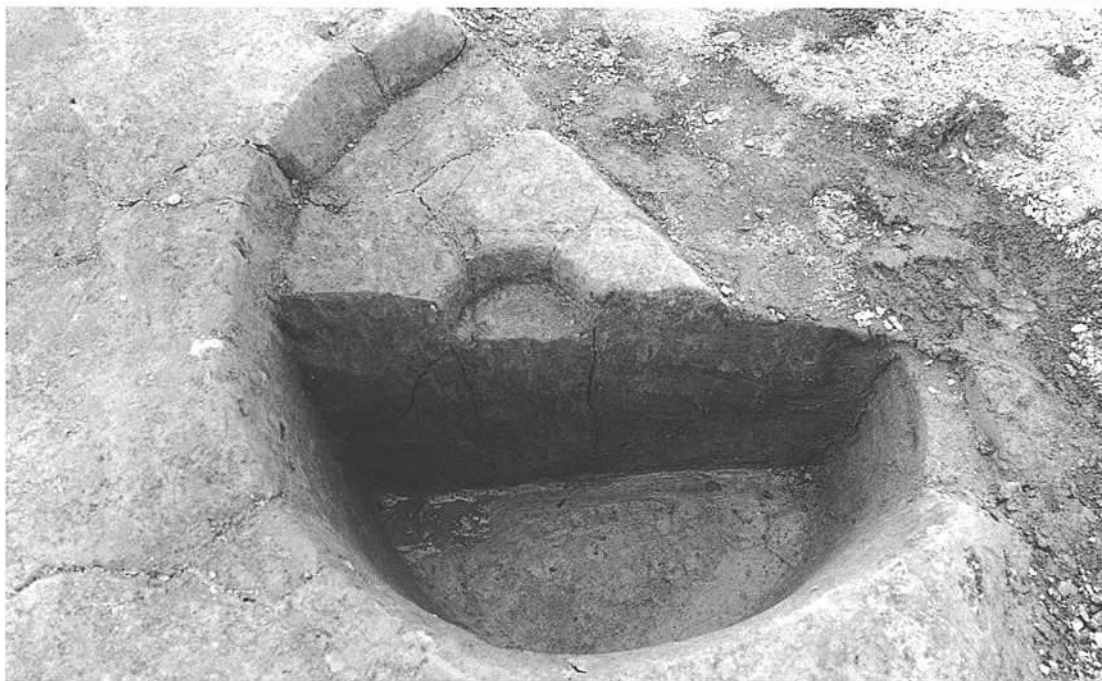
1 5区2号掘立柱建物跡
P5土層(南東から)



2 5区2号掘立柱建物跡
P6土層(南東から)



3 5区2号掘立柱建物跡
P7土層(南西から)



1 5区2号掘立柱建物跡
P8土層(北東から)



2 5区2号掘立柱建物跡
P9土層(北東から)



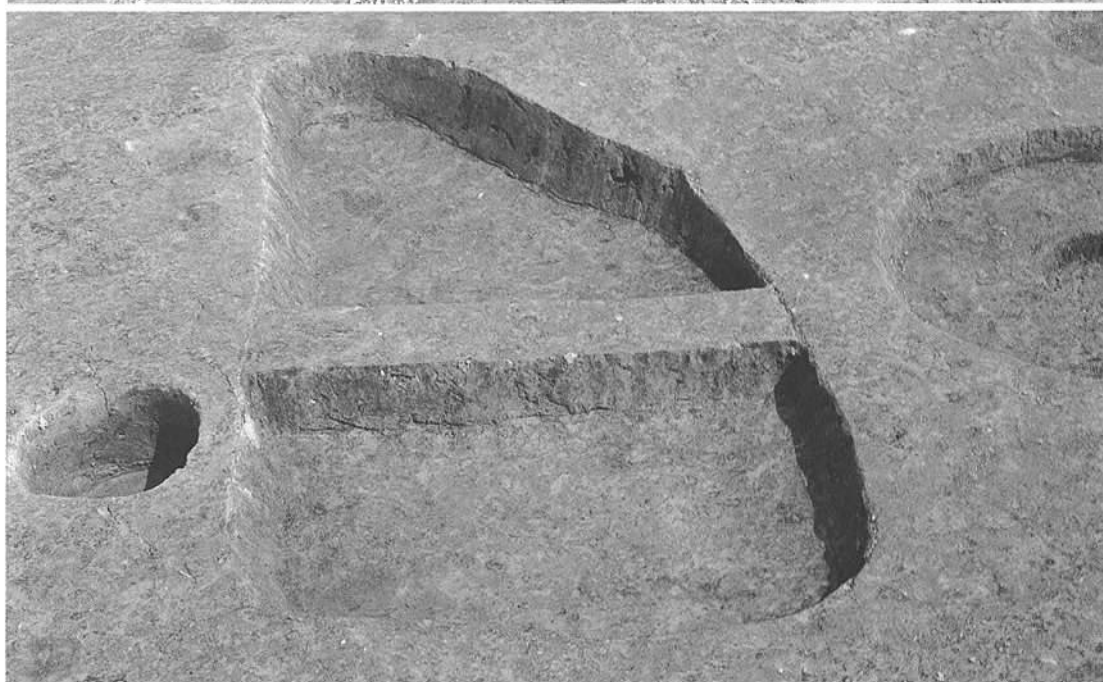
3 5区3号掘立柱建物跡
(南東から)



1 5区4号掘立柱建物跡
P2土層(北西から)



2 5区4号掘立柱建物跡
P3土層(北西から)

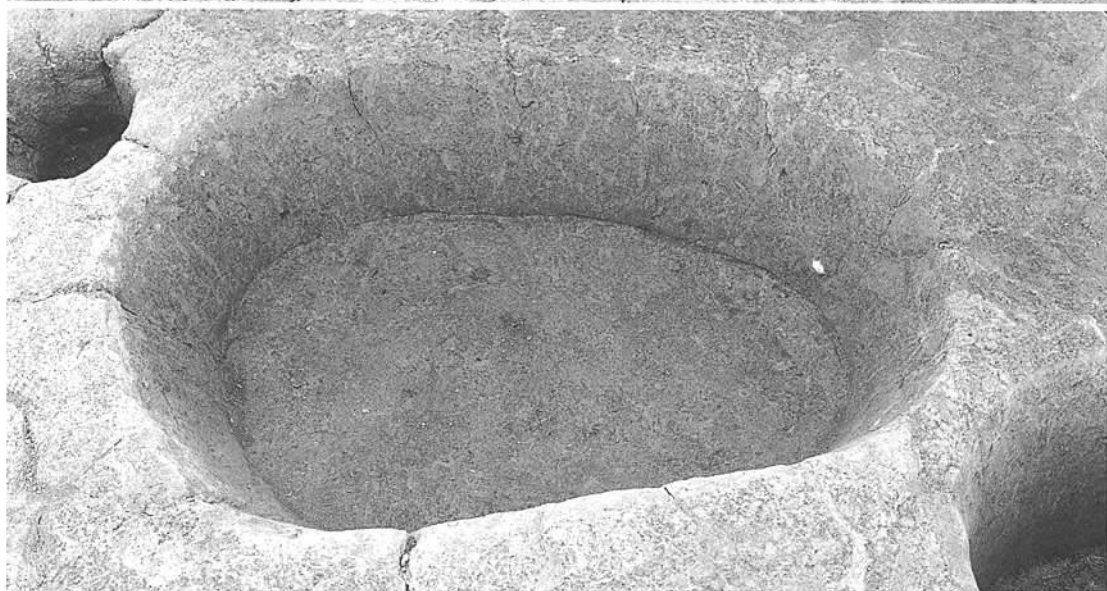


3 5区12号土坑
(西北西から)

1 5区13号土坑
(北から)



2 5区14号土坑
(北から)



3 5区1号中世墓
(北から)





1 5区第2面全景
(上から、右が北)



2 5区第2面南全景
(上から、右が北)



3 5区第2面北全景
(上から、右が北)



1 5区47・60号竪穴
住居跡(西南西から)



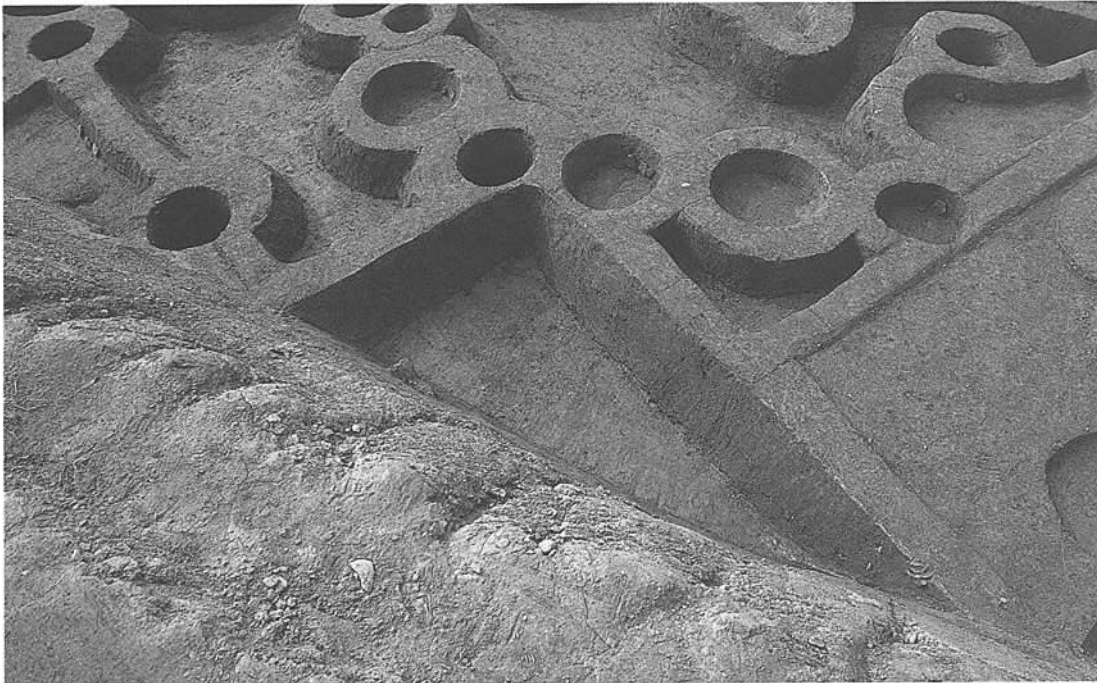
2 5区47号竪穴住居跡
出土状況(南西から)



3 5区47号竪穴住居跡
カマド出土状況
(西南西から)



1 5区47号竪穴住居跡
カマド完掘状況
(西南西から)



2 5区48号竪穴住居跡
(北東から)



3 5区49号竪穴住居跡
(南東から)



1 5区49号竪穴住居跡炉
付近出土状況(東から)



2 5区50号竪穴住居跡
(西から)



3 5区51号竪穴住居跡
(南西から)



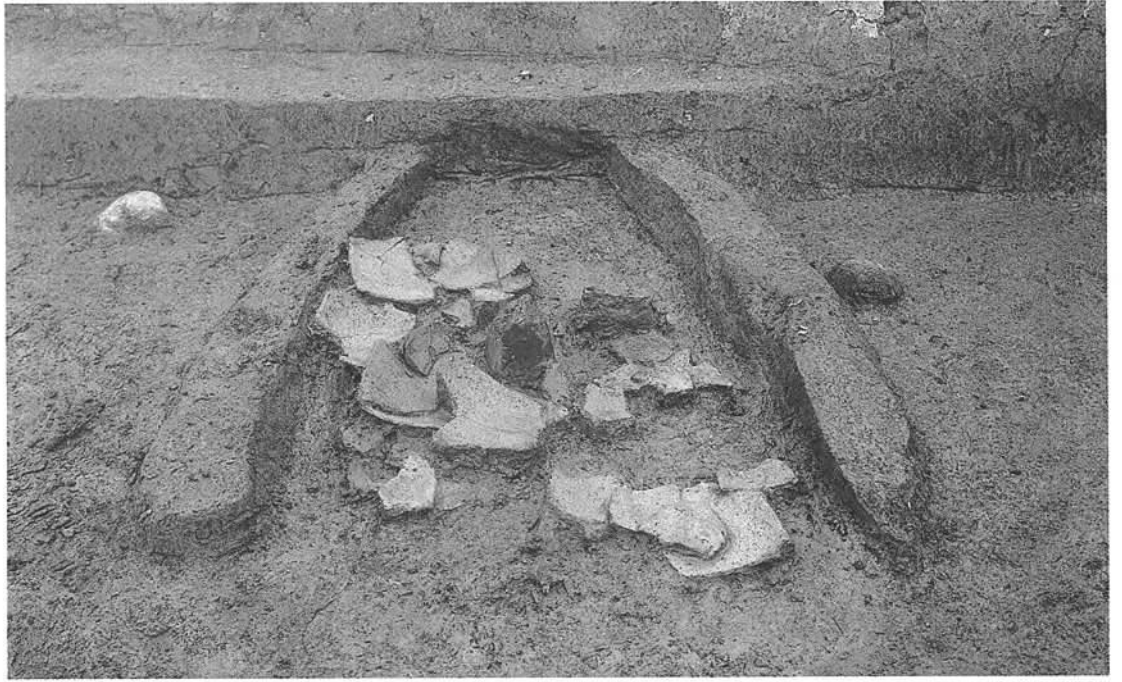
1 5区53号竪穴住居跡
(北東から)



2 5区53号竪穴住居跡
カマド(北東から)



3 5区55号竪穴住居跡
(南から)



1 5区55号竪穴住居跡
カマド(南から)



2 5区30・37・56・57号
竪穴住居跡(西から)



3 5区59号竪穴住居跡
(西から)



第15図-1



(上)



(側面)



(正面)
第15図-6



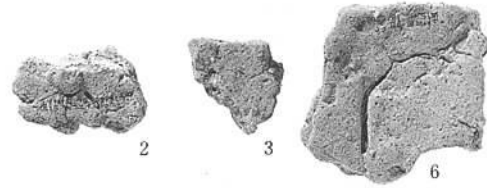
第15図-11



第15図-12



(同一個体)
第15図-13



第16図



第18図-5



第18図-7



第18図-8

3区1号土坑、1号溝、第1面ピット・遺構面等、16号住居跡(1)出土土器・土製品



第18图-9



第18图-19



第18图-10



第18图-21



第18图-11



第18图-22



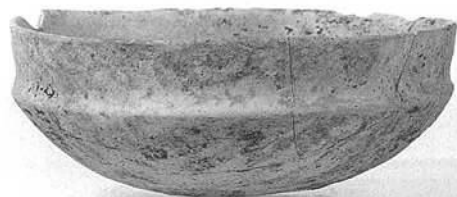
第18图-12



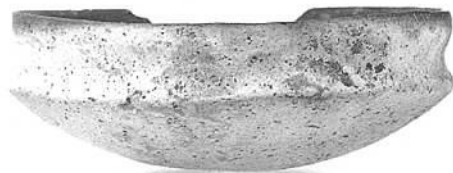
第18图-23



第18图-13



第18图-24



第18图-17



第18图-25



第18图-18

3区16号住居迹出土土器(2)



第18图-28



第19图-34



第18图-31



第19图-36



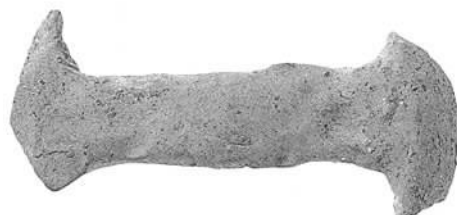
第18图-32



第19图-37



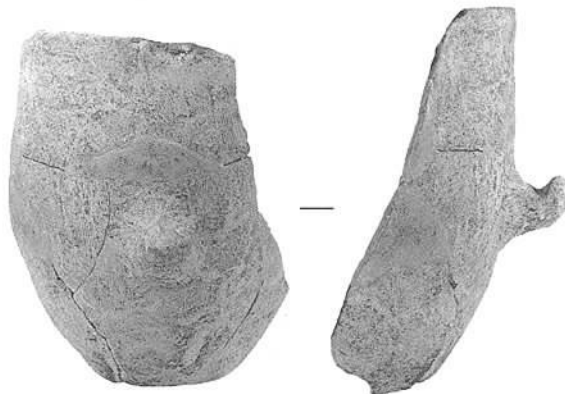
第18图-33



第19图-40



第18图-41



第20图-41



第20图-42



(侧面)



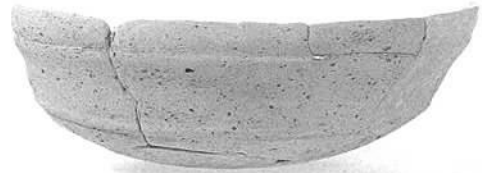
第20图-43



(正面)
第23图-14



(上)



第23图-23



(正面)
第20图-44



第23图-27



(上)
第20图-45



第25图-1



第23图-11



第25图-2



第25図-5



第25図-7



第25図-10



第25図-12



第26図-18



第26図-19



第26図-20



第26図-21



第26図-22



第26図-26

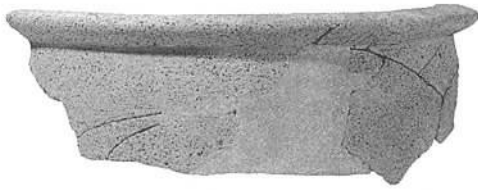


第27図-4(表)



(裏)

3区22(2)・24・25・27号住居跡、第2面ピット・遺構面等(1)出土土器



第27図-5



第31図-18



第27図-6



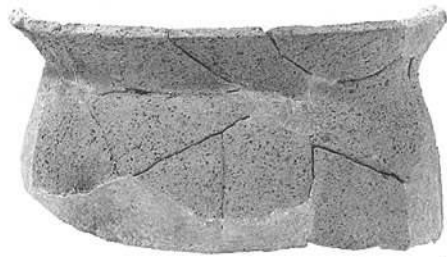
第31図-20



第27図-8



第31図-24



第31図-25



第30図-9



第31図-27



第30図-12



第31図-28

3区第2面ピット・遺構面等(2)、4区1・2(1)号住居跡出土土器



第32图-39



第38图-12



第32图-42



第38图-22



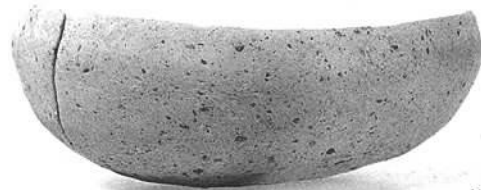
第33图-50



第40图-3



第35图-9



第40图-4



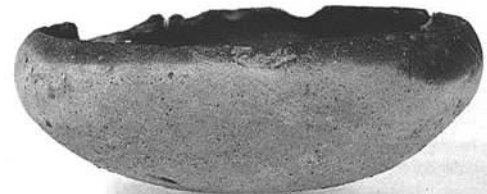
第35图-10



第40图-9



第35图-21



第40图-10



第38图-4



第40图-13

4区2(2)~6·7(1)号住居跡出土土器



第40图-16



第40图-24



(正面)

(右侧面)
第40图-25



第40图-26



第42图-8



第42图-7



第42图-11



第42图-12



第42图-14



第42图-16

4区7(2)·8号住居跡・8号住居跡付近遺構面(1)出土土器



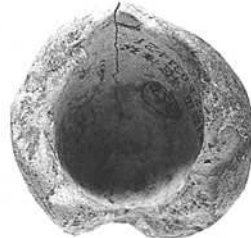
第42図-17



第48図-5



第42図-18



(上)



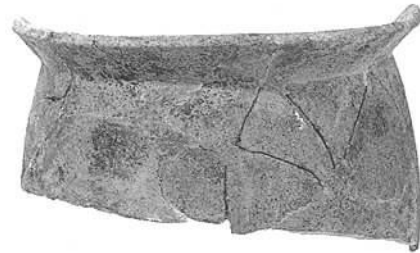
第45図-2



(正面)
第48図-14



第45図-3



第50図-5



第45図-12



第52図-7



第45図-18



第52図-10



第52図-16



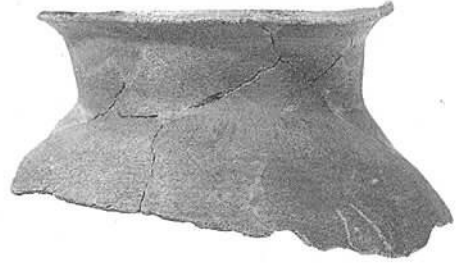
第52图-18



第55图-3



第52图-21



第58图-14



第52图-22



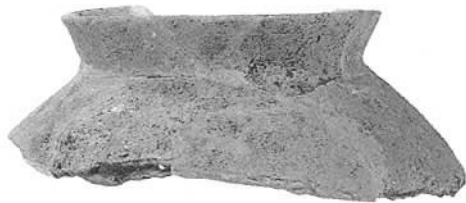
第58图-20



第53图-33



第60图-4(2号葬棺墓上甗)



第53图-34



第53图-36

4区43(2)·45号住居跡、6·7号土坑出土土器、2号葬棺



第60図-2(1号妻棺墓上甕)



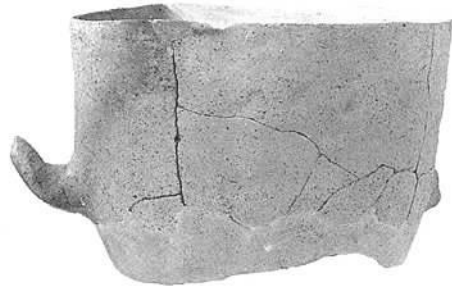
第60図-1(1号妻棺墓下甕)



第61図-1



第61図-8



第61図-9



第64図-3



第64図-5



第66図-1



第66図-2

4区1号妻棺、第2面ピット、5区30・37号住居跡、30・31号住居跡付近クレーク内、30号住居跡(1)出土土器



第66图-6



第66图-8



第66图-9



第66图-19



第66图-21



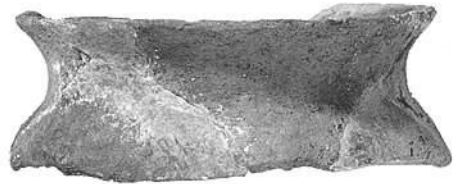
第66图-23下



第66图-24



第66图-25



第67图-26



第67图-27



第67图-29

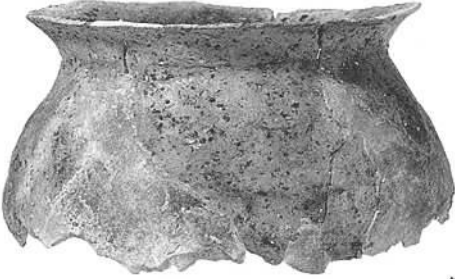
5区30号住居跡出土土器(2)



第67图-31



第68图-44



第67图-33



第69图-52



第67图-37



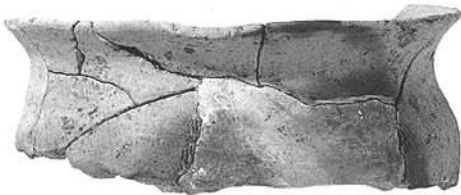
第69图-54



第67图-38



第69图-57



第67图-40



第69图-60



第69图-63



第68图-43



第69图-66



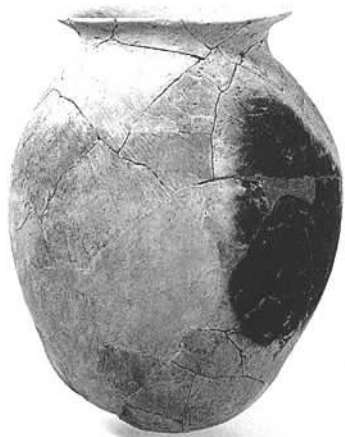
第70图-67



第70图-68



第70图-69



第70图-70



第71图-72



第71图-73



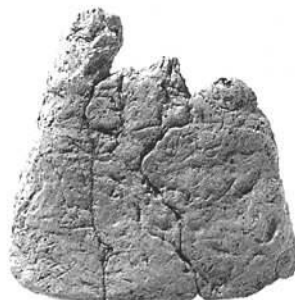
第71图-74



第71图-77



第71图-80



第71图-84

5区30号住居跡出土土器(4)



第73図-7



第79図-5



第79図-7



第74図



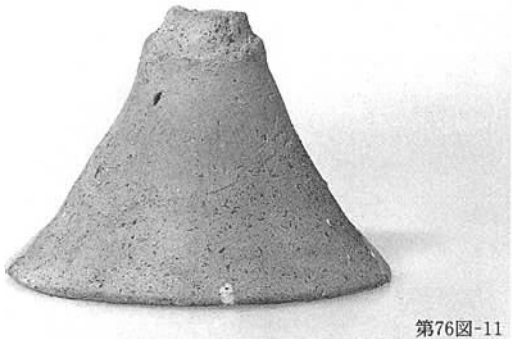
第82図-3



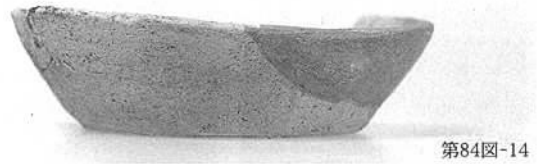
第76図-7



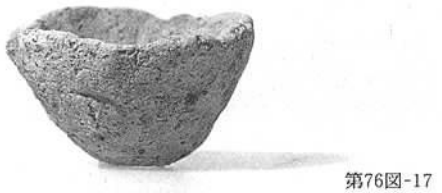
第84図-9



第76図-11



第84図-14



第76図-17



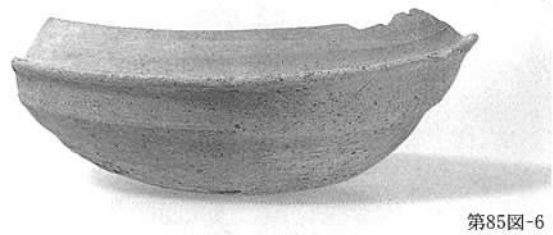
第84図-15



第76図-18



第85図-1



第85図-6

5区31・34・36・37号住居跡、34号住居跡南包含層、2号掘立柱建物跡
13号土坑、1号中世墓、第1面ピット・遺構面等出土土器・土製品



第87图-3



第87图-9



第87图-4



第91图-1



第87图-5



第91图-4



第87图-6



第91图-5



第87图-7



第91图-15



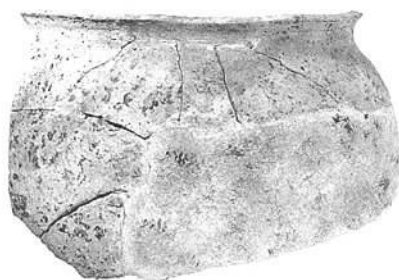
第87图-8



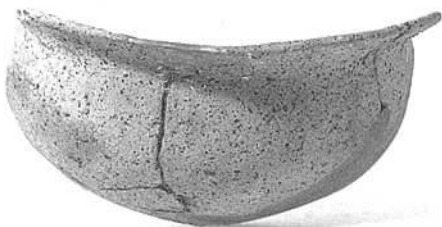
第91图-16



第92図-18



第94図-19



第92図-20



第97図-14



第93図-23



第98図-1



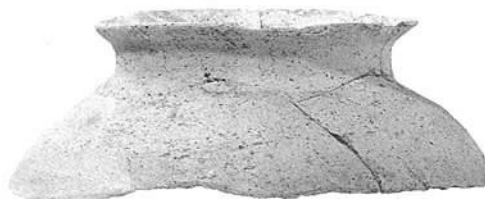
第93図-24



第98図-3



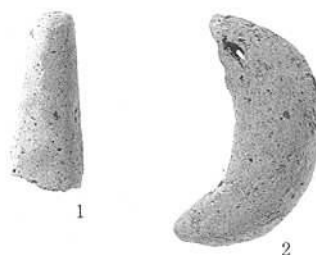
第94図-7



第98図-11



第94図-17

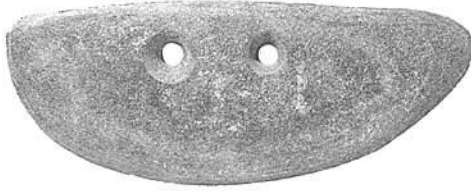


第104図

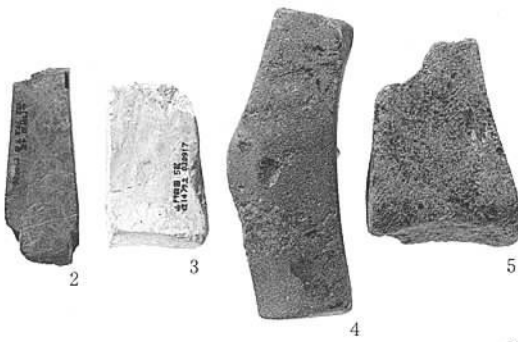
5区49(2)・55・61号竪穴住居跡、第2面ピット、表採等出土土器・土製品



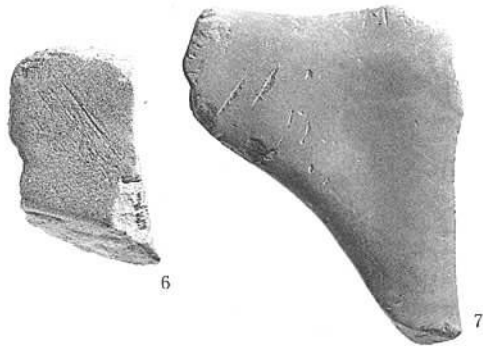
第99図-1(表)



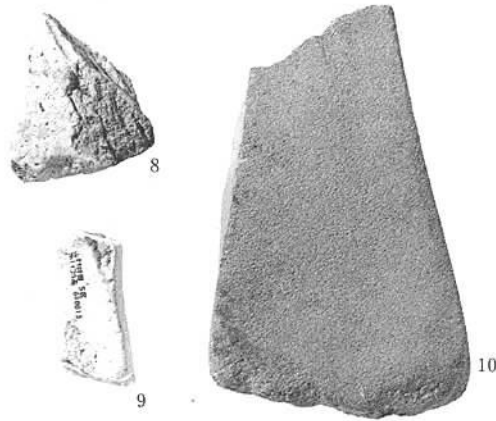
(裏)



第99図



第99図



第100図

石器・石製品(1)



11



12

第100図



11



12

(下端)



14



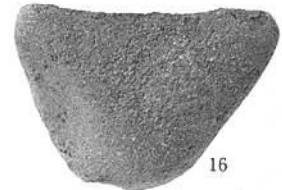
13



17



15



16

第100・101図



18



19



20



21

第101・102図



22



23



24



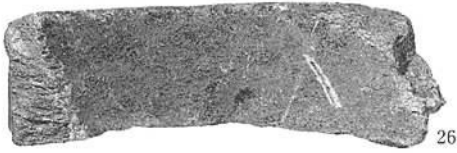
25

第102図



26

第103図(表)



26

(裏)



鉄鋸鋤先



27



28

第103図(表)



27



28

(裏)



1



2



3



4

銅銭



29



30



31



32

第103図(表)



29



30



31

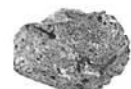


32

(裏)



銅銭(写真のみ)



4区第2面P250出土鉄滓(写真のみ)



銅銭(写真のみ)

報 告 書 抄 録

ふりがな	やまときたいけいせき							
書名	山門北池遺跡							
副書名	福岡県みやま市瀬高町山門所在遺跡の調査							
巻次								
シリーズ名	九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第6集							
編著者名	大庭孝夫・一瀬智・株式会社パレオ・ラボ							
編集機関	福岡県教育委員会（教育庁総務部文化財保護課）							
所在地	〒812-8577 福岡県福岡市博多区東公園7-7 TEL 092-651-1111 FAX 092-643-3878 E-mail kbunkazai@pref.fukuoka.lg.jp							
発刊年月日	西暦2007年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	所在地	市町村	遺跡番号					
やまときたいけいせき 山門北池遺跡	ふくおかけん 福岡県みやま市 せとかまちやまとあぎまた 瀬高町山門字北 いけ あぎまた 池・字前田	40229		33°9'3"	130°29'38"	2003.5.1 ? 2004.1.31	1,230㎡ (2層で2,460㎡)	九州新幹線 鹿児島ルー ト建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
山門北池遺跡	集落・墓地	弥生時代 古墳時代 飛鳥時代 中世	竪穴住居跡52棟、 掘立柱建物跡4棟、 土坑14基、溝7条、 木棺墓1基、 甕棺墓2基、 中世墓1基	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 瓦器	青磁・白磁 陶器 土製品 石器・石製品 金属器	<ul style="list-style-type: none"> ・縄文時代後期の北久根山式 ・西平式の鉢が各1点出土。 ・甕棺墓は弥生時代中期前半の成人棺・小児棺各1基。 ・古墳時代後期の16・30号竪穴住居跡出土土器は良好な一括資料、古墳時代後期の竪穴住居跡カマドで使用した支脚はすべて土製品。 ・2号掘立柱建物跡は6間×2間以上の大型建物跡。 ・1号中世墓から「洪武通寶」40枚出土。 		
要約	<p>当遺跡は標高6m前後の4つの沖積微高地上に存在する遺構群から構成される。まず弥生時代中期前半の甕棺墓2基が最も安定した微高地上に作られる。弥生時代後期後半～古墳時代前期には3つの微高地上で多くの竪穴住居跡を検出し、当遺跡の一つの画期となる。古墳時代中期になると、一旦集落は断絶する。古墳時代後期中葉から再び集落が3つの微高地上で形成され、後期末にはピークを迎える。7世紀中葉前後になると、それ以前の竪穴住居を整地し、掘立柱建物を建てるという集落内再編が認められる。当遺跡では7世紀末以降に属する遺構は未確認であり、集落の廃絶は条里制の施行と関係する可能性がある。</p>							

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 18	登録番号 1

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第6集

山門北池遺跡

平成19年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7-7

印刷 株式会社 川島弘文社
〒812-0051 福岡市東区箱崎ふ頭6-6-41
TEL 092-641-2665 FAX 092-641-2659